
『E／O』 イオ

たま。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『E／O』イオ

【Nコード】

N3197X

【作者名】

たま。

【あらすじ】

21世紀半ば、3DMMO最後の最高傑作『UO2』を開発したOasisSpace社は深刻な過疎によるサービス終了の責任で親会社から見捨てられMMO業界から姿を消す。それから10年余り沈黙を破ってOasisSpace社はVRMMO『E／O』を突如発表。

すでにMMOから引退していたが、雨月亮はUO2の廃人プレイヤーだったことから『E／O』に興味を引かれる。

※筆者は未熟ゆえ色々抜けている所がありますので、随時修正を入

れています。

※V R M M O系は、ジャンルがS Fみたいなのでファンタジーから変更しました。

※キーワードに「性転換」が含まれていますが、現状活かされていません。

※見た目だけ性転換と思って良いので、性転換はあまり気にしないで下さい。

第0話『プロローグ』（前書き）

初めての作品です。誤字脱字、言葉の表現を誤っている箇所があると思いますが温かい目で見守ってください。掲載は不定期で行うと思います。完結できるように頑張りたいと思います。途中出てくるMMOの名称および内容はウルティマオンラインに影響されていますが一応無関係です。

第0話『プロローグ』

『Ultimate Online 2（アルティメットオンライン2）』通称UO2：

East Abyss社の子会社であるOasisSpace社が発した世界初のMMO『Ultimate Online』を再構築し 3DMMOにリメイクしたMMO界最高傑作。

やりこみ要素が無限大で出来ない事はないのではと言われるほどの自由度を売りにし、多くのプレイヤーを虜にした剣と魔法のファンタジー作品である。

MMOでは珍しくマジックアイテムが存在しなかった為、多くの生産職が花形を飾り、武器や防具の欲しい戦闘職と生産職との間での交流も盛んに行われ一大コミュニティを築いていた。

一時期はMMO人口の8割は『UO2』をプレイしていた程の人気を博していたが、21世紀半ばになり軍事目的で開発されていたVR空間を転用したVRMMOが登場、瞬く間に他社は挙って開発し3DMMOの時代が終わりを告げた。

『UO2』以外のMMOは全てVRMMOばかりになった時点でも人気は全盛期の半分と深刻なほど落ちていた訳ではなかったが、VRMMOの存在に焦ったEA社はマジックアイテムは実装しないと公言していたOS社に対して実装を命令した。

『UO2』を愛していた廃人プレイヤー達はマジックアイテムの実装から僅か数週間で半数以上がVRMMOに流出し、残り半数も時間の問題と言われるほど深刻な過疎状態に成り果てる。

OS社は打開策として様々な救済システムなどを実装していったが新規開拓どころか流出が加速度的に増し、実装から僅か1年足らず

でサービスは終了する事になった。

OS社はサービス終了の責任を押し付けられ、子会社関係もEA社から強制的に打ち切られ資金調達も間々なくなり業績不振でMMO界から姿を消した。

——それから10年あまり後、人々の記憶からOS社の名前が消え、いくつものVRMMOが生まれ消え行き、5つの大型VRMMOが固定化された停滞期に事前情報を全く公開せずに突如として新規VRMMOが発表された。

：その名は『Evolution Online』エヴォリユーションオンライン。

通称『E/O』（イオ）の発表であった。

それだけなら誰も「ああ：またVRMMOか：」となるのだが、開発はあのUOで有名になり10年もの間息を潜めていたOasis Space社だったのだ。

タイトルの発表と同時に公開された内容はかの『UO2』に酷似しOS社もそれを認めた上で『UO2』の正当進化系VRMMOと公言したのだった。

あの『UO2』をVRで体験できると他のVRMMOに移った者やすでにMMOから引退していた者は興味を示した。

多くのゲーム情報サイトも大きく取り上げた為、βテストを行っていないというのにE/Oサービス開始時に他のVRMMOのプレイヤー数を上回るほど集まった。

あまつぎあきら

——雨月亮、28歳、『UO2』を5年ほどプレイしマジックアイテムが実装されてから辞めたプレイヤーの1人である。

辞めてからはMMOには手を出さず真面目に勉強に励んだ為、有名大学に合格大手一流企業に就職していた。

そんな彼がコンビニで立ち読みしていた時に、『E/O』の情報が目に飛び込んで来た。

あのOS社が作ったVRMMO、『UO2』の正当進化系…最近はめっきりMMOに興味を示さなかった彼もこれに関しては別だった。

彼は『E/O』のサービス開始初日からプレイし寝る間も惜しんで1日8時間、休日には20時間近くプレイした。

サービス開始から2年、会社には行かなくなり解雇通告と共にさらに『E/O』に熱中し半引き籠もり状態になっていた。

それからまた1年、サービス開始から3年、初代キャラから丁度10代目のキャラに変わった時、彼に…いや彼らに転機が訪れる…。

——思いもよらない転機だった——

第0話『プロローグ』（後書き）

どうだったでしょうか？拙い文章で申し訳ありません。
慣れてきた頃に改定しようと思います。

次から本編が始まりますので宜しくお願いします。

第1話【異変】（前書き）

ここから本編が始まります。

基本、主人公である雨月亮あまつぎあきらの視点で書いていきます。

しばらく性転換や残虐表現やR15部分はほとんどありません。
話数が溜まり次第、用語集なども書いていくつもりです。

第1話【異変】

俺はいつも通り『E／O』にログインし、時代進行とも前キャラから入れ替わった新キャラつまり前キャラの子供キャラでの初プレイを迎えていた。

今まではヒューマ（人族）のような短命キャラでプレイしていたのだが、継続補償のクエストで特殊NPCの古代エルフ族と結婚できる状況を得たので、10代目キャラ記念にこの際だから長寿種族でのプレイも良いかと思い現在に至っている。

まあ、子供の性別がランダムなのは仕方ないとして、10代目キャラ記念にと初代と同じように自分の名前を付けたキャラが運悪くも女の子なのは残念で仕方ない。

ヒューマの特性は熟知しているが全く情報が出回っていない上にシークレット扱いのNPC種族「古代エルフ族」の特性なんてさっぱり分らない。

分っている事といえば長寿種族、体術も魔法もヒューマ以上の能力がある程度、さらにヒューマとのハーフであるからこういう特性になっているかも知らない。

「ふむ、どうしたら良いものか…」

俺は現在、オーランド大陸にある一国ノースブレイ王国内にある自宅の一室にいる、歴代キャラの持ち家である。

『E／O』の世界地図は地球に酷似していて位置的に言えばアフリカ大陸とほぼ同じと言える。

まあ、位置は同じでも環境は全く違うのだけど…大陸の半分以上は草原残りは山と森が占めていて自然が豊富な環境だ。

ちなみにこの持ち家かなり大きい、歴代キャラの半数は傭兵プレイしていたのでお金が腐るほどあり、アイテムもなかなか良いのが揃

っている。

歴代キャラ10キャラの内3キャラは武器職人を極限まで鍛え上げたお陰でオリジナルの武器もそれなりにある。

取り合えず、色んな武器を試してみて一番しっくり来るのを選択しようと思い、我が家の地下倉庫に向かう。

「我ながら中々の壮観だな。」

地下倉庫の中は様々なアイテムが並んでいる。はつきり言って一度も使っていないアイテムや記憶の片隅にさえ置かれていないアイテムもざらにある。

取り合えず、あまりにも膨大なので前時代最後の日を全部使ってカテゴリー別に整理したので、どこぞの大商店の店舗内みたいな状態になっている。

一番近くにある棚に目を向けると西洋剣が数十本並んでいて、騎士剣と思われるその内の一振りを手取る。

「…やっぱり、子供状態だと重いな…これではまともに攻撃出来そうに無い。」

手に取った騎士剣を棚に戻し、俺は1つ忘れていた事を思い出す。

「そういえば、初期ステータス確認していなかったな。メニュー…ステータス確認」

俺はそう呟くと目の前に半透明のウィンドウが表示される。

あ、ちなみにこの『E/O』の鯖は、世界共通鯖と国別鯖の2種類があり、今俺がプレイしているのは日本鯖なので日本語表記となっている。

敏捷… 22 (+12)
 視力… 20 (+8)
 指揮… 5
 魅力… 20 (+10)
 突破… 3
 妨害… 1
 詠唱… 28 (+15)
 運… 11
 魔法力… 30 (+20)
 法力… 22 (+10)
 魔力… 20 (+10)
 霊力… 28 (+20)
 神力… 5 (+5)
 呪力… 0
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

おいしい、ハーフエルフとはいえレベル1でこれって高すぎやしないか…
 ヒューマのステータスは良くも悪くも平均的なステータスで確かレベル1の段階ではどの数値も10前後だった気がするが…
 ちなみに○内の数値はボーナス値でこの数値を差し引いたのが本来の数値だ。
 過去9キャラ分の『血の記憶』ボーナスを差し引いても高すぎる…
 というかどう見てもこれは種族ボーナスの影響だな。
 俺の流派ボーナスは脚力と敏捷にしかボーナスはいかない筈だし、魔法関係のボーナスが明らかに高い。

種族のハーフエルフの横にある※は2つ以上の種族が混合されている

るという意味だ。

ちなみに今回はヒューマ※と古代エルフの混血種族で、歴代キャラの中にはアマゾネスの血が混じっている。

確か4キャラ目の嫁にアマゾネスでプレイしていたフレンドと結婚したんだっけな。

属性は光と炎か、光は種族属性で炎がキャラ属性だな：髪が深紅で瞳が銀色なのはこの属性のせいと見るべきか。

それ以外に目に付く項目は：ふむ、両利きか、まあ当然だな。7キャラ目以降のキャラは全て両利きで生まれてきている。

血の記憶様様って事だな。

月守流居合剣術は1キャラ目で創設した自流派だ。

初代と現在のキャラを除いた8キャラで様々な流派と掛け合わせた結果が現在の流派で1キャラ目の月守流とは大分違った流派になっている。

正直、やり過ぎたと自分では思っている。どれも極限まで鍛え上げてから掛け合わせたせいで『E/O』のシステムギリギリの非常に強力な流派になってしまった。

何故、居合を選択したかという点、そこは男のロマンだからだ。他意はない。

補足だが、月守ってのは初代キャラ『アキラ||ツキモリ』から来ている。

所属国の国名の横にある○内はいわゆる運営会社の社名で、月額3000円と少し割高だが国内の環境整備は文句の付け所もないほど完璧で消費税も他社に比べて安いのが魅力。

3キャラ目までは別の国に所属していたが、ころころ月額料金を変更するのは、最終的にはアイテム課金とのハイブリットにするはで、

結局2度の救済措置の上、運営権利を剥奪され現在のCyberN
ote社が運営するノースブレイ王国に変更した。

どうせ、税金(料金)のほとんどを自社の利益にした事で国家の運
営が立ち行かなくなったのだろう。

それはさておき、このステータスを見た限り魔法系統に進むのが良
さそうだ。

霊力がかなり高い精霊魔法を使えて事か…エルフは1回も使った
事がなかったから楽しみだ。

後は、護身用にイスカ刀で良いか、流派と相性良いし…

「たしか、脇差が…この辺…に、あった気がするが…あれ?どこ
いったかな?」

イスカ刀のカテゴリにある筈なんだけど、見当たらない。

脇差は別カテゴリだったけかな…はて?

ああ、ちなみにイスカ刀とは、日本刀の事で、この世界の日本に当
たる国がイスカ王国という所と言う訳でイスカ刀になる。

「あっ…そういえば、前のキャラの時に知り合った初心者さんにあ
げたんだったけか…」

他にあったかな、このステータスでも装備出来るイスカ刀……
俺のコレクションはどれも名刀以上の業物だらけでレベルの低い状
態で装備出来るものはなかった。

ま、いつもは露店を適当に見て回って目に付いた装備を着けていた
のだが全くない訳ではないので探したらあるかもしれない。

「むう…お、おおお、そういえば武器職人キャラの時、試しでロッ
ドにイスカ刀を仕込んだっけか…」

確かあれならこの腕力でもいける、魔法力の制限があって確か30以上あれば装備できた筈：お、ギリギリいけそうだな。

『E/O』の世界の装備品にはレベル制限はない、能力さえ足りていればレベル1でも聖剣などを装備出来る：

例えばの話なので実際レベル1では聖剣なんて装備出来ない。

ついでに言うレベルはそのキャラがどのくらい成長しているかの目安でキャラの強さとイコールという訳ではない。

まあ、それはさておきアレはどのカテゴリーだっただろうか：

「えーと……あれは確か、ロッドのカテゴリーに入れたんだっけか……どれどれ。」

あったあった。これだ。よっと！」

量産のイスカ刀を試してロッドに仕込んだだけだから必要能力はそんなに高くない。

試しを作った後、本番で確か神刀に匹敵する性能のイスカ刀をロッドに仕込んだのがあるが、あれは今の10倍以上の能力が必要だから今は触れないでおこう。

ロッドを手にすると手に馴染む。軽く振るえるし問題はないだろう。

「よしっ、まずは魔法書店に：あ、精霊魔法はエルフから学ばないとだめだったか」

このノースブレイ王国に精霊魔法持ちのエルフNPCはいただろうか：

少し外部サイトで調べてみるか。

と、思った矢先、OasisSpace社から緊急メールが届いた。開発元から緊急メールなんて珍しい、大体は運営を通してメールが

届くの…

「メニュー…システム…メールボックス…受信メール…開く。む、動画？」

メールを開くと動画の下に詳細な内容が書かれていた。取り合えず動画を見てみるか。

『こちらはOasisSpace社開発総責任者リッチーセイカーです。』

本来なら私どもから皆様に直接メールをお出しする事はないのですが、なにぶん緊急の為ご容赦願います。

今から、数分前16…00丁度にシステムに大幅な誤作動が生じ、現在ログアウトが出来ない状態にあります。

スタッフ一同原因究明と共に復旧作業中です。何卒、混乱せぬよう少しの間お待ち下さいます様お願い申し上げます。

もう一度申し上げます。何卒、混乱せぬようお待ちください。

それでは、誤作動による影響などはこの動画と共に記しておりますので詳細はそちらをご覧ください。』

と、ここで動画切れていた。

メッセージとともに後ろからスタッフが混乱…いや作業している怒声や報告などの声が混じっていたので余程の事なんだろう。

で、俺は動画ともに送られてきた詳細の報告を見ると、見慣れない項目を発見した。

「…五感の接続、禁止事項の解除？」

どういう事だ？五感ってあれだよな、視覚とか聴覚とか痛覚とか…

…痛覚？

俺はおもむろに自キャラの腕を抓って見た。

「痛っ！」

おいおい、いつもならチクツって程度なのにリアルと変わらない痛さだぞ。

禁止事項…確か下着とかは脱げない仕様というか禁止されていた筈、1年ほど前ハックして下着を脱げるようにしたプレイヤーがいたが、数時間後にはBANされていた。

脱げない仕様の筈なのに性器の部分もしっかり作りこまれていたのには驚いたっけかな。

…試しに脱いでみる？…いや道徳的に不味い…妄想とはいえ15歳未成年女の子の体だ。

でも、試したい…

俺は初期装備である長めのスカートを脱ぎ、上を向きながらパンツに手を掛け脱いでみた…。

腰の辺りがスウスウする…これは確実に脱げている。

「はあゝ虚しくなってきた。俺は何やってんだろ…」

さすがにこの姿は間抜けすぎるパンツを上げ穿きなおし服を着なおす。

んっ？ていうか、あれ？今更ながらいつもの声と違うような…なんていうかスピーカーやヘッドフォンを通して聞こえる声ではなくて、そうリアルの自分が喋って聞こえている感じ。

まあ、リアルの俺の声はこんなに可愛らしい声ではないんだけどな。他にも気になる項目はあったのだが…取り合えず、ログアウト試してみるか多分無理だけど…

「メニュー…システム…ログアウト」

……やはり、無理か…何のアクションも返って来ない…

「はぁ…これから、どうするかなあ」

第1話【異変】（後書き）

どうだったでしょうか？

駄文かもしれませんが、これから宜しくお願いします。

閑話【暴走】（前書き）

いきなり閑話で申し訳ありません。

2話にするかどうか迷ったのですが、出来るだけ本編は主人公の視点で行きたかったので、今回は閑話にする事にしました。

閑話【暴走】

——雨月亮が『E／O』にログインした時より少し前のリッチーセイカー——

四神システムの一角ヴィーナスの様子がおかしいと部下から報告を受け、私リッチーセイカーは『E／O』にログインした。

基本、開発・メンテナンスなどの全ての作業はゲーム内でする事になっている。

『E／O』が構成されている世界の遙か上空に宇宙ステーション【アラボト】を作り、私達開発チームはそこであらゆる作業をしている。

いわゆる、ゲーム内だとトラブルなどがあつた場合、対処がし易いというのもあるしリアルタイムアップデート（メンテナンス）の為でもある。

偶に私達専用の（GM）アバターで世界に下り立ち運営会社では対処できないトラブルの解決や世界規模のイベントなどもしている。

『E／O』はメンテナンスで長時間サーバーを止めるなんて事はしない。アップデートも同様だ。

今回報告にあつた四神システムもこのアラボトで制御しているのだ。四神システムはこの世界では非常に重要な役割があり、このアラボトにあるガディウスは特に重要なのだ。

確か、今ヴィーナスはフィラシエット大陸の山奥にて待機中の筈だ。誤作動という意味がどういう事なのかいまいち理解出来ない。

とりあえず、部下からの報告を聞くとするか：

「で、どういう事だね。ジャック」

「は、はい。数時間前、ヴィナースから断続的にガディウスへ何らかのデータを送信している形跡が見当たりまして…」

「ふむ。」

「それが何なのか確認の為にヴィーナスへ命令を送ろうとするとアクセスが拒否されるのです。」

「我々のアクセスをヴィーナスが拒否しているというのか？」

「恐らくは…でも、何回かアクセスを試みた所、偶に通っているようにのですが…」

「命令が通っているのだろうか？なら早く原因を究明したまえ。」

「そ、それが命令したデータがヴィーナスから帰って来ないのです。」

「どういう事だ？」

「それがさっぱり…」

こんな事は初めてだ…
人工知能とはいえマスターである我々の命令を拒否するなど今まで考えられない事だ。

「原因究明はしているのだろうか？」

「はい…それは勿論、ですが…」

考えられる原因は1つだけなくもないのだが、こんな事はあるのだろうか…

元々アメリカ空軍が無人戦闘機用に開発していた高性能の人工知能であった。

しかし、戦争をゲーム感覚で行う非人道的で言語道断！もしAIが暴走した時の対処はどうするのか！など反対する世論が高まり結局は計画自体がなくなった。

そこで我々は開発途中であった人工知能の開発権利を知人の伝で取得しVRMMO用に改良を加えたのが、ヴィーナスをはじめ四神システムの正体なのだ。

4つの基本行動、自己進化、自己分析、自己行動、自己再生…まあ、簡単に言えば自我が存在するのだ。

それでも、開発主である我々OasisSpace社の命令は四神にとって絶対的のはずなのである。

「可能性としては、自己分析の上で我々のマスター権限に対してハッキングをした？」

我々人を上回る知能を持ったAIなら考えられない事もないのだが…ふっ、まさかな。

「リッチさんっ！」

「ん？どうした。」

「また、ヴィーナスからガディウスにデータが送信されています。今までにないデータ量です。凡そ10倍あります。」

10倍だと？おいおい、まさかガディウスのプログラムを書き換え

ているんじゃないだろうな…

「今すぐ、ヴィーナスとガディウスのリンクを遮断しろっ！」

「無理です。ヴィーナス・ガディウス双方ともアクセスを拒否します。」

・
・
・
・

何の対処も出来ずにどのくらい時間が経ったのだろうか。
開発室の中にある時計が16時丁度を示していた。

「ヴィーナスからのデータ送信終了しました…」

「そうか…収まったか…」

「ヴィーナスにアクセスは出来るか？」

「いえ、完全に我々とのリンクが切れています。
ガディウスにはアクセス出来る様です。我々の命令にも応じます。」

「そうか、最悪な事態は回避できたか…」

ヴィーナスが我々の制御化から外れたという事か…恐れていた事が
起こったな。

だが、ガディウスが無事で良かった。

ヴィーナスにガディウスが支配されたりすれば世界の崩壊…なんて
状況になり兼ねないのだ。

「何事も起こらなければ良いが：

取り合えず、皆ごくろう。君達はログアウト後、報告書を提出の上
帰宅してよろしい。

十分、休養した上明日に備えてくれ。」

私は日中チームを見送り深夜チームの到着を待つ。

・
・
・
・
「おつかれさまでした」

・
・
・
・
どうしたのだろうか、日中チームはログアウトせずその場で立ち竦
んでいる。

それに交代要員である深夜チームのログインも誰一人して来ない。

「どうした？」

「それが…ログアウトできないんです。」

「はぁ!？」

そして俺はログアウトを試みてみた。反応がない。
エラーが吐き出される訳でもなく本当に何も反応しない。

「ログアウト出来ない……?」

おい、今すぐガディウスにアクセスしてログイン領域がどうなっ
ている確認しろ。」

「は、はい。」

命令を受けた社員はガディウスにアクセスを試みようとしたが：数分してもまだ報告が上がってこない、いくらなんでも遅すぎる。私はガディウスの前で悪戦苦闘している社員に声を掛けた。

「遅い。何をしている。」

「そ、それが、ログイン領域にアクセス出来ません。と、言います
でしょうか：」

ログイン領域が存在しません。」

「……？存在しない？」

「はい：存在しないのです。」

ガディウスからヴィーナスにデータを送信した形跡がある事から、このログイン領域を送った上で削除したのではないかと：

データ量も一致しますし間違いないと思います。

それと、ログを調べてみたのですが、『E／O』の仕様が改変されているようです。

まだ、詳細を調べていないので何がどう変わったかは言えないのですが…」

「その改変内容は当然…」

「はい、アクセス出来ない様になっています。」

「そうか、ヴィーナスの仕業と見て間違いないな…」

私は、他数名と共にプレイヤーおよび各運営会社スタッフに対しての状況説明用動画の撮影準備に取り掛かった。ただ、単に文章だけで説明するとプレイヤーの反感を買ってしまい状況把握どころではなくなってしまう。

「私達はこれから状況説明の準備を行う。

他の者は仕様改変の内容を分る範囲で調べ上げてくれ。」

「5分後、全プレイヤーに緊急メールを送信する。」

閑話【暴走】（後書き）

話が纏まっていけない箇所がいくらあると思いますが、ご容赦願います。

筆者はサーバーの知識とかないので用語の引用など間違っている可能性が大きいと思いますが、雰囲気だけでも掴んで貰えると助かります。

次からまた本編に戻ります。

第2話【改変】（前書き）

毎度の事ながら誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

第2話【改変】

俺はログアウトが出来なくなったその日、現実逃避をするかのよう
に自室としていた部屋のベッドで寝た：

のだったが、深夜にも関わらず昼間のような明るく強い光が窓から
差し込んできて目を覚ました。

ベッドから飛び降りそのまま玄関へ向けて走り抜け大通りまで出て
行った。

大通りのほぼ中間に位置する広場まで出るとぱっと見て、南東を中
心に東から南にかけて昼間以上の明るい空になっていた。

どこかで大爆発があったとか、隕石が落ちたのではないかとか、広
場に集まったプレイヤー達は慌てながらそう話していた。

大爆発や隕石が落下したなら爆音や衝撃波があってもおかしくない
のに、今のところそういうのはない所を見るともっと遠くの方の出
来事なのかも知れない。

——その日、『E／O』の世界は改変した。——

あの日から3日経った今日に至るまで俺を含めプレイヤー達は混乱
していたが、流石に状況把握に努めある程度には落ち着いてきた。

とはいえ、まだ南東の空は明るいままだ。何が起こったのか、懇意
にしていた情報屋から聞いた話でやっと判明した。

普段ならOS社か運営から何らかの状況説明があってもおかしくな
い状況なのだが、恐らく俺達以上に混乱しているのだろう：

なんでも南東の大陸フィラシエット大陸、地球で言うところのオーストラ

リアに位置する大陸で四神の一角ヴィーナスが大陸全体を焦土化させたと言うのだ。

はつきりいつて信じがたいがフィラシエット大陸にいる友人と連絡が取れないと知り合いのプレイヤーが話していた。

連絡が取れないとはどういう事だろうか…その日ログインしていなかっただけではないのだろうか…そういう疑問を俺は彼に聞いてみた。

「そういう事じゃないんだって、あの日、丁度その時間そのフィラシエット大陸にいた友人とリアルタイムで話していたんだよ。

本当、その時まで。でも…あの光と共に友人との通信は切れてそれっきり…もうアレから3日だぜ？

いくらなんでも、もう復活しておかしくないだろ？でも、いまだ連絡が取れないんだ…」

彼は焦燥し切った表情で呟く。恐らくアレからほとんど寝ていないのだろう。

もしかしたら、改変されたこの世界で死んだらリアル自分も死ぬという事なのだろうか…、なんとなく俺はそう思えた。

恐らく彼もそう思ったに違いない。

そういえば、あの日から変わったと言えば、NPCだ。

元々『E/O』のNPCは高度なプログラムで組まれ自我があるような行動をしていたが、その改変で本当に自我を持ってしまったのだ。

自我があるようなNPCも以前は重要な役割を持つNPCのみであったが、全てのNPCが自我を持つようになった。

自宅で微動だにせずある一定パターンの台詞しか喋らなかった、俺

の前キャラであり現在のマイキャラの父親に相当するNPCも自我を持ちまるで人間のように喋るようになった。

母親に位置する特殊NPCの古代エルフも名前も定かでなかったのに自我を持ち名前まであるのだ。

使い慣れていた元マイキャラが俺の意思とは別に喋りかけてくるのだ。はつきり言って奇妙な感覚だ。

時間も変わった。以前ならリアル3時間で3日経つのに、体感がほんとうに3日ほど経っている。信じがたい：

五感が生まれたせいで時間経過によって空腹になるようになった。以前からシステムとして空腹という概念はあったが実際に空腹になる訳ではなかった。

だけど、今回の改変で本当に空腹になる。逆に味覚が生まれたせいでこの世界の味覚に触れるようになった。

ファンタジーという事もあり日本ではあまりお目にかかれない料理ばかりで新鮮だ。それに美味しい。

そういえば、昨日OasisSpace社からメールが届いていた。あの日に改変した詳細な報告が書かれていた。

内容的に信じがたく俺はもとより他のプレイヤーも信じなかったが、それらの幾らかを実践し確認した。（死亡は怖くて誰も実践していないらしい）

魔獣の活動が活発化し、逆に野獣の活動が減ったらしい。いない事もないが町周辺にしかないとの事。

これは未確認だが、開発元であるOasisSpace社である彼らでさえ把握していない精霊が増えたらしい：

おそらくヴィーナスによる魔獣増大に対し、環境の管理を統括する

四神メシアが対抗措置として生み出したのではないかとOasis Space社は推測しているようだが、真偽は定かではない。

報告内容の1つに、レベル（成長）の限界が100から150に延びたらしい（未確認）という情報もあった。

今まで短命種族かつ限界突破クエストを2回繰り返す事でレベル150にまで限界を伸ばせた。

でも、今回の改変でクエスト自体がなくなり今まで限界突破の対象外だった長寿種族が150まで上げれるようになったのだ。

それだけではない、スキルの成長限界が無制限になった。

今までは毒耐性のスキルを上限まで育てても60%が限界だったが、頑張り次第で毒耐性100%も夢ではなくなった。

成長限界がなくなった事で習得出来るスキル数も無制限になった可能性がある。

そうなれば、毒耐性100%どころではない全状態異常の耐性100%もありえる。

まあ、それには並々ならぬ努力は必要だろうけど…

で、今日に至る訳だが、取り合えずすぐには現実に戻れそうにない。それも数年下手したら数十年戻れないかもしれない。

絶望的だ…。数年もしたら流石にリアルの時間経過が10分の1の速度とはいえ餓死している可能性がある。

最後に最も絶望的な…いや希望的なのだろうか…四神ヴィーナスを倒せばログアウト出来るかもしれないという報告で最後締めくくられていた。

え、1つの大陸を焦土化したあのヴィーナスを倒せて言うのか？改変前、ヴィーナスには無敵設定がされていた筈である、禁止事項の解除でその無敵設定が解除されたからと言って無理にも程とい

うものがあるだろう。

「そうだ！ エルフの精霊使いを探そう」

俺は取り合えず現実逃避もとい開き直った。

まずは、このキャラに精霊魔法を覚えさせるとするか…

ついでに魔法書店に行って魔術を教会で法術を習得させるしよう。

俺は両親（NPC）に挨拶してから家を出て大通りへ向かい、魔法書店を探していたが、書店に着く前に教会に辿りつく。

ゲーム上ではあまり感じなかったが何となく今は神聖な場所という空気が漂っている。

奥には神官長と思しきNPCが立っており教会に訪れた一般人のNPCに祝福をしていた。

取り合えず聞いてみるかな。

「神官長様こんにちは」

「こんにちは。小さき妖精さん」

小さき妖精？ ……あ、俺の事か。

「今日はこういった御用ですか？」

「法術を習得したいのです。神官長様ご教授して頂けませんか」

「教えてあげたいのは山々なのですが、基本的にシスターが教える事になっているのです。」

「右手奥にある部屋にシスターがいるので彼女に教えてもらいなさい。」

高位の法術が使えるようになれば私自ら教えて差し上げましょう。それまで精進しなさい。」

「はい、ありがとうございます」

俺は神官長に礼を良い、教えられた通り奥の部屋に入る。そこには年配のシスターがおり法術書の整理をしていた。そして、俺が入ってきた事に気付き振り返る。

優しいような笑顔である。今までのようなNPCではこういう笑顔にはならないだろう。

自我が生成されたお陰という事か…ほんと、リアルな人間みたいだ。

「シスター、こんにちは」

「あらあら、こんにちは。今日はこういった御用？」

「法術をご教授お願いしたいのです。」

俺は用件を言い軽く会釈をした。

「わかりました。あなたエルフみたいだし素質に関しては問題ないでしょう。

どの程度の法術をお探し？」

「下位法術でお願いします。高位法術を教えてもらっても使えませんが……」

「分りました。それでは部屋の中央にある魔法陣の中に入ってください」

指示された通り法術特有の魔法陣の中に入った。

ちなみに、法術の魔法陣は偶数の図形で成り立っている。

例えば四角形や六角形などだ。画数が多いほどまたは重なる図形が多いほど高位の魔法となる。

魔術は奇数の図形だ。

余談だが、魔法陣の中には立体の陣や球体の陣も存在する。

これは禁呪指定されている魔法だ。

改変前は限界突破でレベル150（カンスト）まで上げたキャラでないと関連クエストのスタートにも立てなかった筈だ。

過去に何人かはカンストまで上げクエストを受けた者もいるようだが、あまりにも難解で長かった為そのほとんどは途中で挫折していた。

公式発表によると、これらのクエストをクリアした者は3人、内複数の禁呪を習得した者は0人らしい。

フレンドの知り合いに3人の内の1人がいて、その人によると禁呪はチートかと思うほど強力だけどクエストが余りにも長すぎて2つ目を習得する気になれないらしい。

この改変で禁呪関連のクエストはどうなったのだろうか気になると

ころだ。

おっと、そろそろ儀式が始まりそうだ。

「では、目を閉じて心の内面に意識を集中して下さい。」

俺は言われたとおり目を閉じ意識を内面へ集中させる。
少し時間が経ってからシスターは次の段階へ入った。

「今から法術の基礎技術をあなたの精神へ刻みます。
おそらく、今あなたの内面は闇で覆われていると思います。
そこに光が芽生えたら成功です。
では、集中して下さい。」

シスターの言葉の後、俺はさらに内面へ意識を集中させる。
そこに微かだが光のようなものが点滅したように思えた。
十数分経った頃だろうか、その点滅は確かな光となっていく。
これは成功したと見て良さそうだ。
俺は目を開きシスターを見上げる。

「成功したようですね。」

「はい。」

シスターは微笑んだ後、本棚へ向かい一冊の書籍を取り出す。

そして、シスターはカウンターののような木製の机にその書籍を置き、俺を手招きする。

「これは…?」

「法術書よ…下位法術に関して記されているの。

さっきの儀式だけでは法術は使えないの、法術自体を学ばないとね。まあ…タダではないのだけど、お金はあるかしら?」

「大丈夫です」

「じゃあ、600シルバーになります。」

通貨に関して簡単に説明しよう。

それなりに良い宿の一泊の値段が大体30シルバー、だから600シルバーは結構な金額である。

世界設定的に一般人は金銭的な理由で魔法関連は習得していないらしい。

一部の金持ち以外は…

俺達プレイヤーは大体が傭兵・騎士・商人・職人のどれかを職業に選ぶ為、魔法関連の習得は問題ない。

一般人も選択できるが一部の物好きか情報屋プレイする者しかいない。

この世界には金貨・銀貨・銅貨の3種類存在するが、騎士を除いた傭兵・商人・職人は基本金貨で取引する為、銀貨・銅貨はほとんど持ち歩かない。

なので、俺は懐から1ゴールド金貨を取り出しシスターに渡す。

「すみません。1ゴールドしかないのですが、お釣りはありますか

「？」

「ええ。では、少し待ってね」

シスターは中腰でカウンターの中段あたりを探る。

「はい、お釣りの400シルバー。ちゃんとあるか確かめてね」

シスターからお釣りを受け取る。

俺達プレイヤーは一々確かめなくても見ただけで金額が分るようになってる。

とはいえ今回は100シルバー銀貨が4枚なのでそれさえも必要なさそうだ。

「大丈夫です。ご教授ありがとうございました」

俺はシスターに一礼し部屋を出て教会の本堂を通り神官長に軽く会釈してから中央広場に出る。

教会を出て辺りを見回すと中央広場でジャンクフードを売っている露店が増えていた。

「もう昼過ぎか…」

改変前は習得する時間なんて一瞬だったのに、最低でも30分いや1時間は経ってるかもしれない。

まあ、俺はエルフだし時間はたっぷりある。リアルは…まあ何とかなるだろう。きっと、おそらく…。

そういえば、短命のキャラを使用している人は寿命で死亡した場合どうなるのだろう…。

深くは考えないでおこう：

俺は露店でフライドチキンもどき（通称沼ガエルと呼んでいるM O bの肉を揚げた料理）を購入した後、中央広場を後にし魔術書店などの専門店が立ち並ぶ通りへ向かう。

確か、この中央広場から東西へ延びる大通りだったような…。

それにしてもこの料理美味しいな。

改変前は、毒耐性を上げる為に購入する料理の1つという認識でしかなかったのに…

第2話【改変】（後書き）

すみません。今回は会話よりも説明文が多くなってしまいました。
今回、NPCという表記が多くなってしまったので次回から極力なくします。

それとこの話でストックがなくなったので次回は少し先になると思います。

第3話【魔術】（前書き）

前回、掲載が少し先になるかと言いましたが、案外早く書けてしまいました。

誤字脱字、表現の誤りはご容赦願います。

説明文が多く、話の進行速度が遅いですが気長に読んで下さい。

第3話【魔術】

俺は今中央広場から東西に伸びる大通りにやってきた。

ここは専門店が多く俺が目的としている魔法書店もココにある筈だ。専門店といってもNPCが経営する商店だから良い物でも中級品止まりだ。

が、改変した事によって自我を持った訳だから、今後の中級品止まりという可能性は低いと言えるだろう。これは先が楽しみだ。

と、フライドチキンもどきを食べ終えたあたりで目的の魔法書店を見付けた。

確か、後2軒ほど魔法書店があった筈だが下位魔術の魔法書ならどこでも売っているだろう。

俺は古めかしい書店の扉を開け入店した。

「いらっしやうい。」

大方、気難しい爺さんが出迎えると思ったのに予想に反して人の良さそうなお姉さんが俺を迎えた。

「あら、どうしたの？」

「あ、いえ御気になさらず…」

お姉さんは悪戯っぽい表情を浮かべる。

「わかったあ。うちのお爺ちゃんかと思ったんでしょう？」

「え、まあそんなところです。」

「うちの店、お爺ちゃんが気難しい顔でお客さん迎えるから常連さん以外あまり買って行かないのよねえ。だから、私が見かねて店員を買って出た訳なのよ。」

改変の結果にいきなり出会ってしまった…。

まあ、それはさておき目的の魔法書を買うか…

「お姉さん、初心者でも使える下位の魔法書売って下さいませんか？」

「良いわよ。じゃあ、適性のある属性は何かしら？」

「属性？…その事をすっかり忘れてた。」

「あら、そうなの？」

じゃ、お店の裏手に来て頂戴。お姉さんが特別にあなたの得意属性を調べてあげる。」

店を一旦出て裏の方へ行って頂戴な。」

「わかりました。」

俺は店を一旦出る事にした。

お姉さんは扉の前に【Closed】の看板を立ててから店舗奥の扉から裏手にやってきた。

属性を調べてくれるのは嬉しいけど、店を閉めて大丈夫なのだろうか…

店の裏側に来てみると広くはないが射撃場みたいな所に出た。

「まあ調べると言っても基礎魔術を使って貰うだけなんだけどね。じゃ、そこに立って、今から私が詠唱する魔法を真似てみて頂戴。」

「はい」

俺は少しドキドキしている。

なんと言っても俺は今まで魔法を全く使っていなかったのだ。いわゆる脳筋キャラばかりという訳である。

「じゃあ、始めるわよ。炎の妖精よ…、フェアリーボール！」

お姉さんの右手からサッカーボール大の炎の玉が出現し、的に向かって飛ぶ。

炎の玉は的に命中し直径2メートルぐらいの範囲で爆発する。

「炎の妖精よ……、フェアリーボール！」

俺の右手から野球ボール大の炎の玉が出現し、的へ向かって飛ぶ。炎の玉は的に命中し爆発するが直径は1メートルに満たない小さなものだった。うわ、しょぼ…

「へえ、初心者にしてはなかなか魔力高いようね。」

お姉さんが言うには初心者は大体卓球のボールぐらいの大きさらしい。

恐らくはキャラ属性が炎な上に種族ボーナスのお陰だろう。

同じ魔法なのに性能が全く違う訳として、見た目の派手さや威力が

詠唱者の魔力に大きく左右されるからである。

片や魔法書店のお姉さん、片やレベル1の俺、お姉さんの魔力がどれほどのものか分らないが魔力に大きな差があるのは間違いない。

・ ・ ・ ・ ・

大体、30分ほど各属性がどの程度使えるかお姉さんと一緒に調べた結果…

無【普通】、炎【得意】、水【苦手】、雷【普通】、風【普通】、土【微妙】、光【得意】、闇【苦手】と、いう感じになった。

キャラ属性と種族属性に合致している炎と光2つの属性は、2段階上の性能があるみたいで、水と闇はその逆だった。

微妙と出た土は1段階ほど性能が下のようだ。まあ、でも1段階程度なら使える部類だろう。

で、今、店内でお姉さんに俺が使えるような魔法を見繕ってもらっている。

しばらくして、お姉さんが店の奥から戻って来た。

「おまたせ。」

店のカウンターに数枚の羊皮紙が並べられた。

「あれ、紙？」

「魔術書が欲しいの？あれ、結構高いわよ。今のあなたじゃ使えない魔術も結構載ってるから宝の持ち腐れになると思うわよ。」

「今あなたが使える魔術は各属性1つか2つだからこっちの方がお得よ。大丈夫、羊皮紙だからといって魔法の質に違いはないから」

「なるほど」

それはそうか…

「じゃ、説明に入るわね。」

と、お姉さんは言い一番右端の1枚を指差し説明に入った。

「まずは、これ。炎属性の下位魔術【フレイムスピア】射出スピードが速いから使いやすいわ。その代わり誘導性はないけどね。」

次はこれ。これも炎属性の下位魔術で【フレアアロー】若干誘導するから当たりやすいし、魔力が大きくなればなるほど炎の矢の本数が増えるの…

高位魔術を詠唱できる魔術師が使うと恐ろしいわよ。詠唱者の周りに数十本の矢が出現して、全部が誘導しながら飛んで来るんだもの。炎属性は次が最後。中位魔術【ファイアボール】本当は初心者が使える魔術ではないんだけど、あなたの得意属性みたいだから多分ギリ使える筈。

これは、さっき教えた基礎魔術【フェアリーボール】の強化版かな。炎の玉が着弾すると広範囲爆発するわ。」

聞いた感じ、炎属性は威力に長けた魔術のようで、高魔力になった後でも結構使えそうだ。

「次は雷属性の下位魔術【ライトニングピアース】貫通力に優れた

魔術よ。麻痺効果も与えるからかなり使えると思う。相手が金属製の鎧を着ていると：

次も雷属性の下位魔術で【フラッシュサンダー】威力は皆無だけど、広範囲に対して麻痺と盲目を与える状態異常魔術って事かな。

ちゃんと範囲を指定してやらないと味方も巻き込むから注意して：特に自分は巻き込まないように。」

2つ目の魔術は使いどころが難しそうだな。

雷属性は麻痺効果が付与するのが多いようだ。

「次は風属性の下位魔術【ウィンドカッター】誘導性と持続時間が高くて使い勝手が良いわ。魔力が高いと風の刃の大きさが変わるわ。次も風属性の下位魔術【ウィンドミスト】威力は皆無よ。詠唱者を中心に濃霧を発生させるわ。逃げる時に有効かな。

ただ、嗅覚や気配で察知するようなM o bには利かないから気を付けて。」

1つ目は炎属性のフレイムスピアとフレアアローが合わさった感じなのだろうか：

2つ目は視覚で敵を察知するM o bからは逃げられるという事かな。

「次で最後、土属性の【アーススパイク】岩の槍を地面から突き出す感じの魔法よ。魔力によって大きさが変わるわ。下位の割には結構範囲広いから気をつけて。

無属性は結構貴重でうちでは扱ってないわ。光属性の魔術はなくて法術がそれに相当するから、そっちで学んで頂戴。

水属性と闇属性は苦手みたいだし、態々使う必要もないでしょ。それに今の魔力では多分まだ使える段階ではないわ。

ま、こんなところかな。どう、使ってみたくてウズウズするでしょ？」

「ええ、そうですね。」

それにしても魔術のイメージとして攻撃魔法だけと思っていましたが、状態異常の魔術とかあるのですね……」

これはほんと予想外だ。というか、フレンドに何人か魔術師でプレイしているプレイヤーがいたが、使っている所を見た事がない。

「そ、結構万能よ。魔術師のほとんどは威力ありきな感じがあるから不人気なだけだね。」

「はは、なるほど、そういう事ですか」

「じゃ、お会計に行こうかしら。羊皮紙だから安いと言っててもそこは魔術、教会と違って慈善事業じゃないから結構高いわよ。お金とか大丈夫？まあ、あなたなら後日払いでも良いけどね。」

「魔術書買うつもりでしたし、お金は大丈夫ですよ。」

それにお姉さん、今日が初対面のおr：私に後日払いとか正気じゃないですよ。」

やばいやばい。この容姿で”俺”とか言ってしまうところだった。今後、自分の事をなんて呼ぶか考えておこう。

「あら、そういえば今日初対面だったわね。私結構見る目はあるつもりよ。きつとあなたなら大丈夫。」

「そう、言って貰えると嬉しいですけど……で、おいくらですか？」

「そうね。下位魔術7つと中位魔術1つだから………本当に大丈夫

「？」

「大丈夫です。」

「下位840Gと中位250Gで合計は、1090G。おまけして1000Gで良いわ。」

俺は懷から100ゴールド金貨を10枚取り出し、お姉さんに渡す。

「毎度あり。それにしてもあなた子供なのによくこんな大金持っていたわね。」

あ、もしかしてハーフエルフとか？容姿に騙されちゃったかしら。」

ハーフエルフは大体15歳〜18歳で容姿の成長が止まる。いわゆる永遠の未成年という訳だ。

「まあ、ハーフエルフですけど、容姿どおりの年齢ですよ。それに、お父様が傭兵だったんで…」

「へえ。あなた名前は？」

「アキラ。ローグライトと言います。」

「ローグライト！？？」

「え？」

「あ、ごめんね。私がまだ10歳ぐらいの時にヴォルトさんに命を助けて貰った事があるのよ。私、アマンダ。サイフィスっていうの。よろしくね。」

あなたのお父さんにあの時はお世話になりましたって伝えておいてくれない？」

アマンダ「サイフィス？アマンダ、アマンダ……聞いた事あるようなないような。」

NPCを助けたって事はクエストか何かだよな……？

あ、思い出した。クエストじゃなくて傭兵ギルドの依頼だ。

確か、誘拐された子供を助けて欲しいという依頼だったような。

あの時の子供の名前がアマンダだ。サイフィスっていうのは多分、今回の改変で付いたのだろう。

改変前、基本的にNPCに苗字はなかった。下手をしたら町人Aという名前さえなかったNPCもいた筈だ。

苗字があったのは重要な位置にあり、プレイヤーと会話する回数の多いNPCぐらいだった。

「私、ヴォルトさんに憧れて今傭兵もしてるのよ。ちなみに、この店員はアルバイトみたいな感じね。何か困った事があれば、私を頼って貰って良いわよ。」

あ、引き止めて御免なさいね。新しい魔術が欲しかったらまた来てね」

「はい、わかりました。有難うございます」

俺はお姉さんもといアマンダさんに手を振ってから店を出た。

うわ、もう夕方じゃないか……かなり長居してしまったな。

朝からずっと外にいたから、さすがにそろそろ家に帰らないと両親が心配するな。

「っていうか、エルフ探せなかった!!」

第3話【魔術】（後書き）

どうだったでしょうか？

ここにきて、前キャラ（父）の名前が判明。

名前付きキャラクターが登場しましたが、単発になるのか今後も出てくるのか自分でもわかりません。

それと、今回は文章が見辛かったかもしれない。

申し訳ないです。

また次回も読んで下さい。

第4話【闇馬】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

話がなかなか進んでいませんが気長に読んで下さい。

今回は、少し短めです。

気付いていると思いますが、サブタイトルがプロローグを除いて全て漢字2文字になっています。最初はそのつもりはなかったのですが、もう最後までそれを貫こうかと思っています。では、続きをどうぞ。

第4話【闇馬】

今日一日中歩き回れば精霊使いの1人ぐらい見付かると思っていたのだけど…

結局見付からないまま俺は家路に着いた。

家の前に来ると美味しそうな良い匂いが玄関の隙間から漂ってきた。俺の腹の虫が良い感じに反応する。

ま、明日探せば良いか…食欲には勝てないしな。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさい」

食堂から若い女性の声が聞こえてきた。

母の声だ…ぐっリアルでもこれぐらい若い母だったら…いや、何でもない。

食堂に入ると父ことヴォルトⅡローグライトがすでに席に着いていた。

「戻ったか、アキラ」

「はい、ただいま…」

ちなみにこの家の食堂は大きい、普通の家なら食卓とか言えば良いかもしれないが、

軽く10人は座れるぐらい大きいテーブルが部屋の真ん中に鎮座し

ているのに関わらず、まだまだ部屋のスペースには余裕がある。
そうこうしている内に、母が最後の料理をテーブルへ置き、自分の
席であるちょうど俺の真向かいに座る。

「では、頂くとするか…。主よ、あなたの慈愛に感謝を込めて食事を頂きます。主神ガイウスの名において：アーメン」

：昨日みたいに口パクで誤魔化しておくか：面倒だし。
復唱が終わった後、父と母が食事をし始めたのを見て俺も食べ始める。

恐らくけど、この世界の神は四神の事だと思う。
あ、でもヴィーナスの扱いどうなるのだろうか：

「今日は、どこへ行っていたの？アキラちゃん」

アキラちゃん：だと！？と、鳥肌が立った。

今までそんな呼び方された事なかったから：いや、そういえば幼い頃3歳年下の従姉妹にもそう呼ばれていた事があったか：

でも、中の年齢28歳にもなって、この呼び方はどうもダメだ。

「あ、えーと、中央広場？かな。少し教会で神官長様とお話していました。」

その他色々行って来たが間違っていないだろう。

「そうなの？神官長様って優しい方でしょう。」

・
・
・
・

しばらくして、今まで喋らなかった父ヴォルトが口を開いた。

「……ふむ、アキラお前はもう15歳だったな。」

「はい、そうですが、それが何か？」

「そろそろ身の振り方を考えねばな…」

「身の振り方とは何です？」

「私や母さんのように傭兵になるか、騎士になるかだ。」

まあ、商人や職人でも構わんが、ローグライト家は今まで1回も商會に所属していないからコネがないぞ？」

「そういう、振り方ですか…。そうですね。俺は傭兵になろうかと思えます。」

「!？」

父と母は顔を見合わせてこちらに睨み掛けた。

「あれ、どうしました？」

「お、おおああ、アキラいつから自分の事を俺と呼ぶようになった？」

え、あれ、俺そんな事口走ってしまったか？
油断していた…

「どどど、どうしましょ。あなた！」

父同様母もかなり動揺している。

改変後、俺は自分を呼ぶ時どういう呼び方に設定されているんだ？

「え、えーと…」

「…女の子であるアキラお前が自分の事をボクって呼ぶのは何とか我慢できたが、俺は流石に認められん！

誰だ？誰にそそのかされた！」

あれ…俺ってボクッ娘なのか！？

さすがにその発想はなかった。

「誰にもそそのかされていません。少し言い間違っただけです。」

少なくとも両親の前ではボクにしなければ…

「む、そうか。ならば良いのだが、くれぐれも俺なんていう言葉は使うな。」

「もう、お母さんびっくりしたじゃない。」

な、なんとか誤魔化せたか…危ない危ない。

というか、言い間違いで納得するとは思わなかった。親馬鹿の類か？
”俺”でも別に構わないのだが、家族関係を悪くしてもメリットがないし仕方ない。

「あ、お父様。魔法書店のアマンダさんがあの時は命を助けて頂いて有難うございますって言ってました。」

ま、助けたのは俺だけだな。

「ほう、あの子に会ったのか。元気にしていたか？」

「はい、今傭兵をしているらしいです。」

「傭兵か、いつか会う事があるかもな…」

俺がこのキャラを使っている？のだから父は傭兵を引退している筈なのだが、どういう事なのだろうか。

あ、よく見たら両親ともに食べ終わっているじゃないか…

話に夢中…というか、さっきので動揺して食事が進んでいなかった。

そういえば、今更だが母って古代エルフだったよな。という事は精霊魔法使えたりするのだろうか…
ダメ元で聞いてみるか。

「お母様。」

「なあに、アキラちゃん。」

うう、慣れない…。

「お母様って精霊魔法使えたりしますか？」

「当たり前じゃない。あ、アキラちゃんもしかして精霊魔法を覚えたいの？」

…こんなすぐ近くに精霊使い居たよ。びっくりだ。
まさにダークホースだな。

「まあ、そんなところです。」

「ふふ、アキラちゃんの頼みなら教えてあげるわよ。ついでに神術も教えてあげましょう。アキラちゃんは私の娘なんだし少しは使える筈よ。」

神術か…確かGMのセレスティア以外で神術が使えるのは古代エルフだけだったか…

法術の上位魔法っていうぐらいの知識しかないが、実際どういうものなのだろう。

「まあ、精霊魔法はエルフなら誰でも使える筈だから、教えると言っても契約方法と精霊についての知識ぐらいなだけだね。

神術は法術が使えたら、その延長線上で使えるからこれも問題ないでしょう。」

そうなのか！？意外と簡単に習得できるんだな…。
いや待てよ…確か、俺の神力5しかないぞ。

「お、お母様。ボクの神力ほとんどないのですけど…大丈夫ですか？」

「少しでもあれば何とかなるわ。ま、その前に法術を習得するのが前提条件だけだね。」

「それは問題ありません。今日、教会でシスターに基礎技術と下位法術を教えていただきました。」

「そう…なら、神術に関しては、しばらく【祈り】で上げなさい。」

これは法術の基礎技術でMPを回復させるスキルなんだけど、同時に僅かだけど法力も上がるの。

ついでに神力も上がるわ。法力の半分の速度でだけど、適性があるのなら確実に上がるから…

魔術にも良く似たスキルで【瞑想】があるけど、これは魔術限定だから間違っってはダメよ。」

なるほどね。いわゆる魔術や法術で魔法を使える段階にない低い能力値の時に使う救済スキルみたいなものか…

暇が出来れば少しずつ使っていこう…

魔術は炎属性限定だが中位まで使えるし【瞑想】を使うまでもないだろう。

「今日はもう遅いし明日、精霊魔法を教えてあげましょう。」

母はそう言い、食べ終えた食器を纏めてキッチンへ向かった。

俺はそれを見届けた後、風呂へ入りに行く準備をする為に自室へ向かう。

というか、いつの間にか父がこの部屋からいなくなってる。

魔法の話になって逃げたか…脳筋キャラだし。

まあ…今日は散々歩き回って疲れたし風呂から上がったならそのまま寝よう…。

第4話【闇馬】（後書き）

どうだったでしょうか？

相変わらずの文章で申し訳ありません。

改変によって主人公にボクッ娘属性が付加されてしまいました。が、中身は男のままで進みます。しばらくは、家族内の話で進みますので、あまり活用されないと思いますが。

第5話【準備】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。

今回はほとんど説明文で見難いと思います。ごめんなさい。

設定の垂れ流しと指摘されましたが、今更変える事も出来ないのでこのまま行かせて貰います。

ですが、後々、書き方が固まり次第修正などしていくつもりです。

第5話【準備】

夜が明け、朝食を摂った後、俺は早速母から精霊魔法についての手解きをして貰い、先ほど終えたところだ。

第一印象からいえば、精霊魔法ってこんなに面倒な事しなければならぬのか：って感想だ。

要約すると、精霊魔法は各地に散らばる石碑にて契約するとの事だ。契約するには、その精霊が見えなければならぬ。まあ当然だな。見る為には霊力が必要だ。

契約するのに霊力が足りていれば見えるし、足りていないと見えな
いとこの事。

だから、強力な精霊の石碑を見つけても見えなければ契約する事が出来ないのだ。

石碑はいわば精霊界とこの人間界（仮）が、交わっている境目のようなもので、その綻びで精霊と契約する。

精霊を蔑ろにするような人間には精霊は契約しようとしなない。

上っ面だけ良い人を装っていても精霊は内面を見る。

精霊には人格が存在し同じ種類の精霊でも1体毎に違うらしくて、まず初めにその精霊と信頼関係を結ばないとダメらしい。

この最初の信頼関係が難しいらしくて、精霊の性格に合わせた話術で契約まで持っていき、彼ら精霊に名前を与えると契約が完了する。

信頼関係こそが精霊の強さなのだ。

信頼関係が深ければ深いほど精霊はより大きな力を貸してくれる。初めは主従関係に近い関係から始まる、貸してくれる力も10分の1にも満たないぐらいらしい。まあ、精霊によるだろうけど。

最終的に親友関係までいくと精霊は詠唱者に最大限の力を貸し、命がけで守ってくれる事もあるらしい。

余談だが、通常、精霊を1度に召喚できるのは1体までらしいのだが、稀に精霊を複数召喚する才能を持ったものが生まれるらしい。母が言うには同時召喚出来ても、精霊同士の相性にあったものを召喚しなければ、詠唱者を巡って喧嘩になる可能性があるようだ。

最悪、その精霊達との契約が切れてしまうかもとの事。あれか、いわゆる三角関係とかああいう愛憎の纏れみたいな感じか。

でだ、精霊の契約方法と精霊の知識を教えて貰った後、母にこの街で契約できる精霊を教えて貰った。

比較的低い霊力でも契約が結べるらしいので行ってみる事にしたのだが、石碑のある場所が少々問題を抱えている場所のようだった。いわゆる、裏通り。浮浪者やチンピラなど表には出ない者などの溜まり場になっている。

その通りの奥、今はゴミ捨て場になってる場所に石碑が埋もれているらしい。

裏通りというだけで行きたくないのに、さらにゴミ捨て場かよ…。石碑は精霊使いにとっては重要だけど、それ以外の人にはどうでも良いものらしい。

区画整理の際、表通りから外れたみたいだ。

あれだな、日本でいう工事する際に見付けてしまった朽ちた祠みたいな存在だな。

それにしても、俺はレベル1だぞ。

普通なら野獣、魔獣の過程踏んだ後、人間でレベルを上げていくものなのに…いきなり人間とか…。

母は、「アキラちゃんなら大丈夫。私とお父さんの血が入ってるもの…」という…

いや、まあ確かに、その血は戦闘に特化しているが、さすがに始めたばかりのキャラでその血は發揮されないだろう。

まあ、でも街の外に出て闇雲に探すより場所が分っているだけマシか…

裏通りと聞いた時、そんな危険な場所より街の近くで安全に契約できる場所はないかと聞いたが笑顔で拒否された。

「教えるのはココだけ、後は自力で探しなさい。」との事、親馬鹿と思っていたが結構なスパルタじゃないか…

取り合えず、地下倉庫から好きなものを持って行って良いみたいだし…

（改変後、地下倉庫のものは父ヴォルトの物になっている。）

現状のステータスを確認して装備を見繕うか…足りないものは商店街で購入しよう。

「メニュー…ステータス確認、それと…装備品確認」

半透明のウィンドウで左にステータス欄、右に装備品一覧が表示される。

名前Ⅱ苗字…アキラⅡローグライト

通名…

年齢…15

性別…女

種族…ハーフエルフ※

属性…光・炎

主職業…一般人

魔力…27(+15)
霊力…28(+20)
神力…5(+5)
呪力…0

ん、微妙にステータスが変わっているな…
どれどれ、役割が魔術師に変わっている。
これは、恐らく魔術を8つ習得した為だろうな。

役割ってのは他のMMOという職業やジョブのようなものだ。
色々習得していても一番成長しているものや多くのスキルを覚えて
いるものが役割になってしまう。

まあ、傭兵ギルドで固定化も出来るのだが…今、それは良いだろう。
所属国の○内が変わってるな…。

ああ、確かCyberNote社の国王を演じているGMがオード
っていう名前のキャラだったな。
ログアウト出来なくなって彼に固定されたのか…

と、レベル上がっているじゃないか。
何でだ？…脚力と体力が上がっているという事は、昨日歩き回っ
た影響かな。

レベル1だし上がりやすいのだろうな。

『E/O』の世界では、行動した結果や使ったスキルによって上が
るステータスが変わる。

魔法関係も微妙に上がっているな。魔術師ボーナスだろう。

次は装備品一覧を確認だ。

どれどれ：

<防具>

頭
●●
|

顏
..
|

首
● ●
|

耳
• •
|

肩
..
|

背
..
|

上半身（上）
.. 初心服・上

上半身(下) .. |

腰..初心ノベルト

下半身（上）
.. 初心服・下

下半身（下） .. 安物のショーツ

靴下..初心の靴下

靴
..
サンダル

右手
..
|

左手
..
|

鞆
..
|

[illegible]

<武器>

右手..仕込み杖（打刀）

左手
..
|

予備
1
..
|

予備2
..
|

```
* * * * *
```

…気になる項目が1つだけある。

俺、ノーブラだった：

ああ、そういえば、着けた覚えがない。

タンスにもそんなものはなかった。

習慣というのは怖い、俺は男だからブラジャーを着けるという行為自体した事がない。

初心の服・上つてのがTシャツみたいなもので、あまり気にしてはいなかった。

というか、妄想とはいえ女の体になった訳だからノーブラというのは拙いな…。

いや、それよりもノーブラでも気にならないっていうのはどういう事だ？

俺は今まで意識しないようにしていたが…：確認するしかない！

決して俺のエロ心からそうする訳ではないからな！
意を決して、胸に手を当ててみる。

嗚呼、触った感じそれは見事なまでに貧乳だった。

俺は巨乳派なんだが、残念だ。

い、いや、勘違いするなよ。俺にやましい気持ちなどはない…事も無いが少しだけだ。

ま、まあ、そろそろ本題に戻ろうか。

さすがに初心者用の装備で裏通りに行く訳には行かないな。

当たらなければ、どうという事はないっ…：なんていう迷信は、今まで五感がなかったから言えるもので、五感がある今はそんな事は口を裂けても言えない。

俺は生粋の日本人だからな…：痛いのは嫌だ。

だから、出来るだけ装備出来る一番良いものを装備したいところだ。

色々、探していると父が地下倉庫に下りてきた。

「防具を探しているのか？出来るだけ軽いものにしておけ。そもそもアキラの体に合う鎧などは置いていないしな。そうだな、布製を薦めるが、革製でも構わない。」

俺は、えええ！？と嫌そうな顔を父に向ける。

「防具が重くてはまともに歩けないぞ。いざという時、逃げられるよう重い装備はしない方が良い。」

いや、それはごもつともなんですが、当たったら痛いじゃないですか…。

「当たらなければ、どうという事はない。そもそも、アキラお前は月守流居合剣術の跡取りなんだぞ。チンピラごときでお前に傷など付けれるものか。安心しろ、そういう場面になれば自然と体が動くものだ。」

言っちゃったよ。この人…

そういえば、過去9キャラ分の技術が詰まった月守流居合剣術使えるんだったな…

確かに、これが自然と使えるなら何とかなるかもしれない。

そうと、決まれば軽い防具で固めるか…

で、倉庫と商店で買い漁り最終的に装備はこうなった。

<防具>

頭…

顔…

首…守護の首輪

耳…

肩…

背…

上半身（上）…なめし革の鎧

上半身（下）…バトルブラ（白）

腰…初心のベルト

下半身（上）…バトルスカート

下半身（下）…安物のショーツ

靴下…ニーハイソックス

靴…なめし革のブーツ

右手…

左手…

鞆…小型ポシェット

<武器>

右手…仕込み杖（打刀）

左手…

予備1…

予備2…

結局、首に着けたネックレス以外は商店で買った。

それと、動き回ると思うからブラジャーも購入した。

小型ポシェットには道具屋で買ったHP回復薬（小）を4つ入れてある。

後は、無難に纏めたと思う。

次はどんなスキルが使えるか確認しておくか：

「メニュー…スキル確認…」

<流派>

【斬鉄Lv1】ブロンズ以下の防具が斬れる。

【縮地Lv1】2mの距離の間合いを一瞬で詰められる。

<魔法>

【魔術Lv1】下位魔術まで使用できる。

【法術Lv1】下位法術まで使用できる。

【精霊魔法Lv1】下位精霊まで召喚できる。

<才能>

<知識>

【戦闘基本知識】戦闘に関する知識がある。

【魔術基本知識】魔術に関する知識がある。

【法術基本知識】法術に関する知識がある。

【精霊基本知識】精霊に関する知識がある。

【神術基本知識】神術に関する知識がある。

<生存>

【気配察知Lv1】10m以内の自分より低レベルの気配を察知で

きる。

【話術Lv1】商人との売買時5%利益が増す。たまにおまけして貰える。

<生産>

・
・
・

生産スキル以下は見なくても良いだろ……。当分は縁がない。

えーと、流派スキルは、まあ当然レベル1だな。一度も使っていないのだし……

どの流派でも流派スキルは必ず2つ付いている。

月守流居合剣術では、この2つという訳だ。

ちなみに、斬鉄を持つ流派と縮地を持つ流派を掛け合わせて創った。

魔法スキルは、まあ覚えただけだしLv1だな。ほとんど使っていないし……

神術が下位まで使えると書いてはいるが、神力が足りていないので使ったとしても失敗する。

才能スキルは、まだ開花していないか……

『血の記憶』システムでもっとも影響のあるスキルがこの才能スキルだ。

血の記憶には歴代キャラの知識・技術・記録などあらゆるデータが詰まっっていて、その蓄積量に応じて特別なスキルが開花する。

例えばだが、俺のキャラ達のように剣術ばかり使用していると、そ

の技術が全て”血”に記憶されていき蓄積される。

次に生まれるキャラにもその血が受継いでいる訳だから、剣術の才能があってもおかしくないのだ。

恐らくだが、俺は【剣術の才能】に開花する筈だ。

ちなみに、蓄積されて上がるのは確率なので、必ず覚えるという訳でもない。運が悪いと開花しない。

それに、今まで全く使用した事のない技術の才能も確率は非常に低いが開花する可能性もある。

この才能が開花するかしないかで今後の行動が変わると言っても過言ではない。

フレンドで全く使用した事のない武器の才能に開花してしまい急遽方向性を変えた者もいる。

それほど、才能というのは有用なのだ。

あれだ、『血の記憶』ってのは、長期間の継続かつ廃人プレイをしている者に対するご褒美というやつだな。

ちなみに、このキャラの”両利き”は普通の方法では取得出来ない。6キャラ目までの全てのキャラで【両利き（仮）】という、両利きの様にするスキルを上限まで鍛え上げた結果が今に結びついている。

【両利き（仮）】は上限まで鍛え上げても利き手の様には力を発揮出来ず80%が限界だ。

で、ステータスで両利きになるとどちらの手を使用しても100%の力を発揮できるのだ。

まあ、この情報を知っているのは極僅かの者だけだ。俺を含め両利きを取得している者は恐らく両手で数えられる程度だ。

次は、知識スキルか：これにはスキルLvが存在しない。

見て分ると思うが取得した知識が並べられている。まあ、それだけで特に意味はないし、これが何かに影響する事もない。

これが使えますよ！ってぐらいだと思ってくれていい。

生存スキルだが、これは何かを行動する上で重要なスキルが多い。まさに生きる為の技術だ。

特に傭兵をするなら、このスキルを充実させた方が楽に動ける。以前に何度か登場している【毒耐性】もこの部類に入っている。

まあ、スキルとはステータスの底上げだと思ってても強ち間違いではない。

さて、準備は整った訳だし、裏通りへ向かうとするか。俺は地下倉庫を出て玄関へ向かうと父に出くわした。

「行くのか：相手はチンピラだろうが気を抜くな。」

「分っていますよ。お父様。」

そこへ母が台所から顔を出し見送ってくれる。

「アキラちゃん、いつてらしゃい。気を付けるのよ。」

「はい。行ってきます。お父様お母様。」

そして、俺は玄関を出て中央大通りの奥にある裏通りへ向けて歩みます。

第5話【準備】（後書き）

見辛かったですよね。ほんとにごめんなさい。

ステータス欄とかどうにかすつきりさせたいのですが、取り合えずこのまま進めます。

※ご指摘のあったノーブラに関する記述を少し変更しました。

それと、次は初の戦闘になると思います。

第6話【初戦】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。

今回は、戦闘です。

筆者的にも初戦なので、上手く表現できているか自信はありません。
でも、楽しんで頂ければ幸いです。

第6話【初戦】

この街の領主が住む館へ向かう大通りの脇にある小道を奥に進んでいくと、Y字路の先に目的の裏通りがある。

片方は低所得者向けの集合住宅のような建物が建ち並んだ普通の住宅街だが、もう片方の奥の方が明らかに違う空気を漂わせていた。ここから一歩でもこの道に入ると、住民や騎士達からの目から外れる。いわゆる、街にいながら安全圏から外れるのだ。

ここで何をしようが目撃者がいなければお咎めがない。

正直怖い。この先は危険だと第六感？が告げてくる。

五感がなければ多分、何も感じず入って行けるのだろうか…

ほんと、父と母はスパルタだ。

「さて、行くか…」

俺はY字の先へ入っていく…安全圏から外れたココからが本番だ。

俺は目的に向かってどんどん奥へ進んでいく。

何もして来ないが厭らしい視線が俺に付き纏う。不気味で気持ち悪いな…。

む、分かれ道だ…どっちに進もうか…。

取り合えず、ここに印を置いて奥へ行くように進んでいこう。

あ、また分かれ道だ。なんか迷路みたいだな。ここにも印を置いてつと。

この後、3回ほど分かれ道を通った後、辿り着いたのは行き止まりだった。

そして、俺は元来た道に戻ろうと振り返ると、いかにもチンピラで

すと言わんばかりの者達が行く手を阻んでいた。

気配察知のスキルが働かなかったという事は俺よりもレベルが高いという事だな。

1、2：6人か、男5人女1人全員がナイフらしき武器をチラつかせていた。

「お嬢ちゃん、こんな所で何をしているのかな？」

俺は一番前で話しかけてきた男を無言で睨む。

「おお怖い怖い。何か探し物があるのなら手伝ってやろうと思ったが、気が変わったなあ」

こいつ：手伝う気なんて更々ない癖に何言ってるのだから：

「なあに、別に取りって食おうって訳じゃないさ。ここで会ったのは何かの縁だし、身包み全部ココに置いて行くだけで良いんだぜ。」

取って食おうとしているじゃないか：こいつ馬鹿か？

「おい、何か喋れよ：命だけは助けて下さいとか何かあるだろうっ！」

何も喋らず無言で睨む俺に対して男は苛立ちを見せる。

「なんだあ！？その目は！」

「ッ」

男は俺の髪を強く握り顔を上に向けさせるように持ち上げる。

「へへ、綺麗な目してるじゃないか…」

くう、痛い。強く引っ張るな…

さっきから俺の毛がちよつとずつプチプチといって抜けていつてい
るではないか。

「ボクの髪から手を離せ…チンピラ。」

「あああん!？」

「うっ…」

男はより一層強く握る。だから痛いって言っているだろうがっ！

「兄貴、こいつ生意気過ぎますよ。」

「そうだぜ。取り合えず動けないようにしてから身包み剥げば良い
んじゃないの？」

「俺はどっちかというと体の方が興味あるな…」

「廻すなら私が見ていないところでやってよね。」

なんか、チンピラ（小者）どもが言いたい放題なんだが…いい加減
ムカついてきた。

俺は腰に差してある仕込み杖を取り出し、男の腹に押し当てる。

「ん?」

男が下を向いた瞬間…

「炎の妖精よ：フェアリーボール！」

ワンワードワンスペルで出せる基礎魔術を唱えた瞬間、男の腹で爆発が起き、後ろにいたチンピラ（小者）の1人を巻き込んですっ飛んで行く。

不意打ち成功、さすがに至近距離での魔法は効いただろう。

男は白目で気絶しているようで、魔法が直撃した腹は服が完全に焼き飛ばされており、体の方もかなりの火傷を負っていた。

巻き込まれたチンピラ（小者）は少しふらついてはいるが無傷のようだ。

それ以外の者はあまりにも突然だったので呆然としている。

一瞬の間を置いて、チンピラ（小者）達は俺に対して敵意をむき出しにした。

「てんめええ」

「不意打ちとか汚ねえぞ！」

「ぶっ殺してやる！」

命の危険と貞操の危険があるのに不意打ちとか汚いとか関係ないと思うのだけど。

「この子、魔術使うみたいだし、近付いて唱える隙を与えなければ良いわ。」

チンピラ（女）が魔術を使う者に対してのセオリーを他の者に伝える。

だが、俺は普通の魔術師じゃないんだよな。
勢いを付けて2人ほど突進してくる。

俺は杖を腰に差しなおして腰を落とす。

そして：【縮地Lv1】を発動させ、それにプラスして頭の中で月守流居合剣術の基本技である抜刀術をイメージしてから技を繰り出す。

『居合・壹之太刀』

俺の体は一瞬でチンピラ（小者）達との距離を詰め、仕込み杖から抜かれた刀で一閃2人を斬り捨てる。

その一閃で真空波が発生し、後方にある壁を切り裂いたが見なかった事にしよう。

すぐに杖へ刀身を納める。

『居合・貳之太刀』

そして、丁度、チンピラ達グループの中心に来ていたので、もう1つの基本技をイメージして他の2人を纏めて斬り裂く。

ここでも真空波が発生、後方でふらついていたチンピラ（小者）を肩口から腰にかけて両断する。この場所は結構広いスペースなのだが、周囲の壁に切り裂いた後が深く刻まれた。

5人を斬り捨てる時間、およそ3秒：イメージした通りに技を繰り出せたので俺は満足した。

周りを見渡して他に誰も居ない事を確認した後、血振りをして杖に納めた。

ちなみに、壱之太刀は前方90度の範囲を横に斬る出の速い技だ。オプシオンでランダム軌道の真空波が3mほど飛ぶ以外は普通の技である。

式之太刀は周囲360度を横に斬る技だが、壱ほど出は速くない。壱同様オプシオンでランダム軌道の真空波が3mほど飛ぶ以外は普通の技である。

多分、今の俺が出してもSP的に大丈夫なのはこの2つの技だけだろう。

技の名称について、考えるのが面倒だったので適当に考えた。最初に覚える技と2つ目に覚える技なんだから、これで十分だ。

周りを見渡すと、そこは猟奇殺人の現場のような惨状だった。う、自分がその惨状を作り出した張本人とはいえ、これは吐きそう
だ。

両断された死体と俺を中心に周囲へ円状に広がった彼らの血：

ん？ 改変前と同じようにチンピラ（小者）達の死体が光の粒子に包まれていく。

死体全体を覆っていたと思ったらその粒子が集まって光の玉となり、上空へ上がっていく。

そして、俺の身長ぐらいまで来たと思うと、光は消えていった。

彼らが着ていた衣服や武器などを残し……血は残っているようだが。これはMobが死んだ時の演出と似ているな。

NPCだからこういう演出なのだろうか……

改変後のプレイヤーもこういう死になるのだろうか……

さて、最初にすっ飛んだ男がまだ辛うじて生きているようだが放っておき、もう少し戻って他の道を探すとするか。

目的地に近付いている感じがするが、その間あの付き纏う視線がな
い事に気付く。

一応、周囲に誰もいないか調べてみるか…

俺は、下位法術の1つである周囲にある生物を探る魔法を使ってみ
る。

ちなみに、これはスキルである【気配察知】とはまた違う性質のも
のだ。

唱える事で、周囲100m内にいるあらゆる生物を視認出来まいが
隠れていようが見つけ出す魔法なのだ。

一見便利なように見えるが、発動中は移動出来ないだけでなく一切
の行動が出来ない。

だから、戦闘中や近くに敵性生物がいると良い的となる。

多分、今使っても大丈夫だと思う。

「女神ヴィーナスの名において、見えざる者を映し出せ…ディテク
ト！」

唱えた瞬間、俺の目に人の姿が強調された感じで映し出される。

ふむ、少なくとも周囲10m以内にチンピラと思しき者はいない。

それ以上は警戒している様子のチンピラ達がちらほらいるが、敵意
は今の所感じない。

一応、安全なのが分ったので魔法を解く。

それにしても、ヴィーナスの加護はまだあるようだな…。

もしくは、詠唱文にヴィーナスの名が使われているが、力の源はま
た別のところにもあるのかも知れないな。

そして、しばらく歩くと先ほどのスペースの大体3倍の広さの空き
地に出た。

その奥にはゴミ捨て場のような所が見える。目的地はここで問題な
さそうだ。

俺はそのままゴミ捨て場に移動し、もう1つの探索系下位法術を唱える。

「龍神メシアの名において、隠れし物を映し出せ…オブテクト!」

今回唱えたのは人ではなくて物を見つけ出す魔法だ。

周囲100m以内の隠されたスイッチや宝箱をディテクトの様に強調して見つけ出す魔法だ。

デメリットもディテクトと同じである。

あ、見付けた…。石碑以外にも回復薬とか色々あったが、取り合えずそれらは放置で良いだろう。

俺は魔法を解いて石碑の上にあるゴミを不本意ではあるが、手で掘り返す。

ゴミを払いのけた後の石碑は異常に臭かった…。

何年ゴミに埋もれればこんなに臭くなるんだ。

第6話【初戦】（後書き）

どうだったでしょうか？

少し短めですが、切りが良いのでここまでにします。

次も戦闘がありますので見て下さい。

第7話【精霊】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。
今回も戦闘があります。

第7話【精霊】

「ほお〜10年ぶりの客だ…」

と、言ったのは俺の目線で漂っている精霊だった。

なんだ、この臭い上にだらけた精霊は…

肥えに肥えた主婦がテレビの前のソファで寝ながら尻をボリボリと掻くその姿に酷似している。

「おいおい、最近の精霊使いつてのは精霊に対してそういう態度を取るのか？」

そういう態度つてのは鼻を詰まんで汚れたものを見る目の事だろうか…

「申し訳ありません。あまりにも臭いので…」

「だっはっは、正直な嬢ちゃんだ。そういうのは嫌いじゃねえぜ。」

あまりにも碎け過ぎだろ…俺の精霊に対するイメージが変わった。

「言っておくが、精霊がみんな俺みたいな奴ではないからな。」

あ、自覚あるんだ…。

というか、話しながら鼻くそをほじるのは止めろ。

俺は自然と嫌そうに顔をしかめていた。

「ん？おおっとすまねえ。生ゴミに埋もれたせいで10年間誰も来なかったからよ。」

暇で暇でつい癖になっちゃった。唯一の楽しみと言えば、その辺にいるチンピラ共の殺し合いぐらいだしな。」

ああ、なるほどね。こういう殺伐したところに10年も放って置かれたらこうなるわな。

大方、チンピラはこのゴミ捨て場に散見されるまだ使えそうな代物の取り合いをしていたんだろうな。

「で、契約するかい？」

え？ そんな簡単に契約できるのか？

「あ、勘違いするなよ。嬢ちゃんを信頼した訳じゃねえからな。こんな所から連れ出してくれるなら誰でも良いんだよ。」

なんていう正直な精霊だ。

俺もこういうのは嫌いじゃない。

「それならば、よろしくお願いします。」

「おう、なら、俺の名前を決めてくれや。俺は風の精霊ソードレスだ。それで契約完了だ。」

名前どうしようか：喋り方がヤクザやヤンキーみたいな感じだし、そういうニュアンスで付けてみるかな。

ふむ、決めた。これで良いだろう。

「古の誓約に基づき風の精霊ソードレスと契約を結ばん。汝の名はザキラ。我が名はアキラ＝ローグライト！」

俺と精霊はそれぞれ光の柱に包まれる。

その光が落ち着くと風の精霊は姿を消すと同時に、突風が俺を包み込む。

そして、空気に溶け込むかのように消えていった。

ふう、終わったか。さあ帰ろう。

俺は、ゴミ捨て場の出口へ向かう。

・
・
・
・

「あれ？」

どうしたのだろう：何故か足が進まない。

と、厭な視線なんていうレベルじゃない明確な殺気と共に、ゴミの山の陰からチンピラ？が1人出てきた。

「クックック、話し声が聞こえると思えば面白いものが見れたぜ：。」

なんだ、こいつは：

「あれか：さっきの言葉は精霊と契約でもしたのか？ん、アキラちゃ〜ん？」

男は値踏みをするかのように俺の全身を下から上まで眺める。

「くっ：」

「ああ、そうか。俺だけ名前が知ってるのもなんだな。俺の名前はジョーイⅡシムス、簡単に言えば賞金首、PKをやってる。よろしくな。」

何故か、自己紹介してきたその男、ジョーイⅡシムス…どこかで聞いた覚えがある。

前時代、賞金首を専門に狩る有名なパーティを一人で壊滅させた上に身包みを全て剥ぎ取った賞金首がそういう名前だった。

その後も、目に付く傭兵を狩り続けた結果、「傭兵狩りのシムス」なんていう呼ばれ方をされていた筈だ。

「傭兵狩り…」

確か、こいつはアキレウス族の筈だ、魔法が一切使えない代わりに身体能力が非常に高い種族で、特に近接武器のエキスパートと呼ばれる。

しかも、前時代から引き続いて今の時代をプレイしている。レベルは恐らく100を軽く超えている廃人プレイヤーの1人だ。

今の俺にとって最悪の相手が目の前にいる…

「ほー、俺を知っているという事は前時代に傭兵でもしていたのか？」

少し驚いたシムスは、腰に差してある剣に手を掛けた。

「なら、少しは楽しめるかもな…。なあに、気にするな。ただの暇つぶしだ。」

お前がただの糞ガキだったら、犯して犯しまくって俺の奴隷にした拳句に苦しませて殺してやろうと思ったけど…

そうだな、俺を少しでも楽しませる事が出来れば、苦しまずに殺してやるよ。」

シムスは理不尽極まりない言葉を吐く。
俺には死ぬ選択肢しかないのか？

「どうした、構えないのか…？」

シムスの姿が俺の視界から消える。

「だったら、死ぬ事になるぜええ！」

シムスの声が俺の背後から聞こえてきた。

「!？」

は、速い。

「くっ」

俺は咄嗟に腰に差してある杖を振り上げる。
ガチィ！と鈍い音と共にシムスの剣が杖と交差する。

「お、良い反応するじゃねえか？」

シムスはそういうと俺の腹部を足の裏で蹴る。いわゆるヤクザキックというやつだ。

何気ないそのキックも俺にとっては非常に強力な打撃で、俺の体は軽く吹っ飛び後ろの壁に激突する。

「かはっ!？」

くう、視界が赤い…さっきの一撃で俺のHPはほとんど削られたの
だろう。
足もともに働かない、プルプル震えてまるで生まれたての小鹿の
ようだ。

「おいおい、今ので瀕死かよ…お前どれだけレベル低いんだ。」

一桁だよ、こん畜生おお!

俺はポシエットにあるHP回復薬(小)を1本一気に飲み干す。
これで俺のHPは全快だ。

そして、俺はシムスに向きなおす。

「ひやはは、お前さっきのHP回復薬の一番初期のやつだろ? お前
もしかしてレベル20にも満たないのか?」

そうだよ、20どころか10にも満たしてないよ。悪いか…。

「そんなレベルで、さっきの一撃を防いだのか…手加減したとはい
え信じ難いぜ。」

ひやははは、マジかよ。有り得ねえええ。お前凄いな。」

シムスは腹を抱えながら大笑いをする。

非常に悔しいがこの隙を狙うしか俺には活路がなさそうだ。

そして俺は【縮地Lv1】を発動させ、男の脇をすり抜ける。

「おおおっと、逃がさねえよ!」

脇をすり抜けようとした俺の足を狙いシムスは素早く剣を振るう。

そして、シムスの剣が俺の足を掠める。
激痛が走り、俺は縮地の勢いのまま地面に転ぶ。

「イツつ…」

掠めただけなのになんかなり痛い…それに傷口が濃い紫色に変色している。
毒？

「注意しとけよ。俺のこの剣には猛毒が付加された特別な剣なんだ
…掠っただけでも10分足らずで死亡確定だ。
あ、お前程度なら2分ぐらいか…」

だ、だめだ。力が出ない…視界も暗くなってきた…。
くう、生き返る確証がないんだ、こんな所で死ぬ訳にはいかない！
俺はポシエットにあるHP回復薬（小）をまた一気に飲む。
でも、これだけじゃダメだ。猛毒を何とかしないとタダの延命措置
にしかない。

俺は朦朧とする意識の中で、治癒の法術を唱えた。

「女神ヴィーナスの名のもとに、我が身を蝕みし負の力を浄化させ
たまえ！キュアライト！」

俺の体を蝕んでいた猛毒は綺麗さっぱり霧散していった。

「ほう、お前法術使えるのか…こりゃ驚いた」

あんまり魔法は使いたくなかった…。なぜならMP残量が最大の3
分の1にまで減っていたからだ。

誤算だ。チンピラしかいないと思っていたからMP回復薬を買っていない。

「じゃあ、純粹に殺戮を楽しもうじゃないか！」

シムスは余裕な表情で俺に向かって走ってきた。

だが、俺には余裕はない。

そして、最も有効でシムスから逃げ果せる方法考えた：

居合で奴に隙を作り後退したところを魔法で吹っ飛ばす。そして、そのまま一目散で逃げるのがベストだと：

そして、俺は杖を腰に差し直してシムスが間合いに入るのを待つ。

「ヒヤッハッ！」

シムスは上段で構え俺を頭から真っ二つにするかのように振りかぶった。

今だ！

『居合・壺之太刀』

シムスを後退させたら儲けもの、どうだ！

俺の刀はシムスの腹を横薙ぎし、さらに生じた真空波がやつの傷口を抉って行く。

「ぐううっ！？」

シムスは傷口を押さえ蹲る。

よし、行ける！俺は次に中位魔術【ファイアボール】を唱えようとする。

だが、その時、奴の腕が伸びてきて俺の喉を掴む。

「ぐぎっ…」

「つつ、やらせねえよ！」

怒気を含んでシムスはそう言う俺の喉を掴む腕の力をじよじよに強くしていく。

く、苦しい。息が出来ない。意識が飛びそうだ…。

「やるじゃねえか…そんな隠し玉があったとはな…さすがの俺もこれは防げなかったぜ。」

くくく、楽しいな…俺に傷を負わせたのはお前が初めてだ。」

もう…ダメ…だ…。

「おおっと、ここで殺したら勿体無い。」

シムスは手を放す。

「くはっ…ひゅーひゅーひゅー…」

視界が歪む、奴の笑みも歪む…もう俺にはほとんど力は残っていない。

回復薬を飲む隙なんて恐らくもうないだろう…俺はここで死ぬのかな。

「どうした？回復薬はもう飲まないのか？」

え？どういう意味だ？

「もっと、楽しもうぜ。おら！早く飲め！」

シムスは俺に蹴りを入れると回復薬を飲む様促す。

ただでさえ、残りHPが少ないというのに回復薬を飲ます為に蹴りを入れるなよ…と薄れ行く意識の中で思った。

って、ここで死ぬ訳にはいかない。震える手でHP回復薬（小）を掴んで口に持って行く。

震えていた為、口から少し零れHPが全快しなかったが、意識ははつきりとしたものに戻った。

「おら、立てよ。」

シムスは俺の顎を爪先で持ち上げ立つように言った。

俺はシムスを睨みながら立つ。

「良いねえ。その目。ゾクゾクするよ。俺の息子も勃ってしまいそうだ。」

こんだけ遊んでやったのに、まだその目が出来るとはな。」

残り、回復薬1本。次、致命傷になる攻撃を受けたら本当に死んでしまう。

俺、どうする！？

（はぁ、俺の事忘れてるんじゃないだろうな…俺を呼び出せ！嬢ちゃんが逃げる時間ぐらい稼いでやんよ。）

俺の心に先ほど契約したザキラがため息をつきながら呼び掛けて来た。

く、他に手はなさそうだ…ザキラの提案に乗るか…。

なら、全は急げだ。俺は【縮地Lv1】を発動させ、2m奴から離れる。

「ん、縮地を連続で使用して逃げるつもりか？無駄だから止めとけ。お前のSPなんざすぐに尽きるぜ。」

「そんな事はしないっ！」

俺はシムスを睨みながら精霊魔法を詠唱し始める。

「我は望む。我が親愛なる…風の精霊ソードレス。我の呼びかけに応えよ！我の名はアキラ！ローグライト！汝の名はザキラ！」

すると、俺とシムスの間に強い旋風が発生し、その中心からあの風の精霊が実体を持って姿を現した。

「やっと、自由に動けるぜ…嬢ちゃん全て俺に任せな。」

ザキラは俺を横目で見ながら、リーゼントでガチガチに固めた自慢の髪を両手で整える。

……なんていう、時代遅れのヤンキー。

「なんだ。こいつ…雑魚臭しかしねえ…」

俺も同意見だ…

ヤンキー漫画とかで、主人公に喧嘩を売って一瞬で散っていく名前もない雑魚キャラにしか思えない。

「なっ！？失礼な奴だ…」

ザキラは憤慨しながらシムスを睨む。

「おら、嬢ちゃん早く逃げな…」

ザキラは俺を逃がす為笑顔で促す。

そして、油断しているシムスに向かい直す。

「やあああってやらあああ！」

まるで、ヤクザ映画の鉄砲玉のような台詞を吐き、精霊らしからぬ突進攻撃を繰り出す。

それ死亡フラグじゃないのか？

「ありがとうございます。後はお願いします。」

お前の事は忘れない…

俺は彼らに背を向けて後ろには目もくれず逃げ出した…。

悔しいが、俺ではシムスには勝てない…。

ゴミ捨て場のある広場を抜けた辺りで、ザキラがシムスに葬られる叫びが聞こえたが気にせず走り抜ける。

このままでは追いつかれる可能性があった為、俺は残りMPで使えそうな風の魔術の1つを唱える。

「谷の風よ、強く強く吹き荒れ敵を惑わす霧を広げよ！ウィンドミスト！」

俺を中心に濃霧が発生し視界を妨げる。

何も見えなくなるが、シムスにも何も見えない筈…

俺は必死に走った。この淀んだ空気が薄れていく方向へ…

そして、息は切れ切れ、足もガタガタもう走れないと思った瞬間、表通りに出る事が出来た。

第7話【精霊】（後書き）

どうだったでしょうか。

主人公アキラは廃人ではありますがレベル差には敵いません。

魔法の詠唱文は仮です。

もうちょっと飾り気のある文にしたかったのですが、思い付きませんでした。

今回は誤字脱字が多いと思うので随時修正していきます。

出来れば、次回も読んで下さい。

第8話【試練】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。

第8話【試練】

裏通りから表通りに出て、俺はすぐに道を行く人々から奇異の目で見られている事に気付く。

プレイヤーと思しき人達からは、エロい目で見られているような気がしないでもない。

回復薬最後の1本を飲み干し、俺は改めて今の姿を見てみた…

全身泥と血だらけで、今日買ったばかりの装備品は、上半身の鎧を除いて全てが見るも無残なボロボロの状態になっていた。

よく見たら、首にしていた守護の首輪がなくなっている…。

首を絞められた時に切れたのかも知れない。

布製の装備品は、転んだりした際に破れてしまったようで、露出した肌が擦り傷だらけだった。

剣で斬られた足は出血が止まっているものの、傷口はパツクリと広がっていた。

逃げるのに夢中で気付かなかったが、結構痛い。

スカートは腰骨近くまで裂けており、太ももが付け根まで丸見えになっている。

ニーハイソックスは切られた側の方だけ脛より下にずり下がっており、いつの間にかブーツまで脱げていた。

…戦った後の筈なんだけど、どう見てもレイプされた後だな。

それに、恥ずかしい事なんだが、首を絞められた時に少しちびつたみたいだ…ショーツが濡れている。

改变後、HP回復薬はHPを回復させてくれるが、傷は塞いでくれないのな…。

それとも改变前はビジュアルに反映されていなかっただけで、今と同じ仕様だったのかな。

俺は傷口を塞ぐ為に法術で治癒をする……

MPが足りやがらねえ……

途方に暮れていると見知った顔が前を通り過ぎ……なかった。
驚いた顔でこっちを見ている。

「ヴォルト……あ、いや、今はアキラだったか……。何て姿をしてやる。なんとと言うか目のやり場に困るぞ。それにお前泣いているのか？」

泣いている？俺が？……気付かなかった。

死が何度か頭を横切った時に自然と出たのかも知れない。

この顔見知り、スコットIIベイグ。傭兵と商人を兼業している行商プレイヤーだ。

ちなみに、こいつは第2話でフィラシエット大陸にいる友人を失ったあの人だ。

長旅が多いせいか独身で恋人はいない。一度彼の家にお邪魔した事があるが、いくつもある客室が全て商品で一杯だった。

まあ、無事、立ち直れて良かった。

それはさておき……

「スコット。MP回復薬はないか？」

「ああ、あるぜ。MP回復薬（大）が……そうだな。1800Gってところだ。」

「そうか、1800Gだな。」

俺は懐から100ゴールド金貨を数枚取り出そうとすると：

「あああ、待て待て。さすがにこんな姿の友人から金は取れないよ。それと、これもやるよ。ほら、受け取れ。」

スコットはMP回復薬（大）と体全体を覆うローブを押付けてきた。

「すまない。ありがとう：」

「良いって事よ。それよりも何があった：。擦り傷とかもそうだが、首に赤く腫れ上がった手形がクッキリついているぞ。」

：手形は気付かなかったな：

俺は貰ったMP回復薬（大）を少しでも口に含み、残りは栓をした後、ローブの内ポケットの中に入れた。

そして、下位法術の一つである治癒の魔法を唱えた。

「女神ヴィーナスの名の下に、大いなる癒しの力であるべき姿に戻したまえ！ヒール！」

半透明の白い光に体は包まれ、痛々しく主張していた傷達は綺麗になくなった。

「ふう：助かったよ。スコット」

「どういたしまして：で、何があった。」

「PKに出くわした：。傭兵狩りのシムス、知ってるだろ？」

「!! 当たり前だろ。傭兵をして知らない奴なんていない。あいつがいるのか？ この街に…。」

「ああ、裏通りに用事があったんで行ってみたら運悪くも奴がいた…。」

そして、この有様さ。必死で戦ったが勝てなかった。まあ、当たり前だが…。」

「え、戦ったのか？ レイプされた訳じゃなくて？ っていうかどっちにしろ、よく死ななかったな…。」

確か、あいつはレベル120オーバーだぞ。」

シムスがこの街にいる事に驚いているようだが、それ以上に俺が戦って生きている事に驚いているようだ。

「何度か死に掛けたけどな…。」

シムスの攻撃が掠るだけで瀕死なのだから…

「プレイヤースキルで逃げ果せた訳か…。さすが、廃人…いや廃神か…。」

お前ぐらいだよレベル差100以上あって生きているのは…。」

プレイヤースキルというより、あの精霊の犠牲があつてこそその命と言えるな…。」

ザキラお前の事は忘れない…無事、成仏してくれ。

（死んでねえよ。勝手に殺すんじゃねえ!!）

はて、空耳が聞こえたような…気のせいだな。

「で、どうする。家に帰るなら付いて行ってやるよ。」

「ああ、帰る。恩に着るよ。」

俺はスコットを伴って家路に着く。

・
・
・

そして、しばらくして家の玄関前に着いた。

「俺は家に売れ残りを置いたら、そのまま傭兵ギルドに向かうよ。シムスの情報はギルドの方に入れておくべきだと思うしな。何かあったら連絡するわ。じゃあな。」

「ああ」

俺は手を振りスコットと別れ、家の扉を開く。

「ただいま帰りました。お父様お母様。」

家の奥からバタバタという足音と共に父と母は玄関前までやってきた。

「アキラ、無事か！あまりにも遅いから心配したぞ。」

「アキラちゃん！大丈夫？どこも痛くない？」

そう言うと、2人は俺を強く抱きしめる…

父と母よ…スパルタなのか親馬鹿なのかどっちかにしてくれ。

「だ、大丈夫です。何とか生きてます。」

俺はそう言い、2人から逃れて上に羽織っていたローブを外套掛けに掛ける。

「ん？あれ…どうしました？」

2人の視線が痛い…あ、しまった。ローブの下はボロボロの衣服のままだった。

「ほ、本当に大丈夫!？」

母が俺の体をペタペタと触り、傷ついている箇所がないか調べ始めた。

父は何をしたら良いのか分らず、オロオロと慌てるばかりだった。

「傷は大丈夫です。法術で治しましたから…」

「そ、そうなの？なら良かった…」

母は安心したようだが…父は、

「誰だ。誰がお前をそんな姿にした!」

何も答えないと、父はそのままの勢いで裏通りへ向かいそうだったので正直に答える。

「……チンピラではありません。お父様なら名前ぐらいは知っている賞金首です。」

ですが、名前を言ってしまうとお父様はその賞金首を殺しに行きかねないので教えません。」

父は憤慨していた。シムスに対してとあいつの名前を言わない俺にも……

「あ、当たり前だ。賞金首なら尚更だ。そいつは俺が殺してやる。名前を言え！」

父は俺の両肩を掴むとガクガクと強く揺らした。

「あなた、落ち着いて……落ち着きなさい！」

母が父を落ち着かせる為に平手打ちをしパンツと乾いた音がした。

「あ、ああ。すまない。」

「アキラちゃんの話聞いてあげましょうよ。名前を言わない理由は何？」

「……あいつはボクがいつか強くなって必ずこの手で倒す。」

俺は俯いた後、顔を上げ父と母の方に向かって誓いを立てる。

「そう、分ったわ……。取り合えず、お風呂に入ってきてなさい。それから夕飯にしましょう。」

母は笑顔でそう言うてくれる。この笑顔に俺の心は落ち着いていく。

お母様ありがとう…。

（良いお袋じゃねえかつ。くう…泣けてくるねえ！）

うるさい、だまれ。

・
・
・
・

風呂から上がると、新しい服が脱衣場に置いてあったのでそれを着て食堂へ向かう。

恐らく、この服は俺が風呂に入っている間に母が買って来たのだろう。

「おまたせしました。お父様お母様」

「取り合えず、食べましょうか。詳しい話は食べ終えてからで良いでしょう。」

「うむ。」

そして、いつもの過程を踏んだ後、夕食を食べ母が食器を片付け終わり席へ戻ってくる。

「じゃ、成果を聞きましょうか？どう？目的の精霊には会えた？」

「はい」

俺はそう言いザキラを召喚した。

「お初にお目にかかる。俺の名前はザキラと言う。以後よろしくな。お袋殿と親父殿……」

「って、あれ？ あんたどっかで見た事があるな？」

ザキラが畏まったと思えば、すぐにいつも通りになった。

「それはそうでしょう？」

そういうと母はニコニコしながら精霊を召喚した。

あ、風の精霊ソードレスだ……もしかして、10年前の精霊使って母なのか？

「久しぶりだな。我が義弟よ。」

なんだ、このカッコいい精霊はザキラと同じ精霊とは思えない……いぶし銀という言葉がよく似合いそうなナイスミドルだ。

例えるなら、ヤクザ映画という若頭とか2代目とかそんな感じ。

「うげえ！？ あ、あ、義兄貴！……も、もしかして10年前に来た精霊使いはあんたか！？」

「ええ、そうよ。」

「ああ、なんて羨ましい……俺もこんな巨乳の姉ちゃんに召喚されてええ！」

ぐっ……確かに俺は貧乳だよ……悪いか。俺だって巨乳に生まれたかったよ……

っていうか、何て欲望丸出しな精霊だ。正直にも程がある。

そんなザキラを見て母と母が召喚した精霊は、ザキラを変態を見る目で睨む。

「す、すみませんでしたー！ー！」

ザキラは二人の威圧に屈し土下座をした……。よ、弱い……。

「ふふ、精霊の性格は正直アレだと思うけど、無事精霊と契約できて良かったわ。」

母は土下座している精霊を見ながら言った。

そして、自分の精霊を精霊界に帰す。

俺はそれを見てザキラを帰す。

ちなみに、精霊を精霊界に帰しても契約者とは意識が常に繋がっている。

だから、たまに精霊は契約者に心の中で話しかけてくる。

それも信頼を深める大事な行為なのだから……

「私の用は終わりね……。次はあなたの番よ。」

と母は父に話すように促す。

「俺は正直納得していないが、まあ良い。賞金首の事は忘れよう……。

」

「ありがとうございます。」

「で、チンピラ共とは戦ったのか？裏通りに行って賞金首としか戦っていない事はないだろ？」

「はい、チンピラ6人と戦いました。」

「6人か、思ったより少ないな…。で、勝ったのだろうか？まさか、逃げてはいないな？」

「逃げてはいません。勝ちました…」

「どのくらい時間が掛かった。」

…魔法ですっ飛ばした男を含めると大体5秒ぐらいか？

「5秒ほどだと思います。」

「そうか、こういう状況下だったかは知らんが上出来だ。それに賞金首から逃げ果せた事を含めると満点以上だ。」

父は目を閉じ何かを考えているようだ。

「あなた…」

「ああ、これなら安心して旅立てる…」

父と母は顔を見合わせて、頷きあう。

「え？」

旅立って言わなかったか？

「急な話なんだけど…私達、また傭兵に復帰しようと思うのよ。最

近、魔獣も多くなってきた物騒だし、フィラシエット大陸の事も気になるしね。」

ちなみに、母は希少種かつ人間とはあまり深く関わる事を避ける古代エルフ族で、それらの中では珍しい傭兵をしていた過去を持つ：という設定だ。

まあ、恐らく改変後もその設定のままの筈だ。俺がヴォルトとして報奨の長編クエストを受けた際、常に仲間キャラとして行動をしていた。

その長編クエストを続けていくにつれて母と仲が深まり愛に発展し結婚したという設定だと思う。

結婚後、母は傭兵を引退する。というエピソード後クエストは終了する。

クエストで母はほとんど法術か弓術で俺を援護してくれていた。精霊魔法は使っている所を一度も見た事がない。

恐らくだけど、俺のヴォルトの無双っぷりに精霊魔法は必要ないと判断して支援に徹したのかも知れないな。

もしかしたら、ヴォルト以上にチート級的能力を持っているのかも知れないな。

「そこで俺達はアキラお前に試練を与える事にした。お前がその試練をクリアしたら母さんと傭兵に復帰しようと誓ったのだが：

後、半月ぐらいいは掛かると思っていたが、予想以上に早かったな。

俺の娘とは言え正直驚いたよ。」

母もウンウンと頷いている。

「私達は明日の早朝旅立つわ…」

え、早すぎないか？

「家にあるものはアキラお前に全てやる、好きなだけ使って良い。金も置いていく。」

強くなれアキラ。そして俺達に追いついて来い。」

そして、父と母はそう言い残した後、席を立ち旅の準備に取り掛かった。

俺は自室で今後の事を考えていると、父と母の寝室からまるで恋人同士が初めて2人だけの旅行に行くかのように楽しげな声が聞こえてきた。

第8話【試練】（後書き）

どうだったでしょうか？

これが、序章のクライマックスとなります。

次は1話だけ閑話を挟んで第2章【傭兵編】を開始します。

序章2幕は、戦闘がメインとなり、アキラが成長していく過程を書いていきたいと思っています。

閑話【調査】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。

今回の閑話で序章最後となります。

アキラを取り逃がした後のジョーイⅡシムスの後日談のようになっています。と言ってもすごく短いですが…

閑話【調査】

——ジョーイⅡシムスによる調査——

ちい、濃霧を発生する魔術で逃げられた。

気配は分るのだが、霧が濃くて道が分らねえ。

潜伏する場所なんだから、もう少し調べておくべきだった…。

あのガキ、確かアキラⅡローグライトとか言っていたな。

取り合えず今は殺さないで置いてやろう。

今はまだ体が未熟だが、成長すれば絶対良い女になる。熟してから狩るのも悪くない。

特にあの目は良かった、圧倒的な実力差で捌られても絶対屈しよう
としない目：最高だ。

今から考えてもヨダレが出てくるぜ。

そういえば、そもそもあのガキは傭兵なのか？…いや、首に傭兵と
証明するタグが付けられていなかったな。

しまったな…。俺は一応、傭兵を専門に狩る賞金首としてロールプ
レイをしている。

今回は衝動を抑えられなくて、確認もせずに襲ったが…ガキが傭兵
になるのを願うしかないな。

もしくは、なる職業に応じて狩る対象を変更するか…？

いやいや、そんな事で俺のポリシーを曲げる訳にはいかない。

傭兵以外なら瀕死までに留めておいて殺さずに犯せば良い。

ふむ、それで行こう方針決定だ。

今日は、もうあのガキが出歩く事はないだろう。

明日、少なくとも住所ぐらいは突き止めてやる。できれば、挨拶（

脅し）もしておきたい。

ああ、腹減ったなあ：チンピラどもに食い物を盗ませに行かせよう。

・ ・ ・ ・ ・

逃げられた日の翌日早朝になった。

あのガキ、レベルは低かったが少なくとも昨日今日始めたようなプレイヤーじゃねえな。

俺に一撃を与えたあの剣技、あれは余程やり込んでないと使えない：もとい、あんな技は初めて見た。

あれは自流派だ。間違いない。

という事は、プレイヤー達の住宅が集まっている住宅街地区にガキはいる可能性が高い。

早朝から動くのは訳がある、プレイヤーがほとんどいない時間帯なのだ。

全くいない訳じゃないが絶対数は少ない、いくらでも隠れようがある。

昼間に動く俺よりも高いレベルのプレイヤーにばったり出くわしてしまう可能性が高いのだ。

俺が昼間行動する為に使用するスキル【気配遮断Lv10】は、姿は見えても相手に認識させなくさせるスキルだ。

簡単に言えば、視界に入ってもいない者と認識するというべきか。

効果範囲はLv10なので1kmにも及ぶが、欠点もある俺よりもレベルの高いプレイヤーには発見されてしまう。

しかも、一度認識されてしまうと、次の日になるまでスキルを使用しても効かないのだ。

いや、それは改変前の話だから、もしかしたらNPCにも俺を見つめる可能性のある高レベルがいるかも知れない。だから、慎重にならざる得ない。

【暗闇同化Lv8】で、高レベルにも対応できない事もないが…姿は見えなくても気配は察知されてしまう微妙スキルなのだ。しかも、夜か影にいる間しか効果がない。まあ、ないよりマシという感じだ。

普通はこの2つのスキルを併用するのだが、結局は高レベルのプレイヤーにはあまり効かない。

さて、住宅街地区の入り口に来たぞ…。

ここからは【暗闇同化Lv8】も使用し影と影の間を移動するように中を進んで行こう。

さすがに、ここはプレイヤー達の巣窟なのだ。【気配遮断Lv10】だけでは見付かってしまう。

「!?!?」

って、なんで奴がこんな所にいる!?

俺は咄嗟に建物と建物の間の細い路地その奥にまで引っ込んだ。気配が完全になくなるまでここで息を潜めよう。

奴は、俺達賞金首にとって天敵と言っても過言ではない廃人プレイヤーのキャラだ。

”雷迅”それが奴の通名・二つ名だ。

八属性の1つと”迅”という文字が合わさったこの通名は、各々1つしかこの世界に存在しない固有通名なのだ。

これは、前時代の戦争イベントで最も活躍した8人の傭兵プレイヤーに与えられた通名だ。

雷迅を除いた7人の傭兵は全員ヤツの知り合いだった筈、いわば8人の廃神プレイヤーが別ゲーかよと思うぐらいの無双っぷりを披露したイベントだった。

俺も実はそのイベントに参加していた、戦争イベントでは賞金首も参加できる上に合法的に人を殺せるのだ行かない訳がない。

同じ陣営だったから奴らと対峙はしていないが、奴らはまさに一騎当千だったのは記憶に新しい…。

途中で俺達いらくね？なんて思ったのは内緒だ。

奴は確か、雷迅のヴォルトって呼ばれていた筈だ。フルネームは知らない。

とにかく奴が視界に入ったら動くな、いなくなるまで隠れ続けろ！や、

奴が追い駆けてきたら、装備品を捨ててでも身を軽くして逃げ切れ！など

賞金首の間での格言にもなっている。

そんな相手が俺の視界に入っている。…俺には気付いていない…筈なのだが、

何なのだ？ヤツの横を歩いているあの女エルフは??

俺に気付いている？馬鹿な…奴が気付いていないのに何であのエルフは俺の方を見続けているんだ？

こええええええ！足が竦む…体の震えが止まらない…何者なんだ？
どこかで見た覚えがある…いや、誰かに似ている？
どこことなくあのガキに似てなくもないが、同じエルフだからだろう
…。

あ、住宅街地区からあの二人が出る…助かったあああ…

うわ、背筋がゾクリとした…あのエルフ俺の方を見てニヤリとしや
がった。

やっぱり気付いていたのか…。

あんなのがいたら噂ぐらいにはなる筈だ…まさか、NPCなのか？

と、と…りあえず、奴らはいなくなった事だし、調査再開だ…。

震えがまだ止まらないが、いつまでもここにいても仕方あるまい。

・
・
・
・
・

「！」

見付けた…あのガキだ。間違いない。

知り合いらしきプレイヤーと何か話している。

話の内容は聞こえないが随分親しげだな。

ま、それはさておき、その2人別れそうだな。

よし、あのプレイヤーが立ち去ったら、挨拶でもしてやるか。

二言ほど言葉を交わしてから2人は別れ、知り合いのプレイヤーは
大通りの方へガキは家の中に入ろうとしている。

今がチャンスだな。

俺は、気付かれないようにスキルを発動し、ガキの背後へ回って耳元に囁く。

「ア・キ・ラ・ちゃん、俺はいつも君を見ているからねえ？ ヒヤ、ハハハ…」

ガキは後ろを振り向く、だが俺の姿は見えず辺りを見回している。俺はその慌て振りに満足しながら住宅街地区を後にした。

さて、恐らくもう裏通りには戻れないだろう：

ガキが逃げたせいでギルドの方に俺の情報が入っている可能性があるからだ。

しばらくは、街道沿いで傭兵を襲って生計を経てるとするかな。

閑話【調査】（後書き）

どうだったでしょうか？

・ヴォルトのちよつとした過去の話

・母、実はヴォルトより強い？

・シムスの死亡フラグ、

・7人の廃人プレイヤー

の4つが焦点？になっています。

シムスの死亡フラグはともかく7人の廃人プレイヤーは今後の話に出す予定です。母は未定です。

※序章1幕の用語説明※（前書き）

序章に登場した用語のまとめ…なんですけど、暫定版と思ってください。

これにも誤字脱字が多々含まれています。

もしかしたら本編と整合性がとれない箇所もあるかも知れません。

自分のメモ用に使っていたテキストなので改行がごちゃごちゃになっています。ご了承ください。

多分、見なくても大丈夫です。

※序章1幕の用語説明※

◆East Abyss社

通称、EA。米国の大手ビデオゲーム・コンピューターゲーム販売会社である

数々の人気シリーズを出し圧倒的なシェアを持っている。

世界初のMMO「Ultimate Online」を出しMMOの先駆けとなった。

◆OasisSpace社

世界初のMMO「Ultimate Online」と最後の3DMMO「Ultimate Online2」の開発元。

UOを出す前は、Ultimate（邦題…アルティメット）というRPGを出しており、日本でも人気のある人気シリーズであった。

UO2がサービス終了すると共にMMO界から姿を消すが、「E/O」の発表と共に再び咲き、VRMMOのトップシェアを叩き出す。

◆Ultimate Online2（アルティメット オンライン2）

East Abyss社の子会社であるOasisSpace社が、開発した3DMMO RPG界最後の最高傑作。

2DMMO RPGの先駆けと言われたUltimate Online（以下UO）を再構築しその時代の最先端3D技術を採用したゲーム

剣と魔法の世界というオーソドックスな内容でUOの内容を踏破した昔懐かしきMMO

UOは現存するMMO全ての原点と言われ、派生型、複写型コピーのMMOが作られていくが、システムが複雑化する為、UOのように自由

度のあるものは生まれなかった。

MMO人口の80%の人々が熱中し他社がVRMMOを開発し流行になった時でさえ全盛期の半分の人が今だプレイし続けるほどの出来であった

しかし、次世代ゲームであるVRMMOに顧客を取られていき、過疎が進むのは時間の問題とされ焦ったEA社は今まで頑なに導入を拒否し続けたマジックアイテムの実装をOS社に打診、

そして導入した事によりUO2のゲーム性が崩壊し始め、それを何とか食い止めようと新規開拓用の緩い仕様に変更などをしたが改善するどころか悪化に一途を辿り

マジックアイテム導入から僅か1年足らずで最後の3DMMOはサービスを終了する事になる

開発元のOS社は責任を取る形でEA社から切り離され、業績不振に陥りその後MMO界から姿を消す。

◆Evolution Online（エヴォリューションライン）

VRMMOの登場から11年あまり：似たり寄ったりな内容のゲームばかりのVRMMO停滞期に事前情報なしに突如登場した新規タイトル

開発販売元OasisSpace社：UO2サービス終了から10年あまり人々の記憶からすでに消えていたその会社は細々をVRMMOの開発を行っていた

過去の苦い経験から開発と販売を一元化、販売元（親会社）からの無理難題を押し付けられるという状況をなくす

そして発表された内容はUO2に酷似しOS社もそれを認めた上でUO2の正当進化系VRMMO「E/O^{イオ}」と発表

ただUO2との違いもある、このEOはマジックアイテムありきでバランス調整がされているが、マジックアイテムが無制限に出現す

る訳でなく、最大個数などが定められている。

さらに生産職でもある程度極めた者なら1品だけマジックアイテムを作れるようになっていく。その為、マジックアイテムの存在で生産職が死ぬ事を防いでいる。

違いとして一番大きいのが四神システムで：EOⅡ四神とも言えなくもない存在である

四神とは、E/Oの世界を管理調整する4つのそれぞれ独立したシステムと言える。

開発元であるOS社は四神のサポートや大型アップデートなどが主な仕事になっている。

E/Oはロールプレイを公式で推奨している、プレイヤーもUO2からプレイしているものが多く基本的にロールプレイを楽しんでいる。

サービス開始当初は、出会いを求めてプレイする者やリアルと混合する者もいたが、そういった者達は、ゲーム内の雰囲気になじめず辞めている。

非常に珍しい運営形態で、1国家の運営を運営会社に任せ税金という形で課金を決める。そして開発元であるOasisSpace社が全ての運営会社を監視するという

今までのような運営会社に全て丸投げという形態から一線を引く。

その事により運営会社の横暴な課金形態を抑圧したり癒着やゲーム内マナーの横領などを防ぐ形となる。

簡単にいえば、運営会社は国家のというキャラをOS社から借りるという事で、国家の運営は任せてもゲームシステムの改変などには一切関われないという事

ユーザーは運営会社を選択できるようになり正当な課金額にせざる得ない状況になる。アイテム課金制にも出来るがOS社から課金用のアイテムを予め決められている

ちなみに国家の運営は徴収した税金をOS社にゲーム内マナーに換

金してようやく運営資金として利用できる。

運営会社は全ての税金を自社の利益とする事も出来るが国家の運営が回らなくなり国家崩壊という事もありかねない。

崩壊した場合は2度の救済処置の後、それでも崩壊するようなら運営資格を剥奪する

こう見ると運営会社にメリットが少ないように思えるが、サーバー自体はOS社が管理している為、その辺りの費用が掛からない。

◆四神

イオの世界を構築する上で重要な位置に存在し、世界バランスの調整を行っている超高性能AIかつてアメリカ軍が開発して軍事AIを転用し開発される

・メシア…世界の環境を調整する為の神。パワーバランス、四季・時間・災害など環境に影響するあらゆる事を調整する。約10kmを超える巨大な龍の姿をし高高度を飛行する

・ヴィーナス…世界の生物を全て管理調整する神。世界内のMobだけでなくプレイヤーの管理も任されている

・ガディウス…イオ内でOS社がゲーム開発する為に用意した特殊国家アラボト内に存在する。E/Oのシステムの根幹部分にあたる存在。

・ガーディアン…他3神の抑止力。プレイヤーを守護する神。固定な体は持ち合わせておらず、その時代時代にあった姿になる。人型になるとプレイヤーと見分けが付かない

◆地形

・オーランド大陸

リアルでいうとアフリカ大陸に位置する草原と山に囲まれた自然が豊富な大陸である。

・フィラシエツト大陸

リアルでいうとオーストラリアに位置する大陸で北半分は草原、南

半分は荒野で北半分には人はいない。
四神ヴィーナスにより大陸全土が焦土化し、そこにいたプレイヤーは消息を絶つ。大陸の一部は消える事のない炎で今だ燃え続けている。

◆国家

・ノースブレイ王国

オーランド大陸は5つの国家により分断されている。北部を支配するのがノースブレイ王国である。

地中海に面しており、交易が盛んで豊か国。他4つの国とは1つの国だったとされ、大きくなり過ぎた領土を5つに分けて満遍なく支配できるようにしたと云われている。

ここ数千年4つとの国とは争いはなく、主に北の大陸からやってくる外敵に対しての防衛協定を結んでいる。

北との戦争は数十年に1度の確率で発生しており、強力な騎士団を有している。王都はカンストしている賞金首でも入る事は困難とされている。

過去3年間の間に3回（年に1度）は戦争イベントあった為、多くの傭兵が功績を得る為にここを拠点にしている。

◆時代進行と世代交代

リアル時間1年の間に4回時代が進みます。

2ヶ月間【動乱の時代】世界各国で戦争が発生している時代。ノースブレイ王国でいえば北部の大陸からの侵略戦争を仕掛けられている状態。騎士と傭兵の時代。

3ヶ月間【戦後の時代】戦争のない時代。しかし、戦争の傷跡が残る。世界全体的に国家の治安力が低下している。騎士の時代。動乱の時代から10年後の世界。

4ヶ月間【傭兵の時代】世界各地で小競り合いはあるが大きな戦争はない時代。国家の治安がすごく良い。傭兵の時代。戦後の時代か

ら15年後の世界。

3ヶ月間【列強の時代】3つ列強大国が隣国への侵略から始まり、世界へ戦争が飛び火していく時代。騎士と傭兵の時代。傭兵の時代から20年後の世界。

※今回の舞台は、傭兵の時代です。しかし、変更したので、体感時間4年続く筈です。変更後の時代進行は今の所不明です。

世代交代：時代進行とともにプレイヤーキャラが変わるシステム。キャラクターとして活動できるのはキャラ年齢が15歳～65歳ほどで、キャラ年齢が30を過ぎると世代交代できる状況なら選択肢が出る。

今のキャラを続けるか子供キャラでプレイするか選択できる。

もし、時代進行時にキャラ年齢が（時代進行の年月を差し引いた年齢から）65歳までのキャラで子供キャラがいなければ、養子をとる事も出来る。

ただし、血の記憶は初期化される。

※時代進行をしなくても世代交代は出来る。ただし、子供キャラが15歳になっていないと駄目。

◆結婚と子作り

結婚は15歳以上45歳までの間で出来る。（長寿種族は外見年齢15歳以上から無制限）

子作りは、2人のプレイヤーもしくは1人のプレイヤーとノンプレイヤー。

子供は2人のプレイヤーの特徴を引き継ぐ。

ノンプレイヤーとの結婚は結婚できるプレイヤーがいない人用の救済措置のようなもので、2人の能力は受継ぐがノンプレイヤーの能力はかなり低く設定されている。

ただ、ヴォルトの妻となった古代エルフは別格の存在で、かなり能力が高く設定されている。

◆血の記憶と才能の開花

四神同様、このE／Oの世界で根幹となるシステム。

歴代キャラのあらゆるデータを記憶しているシステムで、家系図のようなもの。

さすがに詳細なデータは記憶されない。たとえば、そのキャラの名前、性別、享年、最終職歴、能力の特徴（高い能力ベスト3）、スキル（Lv5以上）、流派、魔法などなど

ちなみに犯罪履歴なども記憶される為、今のキャラが犯罪を犯してなくとも歴代キャラで犯していた場合、そのプレイヤーに対する評価は下がる。

特に重要なのは、能力とスキルと流派と魔法で、このデータが子供キャラに受継がれていく。

同じ種族の子供でも血の記憶を受継いでいるか継いでいないかで大分能力が変わる。

蓄積量に応じて才能が開花するのも特徴的、やりこめばやりこむ程蓄積量は多く確率は上がる。

例えば、剣術の才能などは、剣術の流派の成長率を高めるし、剣術の使用による能力の成長値も高くなる。才能によるデメリットはない。

ただし、デメリットの才能はある。例えば、ドジッ娘の才能とかだ：効果は想像に任せる。

世代交代サイクルの短い短命キャラは、この蓄積が目的のプレイヤーが好んで使う。主人公アキラもその1人だ。

◆職業

・一般人

世代交代後に始めるキャラクターは全てココから始まる。情報屋プレイする者以外はこのまま一般人にしておくデメリットはない。

・傭兵

この世界の花形職業とも言え簡単に大金が入るが、当然リスクもある。ハイリスクハイリターンで死亡する確率が非常に高い。単独で行動する者が多い。

・騎士

安定した生活が送れる職業でリアルでいう公務員。街の治安や国家の守護を主な仕事としている。集団で行動する事が多い為、ローリスクローリターンとも云われる。

・商人

アイテムを売る職業。そのままの意味。細々と商店を経営する者から交易を行い巨万の富を得る者や商会を経営する者など様々なプレイスタイルがある。

・職人

アイテムを創る職業。極めれば自分でマジックアイテムを創れたりオリジナルのアイテムも創れる事から傭兵に次ぐ花形職業。職人固有の通名などもある。

・賞金首

犯罪を犯した者。PKとも言われているが、何も殺人を犯した者だけが賞金首ではない。小さい犯罪を何度も繰り返せばさすがに賞金首となる。殺人に比べれば安っぽいが：

◆種族（序章の時点で登場した種族のみ）

・ヒューマ

この世界で最も標準的な種族。いわゆる人族だ。能力は平均的、あらゆる役割をこなす事が出来る万能種族。短命な為、【血の記憶】が蓄積されやすい。

・ハーフエルフ

NPC種族のハーフエルフはエルフとヒューマの混血種族だが、PCというハーフエルフは、エルフと他種族との混血種族といえる。18歳ぐらいで身体的成長が止まる。

・アマゾネス

元々はベルセルクやバーサーカーと呼ばれていた。女性だけの種族。魔法が一切使えない代わりに身体的能力が非常に高い。短命な為、

【血の記憶】が蓄積されやすい。

・アキレウス

元々はベルセルクやバーサーカーと呼ばれていた。男性だけの種族。魔法が一切使えない代わりに身体的能力が非常に高い。短命な為、

【血の記憶】が蓄積されやすい。

・古代エルフ

3年間継続報奨クエストで結婚相手にする事が出来る特殊な種族。長寿種族という事以外ほとんど謎に包まれている。

・セレスティア

GMの専用アバター。天使のような姿をしている。呪術以外の全ての魔法を使用できる事やセレスティア専用の魔法まである。実は、無敵ではない。

◆流派

流派は1キャラで2つまで習得出来る。1つの流派を極めると1度だけ別の流派（ただし、同系統の武器）と掛け合わせる事が出来る。それによって元となった流派の特徴を変化させる事が出来、それを自分の流派をする事が出来る。

掛け合わせる流派が極まっていると尚良い。

自分の子供のキャラクターにはデフォで自流派が習得された状態になっている。

この流派は前のキャラのもののでまた1度だけ別の流派を掛け合わせる事が出来る。

それを何度も何度も繰り返すことで流派の強化が可能となっている。

1つの流派には2つの流派スキルが設定されている。そこに掛け合

わせた際、4つの流派スキルが2つのを選択して自流派に設定できる。

流派スキルは流派でしか習得できず、他のスキルで補う事は出来ない。

また、流派を別の流派で上書きすると前の流派スキルは消滅する。ただし、同じ流派スキルの場合だけ、上書きはされない。

技は3度強化出来るが、掛け合わせた流派がある場合は、特別な強化も可能で歴代キャラが掛け合わせた流派の強化項目も選択肢に入っている。

流派の掛け合わせ、技の強化、流派スキルの選択によって分岐する為、全く同じ流派存在しない。

◆魔法

・魔術

従来のゲームでいう攻撃魔法の事。光属性以外の7属性の魔法がある。

・法術

従来のゲームでいう回復魔法の事。光属性の魔法しかない。

・精霊魔法

従来のゲームでいう召喚魔法の事。精霊の強さは霊力と比例されず、信頼関係が鍵を握る。

・神術

法術の上位互換魔法。本来ならプレイヤーは使えず、GMであるセレスティアが主に使用している魔法である。

・呪術

厳密には魔法ではない。体に呪文を刻むことで簡単に特殊なスキルの取得や身体能力の限界を引き出す事の出来る刺青のようなもの。

ただし、限界突破できなくなるなどデメリットがある。

・ 禁呪

魔法のカテゴリーではない。呪術を除く4つの魔法の禁じ手に分類するシステムの枠を逸した規格外の魔法である。カンスト後に長編クエストをクリアする事で取得できる。

◆ 役割（序章までに登場した役割のみ）

他ゲームでの職業に相当する。ロールとも呼ばれている。

・ 魔術師

その名の通り魔術のエキスパートのロール。魔法関係のステータス高く、魔術を他の魔法よりも多く習得していた場合、魔術師が選択される。魔法関連のステータスにボーナスがつく。

◆ 風の精霊ソードレス

任侠侍を彷彿とさせる風の精霊。非常に切れ味の高い風の刃による攻撃で敵対する者を問答無用で斬り捨てる。

精霊には珍しく近距離に特化している。大体、アキラの母のソードレスが標準的なイメージであり、ザキラは少々いやかなり特殊なソードレス。

礼儀正しいが威圧感のある喋り方をする。が、ザキラは特殊。

◆ 8人の廃神

前時代のGM主催戦争イベントで活躍した傭兵で”八迅”と呼ばれるプレイヤーキャラクター達。しかし、時代進行と共に多くのプレイヤーは世代交代している。

・ 雷迅のヴォルト

いわずと知れた主人公・亮の前プレイヤーキャラ。8人の廃神の中で最も剣術に優れたキャラクター。しかし、魔法は一切使えない脳筋。

※序章1幕の用語説明※（後書き）

少しずつ手直しをする予定です。

※序章1幕に登場した人物紹介※（前書き）

序章に登場した人物の紹介の暫定版です。

本編で語っていない事も書いています。

用語集同様、改行がうまくいっていないと思いますが、ご了承ください。

見なくても、多分大丈夫です。

※序章1幕に登場した人物紹介※

◆雨月亮（28歳・男・日本人）

アキラⅡツキモリ、ヴォルトⅡローグライト、アキラⅡローグライトの中の人。この他にも7キャラでプレイしていた。

UO2を5年ほどプレイした廃人プレイヤーだが、マジックアイテムの実装とともに辞めてそのままMMOも引退した。

E／Oに熱中する前は、有名大学に合格し大手企業にも就職していたが、現在は引き籠もりニート。

フツメン以上イケメン未満。

彼女は大学時代にいたが、卒業と同時に別れている。

就職していた時は、これといった趣味はなく仕事が趣味のようなものだった為、貯金が数千万ほどある。現在は、それを切り崩して生活している。

実は、社会人時代、OS社の株を買っていたりする。

◆アキラⅡローグライト（15歳・女・ハーフエルフ※）

現在、亮がプレイしている10代目のキャラ。いや、亮自身がアキラというべきか：

深紅の髪と銀色の瞳をしている。ショートカットでエルフの特徴である長い耳が髪の間隙から覗いている。

スレンダー体型でブラジャーが必要ないほど貧乳（微乳ともいう）。改変した時にボクッ娘になってしまう

中の人の影響で思考・行動は積極性があり男前。シムスに成長すれば絶対良い女になると言わせるほどの美少女である。

武器は、自身の7代目キャラが生産した仕込み杖で、見た目はマジックロッドだが、杖の上部を握り上へ上げるとイスカ刀が出てくる。奇襲に向いた武器である。対シムス戦で一矢報いるなど大きな戦果を挙げたが、刃こぼれやヒビなどが入り使用出来なくなる。

主に、剣術・魔術・法術・精霊魔法で戦う。

◆ザキラ（年齢不明・男・精霊）

風の精霊ソードレス。

変態で馬鹿で無鉄砲な性格。巨乳派。任侠侍の欠片さえない。

見た目がリーゼントでガチガチに固めた特有の髪型をしているヤクザの精霊。行動がヤクザの鉄砲玉みたいな感じ。

元々近接特化の精霊なのだが、まだアキラとの信頼関係を築けていない為、ドスを構えて突進する脇役のヤクザのような戦い方しか出来ない。

口癖は「やってやらあああ」

◆ヴォルトⅡローグライト（48歳・男・ヒューマ※）

戦後の時代にGMが主催した戦争イベントで多大な戦果を上げ”雷迅”の通名を取得した傭兵。

賞金首からは異様に避けられている為、賞金首は狩らず依頼を中心に請け負っている。

彼の流派である月守流居合剣術は一騎当千系の技が多い。

脳筋な為、難しい話や魔法の話を嫌う。

◆母（本名不明・年齢不明・古代エルフ）

弓術・法術・精霊魔法を使う事や気配遮断や暗闇同化をしているシムスを簡単に発見する事以外不明な点が多い。

NPC。

◆スコットⅡベイグ（39歳・男・ヒューマ）

傭兵と商人を兼業するキャラで亮の昔なじみ。ヴォルトでプレイする前からの知り合い。

初代キャラからずっと商人でプレイして今のキャラで6代目になる。初代でルドルフ商会を築き2代目以降は交易なども積極的にしてい

だが、現在のキャラになってからは行商プレイに徹している。
現在、商会の運営は、副商会長に任せている。

◆アマンダⅡサイフィス（24歳・女・ヒューマ）

中央広場から東西に伸び専門店が建ち並ぶ大通りに魔法書店でアルバイトをしている傭兵のお姉さん。

人当たりが良く初対面のアキラに親切に接してくれた。

前時代、ヴォルトが傭兵ギルドの依頼で助けた子供が成長した姿。

魔術師。属性やどんな魔法を使うかなどの詳細は不明。

NPC。

◆ジョーイⅡシムス（33歳・男・アキレウス）

動乱の時代から始めた初代キャラ。亮と同様、本名に似た名前を付けている。

肌が浅黒く長身痩躯で髪も伸び放題のキャラで見るからに狂気を内包している。

傭兵を狩る賞金首をロールプレイしている。一般人には手を出さないのがポリシー。

前時代、賞金首を専門に狩る傭兵のパーティを1人で壊滅させ身包みを剥いで、自分の装備品にしている。

その時、奪った魔剣ヴェノムヴァイパー（プレイヤー生産品）を使い続けている。

毒に焦点を置いており魔剣効果も相まって毒耐性100%でない限り必ず猛毒状態にする危険な武器。

※本名・清水丈。21歳、大学生（留年確定済み）今年からE/Oを始めたが廃人プレイの結果、すでに一度目の限界突破クエストをクリアしている。

亮以上にリアルを棄てている。1日1度の食事、睡眠時間3時間。それ以外はほとんどE/Oをプレイしている。

※序章1幕に登場した人物紹介※（後書き）

こんな感じです。

第9話【傭兵】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りはご容赦願います。

第2章に入りました。

戦闘がメインになり、主人公も成長していきます。

名前ありの登場人物がこの章から増えていく予定です。

第9話【傭兵】

——父と母の旅立ちの日の早朝——

「ギルドに再登録しなくてはならんから俺達はもう行くが、帰るまでは勝手に死ぬんじゃないぞ。娘の成長した姿をこの目で見たいからな」

父、精進するよ。

「お母さん、アキラちゃんに置き土産をあげちゃう。南門を抜けた先に広がる闇の森のどこかに石碑があるわ。簡単に見付からないと思うけど頑張ってね」

母、置き土産ありがとう。でも、闇の森すごく広いのですけど…

「お父様、お母様。行ってらっしゃい」

仮想とはいえ、結構楽しかったな…親子ごっこ。でも、これが本来のあるべき姿なんだろうな。

「さ、行くぞ？」

「じゃあね。アキラちゃん」

母は父の肘に腕を絡め、まるで付き合いたての恋人のように住宅街の出口へ歩いていった。

俺はそれを見送り家の中に入ろうとすると、向かいの建物からスコットが出てきて声を掛けてきた。

「あれ、親父さんとその相方どこかへ行くのか？」

スコットにとって俺Ⅱヴォルトであって、あのヴォルトの姿をしたNPCの事をヴォルトとは言わないようにしているようだ。

「ああ、また傭兵に戻るんだとさ」

「ええ！？ 改変後の世界自由過ぎるだろ！ システム覆しちゃったよ……」

全く、その通りだ。前のキャラが自我を持つわ、引退したのに復帰するわ。

改変前のシステムとか完全に無視している。

「あ、忘れる所だった。シムスの情報をギルドの方に流しておいたぜ。

そのお陰かは知らんが、今朝からシムスの姿が見えないらしい」

「そうか、ありがとう」

「いや、良いって。で、これからどうするんだ？」

「取り合えず、傭兵ギルドに登録するつもり、その後は昨日ボロボロになった装備を新調かな？」

「なるほど。やっとアキラと同胞になれる訳だな。楽しみが増えた」

「スコットの方が大分先輩だけだな」

「はは、違いねえ。じゃ、俺は行くわ」

「ああ、また」

俺はスコットと別れ、再び家の中に入ろうと門の取っ手に手を掛けた時、一瞬殺気を感じた。

「ア・キ・ラ・ちゃん、俺はいつも君を見ているからねえ？ ヒヤ、ハハハ…」

突然、人の声…いや、シムスの声が耳元で聞こえた。

俺は辺りを見渡すがシムスの姿は見えなかった…。

気配遮断か…

くそ…姿を消したのはココへ来る為だったのか？

悔しいが今の俺ではあいつに手も足も出ない…

だから、一步を踏み出さねば。

俺は家の中に入り地下倉庫を目指す。

取り合えず、現状確認と武器の新調だ…昨日の戦いで仕込み杖がもう使えない状態なのだ。

倉庫内に何があるか再確認をしよう…。

西洋剣、イスカ刀、ロッド、ワンド、弓、槍、斧、銃、暗器、e t c…。

と、まあ多種多様な武器がある。

我ながら節操がないな…。

ん、ヴォルトでプレイしていた際の最終装備がなくなっている。

父が旅立つ際に持っていったのだろうか…
神杖も3本ほどあった内の1本と魔弓も消えている。
これは母が持っていたのだろうか…

ちなみに、コレクションにある神や魔や聖が付く武器は、プレイヤ
ー達の生産品が大部分を占めていて残念ながらこの世界に元からあ
るそれらの武器は、正直少ない。
だけど、無節操にそういった生産品を集めた訳ではない、ちゃんと
選んで良い物しか集めていない。

昨日の戦いで少しは能力が増加した筈だ。装備出来るものが増えて
いる可能性がある。
取り合えず、ステータス確認をしよう。

「メニュー…ステータス確認…」

名前Ⅱ苗字…アキラⅡローグライト

通名…

年齢…15

性別…女

種族…ハーフエルフ※

属性…光・炎

主職業…一般人

副職業…

役割…剣士

名声…10

序列…

ランク…

「!？」

なんか…上がり方がおかしい…。

ほとんどのステータスが上がっている。

少し上がるとかそういう類ではなく、大分上がっている。

昨日まで一桁だったレベルも今は二桁しかも16まで上がっている。
魔法関係も上がっているが身体能力の増加が凄まじい。

ああ、そういえばシムスに致命傷ではないが一撃を与えたんだっけ…
スコットの話ではあいつのレベルは120オーバーだ。ならこの上
がり方も頷ける。

そのお陰かもしれないが役割が魔術師から剣士に変わっているな…

ん？あれ…名声に10入っている。

身に覚えが……あった。

スコットがシムスの情報をギルドに流したせいだ…恐らくだが。

これだけステータスが上がれば装備出来る武器の幅が大分広がるな。
イスカ刀とロッドもしくはワンドを個別に装備するのも良いかも知
れない。

これなんかはどうだろう…

イスカ刀の棚から装備出来そうな武器を取り出す。

◆名刀・桜吹雪なぐさふくゆき

ベース；打刀

生産者…フブキIIサクラ（プレイヤー）

耐久…250／250

攻撃力…180

必要能力…腕力30、脚力40、器用30、敏捷30

備考…名刀効果、振るう毎に桜吹雪が舞うエフェクトあり
生産者コメント…大切に使用して下さい。

特別な能力はないが、なかなか洒落た武器だ。
ギリだけど装備も出来る。

◆名刀・斬月ざんげつ

ベース…直刀

生産者…セイゴロウⅡムナカタ（プレイヤー）

耐久…280／280

攻撃力…200

必要能力…腕力35、脚力30、器用35、敏捷40

備考…名刀効果、振るうと残像が残る。

生産者コメント…なかなか良いものが出来た。

これも悪くない。

ん？腕力と敏捷が足りない…残念だ。

◆名刀・夢幻刀むげんとう

ベース…長刀

生産者…イトウⅡシホウイン（プレイヤー）

耐久…120／120

攻撃力…220

必要能力…腕力30、脚力40、器用30、敏捷35

備考…名刀効果、刀身を視認出来ない。
生産者コメント…試し打ちで作ったら名刀になってしまった。

名刀にしては、耐久が異常に低い以外かなり良い。

刀身が見えないというのも面白い。

確か、この生産者が作った神刀で同じ名前の武器が同じ棚にあるが、恐らくその試作品なのだろうな。

この3本、いや2本が候補だな。

あ、名刀を低レベル帯で装備出来るのはおかしくないか？と思ったかもしれないが、俺の今のステータスをヒューマに当てはめるとレベル16に+10をしても良いぐらいの能力となっている。

俺も驚いたが成長ボーナスがかなり高いのだ。

それに、名刀を装備出来るレベル帯はかなり幅広く。大体、レベル20〜レベル80程度まで勿論それ以上のレベルでも装備できる。能力値によってそのレベル帯もほとんど曖昧な領域だという事も付け加えておこう。

ああ、ついでに言っておくがLv20程度で装備出来る名刀と言っても値段は安くない。

量産品や基本武器に比べたら2倍〜3倍はする代物だ。さらにオリジナライズ生産された物は10倍近くする。

この世界には傭兵だけでなく、職人にも特別な通名がある。

その通名のボーナスで同じ武器や防具でも1段階から2段階の性能差が出たりもする。量産品でありながら名刀級や名刀でありながら魔刀級などなど。

まあ、そんなものは馬鹿高い値段であり市場には出回っていない

けど…。

ちなみに、ヴォルトの最終装備は1段階性能が底上げされている魔刀だ。詳しくは話さないが、雷属性で雷迅の通名を与えられた切っ掛けにもなった武器だ。

と、話が逸れたな。

取り合えず、キープしてロッドもしくはワンドも決めよう。

杖系ははっきり言って少ない、あの仕込み杖用に量産品を数本と気になった物を少しだけ買ったただけだから…

取り合えず、候補としてはこの2本だな。

◆魔杖・ファイアブランド

ベース…フレイムワンド

生産者…エルネスIIワークナー（プレイヤー）

耐久…220／220

攻撃力…150

必要能力…腕力20、魅力15、魔法力60、魔力20

備考…魔杖効果、刀身に炎を宿す。炎属性詠唱時ワンスペル発動可能。ただし消費MP2倍、耐久が1減少

生産者コメント…フレイムワンドに刺突剣を仕込みました。

これ良いだろう？

俺の7代目キャラが作ったもので、イメージ通りに作れたと自負している。

あの仕込み杖の後に生産したものだ。

残念だが、職人を本業にしているプレイヤーに比べたら、俺のやり込みなんて高が知れている。

だから、生産品も便利な武器程度のものしか作れていない。

まあ、これはその中で良く出来た部類に入る。
ちなみに、自分で使う為だけに作ったから非売品。この世界にはこれ1本しかない。

◆フレイムワンド

ベース…ワンド

生産者…NPC

耐久…180／180

攻撃力…150

必要能力…魔法力30、魔力20

備考…魔力補正+20。炎属性の詠唱速度+10%、消費MP-5%
生産者コメント…炎属性魔術の詠唱補助アイテム

ファイアブランドのベースとなった杖だ。

炎属性が得意な俺にとってこの2つのどちらかが良いと思うが…
性能は確実にファイアブランドだが、俺みたいな低レベルにはフレイムワンドの魔力補正も捨てがたい。

他の武器も検討に入れようと思ったが、あまり複数の武器を使い分けるのは今の段階では不要だろう。

取り合えず、当分は得意な剣術と魔法でやっていこう。

そうだな…決めた。夢幻刀とフレイムワンドにしよう。

刀の耐久は一刀の下に斬り捨てれば、最低限の耐久しか減らない筈だ。

ワンドの+20の魔力補正は攻撃力の底上げに丁度良い。

俺の今着ている服装はNPC生産の部屋着な為、どれも防御力1しかないのだが、正直、防具はこの倉庫に着れるものはない。ほとん

ど、男性用に調整してあるものばかりなのだ。
傭兵ギルドに行った後、お勧めの商店を紹介して貰おう。

俺は夢幻刀を腰にフレイムワンドを腰の後ろに差し、他に使えるようなアイテムはないかと探した後、小型のリュックを壁の棚から取り出し背中に背負った。

ついでに、腰に差していた長刀をリュックの横へ差し、後ろに差していたワンドを横へ差しなおした。

部屋の中で探していた時に気付いたのだが、腰の後ろへ差すと歩く時邪魔になる。

で、今の俺の格好は部屋着に長刀onlyリュックとワンドという訳の分らない状態になっているが、気にしては負けだろう。

一応、準備は整ったので傭兵ギルドへ向かうとしよう。

・ ・ ・ ・ ・

傭兵ギルドの前に着いた訳なのだが、かなり大きい建物だ。

なぜかと言うと、傭兵ギルドのロビーを酒場と共有している為だ。

傭兵達は、酒を飲みながら情報を収集できるという事だ。

ぶっちゃけ、改変前、酒場は全く繁盛しておらず閑古鳥だった。

酒を飲んでもシステム上酔うエフェクトだけで実際には酔えないし、酒の使用効果が続くのは10分で狩場に着く前に切れてしまうからだ。

だが、改変して大繁盛、傭兵だけでなくこの街を拠点としていたプレイヤー達もよく訪れるようになった。

まあ、これはスコットが話していた事で実際に見た訳ではないのだが。

ちなみに、この世界では15歳から酒を飲める…が、どうもアキラというキャラは酒に弱いらしく一口しか飲んでいないのに気付いたら寝ていた。

実はこれ一昨日の話で、食堂のワインセラーから1本持ってきて自室で飲んでみたのだ。

俺自身、酒にあまり強くないが、さすがに1口で眠たくはならない。仮想ならいけると思ったのだが残念で仕方ない。

と、話が逸れたので戻そう。

で、今はまだ朝なのでそんなに傭兵は集まっていない筈だ。

入ってみると朝にはして珍しく慌しかった。

「何があったのですか？」

俺は近くにいた傭兵らしいプレイヤー？に聞いてみた。

「ん？ああ、僕はよく知らないのだけど…たしか、ギルドの人がライジン？が来たとか何とか言っていたな」

ライジン？ああ、雷迅ね。よく知らないという事は傭兵ではなく商人か職人なのか。

「結構有名な傭兵らしいね。他の傭兵も騒いでたよ…特にあそこにいる魔術師が…」

と、彼は指差した先に魔法書店のお姉さんもといアマンダさんが机

に突っ伏していた。

憧れのヴォルトに会って興奮しすぎたのだろう…肩で息をしている。

「で、キミは…傭兵？じゃないよね。何をしに来たの？」

俺の服装を見て判断したようだ。まあ、確かに傭兵じゃないよ。

「あ、傭兵じゃないですけど、新規登録しにきました」

「ああ、新人さんね。カウンターの場所分る？僕が案内してあげようか？」

「あ、いえ大丈夫です」

「そう？じゃあ、頑張ってね」

「はい、有難うございます」

俺は彼に礼を言い、奥にある傭兵ギルドのカウンター兼事務所の受付にやってきた。

そこには受付のお姉さん（エルフ）がいた。

「あ、あらお客さんだわ。傭兵ギルドへようこそ。依頼ですか？」

まあ、服装が一般人だもんなあ…間違っうよね。

第一印象は大事だな…と、俺は思った。

「あ、いえ。傭兵の新規登録を申請したいのですが…」

「え、ああ、新人さんね。分かりました。それではこの用紙に必要事

項を書き込んでください。分りにくい所は聞いて下さいね」

お姉さんは、意外そうな表情を一瞬してからすぐに事務的な笑顔に戻る。

俺は用紙を受け取り、上から書き込んでいく。

傭兵の登録は簡単で、必要事項といってもそんなになかったりする。

えーと、名前ね。アキラⅡローグライトと。

種族はハーフェルフ、性別は、女で役割は、剣士と。

後：戦闘タイプ（複数可）は、剣術と魔術で良いだろう…。

それ以外はもう少し上達してからで良いや。

「こんなもので良いでしょうか？」

ちなみに、年齢はあまり重要視されていない。仕事が出来れば年齢など気にしないからだ。

「ええ、OKよ。オプションで役割の固定など出来ますがどうしますか？」

「あ、剣士に固定をお願いします。」

何故かギルドで役割の固定をすると、その後ずっと魔術師プレイしようとも剣士のままになる。変更するには、ギルドで固定化解除か固定変更をするしかない。

「分かりました。では、登録料と固定料を合計して15Gです」

昔は登録料がなかったのだが、傭兵の乱立を防ぐ為と国庫を潤す為に有料となった。

と言っても、プレイヤーにとっては安いからほとんどタダみたいなものだ。

「では、これを…」

受付のお姉さんは俺からお金を受け取り、書類を後ろで事務仕事をしていたギルド職員の人に渡す。

「これ、登録をお願いね」

「わかりました……って、え、ログライト？」

ギルド職員は用紙を受け取り……ん、何だろう？

「どうしたの？」

「き、きみい！きみ、ログライトって名前なの？」

わざわざ、カウンターまで来て俺に聞き返さなくても、用紙を見たのだったら分るだろ。

「え？あ、はい、そうですね……それが何か？」

「じゃあ、きみは雷迅の娘さんって事だよね？」

「……まあ、そうですね」

「え、ええ！？早朝、雷迅が再登録をしたと思ったら、次は娘が新規登録！？」

職員と俺のやり取りを呆然と見ていた受付のお姉さんは状況を把握したようだ。

「そういえば、昨日スコットが、アキラという女の娘が傭兵狩りを裏通りで見付けたって言ってたけど…それってきみの事？」

「多分、そうだと思います」

「そうかあ、助かったよ。」

シムスがこのノースブレイに入国したらしいという情報はあったのだけど、それ以降の足取りが掴めてなかったんだよね。まさか、すでにこの街に入っていたなんて驚きだよ」

俺の体を犠牲にするところだったけどな。

「この国にいる事をギルドは知っていたのですか？その割にはスコットさんは知らなかったみたいですが…」

一応、スコットの事はさん付けにしておこう…俺の2倍以上の年上で大商会の会長だしな。

「ああ、この情報、あんまり信憑性がなくてね。ギルドで止めてたんだよ」

「…っと、もうこのぐらいで良いでしょ。さ、そろそろ自分の仕事に戻って？」

受付のお姉さんはギルド職員に少しキレ気味で言った。

「あ、ああ。ごめん。興奮しすぎた」

渋々、職員は登録手続きに入る。

「分れば宜しい」

キレ気味だと思っていたけど、そうでもないな。

二人の薬指にはお揃いと思しき指輪がはめられてあるのを見ると、この二人付き合っている？

「で、登録完了するまで、少し時間あるから何か聞きたい事ない？」

「お二人は恋人どお……何でもないです」

受付のお姉さんがジトと睨んできたので聞くのは止そう。

「防具を揃えたいのですが、おすすめの商店を紹介して貰えませんか？」

「うーん、おすすめねえ。

ああ、さっき話にチラッと出たスコットが会長を務める商会の商店2号店が館へ伸びる大通りに出店したって言っていたわね。

確か、世界各地からスコット自ら集めた防具が色々揃ってるって話よ。一度行ってみたら？」

ああ、あれか。改変する前、売れ残りが家を圧迫するんで防具だけれどもと新しく店舗を作ったって言ってたな。

仕方ない：行ってみるか。

「ありがとうございます。お姉さん。行ってみる事にします」

と、丁度登録が終わったようで、登録控えと傭兵と証明するアイテムである傭兵タグを職員が持ってきた。

お姉さんは、ありがとうと小声で職員に礼を良い受け取って俺に向き直る。

「登録完了よ、あなたはこれから傭兵の自覚を持って行動しなさいね。はい、これが控えね。それとこれがあなたを傭兵と証明する物だから、肌身離さず持っているように。一応ネックレスとして装備も出来るわ」

俺は控えを服のポケットに傭兵タグを首に掛ける。

ちなみに、この傭兵タグにはフルネームと登録番号だけが書かれている。

登録番号は390067581で、これは一番初めに登録した人から数えて何番目に登録したかという事だな。

4億近い人が登録しているが、現役だけでなくすでに引退した傭兵も数えられている上にプレイヤーだけでなくNPCも含まれている。オーランド大陸5カ国合わせただけで傭兵の現役プレイヤーは1万人程いる。

さて、そろそろ商店の方へ行くとするかな。

俺はお姉さんと職員の人に挨拶をしてギルドの外へ出る。

あ、そういえば最初に会った人とアマンダさんはすでにいなかった。

第9話【傭兵】（後書き）

どうだったでしょうか。

第10話【八迅】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りはご容赦願います。
第2章の2話です。

第10話【八迅】

俺は、傭兵ギルドから紹介して貰ったスコットの売れ残り専門店もとい2号店に来ていた。

タイミング良く？そこにスコットがいたが見なかった事にしよう。

「すみません。傭兵ギルドの紹介で来たのですが。」

「あゝはいはい、少し待って下さいね」

若い店員が声を返してきた…スコットと何やら話しているところを見ると、

もしかしてあの店員がこの店長なのだろうか…

「ふふふ、アキラ、やっと俺が掻き集めた商品の魅力に気付いたか…？」

スコットは店長？さんとの話が済んだようで俺の方までやってくる。

「聞いてなかったか？傭兵ギルドの紹介で来たって言ったろ」

「会長、お知り合いなんですか？」

若い店長？は、この娘何者！？？みたいな表情でスコットに聞いてきた。

「ああ、俺の古い知り合い………の娘だ」

「そうですか、随分可愛い娘ですね。会長、この娘のコーディネートを私に任せて貰えませんか？」

「それは構わないよ。アキラさえ良ければね」

「ええ、良いですよ。お願いします」

正直、女の子のファッションセンスが皆無な俺にとって願ったり叶ったりだ。

「アキラの装備代は、俺が全額払うよ。アキラには是非ともこれらの素晴らしいさを味わって貰わないと」

何か厭な予感がする…

「布製や革製でも良い物はあるのに、最後はみんな金属製の防具しか買わない。ここは、アキラにモニターテストをして貰う事にしよう。じゃあ、宜しく頼むよ」

若い店長？は、「はい、分かりました」と言わんばかりに胸を張り、スコットを見送った。

そして、俺はこれから地獄の1時間を味わう事になった。

・ ・ ・ ・ ・

・
「ハアハアハア、疲れた…」

俺はゲッソリして試着室から出た。

数にして約20着の試着が終わり最終的に布と革がミックスされた変わった防具になった。

何でも、イスカ王国で流行っていた服装なんだとか。戦後の時代で流行っていた服とか時代遅れに見られないのかな…

「はあ、良い仕事したわ。アキラちゃんって、スレンダー体型だから、体に密着した服がよく似合うわねえ」

どうでも良い事だが、この1時間で店長さんが俺の事を「アキラちゃん」と呼ぶようになっていた。

それにしてもこの服装、俺としては少し…いや大分恥ずかしい。

特にこのミニスカートだ。どこにでもあるシンプルなデザインではあるが、体にピッタリなサイズの為、体のラインがよく分る。

さらに、スリットまで付いているから尚更だ。

「スリットがなかったら武器を構えた時、パンツ丸見えよ？良いの？」なんて、脅されたら断れない。

上半身は、どこかの学園アニメに出てくる制服みたいなデザインだ。プレイヤー生産なのが悪意を感じる。絶対、アニメかゲームを参考にしているよ。

何で、胸元が菱形状に開いて、肌が見えてるんだ？

これは何か役割でもあるのか？店長さんに聞いても「さあ」って答えるし…

これアレだろ。簡単に言えば、生産者の好みだろ…。

ニーハイソックス（白）や革製ブーツなども合わせ全て同じ生産者がデザインした拘り（趣味丸出し）の逸品との事。

デザインはエ○ゲーやギャルゲーに出てくる女子学生服だが、素材はかなり良いらしく。

流石に布は世間一般的に出回っているものらしいが、裁縫糸はミスリル銀糸で革は飛龍の皮らしい。

贅沢にも程があるだろう。

試着が終わり、5分もしない後、スコットが戻って来た。

「おおお！」

と、いう歓声の後、可愛いなどと言い放ちやがった。

可愛いと呼ばれて悪い気はしないが、中身が男という事を忘れていないか？

というか、胸元見すぎ自重しろ。取り合えず脇腹を殴っておいた。

スコットが代金を払い2人で店を出た後、商会から使者が来てスコットはルドルフ商会本部へ行ってしまった。

取り合えず、俺は他に用事はなかったので家路に着いた。

ちなみに、防具はこうなった。

<防具>

頭…

顔…魅惑のリップクリーム

首…傭兵タグ

耳…魅惑のイヤークラス

肩・・―
背・・―

上半身（上）・・純真の学生服・上

上半身（下）・・シルクのバトルブラ

腰・・純真のセーター

下半身（上）・・純真の学生服・下

下半身（下）・・シルクのショーツ

靴下・・純真のニーハイソックス

靴・・純真の龍革ブーツ

右手・・―

左手・・―

鞄・・リュック型学生カバン

<魅惑セットボーナス>魅力+20、身近な同性を惹き付ける。

<純真セットボーナス>魅力+30、身近な異性を惹き付ける。

同性や異性やら訳の分らんボーナスや魅力がやたら上がっているが
気にするな。

生産者と店長を殴ってやりたい気分だが、気にしたら負けだと思っ
ている。

俺はこれらのボーナスを見なかった事に……………出来ないのだろうか。

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

・
俺は、家の近くまで来た時、家の玄関の前に人が立っているのを見た。

「うちに何の用だろう…」

と、近付いてみる俺のよく知るプレイヤーだった。

長い銀髪のハイエルフ、女性キャラの中では身長を高くしている。リアルではデザインに関する仕事をしている為か容姿には拘っており、文句なしの美女キャラだ。ゲームでは美乳だがリアルは貧乳なのはここだけの話。

声を掛けようと思ったが、何やらブツブツと独り言を言っていた。

「せっかく、来てやったのに何でいないのよ…亮のヤツ…、あいつの事だから1人で寂しくしているだろうと……」

何か失礼な事を呟いているな…。

「おい、アヤカ」

聞こえていないかのように、まだブツブツと呟いている。

…気付いてないのか？

もう一度言ってみよう。

「アヤカ！」

「さっきから、何なのこのお子様は…私を呼び…捨てに…s……あれ？呼び捨て？」

と、アヤカは俺の方を見る。

「……………アキラ?……………」

「ああ」

「えええ!?! なになに、この可愛いお子様がアキラなの!?!」

「こ、こら、やめろ!?! む、胸を押付けてくるなっ!?! わ、わかった。好きなだけ抱きついて良いから、家の中に入ろう。な?」

く、恥ずかし過ぎるぞ、この状況…。

俺は抱きついているアヤカを連れ、家の中に入り応接室まで来た。

「な、なあ。この体勢で話さなければならないのか?」

この体勢とは、アヤカの太ももの上に俺が座っている。その上からアヤカが覆いかぶさっている状態の事である。時折、胸を揉んでくる…こいつはセクハラ上司か…。

「胸を揉むな! それに顔が近い!」

「まあまあ、良いじゃない」

そう言いながら、頬にキスするのは止めてくれ。

「で、俺に何の用だ?」

こいつの前で、猫など被る必要ないだろう…

猫を被るとは無論、一人称のボクや丁寧語の事だ。

「特に用はないのだけど…世代交代でキャラ入れ替わったら、一度顔を会わせてないと長距離会話が出来ないじゃない？」

「まあ、そうだな」

「本当の目的はアキラと関係ないのだけど、近くに来たからさ。様子でも見ようかと…」

で、その後、お互いの近況を話し合った…。

あ、ちなみに、このアヤカはリアルで俺の親戚に当たり従兄妹同士の関係なのだ。

以前話したと思うが、3歳年下で俺を最初にアキラちゃんと呼んだヤツだ。

名前はアヤカⅡツキカゲ、ハイエルフの弓術使いで精霊魔法もかじっている。

彼女も”八迅”の1人だったりする。

とはいえ、世間一般的に廃人扱いされているアヤカだが、実際のところ至って普通のプレイヤーだ。

1日3時間しかプレイはしない。ただし、毎日必ずログインはするが…

3年間の間、世代交代を一度もしていない為、現役傭兵ランキング1位だったりする。

いくら長寿種族をプレイする者でも、9割はすでに2代目になっている。

まだ、初代のキャラを使っているのは、俺の知る限りアヤカだけだ。

で、アヤカの通名は”光迅”だ。彼女の持つ武器、神弓・ゴッドブレスに由来している。

アヤカは、どうもこの街の北に位置し地中海に面する小さな町「アビスタ」に用があつたらしい。

神弓の耐久が減つたので直して貰う為との事、神弓を直せる職人がいたのには驚いた。

アヤカがいうにはシークレット扱いの長編クエストをクリアする事で会えるNPCとの事。

しかも、修理を専門にする武器職人で種類・素材問わず修理できるらしい。

シークレット系のクエストは何個か知っているが、そんなクエストがあつたなんて知らなかった…。

前提条件は何なのかを聞いてみると、プレイヤー生産以外の伝説級レアアイテム所持らしい。ああ、なるほど、俺持っていないわ。

伝説級は完全に運だ。廃人だろうが持っている者は少ないというか、アヤカぐらいしか知らない。

アヤカは改変後の世界を旅する予定らしい。

取り合えず、”八迅”（の中の人）に全員会うのが当面の目標みたいだ。

次の行き先は、俺やアヤカ以外の”八迅”であるアーネストと言うビーストがいる華朝連邦という国だ。

確かノースブレイ王国の長年の敵国ハイランド王国の東に位置する大国だ。

面白い流派が多く、俺も一度は行ってみたい国だ。

ちなみに、アーネストは俺と同じように短命種族を好んで使い今回も世代交代している為、今は別の名前だ。

予定を変更して、しばらくはノースブレイ王国に滞在するつもりみたいだ。

何故かと聞くと満足するまで俺を愛でるつもりらしい。
勘弁してくれ…。

そして、俺の近況も話した。

ヴォルトと母が傭兵に復帰した事。そしてフィラシエット大陸の動向を探るかも知れない事。

シムスに殺されかけた事…父ヴォルトと同じような反応をしたので鎮めた…。

ある程度、力を付けるまではこのノースブレイ王国にいる事などないのだ。

俺がノースブレイ王国を出るまで付き合おうと言ってきた…どうしようかと考えていたら、

「私がアキラの保護者になったら色々お得だよ？」なんて言っていて、結局彼女に説得させられた。

俺、ノースブレイ王国を出るまでに気苦労で死ぬかも…。

第10話【八迅】（後書き）

どうだったでしょうか？

アキラの新装備、新キャラの登場という話になりました。

新装備何かと問題がありそうですが、気にしたら負けです。

第11話【依頼】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにご容赦願います。

アキラ初依頼の話です。

※内容にご指摘があったので少し内容を変えました。申し訳ないです。

第11話【依頼】

アヤカが来た次の日、早朝にも関わらず顔を合わせるなり抱きついてきてキスを迫ってきた。

朝からこれはきつい…。

あまりにもアヤカが引っ付いてくるので、試しに防御力自体にあまり影響のなさそうな装備を外してセットボーナスを外してみた。

すると、鬱陶しい程引っ付いてきたアヤカが幾分かマシになった。と言っても、0距離から近距離に離れた程度なのであまり変わらないかもしれない。

俺とアヤカはお互い顔を洗い、食料棚にあった材料で簡単な料理を作って食べた…。

作ったのはアヤカだけ…。

「で、アキラ。これからどうするの？」

「そうだな。当分はレベル上げだな。まだLv16だしアビスタへ行くにしても要塞都市へ行くにしても今のままでは、死亡確定だしな」

「まあ、妥当な判断ね」

「ところで、今日は私が作ってあげたけど、いつも朝ごはんとかどうしてるの？」

「ん？ああ…どうしようかな。昨日の朝は母が作ってくれたけど、もういないしな…」

「それって、遠まわしに作れないって言ってるよね。
はぁ、分ったわ。私が作ってあげる。ただし、食費はアキラが出し
なさいよ」

アヤカはため息をつき、料理当番を申し出てくれた。
有難い。残念な事に俺は料理が全くだめだ。リアルでもE／Oでも
…。

「ああ、それで構わない」

「というか、いつまでこの世界にいるか分らない上に一応女の子な
んだし、料理ぐらい覚えたら？」

「…考えておくよ」

俺としては道具屋にある携帯食料でも良いんだけどな…と言ったら
怒りそうだ。

「…：まあ、良いわ。私は食器を洗うから、適当に時間潰しておい
て」

「ん？ ああ」

・ ・ ・ ・ ・

「取り合えず、アキラの初仕事をどれにするか決めましょうか…」

「ああ、そうだな」

俺達は今、ギルドのロビー兼酒場のテーブルで今後について話していた。

「俺としては闇の森へ行きたいところだな…」

「闇の森？」

「ああ、南門の先に広がる森林地帯の事だよ。セントラルブレイ王国との国境までずっと続いている森だ」

「ふーん、そこに何かあるの？」

「母が言うには、精霊の石碑があるらしい。森のどこら辺にあるかまでは教えて貰えなかったけど」

「石碑かあ…」

俺とアヤカが闇の森の話をしている時、2つ隣で朝食を摂っていた傭兵が話しかけてきた。

「あんたら、闇の森へ行くのかい？今は辞めておいた方が良いでしょう？」

「どうしてですか？」

何故だろう。あそこはそんなに危険な魔獣は居なかった筈だ。それこそ、街道沿いに歩けば野獣にさえほとんど出会わなかったと

記憶している。

「今、あそこには狂人化したアースガントがいて騎士に討伐命令が出ているんだ。

それに、先日、セントラルへ行こうとした傭兵があ森で行方不明にもなってる」

アースガントとは巨人族の事で長寿種族だ。

子供でもヒューマの大人よりも大きく、大人になると3mぐらいある。

非常に温厚な種族で法術も少し使える。プレイヤー人口は全種族中一番少ないが、一番腕力と体力が上がりやすい。八迅にもアースガントを使っている廃人がある。

「魔獣でもないのに討伐命令ですか？」

「ああ、狂人化のせいで手が付けられない状態なんだとさ」

「そうですか…。参考になりました。ありがとうございます」

「良いつて事よ」

傭兵は手を振った後、また食事に集中する。

「どうせ、アキラじゃ狂人化していなくても勝てないし、別の所にしましょうよ」

「そうだな。取り合えず、依頼掲示板を確認して行けそうなものがあれば受けよう」

俺は横幅2mほどある依頼書を貼り付けた掲示板の方へ向かい、左から順に見ていく。

どれもパツとしないな。

優先順位はレベル上げだから、お使いクエスト系は省くとして…。お、討伐依頼があった…。

「んー、グレイウルフの討伐？」

グレイウルフか…悪くない。低レベル帯には丁度良い相手だ。ヴォルトでプレイし始めた頃もよくお世話になったものだ。

「アヤカ、これなんてどうだ？」

「えっと…うん。良いんじゃないかな」

「んじゃ、行ってくるわ」

「オツケー。私は賞金首リスト見てくるね」

俺は一旦アヤカと別れ、依頼受領の為に受付カウンターへ向かう。

「ようこそ。傭兵ギルドへ。」

「すみません。この依頼を受けたいのですが…」

「はい、確認しますので少しお待ち下さい……。グレイウルフの討伐ですね。詳細説明は必要ですか？」

「はい、お願いします」

「では、ご説明します。東門から伸びる街道は勿論ご存知ですよね？」

「ええ」

「その街道沿いにある森に最近グレイウルフの群れが確認されています。」

本来、森の奥か山中に生息していますが、確認された狼は街道近くまで来ているのです。

被害が出る前に討伐して貰いたいのです。能力はそんなに高くはありませんので初心者の方には打って付けですね。

ですが、注意も必要です。彼らは集団で行動します。深追いはせず、退路を確保しながら戦う事をお勧めします。

確認されただけでも10匹はいますので、十分気をつけて下さい。何か質問はありますか？」

「期限はいつまでですか？」

「特に決まっておりませんが、引き受けた後に被害がありますと、その都度報酬が半減しますのでご注意を」

「分かりました。ありがとうございます」

俺は受付を離れ、アヤカと合流した。

「依頼引き受けてきたぞ。そっちはどうだ？」

「この街の付近だと、2人賞金首がいるわね。どっちも小者だけど…アビスタから要塞都市の間に1人。こっちは現段階じゃ不可能ね。小者は遭遇した時に捕らえたら良いわ。糧にも金にもなりそうにな

いから、基本無視ね」

一応、その小者2人のデータを見せてもらった。

1人は、誘拐と人身売買の疑いと複数の軽犯罪か…、確かにどうでも良いな。

もう1人は、初心者を狙ったレイプ魔か…下衆だな。

情報が小太りという特徴以外書いていないな。まあ、早々会う事もないだろ…。

俺達はギルドを出て東門を目指し、中央広場に差し掛かった辺りでアヤカは用事を思い出す。

「あ、ごめん。露店でポジション見てくるから先に行ってて…」

「分った。HPなら俺が法術使えるから、MPのポジションをよろしく」

「りょーかい」

アヤカはそう言う人ごみの中に消えていき、俺はそのまま東門へ向かった。

「外した装備を着けるかな。ちよつとでも防御力上がった方が良さ…」

俺は歩きながら朝外した装備を付け直した。

異性や同性を惹きつける効果があるが、どうせ身近な相手にしか効果がない。

今回の場合は、アヤカだな。

それに、さすがに依頼中に抱き付いては来ないだろう。

そして、東門に着いたが、アヤカがなかなか来ないので、少し街道沿いを歩いた。

街道には、疎らではあるが人が歩いており、そのほとんどが商隊や傭兵だった。

しばらく、歩いていると森から突然、男が飛び出してきた。

男は、俺の姿を見るなり走って近付いてきた。

「…あんた傭兵だよな？」

助けてくれ。さっき、そこでグレイウルフに襲われたんだ」

「ん？？襲われたにしては無傷じゃない？」

何か妖しいぞ…こいつ。

でも、格好は普通の一般人だな。

武器を持っているようには見えないし、考え過ぎか…。

「ひ、必死で逃げたんだよ！」

「そうですか。その討伐依頼を引き受けたので丁度良かったです…場所はどこですか？」

「こっちだ。早く来てくれ。放って置くと他にも被害が出るかもしれない！」

男は俺の手を引っ張り森の奥へ向かった。

しかし、男に誘導された場所にはグレイウルフの仔さえ一匹もいなかった。

「いませんよ？」

「あれえ、おかしいなあ…確かにいたんだけどな」

「…では、あなたはここまで結構です。危険ですので街へ戻って下さい。」

ボクはこれから痕跡を調べますので…」

俺は男を帰し、グレイウルフの痕跡を調べる為、地面に膝を付く。。

ん、おかしいな。足跡もフンもひとつもない。

本当にここにいたのか？

だが、あの男が嘘を付いていると断言できなし、嘘を付くメリットもない…。

探索魔法で探してみるか…

100mしか範囲はないが、そう遠くへは行っていないはずだ。

狼自体を見つけられなくても、何かしら反応がある可能性もある。

「女神ヴィーナスの名において、見えざる者を映し出せ…ディテクト！」

反応は…3つ。

一番近いのが、キンピールビット。

こいつは草食動物の代表的な野獣だ。

何故か、ゴボウが好物なウサギという謎設定のせいで変な名前が付いている。

そう、略称「キンピラ」だ…。

もう、1つはさっきの男か…街へ帰れと言ったのに、まだ近くにいないじゃないか。

まさかとは思うが、一応警戒はしておこう。
ギリギリの範囲にいるのがアヤカだな。

さて、もう少し奥へ行ってみるか……
俺は法術を解き奥へ行く為に立ち上がったその時、後ろに人の気配を感じた。

アヤカ意外と早かったな。

第11話【依頼】（後書き）

どうだったでしょうか。

第12話【不能】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りはご容赦願います。

第12話【不能】

「アヤカ、意外とはや…いつ」

言い終わる前に、何者か…いや、あの男に…左手の関節を極められ口を塞がれた上で抱きつかれた。

やはり、この男は初心者狙いのレイプ魔だ。

「泣き叫ばないのか？」

案外、冷静じゃないか…」

先ほどのまでの口調と喋り方が違うな…。

こちらが本来の口調という事か…

レイプ魔は俺のうなじの匂いを嗅いだ後、首筋を舐めてきた。

この男の股間辺りが盛り上がっているように見えるが気のせいだな…。

気のせいだと信じたい。

俺の尻に何が当たっているのか思い浮かべただけで背筋がゾワゾワとする。

「下衆が…」

俺は口を塞いでいた手を振りほどき言う。

「俺にとっては褒め言葉だね…」

「良い気になっているところ悪いが…気を抜き過ぎじゃない？」

「なんだと？」

レイプ魔は、怒気をはらんで凄む。

「アヤカ、今だ！」

「なに!？」

レイプ魔は、ブラフに引っかかり後ろを振り向く。

その際、俺を押さえつけていた力は弱まったので、レイプ魔の足先を踏みつける。

そして、レイプ魔から離れ、いつでも戦闘できるように詠唱の準備をした。

「ぐっ!?!? てめえ」

「こんなブラフに引っかかるなんて、案外、単純なんだな。大方、低レベルなら抵抗出来ないだろうと思ったのだろ?」

「ああ、そうだな。それに気配察知も出来ないお嬢さん程度なら、今からでも余裕で押さえつけれるさ」

手をワキワキさせて今にも襲い掛かりそうだったが、俺は助かったようだ。

「残念、時間切れだ。ブラフがブラフじゃなくなったみたいだ」

俺には、レイプ魔の後ろで凄い形相の弓を構えているアヤカが見える。

魅惑のセットボーナス効果が効いているようだ。

後ろを振り向いたレイプ魔の表情から余裕が消え青ざめていくのが

ハッキリと分った。

「ま、待て。アヤカ、一応こいつも賞金首だ。殺したら無駄になる」

「フッフ、私のアキラに何をしていたのかしら？」

いつからアヤカのものになったよ!？

「……………」

「取り合えず、去勢しなきゃね」

アヤカは笑顔で男の盛り上がった股間へ狙い澄ます。
レイプ魔の股間が序々に萎んでいく。

「ま、まtぎゃa a A a あああ!？」

萎みきる前にアヤカの放った矢は、男のアレに当たらなかったように見えたが掠ったように音も無くアレは霧散した。
千切れたんじゃない…塵になったのだ。

想像しただけで恐ろしい光景が目の前で起こってしまった。

しばらく、男はその場で転げ回り、数十秒後、泡を吹いて気絶した。

「死んでないよな？」

「同じ男として心配？」

「いや、賞金が心配」

俺は躊躇なく答えた。

「じゃあ、死ぬ前に東門駐屯所に引き取って貰いましょう」

改変前は、引き取って貰ったらそれで終わりだったが、改変後どうなっているかだな。

まあ、その辺はゲーム遵守だと願うばかりだ。

「ああ」

俺たちは股間から出血しているレイプ魔を2人で引き摺りながら東門を目指す。

東門を通り過ぎる時、門番を勤めていた騎士が青ざめていたのは気のせいだ。

東門近くにある駐屯所にレイプ魔を持っていき、傭兵であると告げた後、担当の騎士へ手配書を添えて引き渡した。

俺はその時に早く治療しないと死ぬ事を忠告した。

その横でアヤカが「不能になれば良いのに」と小さな声で呟いたのは内緒だ。

引き渡した後、俺達は本来の目的であるグレイウルフの討伐をしに、また東門を抜け森へ探索に向かった。

「取り合えず、街道沿いを歩くか…痕跡か何かが見付かるかも知れないし」

「そうね。それと確かアキラは法術使えたよね？」

100mごとにディテクトしていったら良いんじゃないかな。

MP回復ポーション買ってあるからMP切れになっても大丈夫よ」

・ ・ ・ ・ ・

そして、6回目のディテクトで反応があった。

グレイウルフの群れだ：数にして16匹、内3匹が仔狼。

魔法を感知したのかは分らないが、明らかに母狼と思われる数匹の狼がこちらを警戒している。

「どうする？」

「森で戦うのは不利だから、私がこっちへ誘導するわ」

と、アヤカは弓から矢を放ち、警戒していた母狼の1匹を木っ端微塵にした。

相変わらず、直撃すれば凄まじい威力だ。

例えるなら、対物狙撃銃「バレット」と言ったか？あれと思ったら良い。

一瞬、呆気にと取られていた12匹のグレイウルフ達は、殺気を立て俺達を囲むように襲い掛かって来た。

俺はザキラを呼び出し、共に戦うよう頼んだ。

「やっと、俺の出番か：よし、任せろ。ドンッと来い」

ザキラはドスのような風の刃を構える。

俺は、カバン横に差していた夢幻刀を腰に差しなおし居合の構えで隙を窺う。

アヤカは構えていない…というかレベル差があり過ぎて狼達は避けて動いている。

狙いは俺とザキラに決めているようだった。

一触即発だが、お互い警戒しているので動きはない。

「くちゅん…」

アヤカが可愛いクシヤミをした瞬間、グレイウルフは一斉に飛び掛ってきた。

『居合・壺之太刀』

俺はすぐさま抜刀し迎え撃つ。

この攻撃で一番前方にいた4匹を両断、後ろにいた2匹を真空波で切り裂く。

俺は他に襲い掛かってくる狼がいなか周りを見ると、ザキラが狼

3匹に噛み付かれていた。

3匹を引き摺りながら飛び掛ってきた1匹を刺し殺していた。

この状態で1匹仕留めたのは正直驚いたが、カッコ悪いな…。

「やああってやらあ！」

ザキラは渾身の力で3匹を振りほどき構え直した…。

見るからに満身創痍だが、精霊だし死ぬ事はないだろうから放っておこう。

俺の前方3m付近にいた3匹と振りほどかれた1匹が合流し、俺にジ○ットストリ○ムアタックばりの攻撃を仕掛けようとしていた。しかし、この隊列は俺にとって好都合だった。

『居合・参之太刀』

俺は狼達が飛び掛る前に、仕留めようと3つ目の技を放った。

これは刀を縦に居合斬りをし、前方に対して巨大な真空波を放つ技だ。

元々は居合による兜割りのような技だったが、真空波を合わせる事で全く違う性質の技に変貌した。

解き放たれた真空波は、前方にいた4匹を一瞬で切り刻んだ後、狼達の後方にあった大木を両断した。

その直後、ザキラも2匹の狼を倒せたようだった。

そして、後に残ったのは3匹の仔狼…

「アキラ、仔狼も仕留めないと依頼は達成されないわ」

俺が躊躇したのがアヤカは感じ取ったようだった。

リアルと変わらない現状、改変前のように躊躇せずに攻撃をする事が出来なかった。

俺って甘いよな…。

「分っている」

後味は悪いが仕方ない。

「……私の矢なら一瞬だから任せなさい」

と、アヤカは躊躇無く矢を放ち仔狼を葬った。

・

・ ・ ・ ・ ・

「討伐を確認後、明日までに指定口座へ振り込みます。それと、賞金首を捕らえたようですね。

こちらは東門からすでに連絡を頂いていますのでお支払い出来ますが、現金で支払いますか？口座にしますか？」

今、ギルドで討伐依頼の完了報告と賞金の受け取り手続きをしているところだ。

で、口座とは：ギルドが管理する傭兵専用の銀行口座の事だ。

今はそんなに高額ではないが、ランクの高い依頼は完了すると現金では渡せないほどの大金が手に入る。

「口座でお願いします」

お金は普通にプレイする分には現状でも十分に持っていたので銀行に振り込んでもらうようにした。

「分かりました。では、討伐依頼の報酬とまとめて振り込ませて頂きます」

依頼書に処理済の印を押し、後ろのギルド職員に渡した。

今日は、あの恋人？ではなかったようだ。

「あの…さっきから気になっていたのですが…お隣の方はどなたですか？」

受付のお姉さんは、目の前の光景を気にしないようにしていたがやはり気になるようだった。

そりゃ、俺にべったりと引っ付いている一見クールビューティなハイエルフを気にするなという方が無理があるな。

「…色々あって、今はボクの保護者みたいな感じですよ。そうは見えないでしょうけど…」

「アヤカ…ツキカゲよ。登録番号387000873」

「……………え？…傭兵ランキング1位！？…もしかして”光迅”？」

受付のお姉さんは登録番号に従って身元を調べ、アヤカのランキングを見て驚いた。

まあ、仕方ない。

ランキング1位なんてギルド職員だからといって早々出会える訳ではない。

ほとんど生きる伝説みたいな存在だ。

「あ、あのでしたら…」

「これでも3百年以上は生きているから。ランク高いのはそのせいでよ。

それと、今回はあくまでもアキラの保護者ってだけだから私自身は依頼を受けないつもりよ」

受付のお姉さんの言葉を遮ってアヤカは釘を刺した。

「あ、すみません」

「別に謝らなくても良いわよ。それじゃアキラ手続きも終わった事だし行こっか」

「ああ、それではお姉さん。また」

俺は受付のお姉さんに挨拶をギルドを出た。

アヤカが引っ付きすぎて歩きにくかったので、また一部の装備を外してセットボーナスの効果をなくした。

・ ・ ・ ・ ・

後で聞いた話だが、あのレイプ魔なんとか死なずに済んだらしい。アレは再起不能だったみたいだが…。

第12話【不能】（後書き）

どうだったでしょうか？

今日はそれほど話が進んでないので面白みに欠けてるかもですね。

ちなみに、レイプ魔の名前は未定です。

第13話【土産】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第13話【土産】

あれから、1ヶ月が経ち、賞金首にばったり出会うという事もなく順調にレベルも上がってきた。
だが、ここで1つ問題が出てきた。

俺が装備している「夢幻刀」^{むげんとう}の耐久が悲鳴を上げていたのだ。
夢幻刀はプレイヤー生産なのでその辺にいる武器職人では直せない。
生産した本人であるイトウⅡシホウインにしか直せないのだ。

しかし、困った事にこれを購入したのは6世代前のキャラかつ買った所がイスカ王国だ。

イトウは確かヒューマを使っていた。そして、彼の子孫では直せない。

レベルも上がったので別の刀に装備を変更する事も考えたが、俺はこの刀を案外気に入っている。

野獣や魔獣にはあまり効果はないが、対人だと間合いを読まれ辛いのが良い。

そして、どうしようかとアヤカに相談してみた。

「なら、ワグナーさんに会ってみる？
彼ならきつと直せるわ。でも、彼が興味を示しそうなアイテムが必要かも知れない」

ああ、確か、アビスタに修理専門の武器職人がいるとか言っていたな。

ちなみにアビスタは北と南に山で分かれた街だ。

北は漁業が盛んで南は鉱山と農業が盛んな所って、昨日アヤカが行っていたな。

「それって、アヤカみたいに伝説級レアアイテムを持って行けっのか？」

さすがに伝説級は持ってないぞ。俺のアイテムで最高ランクは叙事詩級だな…」

「一応、私が紹介するから、少しは大目に見て貰えるかも…。どっちにしろ、会って頼んでみる価値はあると思うわ。どうする？」

「んー、分った。会ってみよう」

俺は、彼が気に入るような武器を探す為、地下倉庫に下りた。

確か、脇差に叙事詩級があった筈…。

◆魔刀・ナインテイル（九尾）

ベース…なし

生産者…不明

耐久…400／400

攻撃力…220

必要能力…腕力50、体力80、器用220、敏捷120、呪力20
備考…呪い付き、HP・MP・SP－50%。叙事詩級効果、一薙ぎで9回攻撃。魔刀効果、クリティカルダメージ＋100%
生産者コメント…我が呪イハ主ヲ殺ス。我が刃ハ九ツ殺ス。

あった、あった…。

呪い付きでなかったら、とんでも性能だ。

攻撃力が夢幻刀と同じだが、その数値に×9をしたのが本来の数値

だ。

さらに、クリティカル時のダメージ量が2倍になるおまけ付きが、俺はこれを装備した事がない。

呪力20ってのがネックで、呪力がある種族はダークエルフだけなのだ。

これの為だけにダークエルフを選択する訳にもいかず、ずっと倉庫の肥やしとなっていた。

とうとう、こいつに役立つ時が来たかもしれない…。

「これで行こうと思う。アヤカ的にどうだ？」

「良いんじゃない。どうせ、これが最高ランクのアイテムなのでしょ？」

じゃ、持って行くものはこれで決まりとして、後はおみやげね」

「おみやげ？」

「そう…。彼、他のドワーフに漏れずお酒が大好物なのよ」

「酒か…一応、食堂にワインセラーがあるが、何があるかは分らないが。」

改変前はインテリアとして効果を見ずに適当に買ったからね」

「じゃ、私ちよっと見繕ってくるから、アキラは行く準備でもしておいて。」

10分後、玄関で合流ね」

「わかった」

俺はアヤカと別れ、準備をしに自室へ向かった。

・ ・ ・ ・ ・

10分後玄関前で待っていると、アヤカが食堂から1本のワインを持ってやってきた。

「良いのあるじゃない」

「良いの？」

「そうよ。これ、ドワーフの密造酒【ドラゴンブレス】。
なんでこれ、アキラが持ってるの？」

「持ってるの？」

と聞かれても分らないって。適当に買ったものだって言っただろ」

「ん…まあ、良いわ。もしかしたら、このワインを交渉材料に出来るかも…」

「まじで？」

「これって伝説級に相当する超レア物ワインよ。」

じゃ、行きましょ。まずは、北門から街道沿いに行けばアビスタよ」

アビスタか…改変前はなかった町だな。

恐らく、クエスト専用の町が改変で表に出てきたってところか…。

俺達は、アビスタまでの街道で出来る依頼を受けた後、北門から出

てアビスタを目指した。

受けた依頼は、街道のほぼ中間地点ら辺に出没するオーガの討伐だ。本来、これは騎士の討伐任務だった様だが、闇の森の一件で傭兵に仕事回ってきた依頼だ。

「まあ、一匹なら何とかなるか：」

ちなみに、夢幻刀の残り耐久値は20だ：。

それは、20回の攻撃で壊れるという事だ。

まあ、20回攻撃する事はないだろうが、相手が相手だけに用心に超した事はない。

程なくして、街道沿いを彷徨くオーガを発見した。

獲物を探しているようだ：凄く機嫌悪そうなところを見ると、もしかして俺達が今日最初の獲物になるのかもな。

取り合えず、魔法で牽制だ。

「炎の槍よ、我が敵を貫き通せ！フレイムスピア！」

前に突き出したフレイムワンドから約2m強の炎の槍がオーガに向かって飛んでいく。

オーガは、炎の槍が1mぐらいまで近付いたところで気が付いたようだが時既に遅し、オーガのどてっ腹に直撃した。

凄まじい音と共に炎が立ち昇り少し吹き飛んだ後、オーガは尻餅を着いて転げた。

最初の頃に比べたらフレイムスピアも炎の槍っぽくなったものだ。初めて使った時、炎のバットかと思ったほどだ。

つと、そんな事を思っている場合ではないな。

その隙に、俺はオーガに向かって走った。

ちなみに、アヤカは歩いていて手出しはしない模様だ。

オーガは雄たけびを上げ、起き上がろうとしていた。

「立たせるかっての！」

『居合・死之太刀』

まずは、横に一閃、続けざま上から下へ縦斬りによる十字攻撃。
簡単に言えば十字居合斬りってところか…。

俺の攻撃は、オーガの腹から胸に架けて十字傷を与え、さらに真空
波が傷を抉りながらオーガを吹っ飛ばす。

どうでも良いが、この2連撃…1回の攻撃と見なされるのだろうか
…。

オーガがピクリともしない…倒したか？

いや、強烈な殺気がして、俺は咄嗟に後ろへ飛んだ。

さっきまで俺のいた場所へ起き上がりながらハンマーで攻撃を仕掛
けてきた。

恐ろしい事に地面が約1mほど窪んだ。

当たったら、即死か致命傷だな。

俺が後ろへ飛び退いた事によって、オーガに立ち上がる隙を与えて
しまう。

ああ、凄く怒ってるな…これ。

長引くと俺に不利な状況になってしまう。
と、迷っている隙にオーガが俺の方に走りながらハンマーを振り上げていた。

まずは、あの武器を何とかしないと。

『居合・壹之太刀（対空）』

俺はジャンプすると同時に居合をし、オーガの振り上げた腕を斬り落とした。

これでオーガの戦力は半減した筈…。

だと思ったが、そうもいかなかった。

オーガのもう片方の腕が迫っていたのに、俺は全く気付いていなかった。

気付いたのは、俺の視界がオーガの手で遮られている時だった。

「あ、やば…」

俺はオーガの手に弾かれ30mほど吹き飛んだ。

「ぐっ…」

激痛と共に俺の視界が赤く染まる…瀕死状態のようだ。

歪んだ視界の先からオーガがゆっくりと俺に近付いてきているのが分った。

なんとなく、にやけているように見えなくもない。

早く治癒しないとまずいな。

「女神ヴィーナスの名の下に、偉大なる慈愛の光であるべき姿に戻したまえ！ヒールライト！」

俺のHPは全快まで回復し、視界が元に戻る。

滅多に使わないヒールの中位法術：消費MPは多いが俺のHP程度なら全快できるほどの回復量があった。

オーガの足を奪おう：それが今一番手っ取り早い。

恐らく、歩いてきているという事はオーガは油断しているのだろう。

『居合・伍之太刀』

本来は、相手の足を払うもしくは切り裂く技。つまり、草薙や草払いなんて呼ばれている技だ。

しかし、真空波と合わさった事で、地を這う真空波が前方の草を総刈りしてしまう技に変貌している。

そして、その真空波は油断しきったオーガの両脚を両断した。

これは油断した相手か不意打ちでないとなかなか当たらない。

いくら真空波だろうと飛んで簡単に避けられてしまうのだ。

乱戦でも使えない事もないが、味方を巻き込む可能性がかなり高い。

両脚を切断された事で、動けず平伏せた状態のオーガの前に俺は立つ。

さすがのオーガも片腕と両脚を失っては完全に戦意を無くしていた。

俺はオーガの頭の横に回りこんだ後、刀を振り下ろし首を落とした。
最後は呆気なかったな：

「終わったようね」

「ああ」

「アキラが弾き飛ばされた時、少し冷や冷やしたけど倒せて良かったわ。」

あ、アキラ今回は、そのオーガの首をアビスタの駐屯所まで持っていきましよう。

ギルドの人が確認しに行かなくても、これが証拠になるから…」

「それは良いけど、これ…結構重い」

「2人で持てば何とかなるわよ」

俺達はオーガの生首を引き摺りながらアビスタを目指した。

引き摺った跡がオーガの血で描かれていたのはここだけの話…

とはいかなかった…。

駐屯所に行って行った時、そこにいた騎士に呆れながら注意されてしまった。

「出来れば、血抜きか血止めして持って来て貰えないか…」と…。

その後、ギルドの出張所に向かい賞金を受け取った。

「で、そのワグナーってどこにいるんだ？」

「奥にある丘の上に数軒家が建っていて、その内の1軒にいるわ。看板とか立っていないから分りにくいけどね。」

私ちよっとお酒のおつまみを買って行くわ。先に丘まで行っ

ておいて」

「分った。酒のつまみって何を買うんだ？」

「ワグナーさんがいつも飲んでるお酒よ…」

酒のつまみに酒を買うのか？

第13話【土産】（後書き）

どうだったでしょうか？

※毎度の事ですが、投稿後に修正する可能性があります。
物語自体の方向性は変えませんのでご了承ください。

第14話【神話】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第14話【神話】

「おまたせ」

「そんなに待ってないよ」

「じゃ、こっちよ。付いて来て」

アヤカの後を付いて行き辿りついた家は、至って普通の家屋だった。言っていた通り、看板などはなかった。

「ワグナーさん、いますか？アヤカです」

アヤカは戸口の扉を叩いた後、中にいるであろう人物に声か掛けた。

「む、ツキカゲ殿か…開いておるぞ」

「失礼します」

「お邪魔します」

声を掛けて、アヤカの後から入った。

パツと見た感じ、普通にある家の中だが、奥の方に如何にもと言わんばかりの扉があった。

恐らく、あそこが鍛冶場なのだろう。

「む、連れがおるのか。まあ、良いわ。で、何用じゃ？

数日前にツキカゲ殿の弓を直したところじゃろ。

無理な使い方をせん限り修理が必要とは思えんのだが…」

「今日は、この娘の武器を直して欲しいの」

「ふむ、いくらツキカゲ殿の頼みでも無条件で修理はせぬぞ？
わしを納得させる程のモノを持って来ておるのじゃろうな」

「ええ。アヤカ？」

「えっと、これです。どうですか？」

俺は、布に包んで持ってきた魔刀・ナインテイルを包みから広げて
見せた。

「ほう…これは…。ふむ。なかなか良いものよな。」

呪い付きか…それを差し引いても伝説級に匹敵する性能があるの「お」

「どうです？」

「ふむ、良い物じゃなコレは…」

「じゃあ」

ワイン必要なかったかも知れないな…。

「じゃが、ダメじゃ。わしが見たいのは伝説級じゃ…。」

確かにこれは良いものじゃが、過去に叙事詩級は何本も見ておる。
残念じゃが…」

「まあ、そうくると思いましたわ。では、これならどうです？」

アヤカは、後ろに隠していたワインを出し、ワグナーさんの目の前に置いた。

「!?!?……こ、これは……まさ……か、いや、見間違う筈はない。

いや、しかし、もう生産はしておらん筈じゃ……。じゃが、これは間違いない。

こ、こ、こ、これをどこで手に入れた? ツキカゲ殿! これはどこにあったのじゃ!」

さっきまで、叙事詩級を見ても全く動じなかったワグナーさんは、信じられない物を見たような凄い驚きと興奮を見せた。

こんなに凄いワインだったのか……

「これは、この娘……アキラの持ち物ですよ。どうします? ワグナーさん」

「ぐぬぬぬ、わ、わしのポリシーを曲げる訳にはいかん!」

と、言いながらもワインを凝視している。

「じゃ、要らないのですね」

アヤカは、ワグナーさんの前に置かれていたワインを掴み、後ろの方へ持って行こうとした。

「ま、まで。要らんとは言っておらん。もちろん、要るに決まっておる!

はあ、お主らには負けたわい。特別に良いじゃろう……ほんとに特別じゃからな」

「本当に良いのですか？撤回は出来ませんよ」

アヤカは念を押す。

「ああ、しかし、条件がある。その魔刀・ナインテイルをわしに譲る事が出来るのなら良いだろう」

「え、こいつをワグナーさんにですか？」

「そうじゃ、その魔刀もちろんこのワインもじゃ…どうじゃ？わしに直して欲しいのじゃろ？その刀を…それとも叙事詩級の方が惜しいか？」

惜しいに決まっている…しかし、夢幻刀は俺にはまだ必要な刀だ。この世界にこれを鍛え直せるのは、この人しかない。

…魔刀は…俺には使えない…。

ここでワグナーさんとコネクションが繋がれば今後はここで修理が出来る。

メリットの方が大きい…：：：：：ような気がする。

「良いです。ナインテイルはワグナーさんにお譲りします！」

「え！？良いの？さすがにこの条件はどうかと思うけど…私は」

「交渉成立じゃな。こいつの修理には4時間ほど掛かる。外で暇を潰しておれ」

と、俺とアヤカは外に追い出された。

「良かったの？ナインテイルと名刀じゃ価値が全く違うのに…」

「良いさ。どうせ、俺には使えないし、他のプレイヤーの交換材料にもなりやしねえ」

叙事詩級以上のアイテムは市場破壊し兼ねない程の価値がある。

おいそれ売る訳にも行かないし、これに匹敵する価値のあるものは同じく叙事詩級ぐらいしかない。

さらに、ダークエルフの刀使いなんているかどうかも分らない。

どうせ、倉庫の肥やしに戻すなら、ワーグナーさんとの交換材料として使っても問題ないだろ。

「まあ、そうね。アキラが良いって言うなら、もう私は何も言わないわ。

で、どうする？」

「んーどこかに食堂ぐらいあるだろ…そこで時間潰すか？」

「そこで時間潰すぐらいなら、アビスタトンネルに行かない？」

「アビスタトンネル？」

「そ、アビスタ内にあるダンジョンよ。この南アビスタと向こう側の北アビスタが繋がっているわ。

不死系が多いけど…どうする？」

「向こうまでどのくらいかかるんだ？」

「3〜4時間ってところかな。Mobを無視するなら、もっと早く着くけど…」

「んー、じゃ、ダンジョンの途中まで行って引き返すか…」

「そうね。それが良いかも」

・
・
・
・
・

アビスタトンネルに行く途中に聞いた話だが、アビスタトンネルは
改変前からあったそうだ。

クエスト終盤で、要塞都市⇒アビスタトンネル⇒南アビスタ（クエ
スト専用の街）を経由して

ワグナーさんに会ったらしい。

アビスタトンネル南アビスタ側入り口にボス級のMobがいたら
しいが、見た感じいなさそうだな。

「ここが、アビスタトンネルか…」

「そ、昔は直線のトンネルだったらしいのだけど…。

500年ほど前に落盤事故が多発した結果、不死系のMobが蔓延
したっていう話よ…

クエストによれば。

脆い岩盤を避けて横道作ったせいで、すごい入り組んだトンネルに
なったみたい。

まあ、それでも先人が正規ルートに松明置いてくれてるみたいだか
ら迷いはしないと思うけど」

・
・
・

俺はアヤカと会話しながらトンネルに入った。

中は意外と広い横幅3～5mと均一ではなかったが、十分戦闘が出来る広さだ。

等間隔で松明が掛けられており、この通りに進めば北アビスタへ行ける。

「出現するMobは大体Lvが20～25よ。高くてもLv30あるかないか。

アキラなら余裕だと思うけど油断しないでね」

最初に中で遭遇したのは5体のスケルトンだった。

俺は目に入った瞬間、中位法術で不死系に特効効果のある【レクイエム】を唱えると、一瞬で灰に返った。

次に遭遇したのがブラインバットいわゆるコウモリとスケルトンの混合パーティだった。

スケルトンは俺がコウモリはアヤカが仕留め、これもほとんど遭遇してすぐに終わらせた。

その後も、約20近いMobパーティを難なく狩り続けた後、アヤカが何かを思い出した。

「あ、言うの忘れていた…というより、すっかり忘れていた事なんだけど…」

スケルトンとブラインバットをそれぞれ100体狩ると、エリアボスみたいな特殊なMob出現するから気をつけてね。

ちなみにスケルトンの方はもうすぐ出ると思う。【レクイエム】で一撃死しないから…」

アヤカによると南アビスタに着くまで、スケルトンのエリアボスには2回、コウモリのエリアボスには1回遭遇しているらしい。

まあ、今回は途中で引き返しているしコウモリは精々60体ほどしか狩っていなかった。

「はあ！？【レクイエム】で一撃死しないのか？」

「そ、ダメージはそこそこ与えられると思うけど、攻撃魔法を当てた方が有効だと思う。」

それと、倒れてもまた生き返るから：対処法は木っ端微塵か【ターンソウル】」

アヤカの場合は、神弓での木っ端微塵を選んだそうだ。

「【ターンソウル】なら使える問題ない」

本来、俺の法力なら中位が限界だが、種族属性のお陰で【ターンソウル】のような上位もなんとか使える。

そう言っている間に、またMobパーティに遭遇した。

スケルトン3匹、俺はすぐに【レクイエム】を唱え排除した。

すると、進行方向の向こう側から何やら巨大な影が動いたのが見えた。

しばらくして、壁に架かっていた松明の灯りに照らされて巨大な影の正体が映し出された。

言ってみれば、巨大なスケルトン：手には巨大な剣を持っている。

刃こぼれがかなり酷いを見ると刃物というより鈍器に近いかもしれない。

「スケルトンキング：。それと後ろに従えてるのはスケルトンナイトよ。」

ナイトの方も【レクイエム】が効かないけど、【ターンソウル】は必要ないわ」

エリアボスであるキング1体に、取り巻きであるナイト6体という訳か・・・

「例の如く、私は手を出さないからね」

「了解。龍神メシアの名の下に、神に仇成す亡者の魂よ、我が神の槍により裁きを下さん！ホーリーランス！」

法術の中で数少ない攻撃魔法の1つで、直線上にいる敵性に対してダメージを与える中位法術だ。
さらに、不死に対して2倍の効果があるオマケ付きだ。

俺は、【ホーリーランス】をキングとその後ろにいるナイト2体を巻き込むように放つ。

すると、キングは仰け反りナイトは大ダメージを食らい1体は消滅、もう1体は後ろに吹き飛んだ。

しばらく、キングと吹っ飛んだナイトは攻撃してこないだろう。
なら、今こちらに迫ってくるナイト4体を相手にしよう。

「女神ヴィーナスの名の下に、現世に彷徨いし命亡き者に安らぎを、慈悲なる鎮魂歌！レクイエム！」

ナイト4体には、大したダメージが入っていなかったが動きが止まった。

十字隊形で迫っていたので、真ん中を狙ってホーリーランス】を唱えた。

至近距離で食らった1体と後ろの1体は消滅し、両端の2体は余波で吹き飛び壁に激突し

幾つかの骨パーツを散らした。

それでも立ち上がって来たので、激突のダメージが残っている間に

【レクイエム】を放って止めを差した。

残るはキングとナイト1体…。

良く見ると、右上の壁が火花を散らしていた…。

俺は危険を察知し後ろへ跳ぶと、今まで居た辺りにキングの剣が通過していった。

キングはそのまま切り返す体勢になったのを見計らって地属性魔術【アーススパイク】を俺と剣の間に出るように放つ。

岩の槍が丁度出現したのと同時にキングの剣が返ってきて攻撃を防いだ。

良い感じに剣が岩にめり込み抜けなくなってたのでチャンスと見て俺はまた【ホーリーランス】を唱える準備をした。

「龍神メシアの名の下に、神に仇成す亡者のも…!？」

詠唱に集中し過ぎて、キングが剣を手放していた事に俺は気付いていなかった。

キングの足が俺の真上に来た事で出来た影により俺は気付いてバックステップをしたが少し遅かった。

ステップした事と足に弾き飛ばされた事が重なり、結構な距離を吹き飛ばされた。

「あぐっ…」

俺の体は後方にあった壁にまで吹き飛び激突した。

視界が歪んだが、赤くはなっておらず瀕死だけは免れた。

俺は懐からHP・MP回復ポーションを取り出し一気に2つとも飲み干す。

ただでさえ、美味しいには程遠いのに2つだと色んな意味でヤバイ…。

混ぜるな危険とか書いてないよな？

ま、まあ、それは置いといて、俺は今使える最大級の法術でケリをつけようと思う。

まずは、自己バフで法力強化だ。

「主神ガディオスの名の下に、我、眠る隠されし力の開放を願う、我が欲するは魔なる力！ハイマジック！」

まずは、これで自身の法力を強化…。

念のために言っておくと、これは法力だけでなく魔力や霊力や神力などの魔法全般を底上げする魔法だ。

大体、現能力の+20%と言ったところだ。ついでに言うとな能力値の大小によって効果は変わらないが持続時間が増える。

ちなみに、現在の俺の能力から言えば、おそらく20分〜30分だろう。

習得してから初めて使ったので正確な時間は分らない。

「女神ヴィーナスの名の下に、現世に彷徨いし命亡き者に安らぎを、慈悲なる鎮魂歌！レクイエム！」

そして、迫ってくるキングの足止めのために、また【レクイエム】を使う。

キングも大分ダメージを負っているようで、今度は【レクイエム】で肩膝を付いた。

これは行けそうだ…。

「龍神メシアの名の下に、神に仇成す亡者の魂よ、我が神の槍により裁きを下さん！ホーリーランス！」

先ほどの【ホーリーランス】より2割増のサイズの槍が出現し、キングを貫いた。

もし、法力がカンスト近くになれば【ホーリーランス】は槍からレーザーに進化するかも知れないな。

俺の知り合いに法術師がいなかったから、どうなるのか少し楽しみが増えた気がする。

キングの骨が関節部からバラバラになり、床へ散乱したのを確認し、次の法術で止めを差す。

「主神ガディオスの名の下に、現世に止まりし命を繋ぐ、彷徨える命は来世へ送る、神の慈愛は命を救う！ターンソウル！」

キングの骨は一瞬光り輝き灰となり、どこからか吹く風に乗りどこかへ消えていった。

ターンソウルとは、基本法術系統の最上位法術に位置する魔法だ。あくまでも基本なので治癒法術や強化法術に位置する上位法術はこれよりもっと難易度が高い。

効果は、死亡した者を蘇らせるのだが、死後硬直前の状態に限る。所謂、死亡してから時間の経った者の蘇生は不可能という事だ。

それと、今回のように【レクイエム】があまり効かない不死への対策ってところだ…。

【ターンソウル】のお陰で戦争時に死亡とカウントされた者がかなり少ない。

戦争開始前、部隊長に選ばれた者に死亡した者をすぐさま野戦病院に送るアイテムが配布される。

ただ、死亡した者が全くないという訳ではなく、隊から放れた者や撤退戦では死亡する事が多い。

ちなみに、E/Oの世界では死亡⇨キャラロスだ。

キャラロスした場合は、子供キャラが居れば繰り上げ操作する事になる。

年齢が15歳未満の場合、強制的に15歳へ変更される。

いない場合は、養子というシステムで補間されるが【血の記憶】が継承されない。

と、長々と説明している間に、トンネル入り口まで戻って来たな。

丁度、良い感じの時間だ。

このまま、ワグナーさんのところへ行くかな。

ワグナー邸の扉を叩き中に入ると、丁度、夢幻刀を鞘へ納めている所だった。

「丁度良い時に来寄ったな…。ほれ、修理完了じゃ」

ワグナーさんは俺に刀を渡す。

「視認出来なくなるまで薄くしたオリハルコンを修理するのは初めてだったが、良い経験になったわい。

ほんと、この刀は良いモノじゃな」

と、ワグナーさんは満足した表情で話した。

「おおと、そうじゃそうじゃ。ほれ、修理代のお釣りじゃ。受け取れ」

と、後方にあった剣立ての中から何やら武器を1本見繕って俺に投げてきた。

「え、お釣り？」

投げてきた武器を受け取る。

「魔刀とあの酒を足せば、伝説級の武器より価値がある上に頂戴しておるからのお。
遠慮せずに受け取れ。どうせ使えんしのお」

え、使えないの？

俺は、渡された武器（…刀にしてはかなり長いが…）目を凝らし分析した。

すると、俺の目に信じられない数値が飛び込んできた。

◆冥刀・闇焰 やみほむら

ベース…なし

生産者…不明

耐久…???／????

攻撃力…?????

必要能力…不明

備考…一度限りの封印（鞘なし効果、魔力－800、常に装備者へ炎ダメージ9999）※封印状態

神話級効果、対神特効、耐炎効果無視、炎によるダメージ追加＋9999、禁呪ワンスペル発動。

冥刀効果、防御力無視、クリティカル率＋100%、クリティカルダメージ＋100%、

封印魔法…【永遠なる闇に潜む煉獄の焰】

生産者コメント…全テヲ焼キ尽クス冥界ノ黒キ炎

封印者コメント…鞘を見付けるまで、絶対に封印を解くな

な、なんだ…???とか9999ってのは！

いや、それ以上に神話級？聞いた事がないぞ。

それはまだ良い、封印者コメント…絶対に封印を解くなだって！？

「あ、あの…。これは何ですか？恐ろしい数字とコメントが付いているのですが…」

数字だけ見れば伝説級がおもちゃに見える…チートか？これ…。

「見ての通りじゃが、おかしいところでもあったかいのお？」

「いや、全てがおかしいですよ」

装備者へ9999のダメージとか禁呪をワンスペルで発動出来るとか…必要能力さえ明記されていない事とか。

「それに気になる事が、この刀身を包んでいる布はなんですか？なにか文字らしきものもが書かれていますか…」

「それは、封印じゃよ。それは言わば抜き身の刀じゃからな。危険なんじゃよ。

死にたくなければ【鞘】を見付けるまで決して使おうとするんじゃないぞ。

使えば、鞘なし効果に書いておる事が起こるからの」

抜き身？鞘がない…？

「では、鞘があって完成品って事ですか？」

「まあ、その状態でも完成品なのだろうが、焼け死にたくはないじやろ？」

予想に過ぎないが、この刀を使わせない様に鞘を隠したのだと思うのじゃ。

恐らく、封印した者か創った者のどちらかが…」

「では、その鞘ってのはどこにあるのです？」

「知らん。知ってたらその状態ではないわ」

「それは、そうですね」

「簡単には見付からんじやろ…。

もし、見付ける事が出来れば伝説級とは比較にならん程の強力な武器なのは間違いないじやろ？」

「はい、そうですね。では、有難く頂戴します」

改めて長刀を見る…俺の背丈より長くないか…？

「話は付いたみたいだし、私達はもう行きますね。

今日は有難うございました。失礼します」

「おう、また修理が必要なら2人とも遠慮せずに来るんじやぞ」

ワグナーさんは、ドラゴンブレスを片手に持ち、手を振って見送った。

前へ振り返る直前、栓を開けていたのが見えた。

俺は、長刀を背負い横目に見ながら街の出口を目指す。

対神特効、これの言う神とは何だろう。

もし、神Ⅱ四神の事ならヴィーナスに対抗出来るかも知れないな…。

と、俺は妄想めいた事を思い浮かべていた。

第14話【神話】（後書き）

どうだったでしょうか。

戦闘の表現が上手く書けてませんね。

2章が終わったら、最初から通して修正していこうと思います。

第15話【狙撃】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りはご容赦願います。
今回は少し長いかもしれません。

第15話【狙撃】

俺達2人は、南アビスタから帰るついでにギルドの出張所で何か依頼がないか寄ってみた。

良い忘れていたが、俺の本拠地マイハウスがある都市には傭兵ギルドのノースブレイ支部があり、それ以外の都市（王都を含む）には出張所…所謂、窓口と掲示板のみの簡易店舗しかない。

ここでは主に依頼の受注と支払いしか出来ず、賞金首関連は全て支部で行われる。

依頼と違い、賞金首の金額が桁違いに多く出張所では払いきれない為である。

依頼書が貼ってある掲示板には目ぼしい物がなかったので、直接職員に聞いているところだ。

「んゝ残念ながらですね。昼頃、街道付近に出没していたオーガが討伐されましたし…」

来る時に倒したオーガの事だな。

「そうですか…」

「要塞都市方面なら幾つかありますが、どうします？」

と、職員は依頼書を3枚、目の前に出した。

「1枚目は商隊の護衛です。今要塞都市方面が少し物騒でして…」

商隊の護衛か：基本、馬車での移動となりそうだし楽が出来るそうだな。

「2枚目は、シーウルフの討伐ですね。海に隠れる習性があるので少々厄介ですね」

シーウルフか：あまり戦った事はないが、見つけるのも戦うのも厄介な相手だったのは覚えている。

「3枚目は……こちらもあり情報がないのですが、狙撃手の排除という依頼があります」

「どういった狙撃手ですか？」

「実は誰も姿を見ていないのです……。狙撃された方は全員亡くなっておりますし……」

ただ、得物は銃ではなく弓だという事は分っています。

それと、山側から無差別に狙撃していると言う事ぐらいしか現在は分っていません」

「山側というと……山から何ですか？街道沿いの林からですか？」

「わかりません。被害者に傭兵も含まれていますので街道近くではなく林奥か山でしょうね」

「ふうむ」

「3枚ご紹介させて頂きましたが：恐らく最後の3枚目を解決しない限り1枚目も2枚目も簡単には出来ないでしょう」

「ですね。護衛中や討伐中に狙撃されたら洒落にならないですものね。少し連れの者と相談しても良いですか？」

「ええ、構いませんよ」

俺は賞金首リストを眺めていたアヤカに相談した。

「ああ、これか」

「知っていたのか？」

「ええ、実はアキラと別れた後に受けようと思っていたのよねえ。どこから撃たれたかも分らない程の弓使い…興味があるわね」

「そうか、じゃあ俺は受けない方が良いな…このまま直帰しよう」

「いえ、私が受けるわ。折角、アビスタまで来たしね」

「そうか、分った」

「じゃ、受けてくるわね」

アヤカは出張所のカウンターで依頼を受ける旨を伝えた後、戻って来た。

「行きましようか。まずは北アビスタに移動よ。今回はトンネルを使わず山越えルートで行くわ」

「え、山越えルートなんてあるのか？」

「ええ、ただし徒歩だと6時間から8時間かかるから馬車で移動する事にするわ」

「馬車か…」

「ええ、北まで直行便だから大体2時間ほどで着くと思う。ただし、乗り心地は最悪だけどね」

「何でだ？」

「山越えルートにもMobが出るのよ。しかも厄介な事に大型の有翼Mobで魔法まで使用するのよ。道幅が広いから、かなりスピードを出して駆け抜ける感じよ。風景を楽しむ余裕なんてゼロね」

山越えと言っても山頂まで上るのではなくて、五合目まで上った後は、谷を抜ける感じで駆け抜けまた下って行く感じだとか…

「山を越えて北アビスタに着いたら、そこで宿を取りましょう。多分、夜になってるだろうしね」

北のアビスタは交易街としても中々盛んで南よりも良い宿屋が何軒かあるらしい。

・
・
・
・
・
・

で、今、山越えの馬車の中にいる。
聞いていた以上に最悪な乗り心地だ。

幸いな事に客は俺達2人しかおらず、俺の醜態を他人に見せる事はなかった。

ぶっちゃけ吐きそう…。

なんで、アヤカは平気なんだ？

「ねえ、アキラ」

「ん……おえ…」

「吐くならあっちを向いてね…。

まあ、それは置いといて、ワグナーさんから貰った刀見せて貰って良い？」

「ん、かつ……て、に、見t r yうおえ!!」

俺は、アヤカにあの刀を渡そうとしたが…やばい、アレが喉から込み上げて来た。

両手で口元を塞ぐ…。

俺の手から落ちた刀をアヤカは受け取った。

「んぐっ…」

ぶち撒けそうになったアレを飲み込む。

アヤカは、そんな俺に気付いていなかったようだ…。

「な、なにコレ!？」

あの出鱈目な数値とコメントを見て驚愕しているのだろうが、俺は今それ所ではない。

「…………魔力ー800、常に装備者へダメージ？
神話級って何よ…それに禁呪ワンスペル発動!？」

俺も似たような所で驚いたな…。

それよりも、飲んだアレが嗅覚を刺激し涙が出てきた。

「鞆がどうか話していたのは、これかあ…。
で、アキラは【鞆】を探す旅をするのよね？」

アヤカが俺に何かを聞いてきているが、またアレが込み上がってきて内容を把握できなかった。

「…つごく…うえ…で、何か言った？」

もう、限界だ。飲んでも飲んでもアレが…(自主規制

「……………いえ、着いてからで良いわ」

俺の行為を目撃し、呆然とした後呆れたように言った。

・ ・ ・ ・ ・

そして、北アビスタに着いた。

馬車内にアレをぶち撒ける最悪の事態だけは何とか防いだが疲れた。
俺はフラフラになりながら馬車から降りる。

「じゃあ、宿を探しましょうか…」

「…だ、な」

北アビスタ：賑やかな街だな…。南とは正反対な雰囲気だ。

街灯が5m置きに設置されてある上に道沿いにある店から漏れる光が町全体を明るく照らしていた。

南にも街灯があったが確か10～15m置きぐらいだったし、店もそれなりにあったが夜も赤々と付けているような所はなかった。

簡単に言えば、北は歓楽街、南は住宅街って感じだな。

北は漁業の街と聞いていたのだが、こういう事だろう。

「なあ、アヤカ。ここって漁業の街じゃないのか？」

「ええ、そうよ」

と、視線を左上に向けたので、俺はそっちを見た。

すると、今いる場所から少し離れた高台にポツポツと小さな灯りが見えた。

「あそこが漁師達の町よ…。副業でこの歓楽街の経営もしているみたいね」

なるほど、そういう事か…漁師達が街から追いやられたのかと思った。

今、俺達が歩いている通りは街の中でも特に賑やかな所で、要塞都市方面には交易所やら土産物を扱う店が多い。

奥に行けば行く程、空気が変わってきて酒場や賭博場などの娯楽施設が多くなる。

その中に宿屋も数軒混ざっている感じた。

ちなみに、賭博場は、犬・鼠・豚などを競わせるレースが主で直接金銭を賭けるようなものはない。

と言っても、裏に行けばそういう施設は幾らでもあるが、この街に限っての話ではない…。

「お、アヤカ。あそこ宿屋っぽいぞ」

10mほど先に宿屋の看板が立っている店舗があった。

他の店舗に隠れるように建っているが、返ってこっちの方が良い感じがする。

「ええ、そこにしましょう」

俺達が入った宿は、この街にはあまりない地味目の宿であったが、寝て泊まる分には十分なところだった。

「お食事の方はどうなされますか？こちらで粗食ではありますがご用意出来ます」

「ええ、お願いします」

「では、こちらへ」

案内された食堂は、ローグライト家の食堂よりも狭く円卓が2台あり、それぞれ4人ずつ座れる感じだった。

俺達は手前の円卓へ着く。

「ねえ、馬車の中で一度聞いた事なんだけど…まあ、アキラはそれどころでなく聞いてないと思うけど…」

「ん？」

何か言ってたかな？

「アキラはこの後【鞆】を見付ける旅をするのよね？」

「ああ、そうだな。でもまだ先だな。この国でやる事があるし」

「やる事？」

「ああ、前に言ったと思うが闇の森へ行って精霊を見つけないとな」

「そういえば、言っていたわね」

「まだ、このレベルで十分と言えなし、せめてレベル50近くにはしたい」

「レベル50か…後、どのくらいなの？」

「えーと、あと8ぐらいだが…まあ、詳細に言えば腕力と脚力と敏捷あたりを重点的に上げたいな」

「夢幻刀の耐久が減ってきた辺りから魔法重視に重点置いてたから、そっち系は結構育っているしな。そろそろ、近接の方も鍛えようかと思う」

「うん、良いんじゃないかな。具体的にどうするの？」

「確か、要塞都市から北西に船で向かった先に海賊の島がなかった

か？」

「…あるわね。」

「あそこで夢幻刀の耐久が赤くなるまで狩り続ける。その後、またワグナーさんの所で刀を直した後、闇の森の攻略へ向かう」

「異議はないわ。この辺でレベル50まで上げれるのって海賊だけだものね」

大体、20分ほど席で話していると、女将が料理を運んできた。

「粗食と言っていた割には、すごく美味しそうだね」

「ええ、そうね」

「これは、アビスタ伝統の郷土料理です。アビスタは昔から漁業の街として栄えてきました。その為、多くは魚を中心とした料理なのです」

それらの出された料理を美味しく頂き一息ついたところで女将がまた料理を持ってきた。

「これは、東方の国の料理でサシミと呼ばれているものです。先月、行商をしている方に教えて頂いたのですよ」

「おお、刺身があるのか」

「刺身は久しぶりね…」

ここに閉じ込められてから初めて日本食を食べるな…。
そういえば、醤油とワサビはないのか？

「ところで女将、醤油はないのですか？」

俺が聞きたかった事をアヤカが言ってくれた。

「ショーユ？」

初めて聞く単語なのか？もしかしたら…

「その行商をしている方には、調理法しか教えて貰っていないのですか？」

「え、もしかして、あの黒い液体ですか？」

「多分、それです。刺身はその液体に漬けてから頂くものなんですよ。」

ちなみに、刺身以外に色々な料理に使えますよ」

「ああ、なるほど。だから、そのショーユを売った後、サシミを教えて頂けたんですね」

商売上手だな…その行商…多分、プレイヤーだろうな。

「ところで、ワサビはあったりします？」

「ワサビ？ですか…。いえ、それは知りません」

それは残念…。

ライスのおかわりをした後、刺身を美味しく頂いた。
刺身の魚はバードフィッシュと呼ばれる白身魚で鮭のような味でコ
リコリとした食感だった。

俺はそのまま割り当てられた部屋に向かい、アヤカは醤油を使った
料理の調理法を女将に教えに行った。

・ ・ ・ ・ ・

すでに、俺達は宿から出て北アビスタ東門に来ていた。

本来、ここを通る者は商隊に混じるなどして海路を使い要塞都市へ
向かっているらしい。

その為か、門の所から要塞都市へ向かう街道の先を見たが人っ子1
人いなかった。

恐らく、謎の狙撃手の性だろうな。

中にはそういう事情の知らない商人や腕自慢の傭兵がこの街道を使
っているようだが、尽く狙撃手に殺されている。

「最後の確認よ。私が攻撃、アキラが守備だからね。私達に飛んで
きた矢を斬り落とすだけで良いから…。何度か射ち込まれるとは思
うけど、場所さえ分れば私が仕留めるわ」

「了解」

この誰もいない街道に2人で歩けば嫌と言う程目立つだろうから会わないという事態だけは避けれそうだな。

俺達は周囲を警戒しながら要塞都市へ向けて歩き出した。

途中、シーウルフの死骸やらが傭兵と思わしき死体などが散乱しており、どれも矢が刺さっていた。

「良い腕ね。全て頭部に命中しているわ」

「大丈夫なのか？」

「問題ないわ。逆に言えば頭部の高さに矢が来ると思えば斬り落とし易いでしょ？」

「ああ、確かにそうだな」

俺は、傭兵の首からタグを回収した。

さすがに死体を運ぶ事は出来ないが、少なくともこれで身元が分るだろう。

「アヤカ：気配は感じるか？」

「いえ、でも見られているわね」

「：…そうか」

「もう少し歩きましょうか：…」

・ ・ ・

それから2時間、昼を過ぎた頃、街道の大体3分の2に到達しようかという時、狙撃手が仕掛けてきた。

出来れば、昼飯食った後にしてくれれば良かったのに：

宿を出る時に女将から貰ったオニギリを食べれるのはもう少し後になりそうだ。

ちなみに、オニギリはアヤカが昨日教えたらしい。

鋭い風きり音と共に1本の矢がアヤカに向けて山なりに飛んできた。この角度だと相当遠くから射ているな：

俺はすぐにアヤカの前に出て、飛んできた矢を斬り落とす。

まあ、斬り落とすというより真空波で射ち落としているに近いが：

「大体、南東の方向ね：でも、どこから射ているのかしら：

「取り合えず、山へ向けて射てみては？」

「そうね」

すると、アヤカは神弓を構え、魔法力を指先に集中させていく。

アヤカの動きを察知したのか、また矢が飛んできたが、また斬り落とす。

「まだか？」

と、聞いたと同時にアヤカは光の矢を放つ。

その矢は矢とは思えない軌道を描き、一直線で南東の山頂へ向けて飛んでいく。

2秒経つか経たないかの間に山頂へ着弾？し、爆発のようなモノが輝いた。

「相変わらず、凄い威力だな」

「そう？さっきの速射と貫通を重視した矢だから、もっと魔法力貯めれば山肌を削るくらいの威力になるけど…」

着弾してから、彼は10秒近く経ってるが反撃して来ないな…。
もしかして、当たったのか？

「射て来ないわね。また歩くのでしょうか」

「だな」

1分ほど歩いたところで矢が飛んできた。

今度の矢は全部で5本ほどか、精度に目を瞑って速射してきたか…。
それでも、どれも標的である俺達からほとんど離れていない所に飛んできそうだな。

『居合・死之太刀（対空）』

俺は斜め上に向けて居合をする。

一薙ぎで前方3本の矢を切り返して後方2本の矢を射ち落とした。

射ては切り落とし射返しを数度繰り返した後、かったるくなつたのかアヤカは精度よりも威力を重視する様になり最終的には計8本の光の矢が指先に集まっていた。

「大体、場所が分ったわ。少なく見積もっても山頂付近なのは間違いないよね：適当に炙り出しましょうかねっ！」

アヤカから放たれた8本の光の矢は円状に飛んで行き、数秒後山頂辺りに着弾した。

ここからだとはよく分らないが、大体直径300mほど円で山肌が崩れていった。

いわゆる山滑りってやつか？

恐ろしすぎる…。あの辺って人住んでないよな？

「ん？アヤカあそこ！」

崩れた山肌の瓦礫から這うように人影のようなものが動いた…。

「ええ」

アヤカはまた集中し始める。

「アキラ、私があいつを追い込むから捕まえに行って！」

「了解！俺に当てないでくれよ…」

「分ってるわよ。でも、当たったら事故だからね！」

と、アヤカは第一射を放った。

俺はほぼ同じタイミングで駆け出した。

恐らく、街道沿いの林にはMobがいるだろうが、一気に駆け抜けるのみ…

俺が林を駆けている際、ほぼ5秒置きに光の矢が狙撃手に向けて放

たれていた。

完全に捕捉しているみたいだな。

む、前にブラッディウルフの群れが…

『居合・壺之太刀』

行く手を阻んでいた数匹だけ切り伏せ、そのまま駆け抜ける。

数匹が追いかけてきているが気にしないでおう。

何れ諦めるだろう。

山麓へ着くまでにブラッディウルフの群れ2、ボアベア3匹に出会ったが一太刀当ててそのまま駆け抜けた。

そして、アヤカは俺が着くまでの間、計20本近く光の矢を射ていた。

さて、ここからが本番だ…。今度は山を駆け登らないといけない。と言っても、リアルみたいに走って登るのではなく、ほとんどはジャンプで登っていく。

ここで脚力がものを言うのだ。

ちなみに、俺の脚力は120に近いので、大体12mの高さを跳び越えるという訳だ。

捕捉ではあるが、走った際の歩幅もこの場合12mになる。

そして、その1歩毎にSPが1減る仕組みだ。その為、ジャンプも走る事も永遠には出来ないのだ。

この世界の人々はプレイヤー・NPC問わずリアルの人間よりも身体能力が高く設定されている。

どの種族の15歳のキャラでも初期能力が8以下にはならないようになっている。

簡単に言えば、走った際の歩幅が80cm以下にはならないという事だな。

ついでに言うジャンプと走るは、SPと脚力と敏捷の3種を普通に歩くよりも大きく成長する。

そうこうしている内にアヤカの放つ矢の着弾する音が大きくなってきた。

そろそろ山頂か…。

すると、前方20m先で着弾音と爆発と共に人影が吹っ飛んでいくのが見えた。

ここで走る速度を落として捕まえるタイミングを計る。

まあ、その間、狙撃手はアヤカの矢に弄ばれているのだが…。直撃しないギリギリで当てている…考えただけで恐ろしいな…。

狙撃手が俺の前方5mの辺りへ落ちたので、急いで駆け寄りアヤカへ合図を送った。

アヤカが弓の構えを解いたのを見て、狙撃手の方を向いた。

「……ご愁傷様…」

狙撃手は死んではいなかったがボロボロの状態で、裂傷・打撲・骨折・火傷？ありとあらゆる怪我を負っていた。

俺はリュックに入れていたロープを取り出し、奴の腕を腰の後ろにした後にきつく縛った。

まあ、この状態で抵抗できるとは思えないが用心の為だ。

捕捉しておくが、このロープは捕縛用ではないからな。

ちなみに、狙撃手はダークエルフのプレイヤーの様だ。ボロボロの状態で判別し難いが肌が黒いし間違いないだろう。

この状態でなければ、さぞかし美青年であろうに…。

数分後、アヤカがこちらへ合流した。

「あら、やり過ぎたかしら？」

ああ、そうだな。

「ところで、こいつの得物はどこだ？」

周りを見渡すが近くにはなさそうだった。

得物と矢筒を回収しないと、こいつが狙撃手なのか騎士は判断できないだろう。

「落ちていたとしたら、あの瓦礫の中だろうな……」

俺は直径300mほど崩れた山肌を見下ろす……

「凄いわね……。誰がやったのかしら」

「お前だ」

「冗談よ……。さて、探しましょうか……」

「ああ」

その後、1時間ほど掛けてやっと見つける事が出来た。

と言っても、弓は半分に折れ、矢筒の中には矢が入っていない状態で矢はあちこちに散乱状態だったが何とか数本回収できた。

ついでに、弓を分析もとい鑑定して見ると、結構良い品だった。

聖弓・シューティングスター

ベース…スナイプボウ

生産者…なし

耐久…0／500

攻撃力…600

必要能力…腕力160、体力130、器用210、視力240、
備考…唯一級効果、射程+20%、命中+30%

聖弓効果、クリティカル率+30%、狙撃+Lv1

生産者コメント…放たれる矢は流星の如き聖なる弓

壊れてしまったが、これが良い弓なのは間違いない。

プレイヤー生産品ではない事から見ても価値は相当あるな。

狙撃+Lv1ってのは、弓術の流派スキルである「狙撃」のスキル
レベルを1上げるという効果だな。

大体、この必要能力だとレベル80〜90中盤といったところだろう。

ちなみに耐久が0になったアイテムは、腕利きの職人であろうと完全に元へ戻す事は出来ない。

0から修理をして見た目が元通りだろうと、最大耐久は半分に減ってしまうのだ。

この場合は250になるという事だな。こうなると元の価値はなくなってしまう。

壊れるまで500本射てる弓と250本射てる弓では随分と価値が違う。

耐久が減る条件は攻撃だけではなく、武器で防御した場合も減る。
そのアイテムに設定された、武器なら攻撃力・防具なら防御力以上のダメージを食らうと耐久が1減るのだ。

設定された数値の倍食らうと耐久は2、3倍食らうと3減る仕組み

になっている。

さて、アヤカの攻撃で何倍のダメージを食らったのだろうか…。

と、説明している間に、要塞都市西門に着いたな…。

西門から要塞都市の中に入ってすぐの駐屯所へ向かう。

駐屯所の前にいた騎士に話を通し、責任者を呼んで貰う。
すると、しばらくして中から団長らしき騎士が出てきた。

「狙撃手の排除”の依頼で犯人を捕まえ連れて来ました」

「ほう、それは真か？」

「ええ、これが証拠のアイテムよ。被害者に刺さっていた矢と照合すれば分ると思うわ」

団員の騎士は弓と矢（矢筒）を受け取り駐屯所の中へ入っていった。
犯人も俺達の前へ突き出し騎士に渡した…。

「あれ？団長…」

「ん？どうした」

「こいつ、確か賞金首ですよ…」

「ほう…」

「え、でも確か賞金首リストに、こいつは張って無かったわよ」

「確か、名前はアレックスⅡナインライドで、ユーフォリア大陸で

指名手配されていた筈です」

ユーフォリア大陸は、このオーランド大陸の北にある大陸だ。
リアルで言えばユーラシア大陸の事だな。

「む、奴はハイランド王国に潜伏している筈ではないのか？」

ハイランド王国は、大体イスラエル・サウジアラビア辺りからトルコ・イラン辺りまでの領地を有している国だ。

ノースブレイ王国の宿敵とも言える国で、長年資源を巡って戦争をしている。

と言っても、ハイランド王国が一方的に侵略しているだけだが……。今は表向き和平を結び同盟国となっているが、列強の時代になればまた攻めて来るのは間違いない。

ちなみに、ヴォルトラ”八迅”が生まれた戦争イベントの内容は、戦後の時代に宣戦布告なしでハイランド王国がノースブレイ王国に侵略してきたという設定だ。

プレイヤーはハイランド王国かノースブレイ王国かのどちらかの陣営を選べる。

ハイランド王国が圧倒的有利な状況かつノースブレイ王国の5倍近い兵力を持って進軍という構図だった。

功績は欲しいが死にたくない連中がハイランドへ、功績と力試しがしたい連中はノースブレイへという流れだった。

まあ、八人の廃人プレイヤーのせいでノースブレイ王国が圧倒的な勝利をしたのだけど。

企画したGMが、かなり驚いていたのを今でも覚えている。

「その筈なんです……。あ、基本的に掲示板の張り紙は、我が国に

入国したと確認された者のみなんですよ。そうでないと、掲示板から張り紙が溢れ返りますからね」

「なるほど、そういう事か…」

改変前は、確か地域別で検索して見ただけど、改変後は、現在いる地域のみしか見れない訳か…。
変な所でリアルにしゃがって…。

「まあ、良い。矢の照合と奴の身元がハッキリしたらギルドの方に連絡しておくが…この出張所で良いのか？それとも支部の方が良いか？」

「えーと、支部の方でお願いします」

「了解した」

俺達は駐屯所を後にしギルド出張所へ向かった。

街道を通っている最中に回収したタグを届ける為と、報告をする為に…。

・

「これが、傭兵タグです。全部で6人分あります」

俺は職員に傭兵タグを渡し、遺体のあった場所を地図で示した。

「わざわざ、ありがとうございます」

「それと、途中、シーウルフが弓で狙撃され死んでいるのも見ました。

恐らくですが、狙撃手に暇つぶしで殺されたものと思います」

「そうですか。では、貴方達の報酬にその分を上乗せして貰うように手配して置きますね」

「あ、いや。そういう風に言った訳ではないのですが…」

「でも、貴方達が狙撃手を討伐したのですよね？でしたら、問題ないですよ」

そう…なのか？

「ああ、そうそう。狙撃手とシーウルフの依頼以外にもう1つあったでしょ？あの依頼なんですけど、取り下げられました。今朝、海路を使ってこの要塞都市へ来たみたいです」

「そうなんですか…残念」

俺達は、一連の報告が終わったので、このまま宿屋へ向かった。

ここは、北アビスタと違って娯楽施設が皆無なので宿屋も容易く発見できた。

まあ、宿屋の質はかなり下がるのだけど…。

メシは付かないし部屋はベットとランプがあるだけという簡素にも程があるだろう的な宿ばかりなのだ。

まあ、寝られれば文句はないのだけどね。

第15話【狙撃】（後書き）

どうだったでしょうか。

名前付きキャラが出てきましたが、彼はここだけの登場です。

閑話【現状】（前書き）

誤字・脱字、表現の誤りはご容赦願います。

前話、レベルについて出たので、少し成長したアキラの現状確認の話になります。

話というか説明みたいになりましたが：

閑話【現状】

宿で朝を迎えた訳だが、少し早く起きすぎたみたいだった。

外から小鳥の囀りしか聞こえず、街の活気などは静かなままだった。ここは、特に職人が多く住む街なので、普段は凄く騒がしく昼寝などは出来ないほどだ。

ユギルス島：通称、海賊島と呼ばれる所へ今日は向かう訳だが、アヤカもまだ起きていないようだし取り合えず現状確認でもすると思う。

「メニュー：スタータス確認：」

名前Ⅱ苗字…アキラⅡローグライト

通名…

年齢…15

性別…女

種族…ハーフエルフ※

属性…光・炎

主職業…傭兵

副職業…

役割…剣士

名声…120

序列…

ランク…39001038

賞金額…

傭兵登録する前から変わった所と言えば、やはりランクだろう…。
これは、傭兵ランキングだ…。

簡単に言えば、「貴方は傭兵の中で39001038番目に稼いでいます」という事だ。

今、どのくらいまで傭兵が増えたかは分らないが、少なくとも登録してから俺は5000番ぐらいランクが上がっている事になる。

まあ、登録して1度も稼がないままの奴やら肩書きだけ傭兵なんていう奴もいるぐらいだから、しばらくは簡単にランクが上がる筈だ。

能力は軒並み上がっているが、レベル1の頃からほとんど変わっていない項目がある。

指揮・突破・妨害のこの3項目は、戦争または大規模な戦闘に関わらないと上がる事はほとんどない。

運は、急所への攻撃か賭博で上がる。

今はレベルが低いという事もあって、急所攻撃を意識していないが、レベルが上がれば敵が固い防具などを着る様になると意識しないとやっていけないだろう。

そうだな、今回は急所への攻撃も意識して狩ってみるか…。

能力のボーナスもかなり変動しているが、これは後で説明する才能スキルに起因している。

ちなみに、ほぼ満遍なく能力が上がっている状態で、まだレベル42というのは異常と言えるな。

これだけの能力が上がっていると本来ならレベル60前半だろう。古代エルフ族の成長の伸び代はどのくらいあるのか…。

さて次は…

『法術基本知識』↑「法術に関する知識がある」
『精霊基本知識』↑「精霊に関する知識がある」
『神術基本知識』↑「神術に関する知識がある」



【生存】

『気配察知Lv4』↑「40m以内の自分より低レベルの気配を察知できる」

『気配遮断Lv1』↑「100m以内にいる自分より低レベルに対して気配を消せる」

『話術Lv2』↑「商人との売買時6%利益が増す。たまにおまけして貰える」

『野営Lv2』↑「現実時間28分で野営を設置出来る」

『追跡Lv1』↑「小型野獣の足跡を辿り追跡できる」

『分析Lv2』↑「アイテムの鑑定およびキャラのレベルの確認が出来る」

『所持Lv2』↑「体力分までの所持量なら、2歩でSP1消費する」



【生産】

『料理Lv1』↑「過程1回分の加工による料理が出来る」

ってな感じに成長している。

流派スキルは少し成長しているが、他のスキルよりも上がりにくい仕様になっている。

『斬鉄』スキルは以前ブロンズまでだったが今はアイアンまで斬る事が可能になっている。

実は金属製以外には効果がなかったりする。

アイアンと同じ硬さの木製や石製などは斬れないのだ。

『縮地』は、1 mから3 mに伸びただけだな。

以前にはなかった才能スキルが2つ増えた…。

見て分るように、才能スキルは成長する上での様々なアドバンテージをキャラに与えるスキルだ。

これがあるのとないとでは能力値に大きな差が出る。

ちなみに、『精霊の加護』はレアスキルだ。普通では滅多に開花しない…。

むしろ、今まで精霊使いどころかエルフでさえプレイしていない俺がこの才能を開花させる確率は本来ならほとんど0%に近い。

古代エルフ母の能力がバケモノでない限りは…。

『精霊の加護』が滅多に開花しない理由として、普通は召喚できる数は1体と決まっているが、

同時召喚数の増加というチート能力（※公式なのでチートではありません）のせいでレアスキルになっている。

噂程度だが、これを習得していたプレイヤーは過去に6人ほどしかいない。まあ、俺が知らないだけかもしれないが…。

で、現在の精霊スキルから見ると一応2体の精霊を同時に召喚できる。

生存スキルも大分増えたな。

『気配遮断』は、あのジョーイシムスや賞金首がよく使うスキルだ。

『野営』だが、このキャラは、まだこのノースブレイから出ていないが世界を旅するようになれば必須と言えるスキルだ。

フィールドで安全にログアウトする為のスキルなのだが、改変後は何故か野営を設置すると安全に就寝する事が出来るようになった。

まあ、それでも完全に安全な訳ではなく、野獣や魔獣は野営を避けるようになるがプレイヤーやNPCは逆に呼び寄せてしまう。その為、街道沿いに集団野営地が作られ、集まった者がお互いに見張りをするという事が自然に生まれた。

『分析』は、Lv1でアイテム鑑定が出来る。Lv1でもかなり有用なのでこれを習得している者は多い。

Lv2になると、Mobのレベルを分析できるようになる。

レベルがもつと上がれば、属性や弱点、Dropアイテムなども分るようになる。

ちなみに、前から所持していたアイテムは分析しなくても内容が分るようになってる。

『追跡』は、まあ素材収集や討伐などで使うスキルなんだけど、小型野獣討伐の依頼を1回程度しかしていないのでレベル1のままで、『所持』に関してだが走った際、本来は1歩でSP1消費のところをレベル2の為、2歩でSP消費になっている。

ついでに、所持量が超えた場合は、1歩でSP2消費する。これは改変前から変わっていない。

今回は狩りに集中する為に、このスキルが活躍する事になる。と言っても、今回もアヤカが同行する為、大活躍という訳でもないが…。

『料理』：炊く、炒める、煮るなどの加工が合計1回の料理なら作れるという事だ…。

簡単に言えば、ライスは作れるがおにぎりは作れないのだ…。丸焼きとかは多分出来る。串刺して焼くだけだろうから…：試していないけど。

で、現在アヤカと共に行動しているせいで、俺が『料理』する機会がない。

この前、アヤカに料理作ろうかと言ったら、素材が勿体無いからと拒否された。

ああ、そうそう。

実は、ザキラ以外に2体契約を終えていたりする。

1体目は、教会の中庭にあった花壇横にひっそりと立っていたのを発見したのだ。

光の精霊ジャックランタン、下位精霊で名前は”ジャック”…まんだな。

容姿は子供ぐらいの背丈で深いローブを被って、右手にカボチャのランタンを持っている。

性格は、物静かで人見知りをするが、やる時はやるといった感じだな。

本体はランタンの方のようでローブを被っている方は顔の部分は暗闇になっていて分らない。

まだ、信頼関係は1段階目な為、暗闇を照らすもしくは魔除け程度
の能力しか発揮していない。

現段階では、野営時の護衛的な役割しか出来ないな。

2体目は、地の精霊ノッカー、下位精霊で名前は”ノックさん”だ。

容姿は、工事帽を被ったちっちゃいおっさんって感じだな。

性格は、お茶目で陽気だ。

こっちも信頼関係は1段階目だ。

直径1mほどの落とし穴を一瞬で出現させる事が出来る。

深さは2mもない為、簡単に抜け出せる。

まあ、一時的に行動を制限するという事は可能だな。

ちなみに、ザキラとの信頼関係はというと、最終段階より1段階前の状態だ。

見た目や口調がかなり変わった。

母のソードレスとよく似ていると言える。

あの特徴的だったリーゼントからオールバックになって、服装も任侠侍風になりイブシ銀が光るナイスガイだ。

得物もドスから直刀：長ドスとも言いうあの武器に変わった。

まあ：見た目はそう見えるというだけで、得物も精霊の一部なのだが…。

俺に対する呼び方も”嬢ちゃん”から”姉御”に変わった。

色々変わったが変わらない所もあり、巨乳派なのは不動のようだ。

かなり頼れる奴になって、背中を預けても申し分ない働きを見せる。夢幻刀の耐久が少なくなってきたからは俺の護衛に役立ってくれた。

精霊の信頼関係と言ったが、全部で5段階ある。

5段階目になると精霊は全ての力を発揮出来るようになる。

下位の精霊と言えど侮れない程の力がある。

まあ、下位だからと言って弱い訳ではない：精霊の位が低いだけなのだ。

俺は今、精霊を同時に2体召喚できる訳だが、精霊同士の相性が良
いみたいで同時に召喚しても3角関係にはならないようだ。

相性についてだが、同属性の精霊の場合は良くない様だ。

装備関係は変わっていないので省略する。

ああ、耐久だけは大幅減っているな…。

出来るだけ回避するようにしているが、何せ紙装甲だからな。

同レベル帯のMobだと一撃食らっただけでHPの半分辺りまで減少する。

龍革使われてなかったか？と思うかもしれないが、あれは急所を守っているに過ぎないのだ。

とまあ、こんなもんだ。

さて、これから行く事になるユギルス島について少し説明しよう。

前述で書いたように、あそこは通称”海賊島”と呼ばれている。勘違いして貰っては困るのだが、島全体が海賊の島という訳ではない。

あの島には街が1つだけ存在する。

その街は自治権を持っており中立地帯のようなところだ。

まあ、その背景には、ノースブレイとハイランドの争いが原因なのだけど…。

ほぼ両国の中間点にありながら、どちらの支配も受けていない。

その為、賞金首や海賊を生業とする者が自然と集まってきているという訳だ。

国ではないので無論、傭兵ギルドの支部や出張所は存在しないし、騎士もない。

あの街では賞金首と傭兵の区別がないのだ。

そして街を守る為なのか、あらゆる争い事を禁止としている。

しかし、街を1歩でも出ると正に無法地帯で弱肉強食を絵に描いたような所になる。

海賊の本拠地や賞金首の家などが街の外にある上に、貧民層（NP C）の小さな町もある。

さらに言えば、これは改変前の状況なのだ…改変後どうなっているか皆目検討も付かない。

街の役割自体は変わっていないと思…いたい。

おっと、アヤカが起きたみたいだ…

では、行くのでしょうか。

閑話【現状】（後書き）

どうだったでしょうか。
次話でまた本編に戻ります。

第16話【海賊】（前書き）

誤字・脱字、表現の誤りはご容赦願います。

第16話【海賊】

今朝、アヤカと共に当分の食料と道具を買い込み、今は船でユルギス島へ向かっている最中だ。

ユルギス島に行くには、海賊船がない時間帯を選ばないといけない。

狙われて危険とかではなく、ノースブレイやハイランドの軍船とドンパチを始めるからだ。

海賊船は、大体深夜に出港し夕方に入港するので朝と昼を安全なのだ。

基本、海賊船は街の港には入港しない。

ユルギス島を拠点としている海賊は街の反対側にある断崖絶壁をくり貫いた専用の港がある。

ちなみに、大きく分けて5つの海賊が存在している。

確か…、海賊の本拠地はインスタントダンジョンになっていたな。

設定では、1つの海賊が100～200人規模で構成されている。

Lv40前半の下っ端の海賊は無限湧きだったな。

下っ端を10人倒す事にLv45～46の少し強い海賊が、さらにその海賊を10人倒すとLv49～50の幹部が出現した筈だ。

幹部を3人倒すと船長のいる大部屋へ通路が開かれた。

確か、船長はLv55～60辺りだった筈だが、改変後どうなるのだろうか。

NPCが改変後プレイヤー同様レベルアップしているという情報もある事から、改変前よりもレベルは上と思っていた方が良いかもしれない。

海賊の本拠地へ行く前にその辺の情報を仕入れるとするかな。

と、そろそろ港に着くな…。

「まずは、宿屋を探しましょうか…」

「そうだな」

港に降り街中に入るとそこは普通の街と違い、空気が濁ったような感じで、あちらこちらから香水とアルコールの臭いが漂っていた。見渡す限り、娼館、酒場、賭博場など普通なら表通りにはないような店ばかりが並んでいた。

改変前もこういう感じではあったのだが、娼館は無かった筈だし、酒場と賭博場は2・3軒ほどしか入れる店がなかった。

街の中にいる人も半分以上は、娼婦を連れた海賊でプレイヤーらしき人影はなかった。

それに、場違いな俺とアヤカをジロジロ見る目が鬱陶しい。

「いよう。お嬢ちゃん達、幾らで出来るんだ？」

俺達を娼婦と勘違いした酔っ払いの海賊が声を掛けてきた。口臭がアルコール臭い…。

「死にたいのですか？」

アヤカがおもむろに弓を構え、酔っ払いの前に突き出した。

「ひよえ〜」

素っ頓狂な声を出し酔っ払いは、一目散に逃げていった。雑魚なのか酔っ払っているからなのか…呆気なさ過ぎる。

でも、さすがに武器を構え続けるのは歩が悪い…。
無駄に敵を作りかねない。

「アヤカ。仕舞った方が良い」

チラ見していた海賊達から殺気というのか悪意のような視線を感じる。

「そうね…」

「お、アレ、宿屋じゃないか？」

これ、営業する気あるのか！？っていうぐらいボロっちい宿屋が数軒先にあるのを見つけた。

「これ…って、宿屋なの？」

「さあ」

俺達は、営業しているのかしていないのか分らない宿屋っぽい店舗の中に入った。

そこには目つきの悪い無愛想なおっさんがカウンターに座り、新聞と思われる紙媒体を見ていた。

「…………泊まりか？」

聞こえる聞こえないか微妙な声で聞いてきた。

「一週間ほど泊まる事は出来ますか？」

取り合えず、一週間泊まる事にして足りなければ延長すれば良いだろう。

「…鍵は、開いている…。好きな部屋を使い…」

え…、開いている？って、鍵を掛ける事が出来ないという事だよな…。

「…金は、チェックアウトする時で良い…」

「わかりました。では、お借りします」

宿屋のおっさんは、少し俺の方を見た後、すぐに新聞へ目を向き直し一切喋らなくなった。

了解という事か…。

用心の為、俺とアヤカは同室に泊まる事にした。

やはり、部屋には鍵らしい物がなかったが、部屋の奥にかなり巨大な宝箱…もとい金庫があった。

貴重品はここへ入れろって事だな。

宝箱ごと盗まれたら意味が無くないか？と思ったが、良く見たら宝箱の底と床が一体になっていて盗み出せないようになっていた。

さらに、錠前もかなり特殊で、ピンキングツール程度では簡単に開かないような構造になっている。

ご丁寧に施錠の魔法も掛けられている。

ちなみに、この魔法は法術に分類されるが、改変前はなかった魔法だ。

恐らく、神話級などと同じで、データにはあったが結局は実装されなかった魔法ではないかと思う。

改変後そういうのが結構あるらしく、酒場での情報交換で色々報告

が上がっていた。

この改変後のE／Oこそが本来の姿なのではないかという噂があったりする。

単なる噂と思いたいな。

まあ、それは置いていて…、これなら荷物を預けても安心できるな。取り合えず、3日分の食料と道具を除いて、後は宝箱に預けた。ちなみに、食料などは1週間分持ってきている。

足りなくなれば、この街で購入するか、酒場で食事する事になっている。

俺とアヤカは荷物を持ち、宿屋を出て今、街の出口に立っている。

用心の為、俺がザキラとノックさんを召喚し、アヤカは水華という名前の上位精霊ウンディーネを召喚した。

アヤカは精霊使いという訳ではないが、一通りの精霊を召喚できる。特に四精霊と呼ばれている炎・水・地・風の精霊は上位から下位まで揃えているようだ。

計3体の精霊を護衛に付け、俺達は街から離れて行く。

ユルギスの街と海賊達の本拠地の間には、小高い丘が幾つか聳え立っている。

その1つの頂上で野営を作ろうと思う。

見晴らしが良いから防犯には打って付けだろう。

・
・
・
・

・
・
そして、5つの海賊の内の1つで、蒼の海賊と呼ばれている奴等の本拠地が見下ろせる丘の上に野営を設置した。

基本的にアヤカと精霊達はこの野営に止まり、俺はその麓で下っ端海賊を狩り続ける予定だ。

今日は無理だが、折を見て本拠地にも潜入するつもりだ。

ちなみに、野営地にはテントと焚き火とイス代わりの岩を置いてある。

「さて、俺は行くとするよ」

「気をつけてね」

「ああ」

・
・
・
・
俺は丘を下り、本拠地の入り口で見張りをしている海賊に目を付ける。

足元にあった小石を拾い、その海賊2人に投げる。

「いてえ、どこのどいつだ！」

「こっち、こっち」

2人は周りを見渡した後、丘の麓で手を振っている俺を見付ける。

「てめえ」

よし、2人連れた…。次は本拠地の周りを巡回している海賊もいる筈なので、そいつらも巻き込もう。

今回は、集団戦と出来るだけ急所攻撃を意識して戦っていこうと思う。

お、30m先に巡回中の海賊を発見。

「てめえ、待ちやがれ！」

後ろの方で息切れ気味の海賊が追いかけているが気にしない。体力のない奴等だな。

勢いを落とさないまま、巡回中の海賊達の脇を通り過ぎる。

何事かよく分っていない彼らは反応できなかったようだが、追いかけていた海賊と合流し慌てて追いかけてきた。

その後、2グループを巻き込み海賊達の人数は計13名となった。

その殆どがレベル40～43で俺と同じか1つ上だった。

改変してレベルが上がっているかと懸念していたが、それでもなかった。

海賊達は俺を取り囲もうと少しずつ間合いを詰めてきた。

「良いのかなあ？それボクの間合い内だよ」

俺の夢幻刀の刀身が海賊には見えていなかった為、間合いを読み誤ったのだろう。

まあ、離れていても縮地を発動させるのだが…

『居合・壹之太刀』

俺は、縮地を発動させず少し腰を落として前に踏み込み真正面の2人に相対する。

今回は、急所への攻撃を意識していたので極力、真空波に頼らず刀本体で斬って行こうと思う。

「っが…」

俺の振り抜いた刀身は、虚を突かれた海賊2人の首を斬り落とす。

防具がなく防御力の関係のない場所である首元の攻撃はクリティカルダメージとなり、一撃で2人は死んだ。

振り抜いた刀を鞘に納めず、2人の右にいた海賊に対してそのまま突きを繰り出す。

その攻撃は、防具を無視し心臓に突き刺さった。

そして、そのまま左にいた海賊に対して唐竹割を繰り出す。

『居合・参之太刀』

その攻撃は、海賊を頭部から下半身まで真っ二つにし、

その後ろにいた海賊を真空波で巻き込み計2人は死亡する。

前方にいた5人の海賊は一瞬で倒れたの見て、他の海賊は動揺する。

「な!?!」

「あいつの剣どうなってんだ!?!」

「一瞬で5人も…」

今まで視認出来なかった刀身が血で濡れて形が露わになる。

「!」

その光景を見て残った海賊達は後退りした。

正面に4人か……。俺は縮地を発動し、距離を詰める。

真正面の1人の首に剣を突き立てる。

同様に反応が遅れたようで、すんなり攻撃が当たり体が崩れ落ちる。

「っ!？」

「てめえ!」

残りの3人が各々攻撃態勢に入るが、俺はそれを予想していたので新たに技を繰り出した。

『居合・玖之太刀』

これは一撃目こそ居合による攻撃だが、その後は乱撃だ。

真空波がある為、180度前方に対しての無差別攻撃と言えるかもしれない。

左の海賊は振り上げた腕が斬り落ち、右にいた海賊は首が飛び、その横にいた海賊が真空波が掠り右脇腹をバツサリと切り裂いた。最後の海賊は即死ではなかったが、大量の出血によるショック死した。

残り4人……。どうしようかと考えていると、海賊達は背中を向け逃げていった。

次の段階へ進む為に、後1人は確実に殺しておきたいな……。

『居合・伍之太刀』

這うような真空波は、一目散と逃げていく2人の海賊の足を薙ぎ斬る。

他の2人は、別の方向へ逃げてしまったので今回は諦めよう。足が無くなり身動きが出来なくなった海賊に歩み寄る。

「ま、待て…」

「ひいいい、た、助けてくれ…」

俺は刀の刃を下に向け、2人の心臓目掛けて突き刺す。

「ぎゃ…」

「ぎっ」

海賊は、短めの悲鳴と共に事切れた。

10人の下っ端海賊を殺した事で、改変前と同様なら少し強めの海賊が出てくる筈だ。

そして、1分ほど待ったが海賊の出てくる気配がない…。

「変わったのかな？」と思った瞬間、状況が一変した。

本拠地からゾロゾロと下っ端海賊とその上の少し強い海賊と思われる集団が現れた。

改変前なら少し強いのが1人と下っ端10人しか出てこない筈なんだけど…これ軽く40人超えてるように思える。

それに本拠地の窓らしき所から複数の銃がこちらを向いているし、テラスからは弓使い十数人いる。

非常にまずい状況だ。

ちなみに、E／Oの世界に登場する銃はリアルの第一・第二次世界大戦中に登場した銃を模した物が多い。

中には現代の銃も一部登場している。

改変前はMobが銃を使おうとした場合、狙われた方は撃つ方向を視覚的に認識できた為、タイミングさえ合えば避けるのは差ほど難しくなかった。

改変後は、五感が鋭いようで何となく来る方向が分るようになってくる。こっちも改変前と同じで避けるのは差ほど難しくない。

まあ、自分が狙われていると認識出来ている場合によるが…。

生存スキルに「第六感」というのがある。これは、銃や弓など飛び道具を撃つ場合、方向を悟られないようにする事と、認識していても避けるタイミングが分るというレアスキルだ。

まあ、これがあったら良かったなあと言う話だ。気にしないでくれ。

いや、そんな事はどうでもいい…。

さすがに、蜂の巣を突いたように海賊が出てくるとは思っていなかったが、

幸いな事に3人いる幹部の内1人しか現れていないのが救いだな。

船長もいないとはいえ、総勢70人から80人ぐらい…その内半分は本拠地内…。

さて、どうする。

「嬢ちゃん、俺達に何か恨みでもあるのかい？ 答えによっては命か身体で答えてもらう事になるが…」

幹部の海賊が喋りだした。

「……」

俺は何も言わず睨み返す。

「ふ、まあ答える気はないわなあ。お前達傭兵は俺達を殺る理由なんて1つだよなあ？」

金の為：普通は。

実際、要塞都市には海賊討伐の依頼が常に張られている。

当然、俺達はその依頼を受けている。

ただ、狩るよりも依頼と併用すれば一石二鳥だからだ。

「だったら、俺達がお前を殺しても誰も文句言わないよな。ま、ここには法がねえ。

いや、むしろ、ここでは俺達海賊が法だからよ」

後ろの丘にいるアヤカの方を少し見ると、本拠地へ向けて弓を構えていた。

海賊達はまだアヤカには気付いていないようだ。

ここは頼りにさせて貰うでしょう。

「野郎共、殺すなよ。殺る前に船長の所を連れて行くからな。

ああ、それと船長からの伝言だ。捕らえた奴には一番手の権利を与えるだよ」

ウオオオオオオ！！

海賊達は雄たけびを上げ、ギラついた目を俺に向ける。

「へへ、俺が一番手を貰う」「いや、俺が…」みたいなやり取りが海賊達の間で交わされている。

何の一番手か何となく分った途端、俺は身震いした。絶対に勝たない…。

さて、覚悟を決めるか…。

「ふうう…」

ジョーイⅡシムス戦以来、久々の命がけの戦いだ。

俺は、縮地で海賊達の方へ駆けて行く。

第16話【海賊】（後書き）

どうだったでしょうか

第17話【死闘】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第17話【死闘】

俺が海賊に駆けて行っただのが合図のようになり、海賊達も一斉に駆け出した。

本拠地のテラスから数十本の矢が弧を描き飛んできたが、山なりの頂上付近でアヤカの矢が全てを消し飛ばした。

海賊達は、アヤカ存在に気付いた。特に本拠地内の海賊は狙いをアヤカに定めたようだ。

ただ、まだ銃使いの海賊の半分はまだ俺に銃口が向いている。

まあ、半分ぐらいになったから文句はない。

初めは出来るだけ背後に回り込まれないようにしていたが、時折跳んでくる銃弾で気が紛れ何時の間にか背後にも海賊がいた。

俺が数人の下っ端を斬っている間、数発の銃弾が俺の肌を掠めている。

まだ、直撃はないがこのままだと何れ当たるかもしれない。

しかし、俺には銃弾を避ける余裕がなかった。

こうなった以上、急所攻撃をする余裕はないな。

「ハッ！」

今、技を繰り出す余裕もなく、俺は通常攻撃で海賊達と戦っている。一旦下がって居合でまとめてやろうにも肉の壁に取り囲まれている為退けない。

また、銃弾が飛んできて俺の頬を掠める。

「っ…」

俺が片目を瞑った時を見計らったかのように海賊達が攻勢に出てく

る。

「オラァァ！」

海賊は3人がかりで俺に切りかかってきた。

俺は避けきれないと思い、思わず刀で受け止める。

「いっ!？」

そこに隙が出来てしまい他の海賊が、俺の横腹に向けてヤクザキツクをした為2mほど

俺は吹っ飛んだ。

「!!」

複数の手が俺に捕まえようと伸びてきた時、突風が吹き海賊達は吹き飛んでいった。

「間に合ったようだな」

そこには風の精霊ソードレスことザキラが俺の前に立っていた。

「ザキラ…！」

「背中任せてくれ」

数ヶ月前には想像も出来ないほど頼もしい精霊がそこにはいた。信頼関係も4段階目になっていたので、ザキラは9割の力を発揮できるところになっていた。

「ああ、任せた！」

俺は刀を鞘へ納め、居合の構えにする。

背後を気にせず戦える…俺の本来の戦いが出来る。

「おらあ、死にたいヤツから掛かって来やがれっ!!」

背後でザキラが海賊に啖呵を切る。

状況は非常に不利だ。

だから、俺は今まであまり使っていなかった技も出し惜しみなしで使っていくつもりだ。

使っていなかったのは今のSPでは燃費が悪かっただけで、余裕ぶっている訳ではない。

実は、俺の流派の技には全部12種あり、11個目と12個目の技は奥義に価するが、今のアキラに使えるか微妙なところだ。

しかし、使わないで負けるよりはずっと良い。

ただ、12個目は、属性が付与された武器に特化した奥義の上Lvが60以上必要だ。

この奥義は、ヴォルトの最終装備に合わせて進化させていった技なのだ。

11個目の技はどんな武器で使えるのだが、ザキラを巻き込む恐れがあるので使いどころが難しい。

それに、繰り出すまでの隙が大きいのも要因の1つだな。

まあ、それは良い…戦闘再開だ。

『居合・死之太刀』

その場で居合を繰り出し、前方にいる海賊達を切り裂き吹き飛ばす。

大体、5・6人ぐらい巻き込んだか…
海賊達に集団心理が働いているのか、味方が数人吹き飛んでも怯む事はなく躊躇しないで向かってきた。

「おらあ」

真正面で剣を振り上げた海賊に対して横薙ぎで右脇腹を切り裂く。

「死ねえ！」

同じように攻撃体勢に入っていた海賊は突き攻撃をしようとしていた。

幹部に殺すなって言われてなかったか？

まあ、それは置いておいて、さっきの海賊の斬った時の勢いのまま下からの切り上げでこっちの海賊は対処する。

俺は、崩れ落ちた海賊を踏み台にし空中へ跳んだ。

『居合・死之太刀（対地）』

「!？」

「へっ？」

「んな!？」

「なにい」

「あ、白だ」

今度は、地面に向かって真空波を放つ。

海賊の後ろで固まっていた無警戒だった数名の海賊達の身体は縦割りのような感じで切り裂かれる。

2人程は死なずに腕か脚が斬りおとした感じになったが、戦闘は続けられないだろう。

それと、何か1人だけ違う反応をしたが気にしない方が良いでしょう。

また、着地する勢いでジャンプ斬りを放ち1人を殺す。

次は、囲まれないように縮地を利用したバックステップで元の位置へ戻る。

見渡した限り、3分の1は倒したかな。

背後で戦っているザキラも大体それぐらい倒しているようだ。

後ろにいる海賊達は、すでに俺が視界に入っていないように完全にザキラに立ち向かっていた。

アヤカもすでに弓使いを全滅させているようで、銃使いに狙いを変えていた。

さっきから、銃弾の雨が弱まったのはこのお陰だな。

数人の海賊がアヤカのいる丘へ登ったようだが、俺が残したノックさんとアヤカの氷華が活躍しているようだ。

海賊達の後ろにいる幹部から余裕の色が消えていた。

7・80人いた海賊達が今は20人強まで減っていたからだ。

俺は血振りをした後、刀を鞘へ納め構え直す。

幹部の方を睨む。

「…畜生、これ以上俺の…が悪くな…は拙い…」

少し遠いので聞き取りにくい独り言を言っているようだ。

「余所見してんじゃねえ！」

1人の海賊が斧を振りかぶって攻撃をしようとする。

「…遅い！」

技は出さずに、そのまま振り抜き鞘に納めた。

海賊達の隙間から幹部の様子を見ると、下っ端に何かを命令しているようだった。

注意が幹部に行っていた間に2人の海賊が左右から同時に攻撃してきた。

俺は冷静に縮地で後ろへ退き、攻撃が空振ったところに居合で斬り返した。

『居合・壱之太刀』

2人の海賊の身体は上半身と下半身が斬られ綺麗に放れた。

幹部の動向は気になるが、取り合えず目の前の下っ端どもとちよい上の海賊を始末してからにしよう。

…って、あれ？そのちよい上の海賊がない…。

その瞬間、俺の影がより大きい影で覆われていたのが見えて、後ろを振り返る。

振り返った後に攻撃しても手遅れと判断した俺は、振り向きながら刀を鞘から抜いた。

でも、少し気付くタイミングが遅かったようだ。

「んっ…」

海賊から放たれたショーテルの剣筋は俺の右肩を切り裂いた。激痛が走ったが、俺の刀も海賊の腹を深く斬り裂き身体が崩れ落ちる。

斬り裂かれた肩は、かなり痛く左腕が思ったように動かない。

俺は両利きなので、このまま続行出来なくもないが、銃弾や剣の掠り傷も大分多かったので、あまり無理はしない方が良さそうだ。

左腕が全く動かない訳ではない。

しかし、動かすたびに出血を伴った激痛があり、視界もぼやけている。

これは、HPが半分を切っている証拠なのだ。

状態異常「出血」にもなっていたので、回復しないまま放っておくと何れ気絶してしまう。

ちなみに攻撃によって破損した防具などは戦闘終了と共に見た目が修復される。

耐久が0になった時のみ修復しないようになっていた。

ジョーイⅡシムス戦後、防具が使い物にならなくなったのはそういう訳でもある。

「今だ、その娘を捕らえろっ！」

「いえっさ〜」

幹部が叫んで下っ端に命令し、下っ端は一斉に返事を返す。

「へへへ…じっとしてなよ〜」

一番近い所にいる海賊は厭らしい手つきをしながら近寄ってくる。それ以外の海賊も俺が動けないと判断したのだろうか、薄気味悪い

笑み浮かべて歩み寄ってきた。
ならば、出来るだけ多く俺の間合いに入ってくるまで動けないフリでもするとするか…。

俺はザキラの位置を確認する為、周りを見渡すと20m左後方で6名ほどの海賊達と戦っていた。

大分、少なくなっているな。

岩陰辺りだし、このぐらいの距離なら巻き込まずに済みそうだ。

当たったとしても、ザキラは死ぬ訳ではないだろうし謝れば良い、

奥義をこの状態で使うには少し躊躇ってしまうが、治癒する時間がないので仕方ない。

ちなみに、奥義は、LV30以上かつHPが半分以下の時に出せる特殊な技だ。

取り合えず、こいつらを始末してからゆっくりとHPを回復させるとうしよう。

よし、10人弱の海賊と幹部海賊が俺の間合いに入った。

1人が俺に手を伸ばそうとしてきたので、立ち上がりながら体当たりをする。

海賊は1mほど下がりと勢い余って尻餅を付いた。

そして、俺は刀を鞘に納め構えなおす。

すでに俺のSPは半分を切っていたので、この技を出すと恐らく俺のSPは空になるだろうな。

いつもより、深めに腰を捻る。

『奥義・剣結界』

十一之太刀とか言い辛いので、実は奥義だけ名前を決めてある。

これは俺の1つの到達点と言える技で360度全方位に対して神速の乱れ斬りする。

一度、発動させるとSPが空になるまで出続けるというデメリットがある。

が、別に他の流派の奥義もそういう特性かというところという訳でもない。

この「剣結界」がそういう特性なのだ。

度重なる成長と強化により剣筋は見えないので、正に剣の結界なのだ。

さらに、夢幻刀効果もあるから尚更だな。

壁際や鈍重な巨大Mobには、ハメ技的な効果がある。

一番近くにいた海賊は細切れされ肉塊となった。

段々と加速していく俺の剣筋は、ヘリのブレードのような加速音を発しながら最高速度に達する。

ここまで来ると剣筋だけでなく、俺の右腕の動きも視認できていない筈だ。

その後方にいた数名の海賊もほとんど間を空けず同じように肉塊になっていく。

目の前で細切れになっていく仲間を見て、他の海賊達は逃げようとするが既に遅く近い者から斬り裂かれていく。

ランダムで飛ぶ真空波は周りの岩や死体をも切り刻み、ザキラと戦っていた海賊も1人巻き込まれる。

そろそろ、SPが切れようとしている。

残るは幹部1人：間に合うか…。

「ぬおおおおお！」

すでに逃げる事を諦めたのか、幹部は自分の得物であるハルバートを盾代わりにする事で何とか剣結界の斬撃に耐えていた。

しかし、ハルバートの刃部分にヒビが入りだし、破片を撒き散らした後砕け散った。

幹部の身体は、剣撃に巻き込まれ空中で肉片を飛び散らしながらお手玉のようになっていた。

そして、技の終了を意味する斬り上げが出て、「剣結界」が止まる。この一太刀で幹部海賊を真っ二つにする。。

しばらくして、血沫と細切れになった肉塊が上空から降り注ぎ、俺の身体が…もとい周辺が血で染まる。

俺の周りにいた海賊を全て始末できたが、S Pは空になり俺は膝を付く。

「ハアハアハア……」

改変前は、S Pが切れるとただその場から動けなくなるだけだった。しかし、改変後は、立つ事も儘ならない状態になるようだ。

やば…、意識が朦朧する…。

「姉御！」

少し遠くの方でザキラの声がしたような気がした。

はや…く、S P回復ポーション飲ま…ない、と…

俺は誰かに抱きかかえられる感覚の中意識を無くした。

•

・ ・ ・ ・ ・

どのくらいの時間が経ったのだろう。
目を覚ますと辺りは、真っ暗だった。

「ここ…は？」

「アヤカ殿、姉御が目を覚ましましたぜっ！」

近くにザキラがいたようだ。

少し遠くにいただろうアヤカを呼ぶ。

ちなみに、俺が気絶していてもザキラが現界していた訳は簡単で、
召喚時と精霊界へ戻す時にしかMPが消費しないからだ。

維持するのにMPが必要ではない上に、俺と精霊は精神面で繋がっ
ているので意識ありなしは関係がない。

そして、精霊界へ戻る条件は、俺が精霊に戻るようお願いするか実
体のHPが0になるかだ。

精霊の実体がHP0になったとしても、死ぬ事はなく霊体に戻るだ
けで再度呼び出せる。

「ちょ…、海賊から隠れてるから大きな声出さないでって言ったで

しょ？」

「も、申しわ…！」

「だから…」

さっきよりも大きな声で謝罪しようとしたザキラを制した。

「…申し訳ありません」

ザキラはしょんぼりした小さな声でアヤカに謝っていた。

こちらに歩み寄ってくるアヤカを見ている内に目が慣れてきた。野営を立てていた丘の上ではなさそうだった。

「ごめんね。こんな所で…」

アキラが倒れた後、海賊船が入港したのが見えたからすぐに移動したのよ」

なるほど…80人ほどの海賊だったのは、半数が本拠地を離れていたらからか…。

「で、海賊達が私達を搜索しているみたいで、焚き火をする訳にもいけないのよ」

アヤカの後ろに水華ではない別の精霊が立っていた。

「あ、この子は風の精霊シルフの風華よ。この子に周辺を守って貰ってるわ」

俺の視線に気付いたのか紹介してくれた。

「初めましてですね。風華と言います」

「よ、よろしく」

風華は、名前を述べた後、暗闇に溶け込むように消えていった。恐らく、この周辺の空気と同化でもしたのだろう。

「そういえば、動ける…」

俺の肩の傷は消えているようだしSPも回復していた。

「気絶している間に、HP回復ポジションとSP回復ポジションを口へ流し込んだわ」

「いやあ、女同士の接吻は何か興奮しますなあ」

ザキラが頬を赤らめながらにやけていた。

「せっ!？」

「勘違いしないでよ。意識ないし出血もしてたから仕方なくよ!」

頬を赤く染めて明後日の方向を向いた。

こ、これは世に言うツンデレというやつか…。

「で、どのくらい動けるの?」

「ん、ああ」

俺は起き上がり左肩を回したり腰を捻ったりした。
問題は無さそうだ。

ステータスを確認しても、「出血」はなくなっている。
それに、レベルが1つアップしていた。

「大丈夫。何ともない」

「そう、良かったわ。じゃ、取り合えず、ハイ」

アヤカは、保存食である干し肉を俺に渡した。

「火が使えないから、これで我慢してね」

「干し肉嫌いじゃないから、全然大丈夫だ」

ヴォルト時代の主食だったし問題ない。

俺は、干し肉に齧り付く。

・
・
・
・

空腹だった事もあり、非常に美味しく頂けた。

「ねえ。これからどうするの？ 私としては夜が明けたら街に一度戻った方が良いと思うわ」

食べ終わったのを見計らって、アヤカは今後の行動について聞いてくる。

「んゝ。それが一番なんだろうけど…」

「何か問題でもあるの？」

あいつら、どうせ夜が明ける前に出港するじゃない」

今回の海賊達の行動をみる限り、改変前と同じ行動するか未知数だ。

「もしも、奴等が夜が明けても俺らを探していたらどうする？」

街に行く為の道なんて当に封鎖されてると思わないか」

「…………確かに、有り得るわね」

アヤカは少し考えた後に頷く。

「じゃあ、どうするの？」

「もう少し、休めば全快する」

HPとMPすでに全快、SPは後4分の1ぐらいだ。

まあ、ポーションを使えば良いが節約も大切だ。

「ん…？」

「全快したら、海賊狩りの再開だ」

準備の為に俺は、装備品とリュックの中身を広げ確認する。

夢幻刀は残り耐久40…心もとない数値だな。

温存の為に途中で海賊の武器を拾って使うとするかな。

防具全般も大分減っている特に上半身の防具はすでに表示が赤い。

肩口に食らった攻撃のせいかな…。

その次に靴の耐久が少ないな。

道具はと…、HP回復ポーションが8つ、SP回復ポーションが6つ、MP回復ポーションが5つで、各々が回復量中のポーション瓶だ。

攻撃を食らわない事を前提にしている為、少ない量しか持ってきていない。

「え？ ちょ、ちょちよつと待って！ ええ？！」

「ん？」

「いやいやいや、私は良いけど…アキラはきついでしょ。さっきまで気絶していた子が言うセリフじゃないわよ」

「どうせ、ここに居ても何れ見付かるさ。なら、こっちから打って出て可能なら船長も倒す。

ついでに、蒼の海賊も壊滅させよう。それにはアヤカの協力も必要だけどな」

「え、いや、まあ、そうだけど…分ったわ。

………協力…ね、具体的にはどうするわけ？」

「簡単な事だよ。俺が本拠地、アヤカが海賊船を叩く。

戦力を2分出来るし、良い考えだと思わないか？」

本拠地なら取り囲まれる事はないので俺に都合だ。

それに、アヤカの狙撃能力と弓の破壊力は海賊船に都合が良い筈だ。

「え、ええ…そう…ね…？」

いまいち、アヤカは納得していなかったが、俺達2人は朝に備え精霊達に周囲を警戒させた後で眠りに付いた。

第17話【死闘】（後書き）

どうだったでしょうか。

第18話【潜入】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。
今回は少し短いです。

第18話【潜入】

早朝、俺はアヤカと別れ、蒼の海賊の本拠地へ目指していた。さすがに逃げたと思っていた者が舞い戻り、しかも自分達の懐に入り込むなんて思わないだろう。

途中、海賊を何人か見かけたが、ほとんどが就寝中だった。

やはりというべきか、街へ向かう道を見張るかのように海賊達は配置にしていた。

起きていた者は、見付からない様に始末をしておいた。

本拠地へ着くとそこには2人の門番が立っていたが、2人共非常に眠たそうにしていた。

門の前にある茂みで身を隠して様子を窺っていると右の門番は半分寝ている感じに見える。

左の門番も右の門番の状態にも気付かないほど、注意散漫状態だった。

「ザキラ、合図したら左の門番を倒してくれ。

決して声を出さないでくれよ」

「承知した」

ザキラはいつでも飛び出せるように構えた。

「我が手で風は狂い暴れ…嵐は踊り狂う…我が指先の魔弾は敵を穿つ」

俺は手振りでザキラへ合図を送ってから、俺は魔術を放つ。

「エアバレット！」

ザキラは茂みから飛び出るが、門番の海賊は死ぬ直前まで気付く事はなかった。

ザキラが左の門番を斬り殺すと同時に右の門番へエアバレットは着弾し心臓を穿った。

ほとんど、音もなく倒す事が出来た。

ちなみに、エアバレットは風属性の中位魔術だ。

圧縮した風の塊を銃弾のように放つ魔法で、射出速度と貫通力が高く使い勝手が良い。

しかも、無色透明で音が出ないので隠密に適している。

俺とザキラは、死亡した門番を門の石柱にもたれさせ、生きているかのように偽装を施した。

まあ、近付けばすぐにバレるだろうが、時間稼ぎにはなるだろう。

そして、人気の無さそうな入り口か窓を探し、本拠地の建物周辺を探索する。

一周だけ周った感じ、建物の中には人の気配が余り感じなかった。

6箇所ある入り口の中から最も気配のなかった扉から俺達は入った。

入った所は、まっすぐ50mほど廊下が延び右側に小部屋がいくつもあった。

一番手前の部屋を覗いて見ると、小さな部屋に2段ベッドが2つ並んでいた。

恐らく、下っ端海賊の部屋なのだろう。

気配察知のスキルを使いながら廊下を歩くが、やはり人の気配がな

く、難なく50 m歩きぬいた。

出たところはエントランスのような広いスペースだった。奥には、上へ伸びる階段と下へ伸びる階段の2つあった。

改変前と変わらないのなら、2階は主に隊長クラスの海賊や幹部の部屋だろう。

そして、地下1階は、武器庫や倉庫など物資関連の部屋があり、それより下は港へ続く長い階段がある筈。

基本的に5大海賊の本拠地の構造はほとんど変わっていないく、部屋の割り振りが多少変更してあるぐらいだった。

おっと、見張りだ。

「ふわあああ、静かだねえ。静か過ぎて退屈だぜ」

「そりゃ、そうだろ。80人程いれば事足りるって思ったらこのザマだぜ。」

アレク様とエリム様が仕事でいなかったとはいえ、大勢の仲間とガルフ様が死んだんだ。

このまま、スルーする訳にもいかないだろ」

「だからって、半数も搜索にいらないだろ」

「面目ってやつさ」

ほう、半数…5・60人ほど搜索に向かったのか、どうりで人の気配がない訳だ。

「こんなに退屈なら、俺も搜索に行きたかったぜ」

「なんでだ？」

「女子供を追い詰める方がまだマシじゃねえか。それに一番最初に捕まえれば一番手を貰えるって話だしな」

まだ、それ有効になってんの？！

「ははは、じゃ、この情報は知ってるか？
その女子供エルフ」

「何やってんだ！お前らっ！」

2階から別の見張りが降りて来た。
見るからに堅物という感じの海賊だ。

「良いじゃねえか。別に…」

船長は部屋に籠りつきり、アレク様は船長の護衛、エリム様は船の方…。

誰も俺達の事見てねえって」

「逆に言えば、ここが手薄って事だろうが…。

まあ、良い。お前達は地下へ巡回しに行け」

「はあ、了解っと」

見張る気のない海賊2人は地下へ、堅物2人は玄関の方へ向かった。
今がチャンスだな。

さて、どうするか…。

確か、2階奥にある階段を上った先に船長の部屋に通じる階段があ

った筈なのだ。

まあ、これだけ閑散としていれば海賊に出会う可能性は高くないだろう。

ただ、見張りの話が本当ならアレクという幹部との戦闘は避けられない感じではあるな。

俺はエントランスに誰もいない事を確認し、階段を上って2階へ向かった。

階段を上りきると小スペースがあり、そこは休憩所のようになっている。

その先に、広めの廊下と左右に分かれて個室が並んでいる。

角に立ち、廊下の方を覗くと見張りが2人1組で2組が巡回していた。

奥には重そうな扉があり、恐らく幹部と思われる1人の海賊が扉の前に立っていた。

さすがに1本道だと隠れて移動は出来ないな。

「我は望む。我が親愛なる…風の精霊ソードレス。我の呼びかけに応えよ。我の名はアキラ||ローグライト。汝の名はザキラ」

俺は背後から襲われないようにザキラを呼び出した。

「背後から来る海賊の始末よろしく」

「おう、承知した」

さて、行きますか…。

俺は、堂々と廊下の方へ歩いていった。

あまりにも堂々と歩いたので見張りの2人は、一瞬気付かなかったようだった。

奥にいる見張りも気づき、走ってこちらへ向かってきた。

幹部はこちらに気付いたようだが、組んでいた腕を解いただけで、こちらへ来る様子はない。

「…あん！？誰だてめえ…」

「そんなもん見れば分るじゃねえか。侵入者…いや、ガルフ様を殺ったヤツだろ」

「んあ、そうだったな。蒼の海賊には女はエリム様しかいねえしな」

「聞いていた特長にそっくりだ。間違いねえな」

む、殺し損ねた海賊がいたのか…。

海賊4人は、武器を構える。

2人は俺の横へジリジリと移動していく。

俺は刀を構え、いつでも迎撃できるようにした。

幹部の海賊がこちらを見ているので、出来るだけ手の内は見えないように戦いたいな。

俺はまず左にいる海賊に通常の攻撃をした。

通常攻撃とはいえ、一応、居合の部類に入る攻撃である。そう簡単には防げない。

不意を突かれた海賊は、腹から右肩までを切り裂かれ何もせぬまま倒れる。

その勢いのまま、右側にいる海賊を袈裟斬りで倒す。

こちらも反応出来ないまま倒れる。

そして、すぐに刀を鞘へ納める。

『居合・壹之太刀』

間髪入れず、技で前の2人を斬り伏せる。

この間、たったの4秒…、幹部の海賊は、その一連の攻撃を見て少し驚いたようだった。

血振りをしてから、刀を鞘へ納め奥の扉へ歩いていく。

・
・
・

廊下を抜け、扉の前にやってきた。

そこは、少し広い空間で戦闘するには十分な広さだった。

壁や廊下に斬った後のような傷が少し気になる程度でさして装飾品などはなかった。

アレクと呼ばれていた海賊は、少し笑いながら俺がやってくるまで何もせず待っていた。

「ふふふ、凄いな君。下っ端とはいえ4人を一瞬なんて…」

アレクは、拍手をしながら俺を迎えた。

この余裕な態度が少し恐ろしく思えた。余程、腕に自信があるのだろうな。

「どうだい、俺達の仲間にならないか？」

船長はあんたを許すつもりはないらしいが、俺は殺すには惜しい人材だと思っている」

本心なのか冗談なのか判断し兼ねるな…。

「はっ、冗談はやめてくれ…」

「冗談じゃないさ。ま、簡単には受け入れて貰えないだろうけどな。俺なら船長を説得できる自信がある」

俺は、無言のまま刀に手を添え構え戦闘の意思を伝える。

「……そうか、残念だ」

アレクは、ロングソードより少し長めの鰐のない剣を持ち、脇構えより少し腰落とした感じで構える。

鰐がない剣はそんなに珍しい事もないが、柄の部分にあるハンドガードに銃のトリガーのようなものがついている。

銃口のようなものは刀身にないし、あれは何なのだろうか…。

「……せいっ！」

俺が武器の形状に気を取られていると、アレクが仕掛けてきた。気付くのが少し遅れたが反応できないほどではない。

俺は、バックステップで攻撃を避ける。

しかし、その反応を予測していたのか、剣先は俺に追従してきた。

「くっ…」

俺は咄嗟に刀を抜いて剣先を逸らし、腰を落としてから縮地を使いアレクの背後へと回る。

背後に行く最中に刀を鞘へ納め、背後に回った後そのままの勢いで攻撃を仕掛ける。

「やるねえ。だけど！」

アレクは身体を回転させ俺の攻撃を難なく弾く。

弾かれた際、俺の手は少し痺れた。

俺よりも腕力が上なのかもしれない…と思い、俺は目を凝らしアレクを分析する。

レベル：54…、改変前よりもレベルが上がっている。

というより、改変前こんなキャラはいなかった筈だ。

改変後、全てのNPCに名前が付いたのは知っているが、容姿まで変化しているなんて…。

その後もアレクは何度か攻撃をしてきたが、見切れないほどではなく俺も何度か攻撃を仕掛ける余裕もある。

むしろ、Lv54でこの程度なのかと思った程だ。

しかし、攻撃をする度に、鋭さが段々と上がってきているのに気付いた。

その時、ブンツツと風を叩っ斬る鋭さと共に俺の額を掠めていき、地面に剣先を突き刺さる。

咄嗟に仰け反って直撃を防いだが、交わしきれなかったようだった。額に生暖かい何か…まあ、血が流れるのに気付き、俺は縮地でのバックステップで間合いを空けた。

「へえ、避けるとはやるじゃないか。それなりに力を込めた筈なんだけどな」

やはり、今までの攻撃は本気ではなかったのか…。

最後の攻撃もあの口ぶりからすると本気ではないという事だな。

「さて、本気を出すか…。あんたも本気を出しな。出さないまま死にたくはないだろ？」

「ふん。ボクを生け捕りするつもりじゃなかったのか？」

「本気ってやつは、相手の命の事なんて考えて出来るものじゃねえよ」

俺は、無言で刀を鞘に納め再度構え直し、アレクもまた構え直す。

「さて、命のやり取りってやつをしようぜ！」

第18話【潜入】（後書き）

どうだったでしょうか

第19話【蛇腹】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

第19話【蛇腹】

数度、アレクと剣を交えていたので本気と言っても、要は間合いに入らなければ当たらないという事だ。

だが、やはり今までと比べ物にならないぐらいの鋭さがあり、ギリギリで避けるのがやっとという状況だ。

「これも避けるか…。あんたやるじゃないか。

間合いの方は、大体把握したが見えない刀身ってのも奇妙だぜ…」

まだ、喋る余裕があるのか…。

俺は、アレクの袈裟斬りを最小限の動きで避ける。

まずは、そっちにも余裕はない事を教えてやらないとな…。

『居合・壺之太刀』

結構、不意を突けたと思ったのだが、ギリギリで気付いたようで避けられる。

「ぐっ…」

完全には避けきらなかつたようで、左脇腹から出血した。

アレクは追撃を警戒したのかバックステップで間合いを空ける。

「どういう事だ…?」

出血した脇腹を手で押さえながらアレクは後ろを振り向き、扉に真空波で付いたであろう斬り傷を見る。

「なるほどね。あんたも一筋縄ではないという事か…。
本気だけでは勝てそうにないな」

?? 本気以上に何かあるというのか…。

アレクは再び脇構えに構えなおし攻撃体勢に入る。

俺はアレクの言葉の真意を確かめる為に、回避に集中する。

アレクは、間合いを詰める為に1歩前へ出る。

そして、さっきまでと変わらない鋭さで横薙ぎを仕掛けてきた。

俺はすでにアレクの間合いは把握していた為、縮地を使わず大きくバックステップをした。

「いづっ！」

しかし、避け切れなかったようで俺の鎖骨と胸の中間を掠り横一文
字に肌が切れた。

「え!？」

間合いは完璧だった筈なのに何で…。

「完全に避けたと思ったのか？」

俺の困惑を見透かしたのかアレクからの攻撃が激しくなる。

俺が間合いを読み誤ったのかと思ったが、どうもおかしい。

さっきよりも余裕を持って避けた筈なのに、それでも当たる。

くっ、考えても仕方がない。

避ける事が出来ないなら、攻撃できないように攻勢に出るしかない。

アレクが俺の首元付近に攻撃をしてきたので、伏せる事で回避しカウンターをお見舞いする。

『居合・伍之太刀』

低い姿勢から放たれた草薙の真空波はアレクの足元を薙ぎ払う。しかし、至近距離で放ったにも関わらず、剣を地面に突き刺した後、棒高跳びの要領でそれを避けた。

「ひゅー、あぶねえ。そんな体勢から攻撃する奴なんて初めて見たぜ」

剣を肩に担ぎ、まだまだ余裕と言わんばかりの笑みをしていた。

「っ…」

俺はそんな態度のアレクを睨む。

「ん？ああ…。こんなに死合が楽しいのは久々だからよ…つい笑ってしまった。」

ところで、俺の間合いは把握したか？」

「……………」

「ふ、その様子だとまだみたいだな。そろそろ、あんたの命を貰うとするか…」

俺とアレクとの距離は優に3mは離れていたにも関わらず、アレクはおもむろにその場で剣を振った。嫌な感じがした俺は咄嗟に天井に付く程度にジャンプすると、何か

が俺の足元を薙ぎ払っていった。

一瞬で何だったのか分らなかったが、それがアレクの攻撃だと何となく分った。

そしてその何かはアレクの手元で方向を変え、ジャンプしていた俺に目掛けて迫ってきた。

俺は、身体を捻り攻撃を避けたが、少し間を置いて背中に刃物が突き刺さるような激痛が走った。

「あぐっ!？」

俺の背中を抉るような何かに引っ掛けられ、床に叩き落された。

その時、アレクのいる場所あたりから『ガキンッ』という硬い物がぶつかる様な音がした。

「……っ」

俺は激痛に耐えながら立とうとするが、背中が焼けるように熱くすぐには立てなかった。

というか、視界がぼやけてきた。これヤバイかもしれない…。

俺は状態異常の確認すると「猛毒」「出血」状態になっていた。

残りHPが985…大体半分以下になっており、さらに3秒間に20ぐらいのペースでHPが減り続けていた。

アレクが追い討ちをしようとしているのか、こちらへゆっくりと近付いてきた。

早く、回復させないと…

「女神…ヴィーナスの名のもとに…我が身…」

アレクは俺の目の前に来て、剣を振り下ろす。

俺は、残った力で何とか剣の直撃は避けれたが、右腕を貫いた。

「あぐっ」

アレクは、俺の右肩に足を置き、一気に右腕から剣を抜いたので周囲に血を散らした。

残りHP582…本格的にやばい。

「ハアハア…を…蝕みし負の力を浄化させたま…え」

アレクは再び振り下ろそうという時に詠唱を終え、残るはスペルを言うだけになる。

「ちい」

アレクは舌打ちの後、今度こそ俺の心臓目掛けて振り下ろしてきた。

俺は身体を捻りながら右手に持っていた刀を振るいアレクの剣を弾く事で軌道を逸らす事に成功する。

「キュア…ライト！」

残りHP378で何とか「出血」と「猛毒」の猛威から避ける事が出来た。

でも、視界は赤く危険信号が出ていた。

「はあはあはあ…」

「その状態で法術を使うとはな…」

アレクは俺の髪を掴み上げ俺を立たせると、左腕で俺の首を絞める。少しづつ首を絞める力が増していき、俺の意識が失われようとしていた。

このままでは本当に死んでしまうかもしれない：なら一か八かだ。運が良ければ、少しHPが残りアレクにダメージを与えられる。運が悪ければ、クリティカルダメージで死ぬだけだ。

俺は、刀を俺の右脇腹に剣先を付け、自分の身体ごと密着状態のアレクに向かって鐔の辺りまで深く突き刺した。

「ぐはっ：！？？な、なにいい」

激痛とともに自分の身体とアレクの身体を裂く感触と共に、突き刺した箇所が焼けるように熱くなる。

アレクの腕が首から離れたタイミングで縮地を使い大きく離れた。残りHP16：急所を避けたとはいえギリ過ぎる。視界がほとんどないほど真っ赤に染まっていた。

そして、俺は早口で治癒魔法を詠唱する。

「主神ガディウスに慈悲を請う。大いなる祝福と愛を以って我が身を癒し給え。ヒーリングブレス」

これは、基本法術の上位治癒魔法だ。

本来、俺は中位までしか使う事が出来ないが、種族属性のお陰で上位まで使用できる。

MPを大量に消費する代わりにHPを全快してくれるだけでなく、部位欠損以外のあらゆる傷も治してくれる。

ちなみに、状態異常は治せない。

俺の視界が回復したので、アレクの方を見ると傷口を押さえながら

こちらを睨んでいた。

「……自分の身体ごと俺を貫くか……」

アレクは今まで見せていなかった怒りにも似た感情のまま剣を構えた。

どうやら、アレクは「出血」の状態異常のようで足元に血が滴り落ちていた。

アレクには自身の傷を治す手段がないのか、止血しないまま構えた。

「俺には時間がないらしいな…」

お互い出し惜しみなしだ。早々に決着を付けさせてもらおう！」

その言葉を合図に俺とアレクは持てる力を出し切るかのようにお互い怒濤を攻撃を繰り返した。

まともに打ち合って気付いたが、アレクの得物は蛇腹剣だ。

いわゆる、刀身が分割し鞭のように使用する剣だ。これを使いこなすにはかなりの技量が必要な筈で簡単には使えない。

2年目の戦争でこれを使ってるプレイヤーを見かけた事があるが、ここまで鮮麗された技は見た事がない。

アレク自身の実力なのか、流派の特性なのか…かなり厄介なのは間違いない。

数十回の打ち合いの後、俺自身満身創痍だったが、それ以上にアレクの顔に血の気がほとんどない事に気付いた。

「…これで…最後だ」

アレクは今までの構えとは違い、脇構えをより深く構えた剣先が正面になるまで身体を捻った感じになっていた。

アレクが最後の技を出すのだと俺は判断し対抗出来そうな技を出す準備をする。

『レギアス流奥義……隴龍水月・大蛇』

『居合・蜂之太刀』

アレクから放たれた技は、手元から8つに剣身が分れ（たように見える）、八方から龍の鎌首が襲い掛かって来た。

そして、俺の技は、居合による袈裟斬りからの連続斬撃だった。お互いの技が交差し決着が付いた。

俺自身が前に出た事によって、アレクの技の収束点から外れ大きなダメージを負わなかった。

とはいっても、左右首筋両肩両脇腹両脚計8箇所に決ったような切り傷が付いたので無傷でないが…。

アレクの攻撃は自身が動かない技だったので、俺の攻撃をまともに喰らい大ダメージを負っていてよろけながら壁に背をもたれさせた。

「っは！……。ま、負けたのか…」

「ああ」

何とか勝てたが満身創痍だった。

HP全快だった筈なのに、さっきの攻撃を掠っただけで3分の1辺りまで減っていた。

まともに喰らっていたら死んでいたな…。

俺は血振りをして鞘に納めようとした時、思わぬ事態が起こった…。夢幻刀が、ピシッという小さな音と共に折れ床に落ち砕け散った。

ここで折れてしまうとは…。

ノースブレイを出るまでは使い続けるつもりだったのに残念だ。

「ふん、どうせ…俺はこのまま死ぬ身だ。船長とやるんだろ？
ならば…、これを…持って行け…」

アレクは自分の剣である蛇腹剣を俺に託した。

それと、血まみれの手で何かをメモ書きした後、俺に渡した。

「レギアス流は…：零細道場なんだわ…：俺が、死んだ…ら、跡継ぎ…：が、い…なく…なる。」

頼めた…義理で…は、ないと…思うが後は頼…んだ…：…：…」

アレクはそう言い残し息を引き取った。

渡されたメモ書きには、ラキノイア王国にいるシャーネーレギアスを尋ねろと書かれていた。

むう、身勝手な奴だな…。

でも、自流派に掛け合わせる流派を何にするか迷っていたし、この際だレギアス流？でも良いかも知れないな。

が、その前に蒼の海賊の船長とやり会わないとな。

俺は、身体についた傷を法術で癒した後、気付いたが上半身の防具が壊れていた。

戦闘終了とともに耐久が残っていれば、自動的に見た目が修復する筈なのに破れたままだった。

上半身の防御力がなくなると共に、複数箇所破れているので裸同然になっていた。

偶々リュックの中にあつた包帯を露わになった胸にグルグル巻きをして隠した。

まあ、サラシみたいな感じだな。

その後、メモ書きを懐にしまい金属製の重い扉を開けて3階にある船長の個室へ向かった。

第19話【蛇腹】（後書き）

どうだったでしょうか。

ナインテイルを犠牲にしてまで修理してもらった刀があっさり折れましたが気にしないで下さい。

相変わらず、戦闘表現が下手で申し訳ないです。

脳内でイメージは出来るのですが、上手く表現できないもので…

第20話【壊滅】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います

第20話【壊滅】

俺は船長の部屋に向かいながら考えていた。
何を考えていたかというと、アレクから貰ったこの蛇腹剣だ。
ちなみに、この武器のステータスはこうなっている。

魔剣・蛟^{ミズチ}

ベース…蛇腹剣^{ロングソード}

生産者…不明

耐久…360／400

攻撃力…580

必要能力…腕力90、体力50、器用130、敏捷100

備考…唯一級効果、刀身1.5m～15m

魔剣効果、状態異常「出血」「猛毒」＋30%

生産者コメント…水に棲まう龍なる神は天を砕く鋭き顎を持つ

唯一級にはしては少し攻撃力が少ないが、最大分割状態だと15mまで伸びる事を考えると妥当と言えるのかもしれない。

このゲームでは、武器に対応した流派でないと上手く使えず通常攻撃しか出来ない。

当然、俺の流派は蛇腹剣に対応していない。

まあ、分割していない状態、ロングソードとして使えば問題ないのだけど…。

ただ、イスカ刀特有の居合が出来ない為、鋭さや攻撃力がそれなりに落ちてしまう。

特に、真空波が使えないのが痛いな。

将来的には、レギアス流を極め掛け合わせて蛇腹剣でも使えるようにしないとな…。

そうになると、真空波は捨てるべきなのかも知れない。

んゝ、難しい選択だ…。

そんな事を考えている間に、船長の部屋へやってきた…。

その部屋は非常に広く、悪趣味な装飾品や娼婦と思われる女性が数人いた。

そして、部屋の最奥中央に玉座のような椅子が鎮座し1人の大柄な男がいた。

恐らく、蒼の海賊の船長だろう。

部屋中に厭らしい空気が漂っており、娼婦の表情を見る限り、この空気は媚薬ではないかと推測できる。

この辺は大して臭いがきつくはないが、玉座周りは臭いの発生源近くという事もあり近付かないほうが良いだろうな。

俺の姿を確認しても表情1つ変えず、まるでそこに居ないかのように娼婦による奉仕に魅入っていた。

俺が部屋の中央付近まで歩いて行くと船長は俺の方に向いた。

「何の用だ、小娘…。見て分ると思うが、俺様は今忙しい。

それとも何かお前が娼婦の代わりにでもなってくれるのか？」

船長は値踏みするかのように俺の身体を見回した。

「とまあ、冗談はここまでだ。お前だな…俺様の領域を踏み荒らし
ている女ってのは…。

それに…お前がここにいるという事はアレクが負けたという事か…。

小娘：生きてここから出られると思うなよ」

船長は、足元にいた娼婦を強引に引き剥がし、椅子付近に立て掛けてあった2振りの戦斧を左右の手で持った。

二刀流の戦斧使いか…。あの体つきなど見る限り、攻撃力と攻撃速度は速そうだ。

反面、攻撃の邪魔にならないようにする為か、上半身はほぼ裸に近い防具だった。

俺は、蛟を構えた。

居合には出来ないので、模擬居合構えという感じで本来鞘がある場所に剣を水平にして構えた。

「む、その剣…。…ふっ…。」

俺が持っている剣に気がついたようで、少し身構えたようだが俺の構えを見て緩めた。

恐らく、剣身の分割はしてこないと思ったのだろう。まあ、実際そうなんだけど…。

船長は、戦斧を両肩に担いで若干前傾姿勢になった。

恐らくこれが船長の構えなのだろう。

厳つい顔がさらに厳つくなり今にも捻り潰しそうな剣幕となった。

数分ほどお互い牽制し合って膠着状態だったが、若干正気に戻った娼婦の1人がその場から出ようとした時にテーブルにあった蠟燭立てを床に落としてしまう。

それを合図にするかのように俺と船長は前に飛び出した。

俺は縮地で一気に間を詰め先手を打った。

『居合・壱之太…』

攻撃をする直前、目の前から船長の姿が消えた…。咄嗟に見上げると、船長は俺の頭上へ2振りの戦斧を振り下ろすところだった。

速い…それに案外身軽だ…。あの体軀からは想像も出来ないほどだ。俺は縮地にてバックステップをして攻撃を回避した。

振り下ろされた戦斧は、俺が元いた位置の床を粉々に砕いていた。なんという、破壊力なのだろうか…。あれを食らったら一撃死もあり得る。

船長は間髪入れず俺の方へ間合いを詰めてきた。

さすがにダンジョンのボスなだけの事はある。

船長の攻撃が俺に当たるか否かというタイミングで俺は垂直にジャンプをして回避すると共に攻撃を仕掛ける。

『居合・死之太刀（対地）』

完全に攻撃後の硬直時間だった船長は虚を突かれ俺の攻撃をまともに食らった。

「ぐおあぁおお」

船長を3mほど吹き飛ばしたが、やはり真空波が出ない事もあり大きなダメージにはならなかったようだ。

まあ、それでも船長の胸には十字の傷跡が出来ていた。

確かに船長は間違いなく強い。

けど、アレクのようにテクニカルタイプという訳でもないし、武器

に小細工が仕掛けられている訳でもない。
倒し難いけど、アレクよりは楽な相手だ。

そうと分れば早々に決着したところだ。

俺は縮地で間合いを詰め、攻撃の準備を始める。

船長はそんな俺の動きを読んでいたのか、横へ薙ぎ払う2連続攻撃を仕掛けた。

『居合・伍之太刀』

俺はその動きをある程度読んでいたので、このような姿勢から技を繰り出した。

しかし、船長はジャンプする事でそれを回避した。

ま、これも予想していたのだけど…。

『居合・蜂之太刀（対空）』

ジャンプ後の無防備な船長に対して連続攻撃で追い討ちを駆ける。
さすがに、これは避け切れなかったようでまともに攻撃を食らったようだった。

俺の連続攻撃は天井に船長が激突する事で要約止んだ。

そして、天井から床へ落下し船長は悶絶した。

「ぐはっ…!？」

しばらく倒れたまま動かなかったが、よろけながら立ち上がると俺を睨んだ。

しかし、そのままフラフラと壁の方によろけて行った。

所謂、ピヨリ状態ってやつだな。

「ぐう…ばかな…」

このタイミングを逃すわけにはいかない…。

俺は、縮地を使い一気に間合いを詰めた。

船長は、朦朧とする意識の中で間合いを詰めている俺を確認し、右手に持っていた戦斧をトマホークのように投げた。

あの大きな戦斧を簡単に投げるとはやはり腕力は凄まじいな…。

俺は、左に軌道を微調整しスピードを落とさずに避ける。

だが、船長はある程度避けられるのを覚悟していたようで、調整した軌道にもう1振りの戦斧が迫っていた。

これは間に合わないかもしれないと俺は思ったが、いまさらこの勝機を逃す訳にもいかないと思い、掠める事を覚悟して右に軌道を微調整した。

右肩に戦斧が掠り、激痛が走ったが最後の技を俺は繰り出した。

『奥義・剣結界』

壁際でこの技は非常に強力になる。

いわゆる、ハメ技というやつだな。

逃げ場がない所で使うと避ける事が出来ず、防御をしても連続する攻撃に耐え切れず数撃後には無防備な状態になっている。

「!!!!!!!!!!」

船長は言葉にならない叫び声と共に俺の攻撃を連続で食らい、体中の血肉を撒き散らしながら段々と空中に巻き上げられていく。

本来なら空中でお手玉状態になる感じなのだが、壁に阻まれ剣の結界に押し潰されていく感じになる。

ジョーイと違い、船長とレベル差があるといっても精々＋10ぐら

いだ。

レベル差の結構あるジョーイに現段階でこの技を出したら死なないまでも結構なダメージを与えられる筈…それ程なのだ。

すでに、船長の身体は跡形も無く肉片と化していたが、SPが切れるまで俺の技は止む事がなかった。

本当、これが唯一の欠点だ…。

「はあはあはあ…」

戦闘中は気付かなかったが、俺は前回と同じようにその場で気を失いかけた時、外から大きな爆発音と砲撃音が聞こえてきた。アヤカも海賊船とやってるみたいだな。

俺はよろめきながら物陰に向かい玉座の後ろに座り、震える手でリュックからSP回復ポジションを取り出し…気を失った。

・ ・ ・ ・ ・

そして、俺は目を覚ますとユルギスの街の宿屋のベッドで横になっていた。

「目覚めたかしら？」

俺は顔を横に傾けるとアヤカが微笑みながら隣のベットに座っていた。

「…アヤカが助けてくれたのか？」

「いいえ、私は運んだだけよ。ザキラがアキラを見つけたのよ」

精神領域で繋がっているザキラは俺の居場所をアヤカに伝えたようだ。

「そうか…」

「ほんと、気を失う技はあまり使わない方が良いわよ？」

「ああ、そうだな。改良の余地があるな。」

ところで、アヤカの方はどうだったんだ？」

「私の方？ まあ、時間は掛かったけど沈めたわよ」

「そうか…」

簡単にアヤカは言ったが、確か蒼の海賊の船は戦列艦だったような気がするのだが…。

・
・
・
・
・

その後、色々消費しすぎた俺に配慮したのか、アヤカの提案で俺達

はユルギス島を後にし要塞都市へ戻って来た。

そして、傭兵ギルド出張所で海賊討伐の報告をし、その報酬で今は酒場で食事をしているところだ。

そうそう、蒼の海賊を壊滅させたという事で、ギルドから多額の報奨金を貰えた。

壊滅は想定外だったようで依頼にはなっていなかったのだが、実際はノースブレイとハイランドから賞金を賭けられていたみたいだ。

アヤカと色々話して出た話題なのだが、アヤカは新たな通名を手に入れたようで、俺にも通名が付いたんじゃないかという話が出た。そういえば、確認する時に気付いたのだが、通名を手動で切り替える事が出来なくなっていた。

どういう理屈で現通名が決定するのか分らないが、アヤカは『光迅』から切り替える事は出来ないらしい。

ちなみに、アヤカが入手したのは『海賊船狩り』だ。海賊狩りならよく聞くのだが、海賊”船”狩りは初めて聞く通名だ。

そして、俺には『蒼の海賊狩り』という通名に固定された。レアなのか一般の通名なのかよく分らない称号だ。

この際だから、現ステータスを確認したら、この話は切り上げて食事に集中しようと思う。

「メニュー：スタータス確認：」

名前Ⅱ苗字ⅡアキラⅡローグライト

通名Ⅱ蒼の海賊狩り

年齢Ⅱ15

性別	.. 女
種族	.. ハーフエルフ※
属性	.. 光・炎
主職業	.. 傭兵
副職業	..
役割	.. 剣士
名声	.. 6587
序列	..
ランク	.. 38983150
賞金額	..
利き腕	.. 両利き
流派	.. 月守流居合剣術
流派	..
所属国	.. ノースブレイ王国 (オード王)
レベル	.. 46
HP	.. 2256 / 2256 (+20)
MP	.. 2364 / 2364 (+30)
SP	.. 2013 / 2013 (+20)
腕力	.. 162 (+30)
脚力	.. 123 (+20)
体力	.. 95 (+2)
器用	.. 145 (+25)
敏捷	.. 119 (+12)
視力	.. 89 (+8)
指揮	.. 6
魅力	.. 73 (+10)
突破	.. 38
妨害	.. 14

詠唱…121(+15)

運…32

魔法力…170(+20)

法力…109(+10)

魔力…99(+10)

霊力…139(+25)

神力…25(+5)

呪力…0

見ての通り、通名に蒼の海賊狩りが追加されている。

ちなみに、設定されている通名によってNPCやMobの反応が変わる仕様になっている。

例えばだが、海賊狩りが通名だったとすると、海賊に対して+5%の追加ダメージと海賊Mobからの敵対心が一段階プラスされる。改変後どうなっているかは知らないが…。

後は…名声とランクがかなり上がったな。

それ以外では、突破・妨害・運が少し上がっているな。

まあ、レベルも大して上がっていないので、こんなものだろう。

・
・
・

いや、ユルギス島に行ってから3日しか経っていないのに、久々にまともな食事を食べた感覚だわ。

明日の事は明日考えるとして、今日は存分に食事を楽しむ事にしよう。

第20話【壊滅】（後書き）

どうだったでしょうか

アレク戦の蛇足のような感じになってしまいましたね

第21話【帰路】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

第21話【帰路】

昨日、酒場でたらふく食事を堪能した後、俺はすぐに眠ってしまったようだ。

というか、宿に戻った記憶さえない。

酒は飲んでいない筈なんだが…。

それはそうと、上半身の防具が壊れたので防具屋に買いに行こうとしたら、

「その格好で昼間歩くのはどうかと」などと言われアヤカに止められた。

代わりにアヤカが買いに行ってくれた。

で、今アヤカ待ちの状態だ。

これからの予定だが、自宅へ戻り夢幻刀の代わりを倉庫から取り出した後

闇の森でLv50までレベル上げして、精霊探索を本格的にするつもりだ。

取り合えず、闇焔を倉庫に預けて蛇腹剣を予備装備として持って行く。

残念ながら、このゲームはいくらでも武器を持ち歩けるという訳ではない。

大型サイズの武器は基本、背中にしか仕舞う事が出来ない。腰に差す事も不可能ではないが、色々な制約がある。

標準サイズの武器は両腰と尻上の3箇所、小型のサイズと暗器は両腕と両太ももの4箇所だ。

例外として、マントやコートなどに武器の収納箇所がある装備もある。

基本的にリュックには武器を収納できないが、鞘を差し込むスロットが設けられた物も一応存在する。結構多く感じるかもしれないが、干渉具合によってかなり少なくなる。

重量の関係もあるので、せいぜい1〜3個が限界だ。

で、夢幻刀の代わりが主武装（左腰）で、蛇腹剣が副武装（尻）とあったところだな。

蛇腹剣が左腰の装備と干渉するように思えるが、剣身を分割する事で干渉を防いでいる。

闇焔は、大型な上に腰の蛇腹剣と干渉するので背中にしか付けられない。

で、リュックに干渉するとなると倉庫行きとなる。

鞘が手に入ったら倉庫から取り出す予定だ。

っと、アヤカが戻って来たみたいだ。

「良い装備が手に入ったわよ」

「ほう…」

「黒龍革の鎧と白龍革の兜…それ以外にもゴーグルとリュックも…。本当は単品で買おうとしたんだけど、セットだったら安くするって言われてね」

「ん？プレイヤーの商人？」

「そ、なんでもイスカ王国から仕入れたネ…みたい」

「ふん」

「はい、これ。早速着替えて」

と、一杯詰め込まれた紙袋を渡される。

アヤカは部屋が一旦出て俺が着替え終わるのを待つらしい。別にアヤカに着替え見られても今更恥ずかしくはないのだが…まあ良い。

「どれどれ…」

俺は、紙袋をひっくり返し中身を取り出す。

…ん？…これは……

「アヤカツ」

「え？もう着替え終わったの？」

アヤカが、扉を半開きにして覗いてきた。

「いや、まだだけどさ。この装備ちゃんと確認して購入したんだろ
うな？」

「まあ…それなりに？」

「それなりに…とは？」

「まあ、細かい事は良いじゃない。はいはい早く着て頂戴。
ちゃんと着なさいよ、今度は見てるからね」

アヤカは新装備を俺に押付ける。

「ちょ、おい、やめろ。俺はこんなの着たくない!」

黒龍革の鎧は、言うなればオールドスクールモデルの水着……略してスク水だ。

競技用水着でなくて、下半身部分がスカート型のやつだ。

ご丁寧に胸部に「6年3組あきら」と書かれている…。

白龍革の兜は、どう見ても水泳用のキャップだ…。間違っても兜ではない。

それ以外にゴーグルやビート板型のリュックなど…。

イスカ王国で仕入れた事やあのエ○ゲー風の制服と同じように、生産者の悪意と趣味丸出し感溢れるデザインが、デジャブとしか思えない装備品だ。

イスカ王国の防具職人は変態しかいないのか?!

いや、待て。同じ生産者の可能性の方が高いな。

忘れもしない…あの制服シリーズの生産者の名前は、シュウジリアップルという奴だ。

俺は、渡された装備であるスク水もとい鎧の詳細を確認する。

黒龍革の鎧

ベース…ボディスーツ

生産者…リーヤリアップル

耐久…300/300

防御力…100

備考…龍革効果、魔法ダメージ50%、

名品効果、物理ダメージ30%

生産者コメント…水着マニアの心を揺さぶる至高の逸品。

ん？ボディースーツ…これ下着じゃないか…。

生産者は…名前からして同じプレイヤーだな。

防御力はかなり低いが…効果がかなりやばい能力だ。

というか、生産者が水着って言っちゃってるよ！？

「はい、これは右手に持った方が様になるかな」

と、ビート板型リュックを手にしたせる。

「完璧過ぎて恐い…」

「……………」

俺はアヤカを冷たい目で睨む。

何だコレ…なんで仮想世界でスク水を着なきゃならん。

俺は一応男なんだぞ。見るのは好きだが自分で着るのは勘弁願いたい…が、手遅れだな。

「ははは、冗談よ。はい、こっちが本当の新しい防具」

で、新しく渡された鎧は、「魅惑の学生服・上」だった。

案の定、生産者は、シュウジⅡアップルだった。

魅惑の方にも学生服があったとは驚きだ。

デザインは、胸元が開いていない代わりに何故か両肩が丸出しになっている。

もう、ツツコム気も起さないデザインだ。

性能は「純真の学生服・上」と同じだった。

「と、これはプレゼントよ」

次に渡されたのが、「赤龍髭のスカーフ」という肩用の防具だ。龍髭って硬いイメージがあるが、どういう加工したのだろうか。生産者はリーヤルアップル：にしては全うな防具だ。

デザインは普通だし、変な特殊効果も付いていない。

赤龍髭のスカーフのお陰で両肩が丸出しだったのが良い感じに隠れたようだ。

ちなみに、性能はこんな感じだ。

赤龍髭のスカーフ

ベース…スカーフ

生産者…リーヤルアップル

耐久…80／80

防御力…100

備考…龍髭効果、物理ダメージ30%、

名品効果、被クリティカルダメージ15%

生産者コメント…もう少し面白みのあるやつを作れば良かった

…こいつ、装備品に何を求めてるんだ…。
で、結局こうなった。

<防具>

頭…

顔…魅惑のリップクリーム

首…傭兵タグ

耳…魅惑のイヤークラス

肩…赤龍髭のスカーフ

背…

上半身（上）…魅惑の学生服・上

上半身（下）…黒龍革の鎧

腰…純真のセーター

下半身（上）…純真の学生服・下

下半身（下）…黒龍革の鎧

靴下…純真のニーハイソックス

靴…純真の龍革ブーツ

右手…

左手…

鞆…リュック型学生カバン

<魅惑セットボーナス>魅力+20、同性を惹き付ける。

まあ、見た目やデザインに目を瞑ればかなり良い性能のものばかりになった。

スク水なのは気に入らないが、これの効果が非常に高い。

純真のセットボーナスがなくなった…俺的には喜ぶべき事だな。

というか、服の下に鎧があるのは何か変だな。

ま、実際は鎧ではなくて下着だが…。

・
・
・

「アキラ、準備は出来た？」

「ああ、問題なくもないが大丈夫だ」

「じゃ、寄合馬車で自宅のある都市まで直行で良いよね？」

俺とアヤカは、宿を出て寄合馬車の停留所がある南門まで移動した。寄合馬車とは、読んで字の如く馬車の荷台に人が乗れるスペースがある。

まあ、バスってやつだな。

ぶっちゃけ、徒歩（全力疾走）よりも移動スピードは遅い。

しかし、スタミナが消費しないので最終的には寄合馬車の方が早く到着する。

この世界での移動方法は、徒歩・馬・寄合馬車・船・飛行船などがある。

ちなみに、飛行船はセントラルブレイ王国、フィラシエット王国、カルディア王国、ロードグリアード帝国の各首都にしか停泊しない。

それなりの大金を払って乗船出来るが、俺のような傭兵が利用する機会はほとんどない。

まあ、遠くで戦争が起こった場合にショートカットとして利用するぐらいだ。

主に利用しているのは行商をしている商人や海外遠征をする騎士などだな。

あー、名前が挙がったので簡単に国家の事を説明しよう。

セントラルブレイ王国は、現在いるノースブレイ王国の南に位置する国家だ。

闇の森を抜けた先に国境線がある。

大昔にあったとされる古代ブレイ王国の首都があったとされ、現在の王都に再利用されている。

フィラシエット大陸にある唯一の国家がフィラシエット王国だ。

他の大陸にはいないような珍しいMobや高レベル帯のMobも存在する。

世界に3箇所しかないとされる龍種が生息する地域がある。
改変後、フィラシェット王国に関する一切の情報が遮断されている。
今、どうなっているのかが全く分らない状態だ。

カルディア王国：多種族が交わる移民国家だ。

地理的にも似た場所にあるし、元ネタは間違いなくアメリカ合衆国
だろう。

銃の生産やアームズと呼ばれる圧縮された魔力を放つ個人携帯古代
兵器の発掘などもこの国家の特有だと言える。

ロードグリアード帝国は、極寒の地にある大国でダークエルフ族が
多い。

取り合えず、よく戦争をする国という認識がある。

列強の時代は、このロードグリアード帝国が発端で、南に位置する
華朝連邦や東のカルディア王国へ戦争を吹っかける感じだな。

アースガント族の隠れ里もこの地にあるらしい。

プレイヤーでこの種族を選択する者が極少数人数上にNPCのアイ
スガント族もほとんど見掛けない。それ故、正確な場所が分らない。
知り合いにアースガントのキャラを使っている人がいるが、その辺
を有耶無耶にされた。

ちなみに、その知り合いは”八迅”の1人だ。

ついでに、華朝連邦は武狭の国と言えるな。

他の国家にはない珍しい流派が多く、母数自体も多い。

珍しい流派というのは、鉄扇や鋼線や鉄爪などで、これに限っては
他の国家にはない。

噂レベルだが、シークレット流派は2つもあると云われている。

基本、1国家につきシークレット流派は1つとされている。

あと：ここにも龍種が生息する地域がある。

ああ、度々名前が登場しているイスカ王国もシークレット流派が2つあるという噂がある。

こっちは、母数自体が少ないので信憑性は非常に低い。

ま、こんなものだろう。

さて、到着までまだまだ時間が掛かりそうなので、少し眠るとしよう。

第21話【帰路】（後書き）

どうだったでしょうか。

第22話【情報】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第22話【情報】

日が暮れた頃、我が家がある都市に俺達は戻って来た。

夕食と情報収集を兼ねて酒場（傭兵ギルド）へ俺達は向かった。

酒場へ入るといつもより随分賑やかな雰囲気になっていた。

3割増ぐらいに多いかもしれない。

大体、混んでいるといっても空きの席がパツと見ても分るぐらいだったが、今回は空いている席が見当たらない。

「何かあったのだろうか？」

「さあね。それよりも私は空腹だわ。早く席に着きましょ？」

「ああ…。でも、空いてるか？」

「探せばあるわよ。私は席探しておくから、アキラはギルドで情報仕入れてきたら？」

「ああ、わかった」

俺はアヤカと別れ、傭兵ギルドの受付カウンターへ向かった。前に会った職員と違う人だった…交代制なのだろうか。

「ようこそ、傭兵ギルドへ。今日はこういった御用件ですか？」

「闇の森についての情報と関連する依頼があれば紹介して下さい。登録番号は、390067581です」

「少しお待ち下さい……………」

お待たせしました。その前にアレックスⅡナインライドの討伐をされていきますよね？

これが報奨金となります。お受け取り下さい。」

「あ、いや。ボクは討伐していない。アヤカⅡツキカゲが討伐した事になってる筈ですが」

「ツキカゲ様のご要望により3分の1は、あなたに入るように手続きされているようですが？」

「そうなのか？分った受け取っておくよ。

ボクとアヤカの報奨金は、1000Gだけ手渡しで残りは口座へ振り込んでおいてくれ」

「分かりました。……それでは、これが1000Gです」

俺は、ギルド職員から1000Gの入った袋を2つ受け取る。

「では、闇の森に関する情報ですね」

「ああ」

「現在、闇の森は一般人の立ち入りを禁止しております。

アースガント族の1人が、足を踏み入れた者に無差別で襲っているからです」

「ちょっと待ってくれ。確かそれは2、3ヶ月前にも聞きましたけど？

騎士達に討伐命令が出されていた筈」

「はい。何度か騎士達の討伐作戦が決行されました。ですが、討伐どころか騎士達に大勢の負傷者が出まして、現在その討伐は傭兵の方へ依頼として回って来ております。騎士からの止む得ない依頼という事もあり、以前よりも報奨金が上乘せされ19200000Gとなっております」

「それだけの額だと誰か討伐しに行った傭兵がいるんじゃないですか？」

この額だと、上位ランクの傭兵が討伐しに行っても不思議じゃない。

「はい、そう思って現在ノースブレイ王国に滞在している上位ランクの傭兵に

ご推薦しようと思ったのですが…。

残念ながら雷迅ヴォルトを含めほとんどの上位傭兵が出国されておりました。

アヤカⅡツキカゲ様に連絡しようと思ったのですが、タイミングが悪かったようで…」

「ん？なら、アヤカを呼んで来ましようか？
酒場の方にありますし…」

「あ、いえ。伝言だけお願いできますか、後日お返事を頂ければ良いので…」

「分かりました。そうします。じゃ、情報の方を教えてください」

「まずは、依頼などに関しての情報です。」

1つ目は、行方不明になった人達の搜索です。

これは、恐らくですが、アースガント族と連動する依頼だと思います。

彼に襲われたであろう、商隊や傭兵の行方が分らなくなっており、その捜索ですね。

生死は問いませんので発見したら、連れ帰って下さい。

死亡していた場合は遺品だけでも持ち帰ってください」

アヤカがアースガントの依頼を受けたら、ついでに受ける感じで良いな。

というか、傭兵まで行方不明になっているのか…。

「2つ前は、レッドアイベアの討伐です。

レッドアイベアの親子熊の目撃情報があり、闇の森近くの民家が襲われたという報告が入っています。

母親熊と見られる熊は、体長3mほどあると言われており、早期討伐を望んでいます。

なので、ご依頼を受けてから報告までの期間が短ければ短いほど報酬金が上がります。

注意して頂きたいのは、受けてから1ヶ月過ぎますと依頼放棄となりまして罰金が発生します」

レッドアイベアは、個体差によるレベル差が激しいMobの筈だ。改変前なら下はレベル30ぐらい、上はレベル80ぐらいだった。

レベル30ぐらいの熊はいわゆる小熊だ。

体長は、1.50mぐらいで大きくはないが、凶暴なのは変わらない。

レベル80ぐらいにもなると体長が3mにも及ぶ、そこらにいるエリアボスよりも強い。

「3つ目は、ウッドウルフの討伐です。

実質的な被害報告はないのですが、ウッドウルフの毛皮をご所望してる商人の方の依頼です。

大体30枚ほどで良いそうですが、1枚ずつ増える毎に追加報酬を払うそうです」

ウッドエルフは、闇の森で一番生息数が多くレベルの低いMobだ。大体、レベルは40ぐらい、まあレッドアイベアの小熊よりはレベルが高い。

ウッドウルフは、生活のほとんどを木の上で暮らす狼には稀な存在だ。

しかも、群れで生活しているのですごく厄介なのだ。

毛皮の色は、緑と茶色のツートーンの迷彩色なので目視で見付けるのは難しい。

襲われるのを待つしかないのだ。

まあ、気配察知やディテクトを使えば難しくはないのだが…。

「4つ目は、トレントの討伐です。

目撃情報が少ないので、私どもからもあまりアドバイス出来る事は少ないです。

過去の目撃情報では、トレントの周りに異常と言えるほどのウッドウルフが群れていると聞いた事があります。

討伐依頼はありますが、ここ6、7年誰も目撃していませんし期待はしておりません」

改変前だと、ウッドウルフを100匹近く狩ると出てくるエリアボスだった筈だ。

トレント本体も厄介だが取り巻きのウッドウルフとレッドアイベアの方が脅威だ。

なんせ、レベル45〜50ぐらいのウッドウルフが30匹ほどとレベル90のレッドアイベアが2匹なのだ。

それだけじゃなく、周囲100m以内のウッドウルフを呼び寄せる「遠吠え」スキルを持っているのだ。

レッドアイベアの方も、「威圧」という、自分よりレベルの低い相手に対して一時的に能力を下げるスキルを持っている。

トレントは、地属性の魔術と射程の長い根による攻撃を多用する。しかも、魔術は無詠唱ときている上に、取り巻きMobを巻き添えにして使ってくる。

乱戦だと危険な存在だが、木なので火属性の魔術に弱いのが唯一の救いだな。

「こんなものですね」

「なるほど、良く分かりました。取り合えず、1つ目以外は全て受けておきます」

「では、ここにサインをお願いします」

俺は、依頼書の受領欄に傭兵登録番号と名前をサインする。

「1つお聞きしたいのですが…」

「何でしょうか？」

「闇の森に精霊がいると聞いた事があるのですが何か知りませんか？」

「精霊ですか……、そうですね。

数百年前まで闇の森には、闇の精霊ベルセウスがいたと伝わっています。

闇の森の由来でもありますね。今もまだいるかは分かりません。

石碑の場所は確認されておりませんし、精霊使いが訪れたという話も聞いた事ありません」

「そうですか……。ありがとうございました」

「お役に立てませんで申し訳ありません」

俺は席を立ち礼を言い、その場を離れ酒場の方へ向かった。

アヤカはどこにいるかなっと。

俺は酒場の中を見渡すと、奥の角にあるテーブルでアヤカが手を振っているのを見つけた。

・
・
・

「お待たせ」

「もう料理の方は注文してあるから……」

「ふむ。なあ、アヤカ。

傭兵ギルドの職員がアヤカにアースガント族の討伐を依頼したいそうだ」

「ああ、あの……。まだ、討伐されていないんだ？

というか、私じゃなくてもこの都市ならいくらでも上位ランクの傭兵いるでしょ？」

「いや、今は狩る事が出来そうな傭兵はアヤカだけらしい……。

俺の予想でしかないが、ヴォルトと同様でフィレシエット大陸に向かったんじゃないかな」

「なるほどね。ま、後で話だけは聞いてくるわ。で、こっちの話なんだけど…。

この満席状態の原因は…ほら、あそこ…カウンター前にいる人。あの人が原因みたい。

何でも改変によって変わった事の情報を世界中で集めているらしいわ。

んで、今、あそこで情報の提供と収集をしていて、人だかりが出来ているの…。

テーブルにいる人達は、順番待ちがほとんどかな」

アヤカが指差した先には、人だかりがあり、その中心にフード付きのコートと大型のリュックを背負った人がいた。

その服装は、長距離の冒険や旅行する際のオーソドックススタイルだ。

世界中を旅しているのは間違いなさそうだ。

「そうなのか…。という事は、ここにいる人達は全員プレイヤーって事か…」

「みたいね」

「ま、気になりはするが、まずは腹ごしらえだ。腹減って仕方ない」

「ふふ、そうね。あ、来たみたいよ…料理」

アヤカの視線の先には、人だかりを器用に避けてこちらへ来るウェイトレスがいた。

テーブルに色とりどりの料理が運ばれてきた。

そして、アヤカの前にはワインが俺にはコーラっぽい炭酸飲料が置かれた。

「なんで俺だけジュースなんだ？」

「アキラは未成年でしょ。それにお酒飲めるの？」

「飲めないな…」

確かこのキャラになってから一度だけ酒を試したが、すぐに酔い潰れた気がする。

リアルでもあまり酒は飲まなかったしな。

・
・
・
・

「大分、人が減ったわね」

「そうだな」

情報交換の時間が終わったのだろうか。

俺達が夕食を食べている間にあれだけ満席だった酒場内は、人も疎らになり厨房内の食器を洗う音が聞こえるほど静かだった。

「こんばんは。少し宜しいですか？」

その時、俺の背後で男が声を掛けてきた。

さっきまでの人だかりの中心にいたプレイヤーだった。

「ああ、良いですよ。で、ご用件は？」

大体、察しは付くが一応聞いてみた。

「私と情報を交換して貰えればと思ひまして…。
先ほど交換してませんよね？」

「そうですね」

あの人ごみには入りたくなかつたし、空腹だったのもある。

「早速ですが、まずは私の話を聞いてもらえますか。

OS社が発表していた情報とプレイヤー達から集めた情報を合わせた話になります。

その上で、あなた達が持っている情報がその中になれば私に教えて下さい」

「わかりました。どうぞ…」

「はい」

・
・
・
・
・

彼の話は、大体30分ほど掛かった。

その中で俺達が知らない情報がいくつかあった。

大体察しは付いていた事だが、デスゲームであるとの事。死亡したらゲーム内から存在が消えるらしい。

これはOS社の調査により改変後閉じ込められたプレイヤーの人数

が減少している事から間違いないとの事。

ただし、24時間以内に蘇生法術を施せば生き返る事が出来るらしい。

魂のような存在になり、その場で蘇生されるなで漂うらしい。

改変前は、2時間半以内に蘇生されれば生き返った事から、

その10倍時間が遅い改変後は23時間もしくは24時間以内だろうとの事だ。

今までゲーム内に存在していなかった街や都市が各国に出現しているらしい。

ノースブレイというアビスタのような街なのだろうな。

恐らくだが、データとして存在していたが何らかの理由で実装されなかった街やイベント限定の街らしい。

これは、OS社に確認を取ってるので間違いないようだ。

それにともなって、今まで”要塞都市”と固有名称のなかった街や都市にも名前が付いたらしい。

改変前、この都市は”傭兵都市”と呼ばれていた…。

というか、今も俺はそう呼んでいるが、「ヴェユス」という名前が付いたようだ。

それと良く似ている事では、データとして存在していたが何らかの理由で実装されなかったアイテムや実装前のアイテム、さらには構想段階のアイテムまでも実装されているようだ。

ぶっちゃけ、改変前でもアイテムの数が膨大でほとんど把握仕切れていなかった。

どれが実装前からあった物なのか、なかった物なのか分らない。武器限定で言っても、伝説級は今の所アヤカの持つゴッドブレスだけしか発見されていないし、

比較的簡単に発見できると言われている唯一級でさえ一部しか発見されていない。

魔法や精霊にもそれは当てはまるとの事だ。魔法は俺も知っていたが、精霊もなのか…。

禁呪習得クエストが無くなったらしく、禁呪習得法がまだ発見されていないようだ。

いつか来るかもしれない対ヴィーナス戦に備えて禁呪の習得したいところだ。

何とか見つけ出したいな。

5年継続報奨のNPC種族ドラゴニアと10年継続報奨のNPC種族グレゴリの目撃情報があったらしい。

まだサービス開始から3年なので、NPC種族としてもまだ未実装段階だった筈なのだが…。

とすると、新たな国家もしくは地域が出現している可能性があるな。その辺は、OS社もまだ確認出来ていないらしい。

新しいカテゴリーの武器が実装されたようだ。

機工武器いわゆる剣と銃が合体した様な2種類の武器を合わせたハイブリット武器だ。

機械の義手で銃が内蔵されている防具は、次回アップデートで実装される筈だった。

機工武器は、それよりも後に実装される筈なのに改変によって同時に実装されてしまったらしい。

これに伴って機工技師というロールが実装されているらしく、プレイヤーの中にはすでになっている人もいるとの事。

ちなみに、モルディオ自治領区でしか販売されていないらしい。

モルディオ自治領区は、フィラシエット大陸に一番近い国家でカルディア王国領内にある。

リアルな地理的にハワイの位置にある。

島全体が都市で出来ており、港が島内部にある。

分厚い外壁に覆われて、島と海を唯一繋いでいるのが港のみと徹底されている。

船舶の造船も出来るようになったようで、それに伴って船舶の種類と船大工も実装された。

船舶のデータはデータ内にあったが、プレイヤーが利用できる船舶は限られていた。

船大工はそれ自体実装される予定もなかった。

E／O発表時のPVでちよっと出ていたが、”この映像は開発段階であり云々”通り実装されなかった。

それと改変前と改変後のデータ量の差異は大体40Gほどで、約1.5倍ほどに膨れ上がっているらしい。

彼の話によると情報屋をしているプレイヤーとOS社が協力して情報を集めているそうだ。

情報屋が情報を集め、OS社がデータとの照合と確認をしているらしい。

他にも色々気になる情報があったが、まあこんなものだろう。

・
・
・
・

「気になる情報はありましたか？」

「ええ、やはりデスゲームだったのね」

「まあ、蘇生できるなら良いんじゃないか…」

「その辺に関しては、死亡する確率を極力控える為に、みなさんはクランを結成したらいいです」

「クラン？」

アヤカは、E／Oが初めてのMMOだから聞きなれない言葉のようだ。

俺は、まあ学生の頃UO2に出会う前はネット難民だったし、色々なゲームに手を出していたからクランの事は知っている。

実は、E／O特に傭兵をしているプレイヤーはソロプレイが基本だ。俺やアヤカのように師匠と弟子の関係にあるようなペア狩りをする者達がいる。

組んだとしても少人数のパーティなのだ。

騎士には、システム上”騎士団”と呼ばれるパーティが存在するが、傭兵にはないのだ。

あえて言うなら、依頼の人数指定によって一時的パーティを組まざる得ない時のみ集団行動をしている。

システム上、パーティがない傭兵には集団で行動するメリットはほとんどないと言えるな。

傭兵の中には1つの目的を達成する為、行動を共にする者達がいるがかなり特殊だ。

例を挙げるならば、”龍殺し”を専門にする集団や戦争時の傭兵騎士団あたりだな。

ちなみに、”八迅”のメンバーは、戦争時に一時的に組んだ傭兵騎士団の仲なのだ。

お互いフレンドであったが、パーティやクランを結成していた訳ではない。

戦争に勝利するという目的があったからこそ、一時的に組んだに過

ぎないのだ。

「ええ、他のゲームというギルドですよ。傭兵ギルド等と差別化する為にクランと呼んでいますが、行動を共にする仲間と言ったところでしょいか」

ちなみに、このゲームのギルドは、傭兵ギルド、魔術師ギルド、職人ギルドがある。

プレイヤーが作れる商会や情報屋のネットワークもギルドに含まれる。

「なるほどね」

「では、そちらの情報を教えて頂けませんか？」

「教えて頂いた情報に少し近い情報ですが…伝説級の上に神話級というランクが実装したみたいです」

「神話級ですか…？」

情報屋は、なんだそれ？みたいな表情を浮かべた。

「それは、見たのですか？それとも入手したのですか？入手したのなら、如何程の性能なんですか？」

疑っているようだが、興味はあるみたいだ。

「入手しましたが、使用は出来ません。」

性能は、伝説級を大きく上回りチートと呼ばれてもおかしくないですね」

「使用できないとはどういう事ですか？」

「鞘がないと焼け死ぬ仕様のようです。

恐らくですが、これ以外に神話級があったとしても何らかの理由で使用できないのと思います。

まあ、推測ですけどね」

「なるほど：是非ともその武器を見たいですけど、今回は諦めましょう。

取り合えずは、それ以外に何かありますか？」

「先ほどの話にMPを使い切ると気絶するという話がありましたが、SPが切れても同様に気絶しますよ」

「それは実践した結果という事ですか？」

「はい、まあ、SPを使い切る技がありました…」

改変前なら一時的な行動不能だったので自然回復でも余裕だったのだが、

さすがに気絶は良くないよな…ほんと。

要改良だ。

「これだけですね。後は、あなたの情報に類するものばかりです」

「貴重な情報ありがとうございました。それでは、私はこれで…。

あ、私の名前はヒューイーカーバインです。

次お会いした時は是非とも神話級を見せて下さいね」

ヒューイと名乗った情報屋は、俺達に手を振り出口へ向かっていった。

「じゃ、私達も出ましようか」

「ああ、そうだな」

「私はギルドへ寄って行くからアキラは先に帰っておいて…」

「了解」

俺は、酒場を出て1人で我が家に帰った。

第22話【情報】（後書き）

どうだったでしょうか
前話から大分、間を空けてすみません。

第23話【木狼】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

大分、遅くなってすみません。

私の乏しい知識で魔法の詠唱文を考えるのに苦勞しました。

た。
で、姉妹品は兼六の様に桜の名所の名前の一部が桜吹雪の後に付く
感じた。



◆神刀・夢幻刀むげんとう

ベース…居合刀

生産者…イトウシホウイン（プレイヤー）

耐久…480／480

攻撃力…1200

必要能力…腕力90、脚力120、器用110、敏捷110

備考…神刀効果、刀身を視認出来ない。居合時攻撃速度2倍

生産者コメント…夢幻刀最高傑作。

こちらは、あの夢幻刀の試しじゃない方、本番で作ったモノだ。
見ての通りプレイヤー生産品にしては攻撃力かなり高い。
居合い時に攻撃速度が2倍になるのは、居合を多用する俺としては
かなりお得と言える。



◆魔杖・フランヴェルジュロッド

ベース…地獄焰の杖

生産者…エルネスワークナー（プレイヤー）

耐久…350／350

攻撃力…1050

必要能力…腕力140、詠唱110、魔法力130、魔力90、法力90

備考…魔杖効果、炎属性詠唱時ワンスペル発動可能。ただし消費MP2倍、耐久が1減少

魔刀効果、刀身に炎を宿す。状態異常「火傷」+50%

唯一級効果（杖）、二重詠唱可能。一定確率で消費MP0

唯一級効果（刀）、炎の開放（2m）、スティーラー以下の金

属融解

生産者コメント…唯一級の杖に唯一級の刀を仕込みました。俺の最高傑作だぜ。ヤホーイ

次は、フランヴェルジュ。

俺の7代目キャラであるエルネスの最高傑作だ。

ああ、生産者コメントは気にしなくて良い。

完成した時、かなりハイテンションでその場のノリでついあんな事を書いてしまった。

少し後悔している。

貴重な唯一級を2つ組み合わせたので効果はプレイヤー生産品としては段違いの性能だ。

効果が闇焔に近い性能なので将来的な事を考えてこれを選択するのもありだ。

実は、フランベルジュという炎属性の西洋剣（名品等級NPC生産）があるが、それと区別する為にベをヴェに変えてある。

フランヴェルジュは、それぞれパーツ毎に分解した後組み合わせるだけなのだが、

合わせれば出来上がる訳でもなく余ったパーツを溶かして一旦材料に戻し別のパーツとして接合部分に組み込むのだ。

新たに材料を用意し接合部分に使用した際は、唯一系の効果全般が

と言えるな。

彼が造ると基本武器であろうと名品級に昇華するのだ。

神刀（名品級最高性能）を造ると恐らくだが、叙事詩級の性能になるだろう。

とはいえ、効果は名品止まりだが…。

ちなみに、朧は何本かある朧シリーズの第一作目だ。

さて、この4つから選択するでしょう…

見た目重視なら桜吹雪だろうな。

ピンク色に淡く光る刀身、振るうと花びらに模した光が散りばめられる。

さらに、兼六は花びら自体にダメージ判定があるから性能も悪くない。

性能は、夢幻刀とフランヴェルジュだな。

居合を重視するなら夢幻刀で決まりだ。

魔法重視ならフランヴェルジュだな。

コストパフォーマンス（修理費用）は、朧だな。

初めミスリルで出来ていると思っていたが、実が真鉄製だった。

純度が100%とはいえ鉄なのは変わらないので、

前者3つ比べれば比較的に手に入りやすく安価だ。

困ったな…、どれも魅力的だ。

第一候補はフランヴェルジュだ。

次点で夢幻刀と桜吹雪だ。

朧は今回外そう。

「どれにしようかな、神様の…（省略）」

適当に相応しいやり方でフランヴェルジュに決定した。

闇焔の練習と思えばこれで全く構わないだろう。

実は、真空波の事なのだが、属性武器を使うと属性に応じた波になるのだ。

フランヴェルジュというと炎属性だが、真空波が炎を纏った熱波に変化する。

まあ、もし月守流居合剣術に蛇腹剣が対応すると属性が付与されていた場合、想像を絶する事が起こりかねない。

よし、武器を決定した事だしアヤカに合流するかな。

アヤカは今道具屋などへ買出しに行っており酒場兼傭兵ギルドで落ち合う予定だ。

・
・
・
・

「待たせたか？」

「まあ、そこそこね。」

で、持っていく武器は決まったの？」

アヤカは視線を俺の腰へ落とし武器を確認した。

「見た事のない武器ね…これはロッドかしら」

「半分正解だな。ロッドでもありイスカ刀でもある。」

エルネスの作品だよ」

「へえ、これがねえ」

エルネスの時はアヤカとほとんど会っていなかった。

時代が変わった時に一度会った後は、ずっと遠距離会話で連絡し合っていた。

だから、アヤカはエルネスが武器職人キャラだという事以外知らないのだ。

「それにしても、やけに凝ってるわね」

「唯一級を組み合わせたからな…」

確かに唯一級だけに装飾は凝った造りをしてる。

「え、そんな事できるの？」

「出来るか出来ないかなんてやってみなければ分らないだろ…。だから、やってみたのさ。ま、色々失敗したけどね」

「なるほど。じゃ、行きましようか」

反応薄っ。

・
・
・

俺とアヤカは、南門を出て丁度闇の森に入る少し手前まで来た。

「今回はアキラには厳しいMobもいるし手伝う事にするわ」

「ああ、頼む。取り合えず、野営地を目指そうか」

「ええ」

俺達は、道沿いにあるだろうと思われる野営地へ向かって歩き出した。

俺の勘が正しければアースガントに関する何かの手がかりが、この道沿いか野営地付近にある筈だ。

行方不明になっている商隊は、道を外れて進むと思われないからだ。

大体30分ほど奥へ進んでいると木の上ら辺から殺気交じりの視線を感じた。

恐らくウッドウルフだが、襲う気配はなくずっと見張っているという感じだな。

「…少し鬱陶しいわね」

「だな。けど、目視じゃさっぱり分らないな」

「ええ」

「少し走るか…。」

ウッドウルフの気配が後方に集中したら俺が木を切り倒すからアヤカは倒れた木に目掛けて矢の雨でも降らせてくれ」

「分ったわ」

アヤカの了承の声と同時に俺達は走り出した。

一気に100mほど駆け抜け気配が後ろになったと同時に俺は振り

返り技を繰り出す。

『居合・伍之太刀』

俺は草薙ぎの居合を繰り出し、真空波が……出ずに炎を纏った熱波が後方の木を切り倒さず一帯を焼き払った。
属性武器は、真空波でなかったのを忘れていた。

「あ…」

「あゝ」

木が燃える臭いと肉が焼ける臭いがあたりを充満していった。

「……矢必要？」

「いや、必要ないかも」

燃えてしまうと皮の剥ぎ取り出来ないな…。
今後からは、炎以外の魔法かザキラを召喚して彼にやらせようかな。

「毛皮、剥ぎ取れそうにないし先へ進むか」

「そうね」

俺達は、この惨状をなかった事にして先へ進んだ。

そして、1時間ほど歩いていったがウッドウルフの気配もなく順序よく先へ進めた。

「アキラ、止まって」

「どうした？」

「囲まれてるみたい…それも結構な大群に。多分、ウッドウルフと思うけどディテクトで確認して貰えないかしら」

俺の気配察知のスキルレベルが低い為、気付いていなかったただけだったようだ。

「了解。女神ヴィーナスの名において、見えざる者を映し出せ…ディテクト！」

ディテクトを発動させるとウッドウルフの群れが俺達を中心に80mほど離れて囲んでいた。

「これは…結構数が多いな」

「大体で良いからどのくらいいるの？」

「60弱ってところかな。俺達が歩みを止めたのに気付いたようだ。包囲網を狭めてるな」

それにしても統制取れすぎだろ。

リーダー格のウッドウルフでもいるのかも知れない。

改変したのだからそういったMobが出現している可能性は大にある。

「どうする？」

「分かれて戦いましょう。その方がお互い戦いやすいし」

「なら、俺は右の中へアヤカは左の中へ行こう。

終わったら野営地で合流だ」

「わかったわ」

俺達は同時に道から外れ森の中へ飛び込んだ。

俺の予測が確かなら前方180度50mほど先にウッドウルフの群れがいるはずだ。

さらに20mほど駆け抜けた後、足を止めて魔術の詠唱に入る。

来るのが分っていると対処がし易い、先制して一気に片付けよう。

フランヴェルジュに付いている特殊効果で2つの魔法を同時に詠唱出来るようになってるので、

詠唱するのは風と雷の範囲魔術の2種類だ。

「我に纏いし雷の鎖よ、我望みに答え敵を拘束せよ」

「重なりし風の刃よ、我が敵を切り刻み肉片とせよ」

前者は、詠唱者を中心に円状に広がる鎖の雷を放つ中位の雷属性魔術だ。金属製の防具を着た者に持続ダメージを与える特性がある。

後者は、前方扇状に幾重にも重なる風の刃を放つ中位の風属性魔術だ。居合の真空波を少し強力にしたような感じだな。

「チェーンライトニング」

まずは、ウッドウルフが俺に近付いてきたのを見計らってチェーン

ライトニングで先制をかけた。
これだけでは、殺しきれないだろうが…。

「ヴァオレットゲイル」

間髪入れず前方へヴァイオレットゲイルを放つ。
これで同レベル帯のM o bなら殺せる筈だ…。

ヴァイオレットゲイルの範囲外のM o bに対しての迎撃の為に再び
詠唱を始める。

次は土属性魔術で行こう。

「聳え立つ鋭き大地の御手よ、我を敵から護り抜け。ロックトウス！」

鉤爪状の岩が、俺へ目掛けて飛び込んできた複数匹のウッドウルフ
を釘刺しまたは切り裂いた。

これで残るは、最初の4分の1ほどである8匹に減った。
後は近接戦で仕留めるとしよう。

今、思い出したが雷魔術にライトニングブレードという魔力で構成
された雷属性の剣があるのだ。

一応、剣のカテゴリリーに入るので真空波もとい雷の鞭に変化した何
かが出せる。

使用間隔は蛇腹剣に近い感じだと思うが、伸縮は出来ず伸びたまま
で、

大体3 mほどの鞭っぽい何かが剣の延長線上に伸びるといった感じ
だ。

「鋭き雷の刃よ、我が武器となり敵を斬り刻め。ライトニングブレ
ード！」

俺の右手に雷の剣が出現する。
MPが尽きない限り消える事はない。

という事で、間合いが広い訳だしウッドウルフが迎撃よりもこっちから打って出た方が良さだろう。
俺は雷の剣を構え居合の体勢に入る。

『居合・弐之太刀』

雷の帯が一瞬で周囲を薙ぎ払った。
所詮、魔法の剣ウッドウルフを殺せるほどの威力はなく、雷により帯電し麻痺状態になっていた。
ならばと思い俺はもう一度同じ技を繰り返した。

『居合・弐之太刀』

同じように雷の帯が襲い小さな悲鳴と共にウッドウルフは息絶えた。
周囲に生きているウッドウルフがいないのを確認し、ライトニングブレードを解いた事で僅かな静電気を残し空中へ霧散していった。

横たわるウッドウルフを数えると全部で36匹いた。
アヤカの方と合わせると結構な数になりそうだ。

「儲け儲け…」

俺は無意識に呟きながら1枚1枚ウッドウルフの毛皮を剥ぎ取っていった。
戦闘していた時間より剥ぎ取っていた時間の方がかなり長いな。
2時間ほど時間をロスしてしまった。

改変前だと、1匹につき5秒も掛からなかったのに…。

さて、アヤカと合流する為に野営地を目指そう。

・
・
・
・

20分ほど森を駆け抜け要約野営地に辿りついた。

そこにはすでにアヤカの姿……と、何故かレッドアイベアの大と小が横たわっていた。

「あら、遅かったわね」

「ん、ああ。すまない。

っていうか、その死体なに？」

俺は横たわったレッドアイベアの死体を指差して聞いた。

俺の記憶が確かならば、この2匹は討伐依頼の親子熊で間違いないはず…。

「え、ここへ行く途中で後ろからいきなり襲って来たのよ」

「こいつは……やはり間違いないな。討伐依頼の親子熊だ」

依頼書と照合して確認する。

「取り合えず、討伐した証拠に何か剥ぎ取るか…」

「じゃあ、毛皮を剥ぎ取ったら良いんじゃない？」

確か、レッドアイベアの全身毛皮は結構な値で売れたはずよ」

「全身かよ…」

・
・
・

その後、俺は約1時間かけて2匹の毛皮を剥ぎ取った。

アヤカに手伝ってくれと言ったが、「討伐してあげたのだから剥ぎ取りぐらい1人でやりなさい」と言われた。

くそ、ウッドウルフとレッドアイベアの血の臭いが混ざって非常に気持ち悪い。

俺が剥ぎ取っている間アヤカは何をしていたかというとき水場を探しに辺りを散策しに行った。

俺は、ザキラとジャックを呼び出し辺りを警戒させ、テントの準備などをしてアヤカを待った。

1時間ほど後にアヤカが野営地に戻ってきた。

「……髪とか肌が微妙に濡れてないか？」

行く前は、俺と同じように血の臭いを纏っていたのに今は全くしない。

しかも、肌が微妙に濡れているせいで非常に色っぽい。

俺が男だったなら惚れているところだ……。

ん？ いやいや、俺は男じゃないか…何を言っているんだ。

「え、何のこと？」

「惚けんな。アヤカお前1人だけ水浴びしに行っただろ！？」

「ナンノコトカシラ」

アヤカは、アメリカ人のようなジェスチャーでシラを切った。

「どこだ、どこにあるんだ？その水場！」

俺が詰め寄るとアヤカは後ろに飛び退いた。

「ちょ、折角洗い流したのにまた付くじゃない……。あつ…」

「ふ、白状したな。で、どこだ？」

「そっちを30mほど行ったら川が流れてるから川沿いに上流へ100mほど進むと滝つぼがあるわ」

アヤカは後方の森の中を指した。

「よっしゃ、行ってくる」

俺はザキラとジャックと共に森の方へ走り出す。

「アヤカ、晩飯の準備よろしく」

すぐに振り返りアヤカに晩飯の用意を頼んだ。

「はいはい、行ってるっしょい」

アヤカが指差した方向へ早くこの血の臭いを拭きたいので突っ走る。途中、川を発見し上流へ向けてひたすら走った。すると、森が拓け直径30mほど滝つぼがあった。

滝と言ってもさほど大きくなく滝つぼは緩やかな流れで水浴びには持って来いの水場だった。

人の気配は全くないが念のため、ザキラとジャックに辺りを警戒させ岩陰に装備品を置いた。

全裸という選択肢もあったが、せっかくだから黒龍の鎧を付けたまま水の中に入った。

「ふう、気持ち良い」

さすが、スク水だけの事はある。

黒龍の鎧は、水を弾く隠れた性能があり泳ぐのに最適だった。気持ち速く泳げているような錯覚に陥る。

「形だけじゃなかったんだ…」

・
・
・

俺は、30分ほど水浴びと水泳を堪能…もとい入念に血の臭いを洗い落とし野営地へ帰った。

第23話【木狼】（後書き）

どうだったでしょうか。

第24話【霊木】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第24話【霊木】

「あら、お帰り」

アヤカは、晩飯の支度が終わり焚き火の前で暖を取っていた。

「ただいま」

俺はアヤカと対面になるように反対側に座った。

「アキラ、少し周辺を調べてみたのけど…。

商隊のいた痕跡はほとんどなかったわ。

でも、誰かがいたのは間違いないみたい…」

「どういう事だ？」

「テントの残骸を2箇所で見つけたけど、焚き火をした形跡や荷馬車の残骸は見付からなかったわ」

「と、すると襲われたが逃げ果せて次の野営地に向かったのか…？」

「もしくは、テント設置中に襲われて荷馬車ごとどこかに連れて行かれたか…ってところね」

「うゝむ」

「ま、話の続きは食事が終わってからにしましょ」

アヤカは火で炙っていたレッドアイベアの焼肉を塩コショウをした

後俺に渡してきた。

俺は受け取りそのまま齧り付いた。

「ウマイ！」

「それはどうも。とは言え焼いただけだけど…」

アヤカも肉に齧り付き満足そうな表情を浮かべた。

それ以外にも川魚の焼いたものもあった。

・
・
・

談笑しながら30分ほどで全てを食べ終わり話の続きを始めた。

「さっきの話なんだけど、私はどこかに連れて行かれたという方が確率的に高いと思うのよ」

「その根拠は？」

「もう、暗くなってしまうって分らないと思うけど…。

あっち側の奥に獣道というか大きい何かに踏みつけられたと思われる草木と倒れた樹木があったわ」

あっちというのは道路を挟んだ反対側にある野営地の事だ。
そういえば、そんなものがあつたようになかったような…。
テントと焚き火の設置に夢中であっち側は調べてなかった。

「ん？というか、ここで野宿って俺達も危なくないか？」

「大丈夫でしょ。もう暗いし襲っているのがアースガント族なら尚更でしょ」

「そういえば、そうだったな」

アースガント族が別段夜に弱いという訳ではなく、ヒューマやエルフ同様夜目が利く訳じゃないという事だ。

スキルに夜目が一応あるが、パッシブではなくアクティブスキルで常時発動ではないのだ。

一応、夜目を持つ種族はあるが、アースガントでないのは確かだ。

ウッドウルフは普段でさえ迷彩色なせいで見え辛いのに夜となると全く見えなくなる。

さすがに、気配だけでは対処は難しい…。出来なくはないが常に気を張るのは疲れる。

俺とアヤカは、それぞれアヤカは火の精霊を俺は光の精霊を呼び出し火の番と周辺警護に付かせその日は就寝した。

・
・
・
・
・
・

翌朝、朝食を簡単に終わらせ、俺達は反対側の野営地の奥にある大きめの獣道の奥へ足跡を辿って進んでいった。

念のため言っておくが、この獣道：幅3m～4mほどある。
大きさに獣道ではないが人工的な道ではないのでそう表記しているだけだ。

その獣道の周囲にある樹木は幹の中間ほどで折れていたり、木の根元付近には多数のウッドウルフの死体が転がっていた。

死体の大体は、殴殺か轢殺といった所でアースガント族に戦いを挑んでいた事が窺える。

これを見る限り、アースガント族は武器を持っておらず格闘タイプの者だという事が分る。

まあ、狂人化しているせいだろうけど…。

獣道に入ってから500mほど行ったところで、100mほど先がT字路になっている事に気付いた。

「どっちだと思う？」

「足跡が多い方じゃない？」

「ああ、なるほどね」

T字路まで残り50mに差し掛かったとき、T字路近くの木陰から大型レッドアイベアが姿を現した…。

「え、なんで？」

ウッドウルフ100匹討伐後のレッドアイベアはアヤカが倒したから次が出現までまだまだ先の筈…。

「待って！アキラ」

「ん？」

「まずいかも…」

「え？　どういふ…あ…」

確かにまずい…。

周囲の樹木から俺達を囲むようにウッドウルフの気配がする。しかも、この出現パターンは…。

T字路中央にあった大きめの樹木が少しずつ変化していき闇の森エリアボスである霊木トレントになった。

その脇からさらに2匹のレッドアイベアが出現した。

「これはヤバイな…」

大きめの獣道とはいえ、激しい戦闘には少々狭い。

それに周囲は木で囲まれ覆われている。

アースガントが通る可能性が高い獣道でもある。

下手したら三つ巴…なんていう最悪の状況になるかもしれない。

「アヤカ、すまないが…しばらくレッドアイベアとトレントの相手を1人でやって貰えないか？」

「アキラはどうするの？」

「少し戦いやすくする…。それとウッドウルフの数を減らすつもりだ…」

「分ったわ。私にも限界っていうのがあるから早くしてね」

「了解だ」

アヤカはT字路の方面へ、俺は10mほど進み周囲にいるウッドウルフを始末する為に居合の構えをする。

1分もせずに周囲にいたウッドウルフは俺に目掛けて波状攻撃を仕掛けてきた。

『炎開放！居合・式之太刀』

フランヴェルジュの特性の1つである炎の開放と式之太刀を組み合わせた技だ。

お互い1つずつだと精々3〜5mが限界だが、2つ併せると相乗効果で数倍の勢いになる筈。

式之太刀から放出された炎は、ドゴォォンという爆音と共に周囲15m近くを完全に消し飛ばした挙句、熱波によって周囲30m内にある木を燃え上がらせた…。

「……………」

やりすぎた…。

アヤカが「ちょ…」と驚きと怒気を孕んだ表情でこちらを睨んでいる。

広さ的には問題なくなったが、灼熱地獄に変化してしまった。

俺は釈明と合流のためにアヤカの元へ走った。

「はは、アヤカ、すまない。

やりすぎたみたいだ…」

「ええ、やりすぎよ…。

でも、見て…。トレントの枝の上にいた筈のウッドウルフがいないわ…。

それにトレント自体、炎による持続ダメージを負っているみたい。逆にレッドアイベアはお怒りモードになったみたいけどね」

ウッドウルフは、仲間が大量に消し飛んだのと熱波によって逃げたようだ。

「うわ…ほんとだ」

トレントの表皮はチリチリといった感じで燃えている。

3匹のレッドアイベアは、二足歩行モードでヴォアアアっと叫びながらこちらを威嚇している。

「私がレッドアイベアの相手をするから、トレントの相手は任せろわ」

「分った。アヤカの方へザキラを加勢させる」

「ありがとう。逆に私の炎華をアキラに付けるわ」

「我は望む。我が親愛なる…風の精霊ソードレス。我の呼びかけに応えよ！我の名はアキラⅡローグライト！汝の名はザキラ！」

「我は望む。我が親愛なる…炎の精霊アグニ。我の呼びかけに応えよ！我の名はアヤカⅡツキカゲ！汝の名は炎華！」

「やっと、俺様の出番か…」

信頼度がMAXになった今のザキラは頼れる存在になった。

相変わらず、巨乳好きは変わらないが…。

アヤカの護衛には問題ないだろう。

「アヤカ…獲物はどれだい？」

アヤカが呼び出した炎華という精霊は、見た感じ魔法よりもザキラ同様肉弾戦が好きそうな感じだった。

見た目は、野生児といった感じだな。

露出の高い服装に筋肉質の体つき口元には鋭い犬歯がチラチラと覗いている。

髪の毛と両拳が炎を撒き上げており、それだけでかなり強そうだ。

口調は、男らしく姐さんという呼び方が似合いそうな感じだな。

「アキラ。炎華は頼りがいがあるわよ…近接戦は彼女に任せてアキラは援護してあげて…」

「宜しくな！お嬢さん。この灼熱地獄ならアタシは倍以上に力を発揮できる！」

うおおおと雄たけびを上げ彼女の周囲の炎が身体に吸収されていく。

精霊は、周囲の環境によって力を発揮出来たり出来なかったりするようだ。

アヤカは、弓でレッドアイベアをトレントから引き剥がし離れた位置で戦い始めた。

「炎華頼みます！」

俺の呼びかけとほぼ同時に炎華はトレントへ向けて突進をした。

炎に包まれた炎華は、丸でコメントという感じだな。

炎華を近づけまいとトレントは、槍の様に鋭い根を向けるが炎に焼ききられいく。

俺は彼女を援護する為に魔術を発動させる。

今回は、フランヴェルジュの効果”炎属性魔法のワンスペル発動と二重詠唱”を大いに活用する。

「フレアアロー×2」

フレアアローは、下位魔術で炎の矢を無数に作り出し撃ち出す魔術だ。

魔力によって出せる炎の矢が変化するので今の俺なら1回の詠唱で20本近く…。

そして2重詠唱の影響で計40本近い炎の矢が俺の周りに出現しトレントへ向けて飛んでいった。

1本1本は、大した威力はないが誘導性能が高くトレントは大型Mobなので必中に近い。

トレントに向かって飛んでいった炎の矢は幹に連続して命中し一時的にトレントを気絶させる事に成功した。

いわゆるピヨリ状態ってやつだな。

「うらあああつあああ」

その間、炎華は連続で拳をトレントに叩き込んでいった。

炎華の拳が命中する毎にドカンドカンと小規模の爆発が起きていた。

「ふんぬっ!」

最後の閉めとして、炎華は昇○拳を繰り出しトレントが地面からス

ポツッと抜けて空中に舞い上がった。

これを好機と思い俺はトレントに向かって魔術を発動させた。

「イリリュージョンアロー！！」

これはフレアスピアとファイアアローの両特性を受継いだ炎属性上位魔術だ。

誘導性と貫通力の高い巨大な炎の槍を高速で射出する魔法で、ダメージがオーバーキルだった場合は対象が消滅する。

残念ながら俺のレベルと魔力ともにオーバーキルになり難い。

ただ、この魔法が強烈なのは間違いない、トレントに命中すると月面宙返り○回捻りような状態に吹っ飛んでいった。

「おおお」

炎華はその様子を見て感嘆の声を上げた。

トレントが地面に落下したのを確認して俺は間をおかず次の魔法を発動させた。

「フレアグレネード！」

これも炎属性上位魔術で、フレアアローとファイアボールの両特性を受継いだ魔法だ。

巨大な炎の塊が着弾すると破裂し周囲にフレアアロー撒き散らす。

破裂して出たフレアアローにも誘導性があり、周囲の敵に対して自動で誘導していく。

1体しかいなかった場合は、その1体に全て飛んでいくのだ。

トレントに炎の塊が着弾し爆発と共にトレントは再び空中へ吹き飛

んだ。

そして、爆発した際に破裂したフレアアローは吹き飛んでいるトレントに向かって飛んでいき連続して着弾していく…。

そう、まるでお手玉と言った感じが目の前に広がっていた。

今尚着弾し続けているトレントの姿は、すでに葉は焼け落ち、所々燃え上がっておりほとんど幹と根しかない状態だった。

全て着弾し終わった後、待ってましたと言わんばかりに炎華は空中へ舞い上がりトレントのちょうど真上にまで来ていた。

「必殺！スーパーメテオキック」

どこかで聞いた事のあるような技名の跳び蹴りは、トレントを捉えるとまるで隕石が落下するような感じで炎を纏いながら地面に落下していった。

トレントは、落下すると大爆発を上げ木っ端微塵になった。

そして、爆発の中心には、やりきった表情を浮かべた炎華が立っていた。

「炎華さん、すごいですね…。特に最後の技とか…」

俺は炎華の横にまで歩いていった。

「そう？まあ、アタシは天才だしな…」

さて、アヤカの方はどうなってるのだろうかと振り向く寸前に俺の真横に何か大きい物体が吹っ飛んできた。

振り向くとその物体はレッドアイベアだった。

そして、ほぼ同時にアヤカとザキラがこちらへ跳んできた。

「そっちも終わったのか？」

「それどころじゃないわ…。緊急事態よ」

アヤカが指差した方向に狂人化したアースガントが立っており、ウゴアガアアと雄たけびをあげこちらを凄い形相で睨んでいた。

トレント戦が丁度終わったところで三つ巴なんていう最悪の状況は免れたが…。

「何かすごく怒ってるね…」

「アキラが森を燃やしたからじゃない？」

「えええええ！？」

第24話【霊木】（後書き）

どうだったでしょうか？

ほとんど戦闘らしい表現は出来ていませんが…

第25話【狂人】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第25話【狂人】

『ウゴアガアアア』

アースガントは、近くで燃えながら倒れている木を持ちこちらの方へ投げた。

「そんなものを軽々しく投げるなあ！」

俺たちは直撃を避ける為に四方へ散開した。

今度は燃えているがまだ倒れていない木を二刀流風味に持ち一歩ずつ近付いてきた。

そして、地面に倒れているレッドアイベアを踏み潰し……おえっ。踏み潰されたレッドアイベアの口から本来は出てはいけないものが見えてしまった。

と、そんな事よりもこんなところで殺られる訳にはいかない。

「ザキラッ」

「炎華お願い！」

「「そいつを足止めして！」」

俺とアヤカは呼び出した精霊に足止めをお願いした。

ザキラは、足元へ斬り付け炎華は腹部へ連打をしているが全く利いている素振りを見せない。

本当に利いていないのか、狂人化で痛覚がないだけなのか分らないが、2人の精霊を振り払う素振りも見せなかった。

俺が詠唱に入ろうしていたしアヤカも魔力の溜めに入っていたが、アースガントが両手に持った木が振り下ろされ中断を余儀なくされた。

アヤカは真上へ跳んで避けたが、俺は判断を誤り後方へ跳んだ為、木の衝撃で生じた石飛礫が身体を直撃しその勢いのまま後方の木に直撃した。

「ぐうつ…」

「アキラ！」

「つう…俺は大丈夫だ」

アヤカが俺の方へ駆け出してきたのでそれを制止し、回復の為に法術の詠唱に入る。

「女神ヴィーナスの名の下に、大いなる癒しの力であるべき姿に戻したまえ！ヒール！」

攻撃自体が直撃した訳ではなかったので、紙装甲の俺でも大したダメージは入ってなかった。

とはいえ、4分の1のダメージではあるが…。

まあ、それでも下位法術のヒールで完全回復ではないものの十分な回復量だ。

余談ではあるが、法術の回復魔法は回復量が固定ではない。

魔法力と法力によって回復量が変化する。

回復魔法に類する法術は結構あって一例を挙げるとしたら、

下位法術のヒールは魔法力と法力を足してそこへ1・5を掛けてや

ると回復量になる。

ちなみに今の俺の魔法力と法力はそれぞれ174と111だ…足すと285だから回復量は427・5だ。

小数点以下は省略される。

消費MPは固定なので無駄に上位回復魔法を使わなくても良いだろう。

回復しきっていないのは自然治癒で回復させても全然問題ない。

俺はヒールでHPを回復した後、再び攻撃態勢に入る。

俺が回復している間、アヤカと精霊達はアースガントへ攻撃を加えていたようなのだが、一向に衰えを見せていない。

相変わらず精霊達は近接戦でタコ殴り状態だが、ダメージを与えているのか分らない。

アヤカもゴッドブレスで応戦している。

一瞬だがガクツと膝を着いている場面があるので利いているとは思うのだがすぐに立ち上がる。

奴は狂人化したアースガントとはいえ、流石にこれはおかしい。

そこで俺はある事を思いついた…。

「アヤカ、奴を分析してみてくれ！」

俺の分析スキルのレベルだと精々レベルが判明するぐらいだが…アヤカのスキルレベルだと色々分る筈だ。

「あ、そうか…」

アヤカは目を凝らしアースガントを分析し始めた。

「え、ウソ…」

HP..10863/15320
 MP..866/866
 SP..4211/6233
 効果…リジエナイト、ハイエール、狂人化、潜在開放、魅了、扇動
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

へえ、アヤカの分析だどこまで視る事が出来るのか……って。

「ちょ…!?!」

なんじゃこりゃ!!

これは明らかに人為的要素がありまくりじゃないか…。
 リジエナイトとハイエールは強化法術で、それぞれ下位と上位の魔法だ。

確かにアースガントは法術を使用できる…が、リジエナイトが使え
 たとしてもハイエールは無理な筈だ。

それに狂人化しているので現状使用できる確率は低い。

次は…狂人化・潜在開放・魅了・扇動だな。

これは所謂、闇属性魔術で禁呪指定されている魔法による状態異常
 だ。

潜在開放が状態異常と言えるのかは分らないが…。

簡単にいえば、人の意思を操るカテゴリーの魔法という事だ。

光と闇の属性は相対し合っているので光属性が種族属性のアースガ
 ントでは使用する事が出来ない。

最も禁呪指定されているので使用できる確率は非常に低い。

ああ、そうそう…状態異常について少し話そう。

狂人化は、身体能力を大幅に向上させる代りに自我をなくしてしまう状態異常だ。

対象のSPが切れるまでか術者が解かない限り狂人化が続く。

使いどころによっては非常に役立つ。

潜在開放は、眠っている潜在能力を開放させる状態異常…というかブースト状態だな。

効果時間が非常に短いので使いどころが難しいが全ての能力が大幅に向上するから短期決戦には持って来いだな。

なんで、俺が閤属性魔術や禁呪指定の事を知っているのかということ…。

まあ、俺も魔術師の端くれだからな、書物を読んで知っていると訊だ。

これも改変様様って事だな。改変後、ヒントが世界中に散らばっている。

というか…奴が乱入してから結構経つのに一向に切れないのが不思議だ…。

もしかして、術者が近くににいるのか？

魅了は、術者に魅了させて自我をなくし自身に従わせるという状態異常だ。

ステータスの魅力で防ぐ事が出来るが…狂人化している状態だと防ぐ手立てがないと言って良い。

扇動は、自我があるなし関係なしに無意識に術者の思い通りの行動をさせる状態異常だな。

リジェネイト、ハイエール、狂人化、潜在開放でアースガント（以下レドルフ）の能力を大幅に向上させ、狂人化で自我を奪い魅了と

扇動で自由に操る…という非常に凶悪な状態にしちゃってこれている。

「き…鬼畜すぎる…」

しばらく、視ていると…精霊達とアヤカの攻撃でHPが減少するが9割方リジェネイトで回復してしまっている。

残りHP10000弱…ここで俺が攻撃を加えたところで状況が好転するとは思えない。

長期戦は俺たちにとっては不利としか言えない…。

レベル89程度が、そもそもアヤカの攻撃を耐えている時点で有り得ない。

レベルⅡ強さではないE／Oの世界だったとしてもある程度の指標である事には間違いないのだ。

しかも、アヤカの使っている武器は伝説級のゴッドブレスだ。

狂人化と潜在開放でどれだけ能力が向上しているんだ？想像さえ出来ない。

なら、方法はこれしかないな。

「アヤカ！明らかに奴は操られている。俺が術者の搜索をするから何とか耐えてくれ！」

「わ、わかったわ」

アヤカは、腰に着けたポシェットからMP回復薬（大）を取り出し一気に飲み干した。

そして、ゴッドブレスに魔力を集中させていく。

俺は、ディテクトで術者を見つけ出す為に詠唱に入る。

「女神ヴィーナスの名において、見えざる者を映し出……うわっ！」

もう少しで詠唱が終わろうとした時、目の前にレドルフの拳が迫っている事に気付き思わず詠唱を止めてしまった。

ギリギリで避けたのは良いが、レドルフのターゲットが俺に固定されてしまったようだ。

レドルフに対して攻撃をほとんど加えていない俺にターゲットが移る可能性が低い。

なら、術者の指示とみて良いかも知れない。

「くそ、これじゃ詠唱出来ない……」

レドルフの攻撃を避けるのが精一杯で詠唱に入る事が出来ない。

相変わらずアヤカと精霊達は攻撃をしているが一向に衰える気配がない……。

いや、待てよ……。

潜在開放の効果時間は短かった筈だ……必ず掛け直すタイミングがある筈だ。

「ア、アヤカ。奴に掛かっている効果の1つは……と、効果時間が短い……と……」

ああ、ちなみに現在、レドルフの攻撃を避けている最中だ。

「しばらくしたら、効果が切れっる。掛け直すタイミングで一斉にっつと、攻撃してくれっよっつと。同じタイミング……っでディテクトを詠唱すっる」

レドルフの両手両脚による連続攻撃が止みそうにない…。
いい加減しつこいな。

俺は避けながらレドルフのステータス画面を凝視している。
効果や状態異常は、切れる5秒前に必ず点滅し出すのだ。
間髪入れず再び掛けなおしたとしても完全に切れる状態は絶対にある。

1回で成功させたいが失敗したとしてもチャンスは何度かある筈だ。
それまで俺たちが耐えられたらの話だが…。

あ、点滅しだした…。

「アヤカ！5秒前」

アヤカは俺の掛け声と共に数十本の光の矢を同時に溜めだした。

溜める時間が5秒なので数の勝負行くようだ。

ザキラは居合の構え、炎華は再び周囲の炎を取り込んで力を溜めだした。

良く見たらレドルフの拳も俺に大分迫っており避けられそうにない。

「…3、2、1…今だ！」

みんな…頼んだ。

潜在開放が掛けなおされる一瞬の間に、アヤカの数十本の光の矢は
レドルフの背中に突き刺さった。

数本は完全に貫通していった。

ザキラは、レドルフのアキレス腱に対しての居合攻撃だ。

さすが、風の精霊…切れ味もスピードも申し分ない。

レドルフのアキレス腱を完全に切り裂いたのが俺の方からも見えた。

炎華は、渾身の必殺技？である「スーパーメテオキック」をレドルフの後頭部へ直撃させた。

そのタイミングとほぼ同時に潜在開放が掛けなおされたようだが、少し遅れたようでレドルフは大きくよろめき前かがみに倒れた。

つと、あぶねえ…。

ヤツが手を前に突き出さなかったら俺が押し潰されていたぞ…。

そんな事はどうでも良いか…。

レドルフのHPが大幅に減少したのを確認した。

と言っても2000弱のダメージしか与えていないが…。

今までの事を思うと十分大ダメージだ。

「女神ヴィーナスの名において、見えざる者を映し出せ…。ディテクト！」

すると、T字路右奥80m先に人影を確認した。

ん、何だ？

人影がダブって見える…どういう事だ？

第25話【狂人】（後書き）

どうだったでしょうか。

第26話【憑依】（前書き）

誤字・脱字、表現の誤りにはご容赦願います。
今回は、少し短めです。

第26話【憑依】

「アヤカ…左後方T字路右奥80m先に対象発見！」

「了解」

アヤカはすぐさま弓を構え魔力を溜めていき、光の矢の矢先がどんどん大きくなっていく。

危険を察知した人影が移動し出した。

「対象、右前方…大体2mずつ程度で移動中…」

「いけっ！」

アヤカから射出され極太レーザーと化した光の矢は、対象までの障害物を消滅させながら突き進んだ。

そして、対象の人影に命中し消滅し……てない!？

「え、なんで!？」

「どうしたの？アキラ」

「当たる直前に光の矢が消えた……？」

なんというか、人影の前方に何か靄のようなモノが見えたと思ったら光の矢が吸い込まれ…

というか、相対した事によってお互いが消滅したという感じだ。

「え!？」

・ ・ ・ ・
しばらくして、対象の人影が森の茂みから姿を見せた。

「妾^{わらわ}ではなかったら、死んでいたではないか…」

現れたのは、無傷の人影……と幽^r…精霊？だった。

なんというか、普通の人の上半身に半透明の精霊っぽい何かが付いている感じた。

取り付かれている人は、見た感じ可愛い部類に入る女性だ。恐らく格好からして傭兵だろう…。

目は虚ろで口元が微妙に開いているし表情らしきものはない。

本人は夢の中ってところか…。

てか、行方不明になっている傭兵じゃないのか？

それは置いておいて問題は取り付いている方だ。

精霊なのか幽霊なのかと一瞬迷ったが、確か闇属性魔術の1つに憑依する魔法があった筈だ。

といっても、禁呪指定なので負いそれ簡単に使えるような代物ではないが…。

禁呪を会得した魔術師なのか…闇属性の精霊なのか…。

禁呪を使用する精霊なんて聞いた事はないが、禁呪を取得した魔術師よりは現実的だ。

「ふむ…。よし、御主で良からう…」

精霊？幽霊？に取り付かれた傭兵の娘は、俺とアヤカを見比べた後、俺の方を指差し意味不明な事を言い放った。

「はい？」

「レドルフ…いつまで休んでおる。この娘を捕まえい」

なんですとう！？

レドルフは、上半身を起こし左手で俺を捕らえようとした。はつきり言って意味が分らなくて呆然としたが、危うく捕まりそうになる直前に意識を取り戻しバックステップで避けた。

「あ、あなた。今すぐレドルフさんを下がらせなさい。さもなくば、今すぐにでも撃ちます」

アヤカはゴッドブレスに光の矢を溜めながら精霊憑きの女性（以下、精霊憑き）に凄んだ。

「ほほう、それで妾を殺せるだけでも？
やってみせい。尽く消し去ってやるわい」

「くっ…」

「ほれ？どうした？やらんのか？
……なんだ、詰まらん。なら、妾が御主を楽しませてやろう」

精霊憑きはそう言うのと、只ならぬ気配が森中に広がった…ように見えた。

すると、俺達を囲むように無数のウッドウルフやレッドアイベアそれだけではなくトレントまで数体現れた…。

しかも、レドルフと同じように赤く輝いた眼で明らかに狂人化して

いますという感じになっていた。

恐らくだが、扇動も入っているようにも思えた。

対象は単一ではなく範囲だった事には驚いた、

どのくらいの範囲なのだろうか、この数は相当広い範囲と見て良いかもしれない。

「なっ!？」

アヤカは、驚愕しゴッドブレスに溜めていた魔力が収縮していった。なんというか、その全てがアヤカを標的した明らかな殺意が俺でも感じ取れた。

「御主は強そうだからのう……。これぐらいが丁度良いじゃろう。精々死なぬように頑張る事じゃ……」

精霊憑きをそう言ったと同時にウッドウルフ以下略達がアヤカに襲い掛かった。

「アヤカツ!!」

「御主は、他人を気に掛ける余裕などないぞ?」

精霊憑きは、心の底から楽しそうな表情をしながらレドルフに命令を下した。

レドルフは、左の掌で捕まえようとしてきたが、俺は右にステップをして避けた。

ぶっちゃけ、捕まえるというより押し潰しに近かったが……。今度は両手で捕まえようとしていたが、ジャンプで避けた。

まあ、捕まえるというより両手で握りつぶそうとしてきたに近いが…。

「むう、ちょこまかと避けるのが上手いのう…。レドルフでは捕まえるのは難しいようじゃわい。ならば…」

一瞬、精霊と眼が合った気がした。

「いづっ!？」

いきなりズキンと頭に激痛が走った…。意識が一瞬だけ飛んだがすぐに回復した。

「ほう…。あれを看破しよったか…」

何をしたんだ？

……もしかして、俺を魅了させようとしたのか？

「面白い娘よのう。益々欲しくなった…」

捕まったら俺は何をされるのだろう…。

レドルフと同じように狂人化され暴れるのだろうか…。

って、それはないな…。今の俺が狂人化したところで大した影響はない。

ましてや、1つのエリアを封鎖なんて出来る筈はない。

それに、アヤカに止められるだろうし…。

「レドルフ、死なぬ程度に攻撃を加えて良いぞ。戦意喪失させれば妾が何とかするわい」

その言葉と同時にレドルフの攻撃が鋭くなってきた。

3mという巨体から考えられない程の速さだ。

唯でさえ避けるが精一杯だったのに：レドルフの攻撃を見極め辛くなってきた。

俺は何度か攻撃を避けていたが、粉々に碎けた木の破片に躓き体勢を崩してしまった。

体勢を立て直そうと上を向いた時、とても大きな影が俺を覆い隠そうと迫ってきた。

それはレドルフが両拳を組んで今にも振り下ろそうとしている影だった。

「やば…」

まだ、体勢を戻しきれていない…。

完全には避け切れない。

だが、避けないとあの攻撃は俺を死の淵へと追いやる筈だ。

レドルフの攻撃が俺の頭上1mまで迫ってきていた。

間に合ってくれ：と俺は願ひ右足で思いつき地面を蹴った。

「ぐがっああああっ！？」

地面を蹴った右足がレドルフの攻撃から避けられず直撃を受けた。

乾燥した木片が碎けるような音と激痛が全身に走った。

だが、その痛みを感じる前に新たな痛みが背中を襲う。

蹴った勢いで転げていたら、どうもその先にあった岩へ背中を思いっきり打ったようだ。

視界が赤く染まり意識が遠のく…。

ここで意識を失う訳にはいかない。
何とか俺は立ち上がろうとしたが、右足に力が入らない…というより感覚がない。

背中の方は、痛みが和らいできているような気がしたが代りに非常に熱を持ち出した。

こちらも麻痺しているようだ。

はは、思ったように身体が動かない…。

潮時かもしれないと思った時、俺の身体に浮遊感を感じた。

俺の左腕をレドルフが掴み、上に持ち上げたようだった。

まるで操り人形のような状態と思って良い。

さっきから「感じた」とか「ようだ」と表現しているが、どうも全身が麻痺しているようだ。

脳が痛みをシャットダウンさせたのだろう。

あ、右腕に持っていたフランベルジュを落としてしまった。

足先よりも下の方でカランと杖が落ちた音がした。

視界が悪いからハッキリとは分らないが、俺はレドルフの顔辺りまで持ち上げられているようだ。

「ほう…まだ意識を保とうしよるか…」

俺はキッと精霊憑きを睨んだ…と思う。

「この状態で戦意喪失しておらんとは…仕方あるまい。
レドルフ、妾の前まで下ろせい」

微妙に足が地面に付かない高さまで下ろされ、目の前に精霊？の顔付近が近付いてくる。

嫌な予感がした…。

俺は再び精霊？を睨もうと眼を合わせたその時、俺の意識が遠のき視界が暗くなった。

どうも、精霊による何らかの状態異常で意識が飛んだようだ。

「では…戻るとしようかの…」

「アキラッ！！」

遠くの方でアヤカが必死で俺の呼んでいたようだったが、意識が飛んでしまった俺にはそれを認識する事が出来なかった。

第26話【憑依】（後書き）

どうだったでしょうか。

アキラ捕まってしまいました…。

第27話【契約】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。
今年最後の更新です。
今回は少し長文です。

第27話【契約】

暗闇の中、人の話し声で俺は目を覚ました…。

確か、レドルフと戦闘したのが昼の12時少し前ぐらいだった筈。でも、太陽の位置からして今はどう見ても朝って感じた。

で、どうも俺は枯れた草の葉の上で寝かされているようだ。

周りを見渡すと、そこは湖の畔がある少し大き目の広場だった。

荷馬車が4台並び、広場中央には焚き火跡と簡易的な調理場があった。

男女含めて20名いるかいなかの人がその広場にいた。ちよつとした集落みたいな感じだな。

その内の1人が俺に近寄ってきた。

見た感じ、傭兵でも商人でもない一般人といった感じで、20代後半から30代前半辺りのヒューマの女性だ。

「どうです。具合の方は？」

応急処置しか出来ませんでしたけど」

「…応急処置？」

背中には、薬草を練り潰して出来た塗り薬と包帯が巻かれ、右足は添え木で固定されていた。

「そろそろ痛み止めが切れる時間ですね。少々お待ちを…」

「あ…それは不要です。自分で治せますので…」

俺はMPの残量を確かめた後、ヒーリングブレスを唱え体中の傷を癒した。

ちなみに、ヒーリングブレスは傷だけでなくちょっとした部位欠損ぐらいまで完全に癒せる。

なので、粉碎骨折ぐらいは簡単に治せる。

「法術師なのですね…」

「ええ、まあ」

「良かった…。ここでは治せないからどうしようかと思ってました…」

「え？ここには法術師がいるのでは？」

おかしいな。

レドルフに掛かっていたハイエールやリジェネイトは誰が掛けたんだ？

「あそこに居られる騎士さんが法術も使える方なのですが…。強化法術を専門にしているらしいです」

え、騎士も行方不明になっていたなんて初耳だぞ…。

まあ、レドルフと交戦していたし捕まっけていても不思議じゃないか…。

傭兵と違って集団行動が基本の騎士は、万編なく習得するよりも専門的に習得する事が多いらしい。

回復法術が使えない法術師がいてもおかしくはないのだ。

基本、傭兵はオールラウンダーで騎士はスペシャリストと思って良

い。

一般的に、騎士とは全身に鎧を纏い剣や槍も持って馬に跨る姿を思い浮かべるかもしれないが、E/Oという騎士とは国家に使える人：国家公務員または警察や自衛隊と思って良い。

だから、剣や盾を持った事がなく法術しか使えなくても騎士と呼ばれる。

「あ、お腹空きませんか？

朝食をお持ちしますね」

女性は荷馬車近くで談笑している輪に入った後、食事が乗ったと思われるトレーを持ってきた。

「ごめんなさいね。食料事情が良くないからこんな物しかないのよ」

トレーの上には、焼き魚と木の実の盛り合わせとコーヒーっぽい飲み物が置かれていた。

「いえ、御気になさらず。頂けるだけでも有難いです」

「では、こんな場所ですけど、くつろいで下さいね」

女性は、にっこりと微笑んだ後、談笑している人達の元へ向かった。

渡された食事を取りながら、現状把握の為に色々考えてみた。

恐らくだが、あそこで談笑している人達は、行方不明となっている人達で間違いなさそうだ。

あの騎士を除けば人数的に合致する。

それに、あの4台の荷馬車…確か、商隊が2組行方不明になっていた筈だから間違いないだろう。

そういえば、あの精霊憑きとレドルフはどこにいるのだろうか。

「あ…」

湖を挟んだ丁度広場の反対側の岸にレドルフがいた。

見た感じ、狂人化はしていないようだ…。

むしろ、小鳥と戯れていないか？

では、あの精霊憑きはどこだ…？

「ふむ、思ったより元気ではないか」

俺の背後で精霊憑きの声が聞こえたので振り返ろうとしたら、何故か俺の胸が揉まれていた…。

「ちよ、おま…何をするっ!？」

「ふむ、健康そうで何よりじゃ…」

精霊憑きはそう言いながら、尚揉んでくる。
き、気持ち悪い…。

「くっ…」

俺は精霊憑きの手を振りほどきフランヴェルジュに手を掛け…た？

「あれ？」

フランヴェルジュがない…………。

あ、そういえばレドルフに持ち上げられた時に地面へ落としたよう
な…落としてないような…。

でも、手元がないのなら落としたのだろう。

仕方ない…。

俺は、尻の方に差している蛇腹剣の方に手を掛けた。

「まあ、待て。妾は別に御主を取って食おうなどとは思っておらぬ
よ」

右足を粉碎骨折させておいて、その言葉は信用出来ないな。

「…何？」

「待てと言っておろう。取り合えず、妾の話聞け。」

御主が気になっておる事を簡単ではあるが説明してやろうと言うの
じゃ」

「ふーん」

「まあ、なんじゃ。妾を召喚出来そうな精霊使いを探しておったの
じゃよ」

「……………ん、それだけ？」

「うむ。それだけじゃが？」

「いやいやいや、何でそれだけの為にレドルフを狂人化させてたり、
誘拐みたいな事してるのさ」

簡単にも程というものがあるだろう。

肝心な所がさっぱり分らないじゃないか。

「霊体のままだと何かと不便…というか千年ほどここに留まるのは少々飽きてのう。

残念な事に、この娘は精霊使いではないのじゃが、エルフじゃったので依代として憑依させて貰ったのじゃ…」

エルフ…という事は、エルフ族のみ精霊魔法が使える事を考えると、憑依するにはある程度の霊力が必要という事か。けど…。

「憑依って…簡単に言うが精霊はそんな事が出来るのか？」

憑依できるなんて今まで聞いた事がない…。

「ほとんどの精霊は出来ぬな…。

妾を含めて闇属性かつ精神系の魔術を使える精霊のみよ」

「取り憑かれる方は堪ったものじゃないな…」

「無論、この娘には許可を取っておる…事後承諾じゃが…。

まあ、駆け出しの傭兵のようでな戦力にならなくてのう。

憑依したとはいえ、妾の魔術だけでは心無くての。

この森で彷徨っていたレドルフの奴を利用して貰ったのじゃ」

レドルフは何でこの森で彷徨っていたんだ？

ここはロードグリアード帝国から大分離れた場所なのに…。

「では、精霊使いを探すためにレドルフを操って誘拐していたと？」

「そうなるのう」

「そんな事をしなくても精霊使いの方からやってくるだろう？」

「……先ほども言うたがのう。

千年待って誰一人来ないのに、これから先来ると思うかの？」

あ、もしかして、改変後に現れた精霊なのかも知れないな。
都市近くで依頼も結構な数が出されているようなエリアで、
入ったプレイヤーが全く石碑に気付かないなんて事はありえない。

それに潜在開放や魅了など禁呪指定されている魔術を使える精霊を
放っておくなんて考えられないしな。

というか、何で母はこの精霊の存在を知っていたのだろう。

「その千年の間に古代エルフ族は来なかったのか？」

「古代エルフ族？ いや、知らぬな……」

この精霊の先代と契約したのか本当に噂でしか知らなかったのか……
どちらかと言う事か……。

「ん？ というか、あの人達は何で解放しない？」

レドルフやその娘がいれば、他の人は必要ないだろ」

「そこはアレじゃ……。話題作りってやつじゃの。

1人2人行方不明ぐらいでは国は動かんじゃろ……。

レドルフを討伐する為に幾多の人がこの森に入りよる。

その中に精霊使いが必ずいる…と踏んだんじゃよ」

それが俺とアヤカって訳だな。

「あの人達にも魅了を掛けてるのか？」

「いや、掛けておらぬよ。

ただし、この広場から遠く離れる事が出来ぬようにはしておるが…。
というか、この娘を通じて事情を話したら不本意ではあるが同情されてのう。

しばらく、この茶番に付き合って貰っておるのじゃ」

まあ、千年も精霊使いがやって来なかったら同情してしまうよな。

「でじゃ、御主、妾と契約を結ぶが好い」

「はい？」

「さっきの会話の流れで察しは着くじやろう」

「いや、まあ。それはそうだけど…」

「何じゃ、齒切れが悪いのう」

「1つ聞きたい…。何でボクなんだ？」

ボクの相棒の方が強いし、精霊魔法も熟知しているが…」

アヤカは4体しか精霊と契約していないが、どれも上位の精霊だ。
俺は今だ上位と契約をしていない。

「それは好みに決まっておる。
ああいうのも悪くはないが、熟しきっていない蕾のような少女の方が好きなのじゃよ」

「はあ…。つまり、どういう事？」

ロリコンって事か？

でも、こいつ一応性別が女性に見えるから…もしかして、百合の精霊！？

「お前は百合の精霊って事か？」

「百合？先ほども言ったが妾は闇の精霊じゃよ」

「あゝ、いや、何と言うか巧く言葉にする事が出来ないが、女しか愛せない女って事？」

「ふむ、強ち間違っではおらんが、妾は男もイける口ぞ？

まあ、妾に見合う男なぞ見た事はないがの。

御主にも分り易く言えばの、妾と契約してその小さな胸を揉ませろ…という事じゃ」

「余計に分らんわ！！」

それに、小さな胸は余計だ。

というか、お前もそっち系かよ。

「安心せい。妾と契約すれば毎日揉んで胸を大きくしてやるわい」
しなくて良いよ…。

契約してやろうかと思ったが、やっぱり辞めておこうかな。
召喚する度に揉まれるのも嫌だし…。

「精霊使い、早く見付かると良いな。んじゃ」

取り憑かれている女性には申し訳ないが俺は立ち去るとしよう。

「まてまてまて。半分冗談じゃ。妾は早くこの森が出たいだけじゃ」
半分は本当なんだな…。

「それに、妾と契約せねば御主としてこの広場から出られぬよ」

「なっ!?!」

どうする…。

でも、当初の目的はこの精霊と契約する事だったのは間違いない。
だが、こんな精霊と契約しても大丈夫なのだろうか…。
平気で人の心を弄び目的の為に手段を選ばない。
そして、ロリコンで百合の女性の胸に何故か固執する。
まあ、俺の選択肢は、契約するかしないかの二択しかない。

「す、するにしてもお前の石碑はどこにあるんだ？
見た限り無さそうだが…」

「ふむ。それもそうじゃな。妾に着いて参れ」

精霊憑きの女性は俺に背中を向けると森の方へ歩き出した。
入って大体5分ほどで目的地に着いたのか足を止めこちらに振り返る。

「ほれ、多少みすばらしいがこれが妾の石碑じゃ…」

確かにみすばらしい…。

石碑が半分辺りで崩れ落ち崩れていない部分も所々ひび割れ緑色の苔が貼り付いている。

確かにここまで面影がないと誰も石碑だとは思わないな。

仕方ない…。

「はあ、分った。契約してやるよ。

ただし、条件がある。まずはボクにその精神魔法を掛けるなよ」

「当然じゃ。契約者に術を掛けるなど決してせぬわ」

これは、精霊達の掟のようなものなんだろうか。

何当たり前の事を言ってるんだ、というような雰囲気だった。

「ボク以外の人に対してもボクがお願いしない限りするなよ」

「努力しよう」

うわ、放つといったら魅了とか掛け捲り兼ねないな。

「召喚の際、ボクの胸を揉むとか冗談だよな？」

頼む。冗談であってくれ…。

そんな羞恥プレイは真っ平ご免だ。

「冗談の訳がないわい。妾の生きがいを奪う気か！」

どこぞのエロジジイみたいなセリフを吐きやがった。
しかも、表情が正に”クワア”という擬態語が似合いそうなほどの
凄い形相だった。

「じゃ、契約しない」

「ちっ、分った分った」

絶対、分ってないようだが、まあ今は良い。

「ボクが契約したら、あの人達を解放しろよ」

「初めからそのつもりじゃ。安心せい」

「はあ、ほら。彼女を解放して石碑に戻れよ…。
契約できないだろ」

憑依しているという事は仮契約のようなものだ。
このままでは二重契約になり兼ねない。
それに、取り憑いた状態で強引に引き剥がしたら、何かしら後遺症
が出てもおかしくないだろう。

「ふむ、それもそうじゃな」

精霊がそう言うのと”フッ”と女性の身体から霊体と気配が消えた。
それと同時に彼女は地面に倒れる。
まるで操り人形の糸が切れたかのように…。

そして、崩れた石碑から精霊の霊体が現れたのを確認し、俺は契約

を開始した。

「あ、お前は何て言う精霊なんだ？」

「妾か？ベルセウスじゃ」

ベルセウスか…。

なんて言う名前にしようか…。

何かこう黒々した雰囲気があるし、そうだ！

昔、プレイしたゲームに出てた女好きの魔女から取ってアーリアって名前にしよう。

「古の誓約に基づき闇の精霊ベルセウスと契約を結ばん。汝の名はアーリア。我が名はアキラⅡローグライト」

契約を終えた瞬間、俺とアーリアは光の柱に包まれた。

そして、一瞬で辺りが暗くなり目の前にいた筈のアーリアは俺の背後に回り、

む…胸を揉んできた…………。

「これから宜しくのう…」

アーリアは、耳元そう言うと言った姿を消した。

契約後の演出も精霊によって様々なんだな…。

第27話【契約】（後書き）

どうだったでしょうか。

今年10月に本作品を始めました。

拙い文章と表現にイラついた方や見限った方も居られるかもしれませんが。

でも、この27話まで呼んでくださった方々、本当に有難うございました。

来年も宜しくお願い致します。

第28話【撤収】（前書き）

明けましておめでとう御座います。

今年も宜しく願います。

出来れば、見限らず最後まで読んで下されると嬉しいです。

では、誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

第28話【撤収】

俺とアーリアが契約を結んだ事によって、広場から出られない魔法が解けた事を

俺は荷馬車付近で談笑していた人達へ伝えた。

実際は、傭兵の女性からアーリアが憑依を解いた事で魔法が解けているのだが…

まあ、この際どっちでも良いだろう。

「え、それは本当かい？」

「じゃあ、ベルさんと君が契約を結んだのか？」

「ええ、まあ…、アーリ…あ、ベルセウスを召喚しましょうか？」

「いや、良い。君を通してベルの奴にも聞こえているのだろうか？」

「ええ、聞こえていますよ」

「なら…、良かったな。ベル」

「おめでとう」

「ベルさん、おめでとうございます」

「良かったな。ベル公」

「よっしゃー、これで安心して帰れるぜっ」

言っている事は様々だが一貫してアーリアを祝していた。

文句や不満からの解放を喜んでいるような言葉が一切なかった。

いや、本当に同情されていたんだな…。

丸で家族や友人が結婚を祝うような流れだ。

（皆の衆、妾に長い間付き合って貰って嬉しかったぞ。有難う…）

「ベルセウスが有難うと言ってます」

「そうかそうか、よし皆、撤収の準備だ」

「おう」

リーダー格と思われる男性の一声で俺の周りに集まってアーリアを祝していた者達は、

荷馬車方面に向かい撤収の準備を開始した。

俺は1人、気になっている人物…そう、レドルフの方は向かった。

まだ、レドルフは湖畔近くで小鳥達と戯れていた。

近くに来てよく分る。

彼は、本来すごく優しい性格なのだ…。

騎士団相手に大立ち回りをしていた人物と同一人物とは到底思えない。

「やあ、こんにちは」

「……？」

「ボクの名前はアキラだ。君を操っていたベルセウスと契約した者

さ…。

分るかい？」

「ベルセウス…契約…」

「もしかして、何も覚えていない？」

自我を失わされ操られていたから覚えていないのも不思議ではない。

「少し…覚え…ている」

覚えていると言う事は、夢の中もしくは無意識化に記憶として残っているのかも知れない。

「そう…。なら、君は何をしていたのか大体は分っているのかな」

「おデ…いばい…人を傷つけタ…」

騎士団と戦っていた事を覚えていたのか…。

それにしても、タ行の発音が独特だな…。

”っ”もちゃんと覚えていないようだ。

アースガント族特有なのか彼のみの喋り方なのかどっちなのだろうか。

「キミも…傷、つけタ…。大、丈夫？」

俺と戦った事も覚えてるのか、結構意識がはっきりしているのだな。これは意外だ…。

「ああ、大丈夫。あれぐらいなら自分で治せる」

「…良かタ…」

レドルフは胸に手を当て心底嬉しそうな表情をしていた。
俺も釣られて自然に笑みが出てしまう。

「で、言い難いんだけど、君が例え操られていたとしても多くの人を誘拐した事実や

騎士団と戦って死傷者を出した事実は変わらない…分るよね？」

「分、る…」

レドルフは、悲しそうな表情を見せる。

彼自身何の罪もないから逃がしてやりたい気持ちはあるが、ここは心を鬼にして彼の出頭に付き添わなければ…。

むしろ、彼1人に行かせると無用な争いが起きかねない。

「ボクにしばらく着いて来ると良い。悪いようにはしないから」

「分、タ。もう…行く？」

「ああ…っと、うわぁっ!？」

レドルフは、おもむろに俺の身体を持ち上げ自分の右肩に乗せた。

「こちの方が楽…?」

「あ、ああ。ありがとう」

レドルフは、俺を肩に乗せ広場の方へ向かった。

着いた時、すでに撤収の準備が終わり、最後を惜しむかのように彼らは広場を見渡していた。

「お、やっとレドルフも来たか…。
よおし、皆、出発するぞ！」

リーダー格の男は周りにいる皆に声を掛け自分の荷物を担ぎ、荷馬車を引く先頭の馬の横尻を叩いた。
すると、ゆっくりではあるが、馬が歩き出しそれに釣られて他の皆も歩き出した。

「あ、それならまずは野营地の方へ向かいましょう。
それから街道沿いにヴェユスへという感じで…。
では、こっちです」

俺はレドルフの肩の上から巨大獣道の方を指差した。
というか、ヴェユスで合ってるよな…？

最近覚えたから、うろ覚えだ。

・
・
・
・
・

獣道を抜け野营地に抜けると、見覚えのあるテントがあった。
アヤカがまだいるかもしれない。

「レドルフ、下ろして貰って良い？」

「……」

レドルフは少し広めの空き地を見つけ膝を付き、俺を肩から下ろした。

まだ、早朝だし寝てるか俺を探しに森を探索しているか分らないが、取り合えず覗いてみた。

すると、アヤカはすでに起きており探索する準備をしていた。

「アヤカツ」

「！」

突然だったのでアヤカは呆然としており、正常な判断が出来ていないようだったが1秒と少しほどで把握出来た様だった。

「アキラ…あなた無事だったの！？」

「まあね…。色々あったけど何とか無事」

「色々あったって…：私かなり心配したのよ？
何があったかちゃんと答えて！」

リアルでもE／Oでもこんなアヤカを見るのは初めてだ。

両肩を力いっぱい驚づかみされている…結構痛い。

アーリアと契約しました。テヘツで済まそうかと思ったけど止めて置こう。

光の矢が飛んできそうな悪寒がする。

「まあ、なんと言うか…。

行方不明だった人達と荷馬車は見付けた…。

正確には、見覚めたら同じ所にいた…かな？」

「そう……、依頼は無事達成できそうね。
それで、あの精霊憑きはどうしたの？」

「あそこにいるよ？」

俺は、一緒に同行してきた一団の後方を指差す。

あの無表情だった時の面影はなく、可愛い印象の若いエルフ娘がいる。

まだ、駆け出しの傭兵だったが、いないよりはマシだと思い、一団の最後方で警戒をして貰っていた。

「くっ…」

アヤカは、おもむろにゴッドブレスを手に取りテントから飛び出して行こうとしたので、腰にしがみついて制止した。

「ちよちよちょっと待って！アヤカ」

「放して、あいつのせいで私はね…。

2時間もMobの相手をさせられたのよ？

HPとMPの回復ポーションが尽きるわ…スタミナまで切れかけるわ……s」

「あああ、分った分った。アヤカの言いたい事は分ったよ。
でも、もうあの娘は精霊憑きじゃないから…普通の娘だよ！」

「どういう事よ!？」

イラつきと怒りの表情で振り返ったので正直ビビってしまった。

他人には見せられないな…。

何と言っても、あの気高く絶世の美女ばかりのハイエルフ（という設定）と思えない程の形相だったのだ。

「あの娘に憑いていた精霊はもういない」

「いないってどういう事よ…」

「んゝ…………怒らないでくれよ…。

な、何と云うかアレだ…。

俺と契約した…………」

「はあああああああ!？」

ひい…正に鬼の形相…。

キレてる…………っていうか、アヤカ首絞めてるよ。

完全に我を忘れているよ。

「ちよ…ちよつと、アヤカ…首、首…く、苦、じい”」

俺は首下を指してアヤカに訴える。

そうこうしている内にアヤカの指が少しずつれて完璧に俺の喉笛を押さえる形になる。

「あぁん!? 首い? ……あ…」

アヤカは、パツと首から手を放す。

く、苦しかった…。

「ゼエゼエゼエ…」

「自業自得よ。あれだけ散々やられたのに契約ですって…。
アキラ、あなた正気？」

「はあはあ、まあ、当初の目的はそれだったしな…」

まあ、経緯はどうあれ無事に契約出来たのは良かった。
母からの置き土産を無駄にせずに済んだ訳だしな。
色々問題がない訳でもないが…。

「た、確かに…で、でも、いや…。

はあ…分ったわよ。

じゃあ、レドルフさんの方はどうなったの？」

「レドルフは…あそこにいる」

俺はレドルフの方を指差した。

そして、指してから気付いたのだが、今度は野獣と戯れている。
ああ、決して戦っているという意味の戯れているじゃないからな…。
まるでペットのように愛でているという感じだ。

ついでに言っておくと、俺達プレイヤーは一括してMobと呼んでいるが野獣と魔獣は厳密には違う。

線引きは微妙なラインだが、基本的にリアルでもいる動物もしくはそれに類似する動物は野獣と呼んでいる。

それ以外の架空の凶暴な肉食動物は魔獣と呼んでいる。

そして、ウルフ系は微妙なラインな訳だが、野獣という人もいれば魔獣という人もいる。

公式にどっちかという風に記されていないので何ともいえないが、恐らく魔獣に入と思う。

余談だが、ファンタジー物では定番の神聖な生き物として神格化しているユニコーンやその正反対のスレイプニールはE/Oの世界にも当然いる。

いや、正確にはいたというべきで、絶滅種（という設定）となっているのだ。

で、絶滅した生物は大体精霊としてこの世界に君臨していて、ユニコーンやスレイプニールも精霊として存在している。

しかし、希少種で契約したプレイヤーがいたとしても公開などしない事からほとんど見る事がない。

3年前、OS社主宰のサービス開始記念GMイベントで、

ゲームマスター

GMがスレイプニールに騎乗しているのを見たがそれっきりだ。

その時、プレイヤーの1人がどうやったらスレイプニールに騎乗出来るのか質問していた。

確か返ってきた答えは「精霊として契約し信頼度をMAXにすれば騎乗出来ます」と言っていた。

あの時のテンションの上がりっぷりはヤバかった…。

でも、あれから3年一度も見た事がないので、すっかり忘れていたな。

「え？彼もここにいるの？」

「見れば分ると思うが、彼も正気で狂人化はしていない」

「そう…ね。狂人化していたと到底思えない程の優しい表情ね」

さっきまでキレていた人物とは思えない程、アヤカの表情は緩んでいた。

「だろ？」

「OK。」

色々言いたい事があるけど、経緯は把握したわ。
で、街に向かうのでしょ？

私は荷物の整理をするからアキラはテントの撤収作業に入って」

「分った」

アヤカは素早くテント内の荷物をまとめ、焚き火付近にあった調理器具の片付けに入る。

俺は、テントの留め具を1つずつ引き抜いていく。

数分後、俺はテントの布を丸めリュックの上に付け、金具類はリュックの中に収め終えた。

アヤカは片付けが終わったようで俺の方に歩み寄ってきた。

「こっちはOKよ。」

そっちはどう？」

「こっちも今終わったところだ。」

じゃ、皆と合流しようか」

「ええ」

俺達は、休憩していた一団と合流し一路ヴェユスに向かって出発した。

「ねえ。アキラ」

アヤカは出発して1分もしない内に声を掛けてきた。

「ん、何？」

また、ウッドウルフの群れでも発見したか？」

俺は、早速ディテクトを詠唱しようとしたがアヤカに制止された。

「んん、違うわ。

悪いのだけど、契約したっていう精霊呼び出して貰えないかしら？」

いつもより不気味なほど表情が柔らかかった…。

と思ったがよく見ると、目が笑っていない。

「な、何で？」

嫌な予感がしたが取り合えず聞いてみた。

「良・い・か・ら・出・し・な・さ・い」

これ以上アヤカを怒らせると何をされるか分らない。

（ま、待つのじゃ。厭な予感がするのじゃ。妾は居ないという事で1つ頼む）

いや、流石に居留守は通じないだろう。

すまない。アーリア、俺には召喚をするという選択肢しかない。

「我は望む。我が親愛なる…闇の精霊ベルセウス。我の呼びかけに応えよ。我の名はアキラローグライト。汝の名はアーリア」

アーリアは、俺の影から浮き出るような感じで出現した。始めは俺の影から靄のようなものが出てきて、それが段々と大きくなり人型大になるとそれが人の形に変化した感じた。

「…待てと言ったろうに……」

初めてのアーリア召喚だが、何とも妖艶な姿をしているのだろうか。エルフの傭兵娘に憑いていた時は、半透明かつ上半身しか見えなかったが実際の姿は実にエロい。

彼女が身にまとっているのは、漆黒の布地のドレスだった。

喋り方から俺は和風の服装かと思ったが西洋風だった。

胸元からヘソの下までが大胆に開いており胸の内側が丸見えの状態だ。

開いた胸元から見える肌は、色黒で色艶が良く髪も目も漆黒だった。足も太ももの付け根まで開いている…スリットってやつだった。足元は、精霊という事もあり半分霊体状態で影と同化していた。

まあ、闇の精霊のイメージにピッタリと言うべきか…。

「フッフ、初めまして…じゃないわね。アヤカよ。
アーリア宜しくね」

「あ、ああ、宜しくのう…。アヤカ…」

厭な予感しかしていなかったようだが、アヤカの表情を見て気後れしたようだ。

「アキラ、少し…ヴェユスに着くまで彼女借りるわね？」

「ん、まあ良いけど…」

アヤカはアーリアを伴い少し早足で俺よりも数m先に行った。
俺には内緒の話をするのかと思ったが…、しばらく様子を見ている
とそうでもなかった。

アヤカが凄い勢いでアーリアへ捲くし立てていた。
内容は気にならない訳でもなかったが、大方予想は付くので放って
おこう。

・
・
・
・
・
・

一団には一般人も混ざっていたので、一昨日よりも大分時間が掛か
って目的地のヴェユス南門の近くまで来た。

大体、6時間は経っているだろうか。

既に太陽は沈み夕焼けから夜空になり掛けていた。

俺は、目の前に行くアヤカとアーリアの方を見た…。

まだ、話は終わっていないらしい。

ここに辿りつく数時間の間、1時間ほど置きにアーリアがアヤカか
ら逃げてこちらに駆け寄って来て、早く戻してくれと懇願してきた
が、結局はアヤカに連れ戻されていた。

3回目ほどからアーリアも戻る事を諦めたようで、代りにと俺の胸
を揉んでいたのは心の隅にでも置いておこう。
思い出したくもないからだ。察してくれ。

まあ、アヤカが気が済むまで彼女は出して置こう。

その方が俺に矛先が向かなくて済むしな…。

「妾が悪かったと言っておろう…。いい加減許してたもれえ」

第28話【撤回】（後書き）

内容的には街に戻るだけの話ですが、どうだったでしょうか

第29話【旅立】（前書き）

誤字脱字、表現の誤りにはご容赦願います。

第29話【旅立】

「あ”あ”あ”ゝ、ま、まだ続くのかのお？」

南門が過ぎた辺りアヤカの説教に心底疲れたアーリアは項垂れていた。

心なしかゲツソリし肌艶も若干悪くなっているような気がした。

「ええ、まだよ。さ、酒場で話の続きをしましょうか」

アーリアは、そのまま引き摺られるようにアヤカに連れて行かれた。アーリア頑張れ…胸は揉ませてやらないが終わったら慰めてやるよ。

（それでは意味がないのじゃ！！）

さうて、アーリアの事は忘れてまずはレドルフの事だ。

案の定、門番の騎士の呼び止められ槍を突きつけられている。

それだけなら、まだマシだったが騎士が応援を呼びに行っていたよ
うで、

今十数人の騎士がレドルフを囲んでいる。

と言っても、囲んでいるだけで何をする訳でもなくうろたえるだけ
である。

なんと言っても討伐に行った騎士団を壊滅させているので、
それを知っているだろう騎士達は恐くて手が出せないのだ。

ああ、そうそう、到着するまでの間、俺はレドルフに何故遠く離れ
たこの土地にいるのかを尋ねていた。

彼の言葉を要約すると、要塞都市を拠点とする鍛冶師に弟子入りし
た為、向かっている最中だったらしい。

ロードグリアード帝国の帝都からセントラルブレイ王国の王都まで飛行船で移動し、
闇之森・ヴェウスを経由しオルドランという予定だったようで、
闇之森を経由している最中、運悪くアーリアに目を付けられたみたいだ。

取り合えず、この状況をどうにかしないとレドルフが可哀想だな。

「ちょっと良いですか？」

レドルフを囲んでいた騎士の中で指示を出していた隊長と思しき、
しかめっ面騎士に声を掛ける。

「何だ、キサマは？」

「彼をここに連れてきた傭兵ですよ。」

討伐依頼を受けたアヤカⅡツキカゲの代行といったところです。

登録番号は390067581ですので確かめて下さい」

パーティーメンバーとして登録してあるから代行でも間違いはない筈だ。

「アヤカ様の代行だとお！？」

おい、レック、確認してこい」

聞き違いでなければ、この騎士はアヤカ様と言った気がするが気のせいだろうか。

しかも、やたら俺の事を睨んでいる。

「了解」

レックと呼ばれた下っ端の騎士の青年に傭兵ギルドへ確認を取らせに行かせたようだ。

「それと、彼は狂人化していないので無害ですよ」

「見たら分る。だが、もし暴れて国民に怪我をされては我々の責任なるからな。用心に越した事はない」

「まあ、それもそうですね」

しばらく、しかめっ面の騎士に愛想を振りまいていると確認を取りに行った騎士が戻って来た。

「ただいま戻りました」

「おう、それで？」

「確かにアヤカⅡツキカゲ様とアキラⅡローグライト様が依頼を受けておられますね」

「そうか…分った。が…」

しかめっ面騎士が下っ端騎士の首にフェイスロックを掛けて離れた位置にまで移動した。

何事かと思ったが、どうも俺に聞こえたら拙い話をしているようだ。と言っても、聞こえてしまってるんだけだな。

まあ、話の内容はこうだ。

「傭兵ごときに様付けしてんじゃないねえ!!」

「ええ、別に良いじゃないですか」

「俺達騎士が傭兵に下に見られるじゃねえか」

「はあ、でもさっき隊長も様付けしてませんでした?」

「あの聡明で気高く美しいアヤカ様は良いんだよ! あんなガキにまで様付けしてんじゃないねえ!」

「それって…隊長の好みですよね?」

「僕はどちらかと言うと…」

「だあああ、そんな事はどうでも良い。

取り合えず、傭兵に…いや、アヤカ様以外の傭兵に様付けなんていらねえって事だ」

何とも程度の低い話だな。

しかも、あのレックとかいう騎士…俺が言うのもアレだがロリコンなのか?

「ははは、すまないな。ちょっと若造に指導していたものでな」

ははは、じゃねえよ。

全部丸聞こえだったの…。

見た目だけなら間違はなく俺は新人の傭兵だが、ここまで卑下されるのも癪だな。

「で、レドルフはどうするのですか？
まさか、このままずっと彼に槍を突きつけているだけじゃないですよね」

若干、表情が引き攣っているのを自覚しながらも俺はしかめっ面騎士に聞いた。

「ん、ああ。事が事だけにな。

ここに駐屯している騎士の中で一番偉い方がもうすぐ来る筈だ。
滅多にお目に掛かれない騎士だ。失礼な事すんじゃねえぞ」

「はあ、はいはい」

「すみませんね。うちの隊長やたらプライドと差別意識の高い人なんすよ。

ここは我慢でお願いします」

俺が騎士の態度に呆れているとロリコン騎士：いやレックが謝罪の耳打ちをして来た。

「ああ、別に良いですよ。気にしてますけど気にしないようにしているのです…」

「はは、どっちなんですか、それ？」

「さあ」

・
・
・
・

・
「お、来なさったみたいだな」

しかめっ面騎士が振り向いた方向に、白銀に金装飾とその辺にいる騎士とは別格といった感じの雰囲気を漂わせる騎士がやってきた。彼の後ろに2人の騎士：多分準騎士と思しき年若い騎士が息を切らしながら走って来ている。

準騎士は言わば、騎士見習いみたいなもので騎士としての心得を先輩騎士から学ぶらしい。

準騎士を2人も連れているという事は、相当高いランクの騎士なのだろうな。

で、そのお偉い騎士様は、顔に大きな斬り傷が残る歴戦の騎士といった感じのナイスミドルなおじさまだ。

「態々、お越し頂いて申し訳ありませぬ」

俺に対する態度とは真逆だな。

まあ、お偉い騎士様とじゃ比べ物にならないか。

「ふむ、ごくろう。」

ああ、堅苦しい喋り方はなくて良いぞ。

俺はそういうの苦手なんだな」

見掛けによらず、砕けた性格の騎士のようだな。

「ハッ、ですがそういう訳には…」

「まあ、良い。その傭兵と少し話をする。
お前達は待機していて良い」

「はあ、了解です」

「皆、ご苦労。」

ずっと、槍を上げるのも疲れたろう。

楽にしてて良い」

レドルフを囲んでいた騎士達は「やっとか…」といった表情で各々槍を下げた。

中にはレドルフを気遣う騎士もいたようで、それを見ていた、しかもっ面騎士が睨んでいた。

「おっと、すまないな。」

形式的な事なので申し訳ないが、登録番号と名前を教えてください」

「390067581。アキラⅡログライトです」

そう告げると、登録番号の照会をしていた手が止まり、ナイスミドルのおじさま表情が驚きに変わっていった。

「…ログライトっていうと、お前ヴォルトか？」

「あ、いえ。それは父の名前で…」

「そんな事は知ってるって。俺だよ俺、ダリルⅡフォーマルアウト」

ダリル？ダリルダリルダリル…ダリル？？

ああ…ダリルね。思い出した。

動乱の時代の時、戦争イベントで一時的にパーティを組んだ騎士だ。というか、ダリルの騎士仲間で構成されたパーティの人数不足を補

う為に

俺を含んだ2人の傭兵が加入した感じだったかな。

まだ、ヴォルトが雷迅と呼ばれるようになる前の話だな。捕捉になるが、ダリルはプレイヤーだ。

騎士のプレイヤーは、傭兵と比べて大体1…5という感じで非常に少ない。

何故なら騎士プレイの基本は、ミッション（クエスト）の繰り返しだからだ。

騎士の役割は大体3つに分かれている。

1つ目は国家内の巡回だ。

他のMMOでいうGMの不正者取締りの巡回やPKやMobの街への侵入を阻む事が主幹だ。

2つ目は訓練だ。

仮にも騎士なので、自由に外を出歩いてMobを倒して経験値を溜めるといふ事が出来ない。

城内もしくは闘技場での訓練が巡回がない時間に限りする事が出来る。

3つ目は、ミッションや戦争へ参加し武勲を溜める。

武勲を上げる為の作業のような感じで、ほとんどがイベントのカテゴリに入る。

イベントこそ豊富に揃っているが、傭兵と違って選択肢が非常に少ない。

自由にMobを倒せる訳ではないのだ。

常に自分のレベル（能力）に見合ったミッションしか受ける事が出来ない。

訓練で強くなってミッションで成果を試すという感じだな。

騎士ランクが上がらない限り、どんなにミッションをクリアしても

一ヶ月に貰える給料が変わらない。

そのせいもあって、騎士は不人気職となった。

ほとんどのプレイヤーは1・2ヶ月で騎士プレイに飽きて傭兵に転職するのだ。

ちなみにここまでの情報は、人づてで聞いた話と公式の情報だ。

次は、ダリル本人から聞いた話なのだが、もっとも騎士ランクを上げやすいのが戦争らしい。

傭兵は武勲を上げると金が多く貰えるが、騎士は騎士ランクが上がる可能性がある。

ランクが上がると色々な特典を得られるらしいが、その辺は希少な騎士プレイヤーぐらいしか知らない事だ。

例えば、今ダリルが着ているような鎧などもそうだが、

高騎士ランクになったり大きな武勲を上げると、貴重なマジックアイテムを国家から賜れる。

それ以外にも爵位を与えられたり傭兵並の給料を貰えたりと

傭兵のように一攫千金ではないが努力に見合った報酬が貰えるので、傭兵では味わう事が出来ない喜びがあるとの事だ。

ついでに、爵位が与えられると次のキャラから最初の騎士ランクを底上げできる。

と、戦争終結後に騎士にならないかと勧誘を受けた際にダリルが話した事だ。

「……………ああ、思い出した」

「って、ええ!？」

そんなに深く考えないと思い出せないのか!？」

顔に似合わず、面白い反応をしてくれる。

こういったノリは嫌いじゃない。

「はは、ごめんごめん」

「それにしても、この状況で女キャラとか災難だな」

「まあ…ね。」

っていうか、見違えたよ。全く気付かなかった。

今、騎士ランク何なんだ？」

確か、初めて会った時は、青騎士だった筈だ。

ヴァルトより2歳年下の22歳だったな。

今みたいに専用の鎧や武器ではなく、量産品の武具だったが鮮やかな青いマントが印象的だった。

「聞いて驚け。今は聖騎士だ」

聖騎士…これは簡単に成れる様なランクではない。

上から数えた方が早い程だ。

ちなみに下から、準騎士、正騎士、青騎士（赤騎士）、白騎士（黒騎士）、金騎士（銀騎士）

白金騎士（白銀騎士）、聖騎士（魔騎士）、天騎士（闇騎士）が騎士のランク分けだ。

それ以外にも、国境騎士、自由騎士、宮殿騎士、近衛騎士、筆頭騎士などもある。

ちなみに、騎士になろうとする9割のプレイヤーは準騎士で挫折する。

よくても正騎士止まりだ。

残った騎士プレイヤーでも金騎士（銀騎士）あたりが限界だ。

何を言いたいかというと、ダリルは俺と同じで廃人って事だな。

「それは、すごい：」

「まあ、そのお陰で結婚相手がいらないんだけどな……」

それはそうだろうな。

さっきも言ったが、普通は金騎士あたりが限界だ。

聖騎士とは、言わばプレイ時間のほとんどを訓練とミッションと戦争に費やした結果と言えるだろう。

城内や都市内を巡回し麗しき乙女？との交流なんてなかったんだろ
うな。

「NPCと結婚すれば良かったんじゃないのか？」

「NPCは能力が低いじゃないか……。ん？」

「？…でも養子よりはまだマシじゃないのか…」

ダリルは肩を落とし項垂れたと思うと何かを思い出したのか俺の顔を凝視し、

写真の位置取りなどでよくする指で四角い枠を作る仕草をする。

「つて、何やってんの？」

「あ、いや、すまん。

ヴォー…アキラって結構…というか、かなり美人だよな」

「?..?」

「どうだ。俺の嫁にならないか？」

「断る！というかこの状況で結婚もくそもないだろ」

まあ、もしゲームが正常に戻ったなら、ダリルにとってこの傭兵の時代が最後の機会になるな…。

ああ、何の機会かという結婚が出来る期間の事だ。

このE／Oの世界では短命種族に限って15〜45までが結婚適齢期なのだ。

ダリルは今42歳だから、今回を逃すと結婚できず次のプレイヤーキャラは養子となる。

養子キャラは、血の記憶いわば親のキャラの血を受継いでいないので才能の開花率などが初期化されるのだ。

今までのダリルの努力が全て無駄になるという事だな。

「ははは、半分冗談だよ。でだ、話は戻る…というか本題だ。彼を連れて来れた経緯を説明して貰いたいのだが…。

正直、彼が狂人化していない事に拍子抜けしているところだ」

ダリルはレドルフの方を見上げた後、向きなおした。

「んゝ、そうだな。

簡潔に言えば、レドルフは操られていただけで、

その大元を絶ったから今は普通の状態って感じかな」

「大元ってのは？」

「精霊…かな」

「…精霊か…。

さすがに捕まえる事は出来ないな…。

絶ったとはいえ、精霊だし死んではいないよな。
とすると…その精霊は、どこに行けば会えるんだ？」

「あー、今アヤカと一緒にいると思う」

「え、この街にいるのか？ 闇之森じゃなくて？？
っていうか、アヤカってあの？」

「多分、そのアヤカだと思うよ」

「で、どこにいるんだ？」

「酒場兼傭兵ギルドで飲んでる筈だ」

「そうか。分った。
長い間引き止めて悪かったな」

ダリルは、騎士達に指示を出し撤収する準備に入った。
騎士達はレドルフに手錠代わりの鉄鎖を腕に巻き駐屯所の方へ歩いていった。

「レドルフ…」

俺の前を通り過ぎる騎士達に連行されていくレドルフと目が合った。
俺には、その目が助けを求める目のように思えた。

「安心してくれ。悪いようにしない」

心配していた俺にダリルは俺の肩に手を置き、気を使ってくれた。

「ただ、無罪という訳にはいかないが：何とか罪が軽くするよう努力はするよ」

「そう…。彼を頼む、ダリル」

「おう、任せておけ」

ダリルは手を振り騎士達の後を追いかけていった。

彼らの姿が大通りの方へ消えていく少し前にしかめっ面騎士が「アヤカ様に会われるのですか？お供致します」とダリルに言った気がする。うん。

さて、俺はどうしようかな。

・
・
・
・
・

酒場は、アヤカの矛先が俺に向くのが目に見えていたので行くのを止めそのまま自宅に戻る事にした。

探せば、簡単な食事ぐらいはあるだろうと樂觀視していたが、いざ戻ってみると食えそうな物は一切なかった。

そして、やる事もなかったので俺はそのまま格好でベットへダイブし程なくして熟睡していった。

・
・
・

でだ：流石に何も口にしていなかったのも、夜中に空腹で目が覚めると横でアーリアが寝ていたのだ。

しかも、涎を垂らしながらアーリアの手が俺の胸を鷲づかみにした

状態でだ。

ん？ああ、言いたい事は分っているさ。

驚づかみ出来るほど胸がないだろ…と言いたいのだろ？

ああ、その通りだ。

実際は、俺の胸がすっぽりとアーリアの手に収まっている感じだよ。
畜生め！

まあ、そんな事はどうでも良い。

流石にこのままでは動けないので、俺はアーリアの身体に触れ”戻れ”と念じた。

すると、彼女は一瞬で漆黒の霧状すなわち闇に変化し、周囲に溶け込んでいった。

そして、飲み物でも良いので胃に何かを入れようと一階のキッチンへ向かった。

すると、何か良い匂いがしたのでキッチンの中を覗くとそこにはアヤカがいた。

「アヤカ…：こんな朝早くから何してるんだ？」

ちなみに、今は朝の6時前ぐらいだ。

早起きだとしても少々早すぎる時間帯だ。

「あら、おはよう。アキラ」

「あ、ああ。おはよう。で、何してるの？」

「見れば分るじゃない」

「料理を作っている…?」

「正解」

材料はどこから調達したんだろうか…。

あ、そういえば朝市は早い所で5時から露店を出していたな。恐らくそこで買ったんだろうな。

「でも、作るにしても早すぎだろ?」

「まあ…ね」

「ん、どうした?」

心なしかアヤカの背中が少し震えている。

俺よりも大きい身体の筈なのだが、いつもよりも小さく見えた。

「アキラ、私今朝発つ事にするわ…」

「たつ??え?」

「また、旅を再開しようと思うの…。

もう、アキラをフォローしなくてもやっていけそうなもの」

「そう…:か」

「うん。で、アキラ昨日の夜何も食べていないでしょ。

だから、料理を作って置いてから発とうと思っていたのだけど…
思ったより早く起きて来ちゃったね」

「ん、ああ、ごめん」

「ははは、何謝ってるのよお…。
よし、完成！」

アヤカは、料理をテーブルに並べると肩から掛けていたエプロンを綺麗に畳み近くにあった椅子に掛ける。

そして、手を洗うと部屋の片隅に置いていた自分の旅道具を肩に担ぎ、少し早歩きで玄関の方へ向かっていった。

「え、もう行くのか？」

「うん。私湿っぽい嫌だし泣きそうになるもの…。

そんな顔、いくら身内とはいえ見せられないわ。

あ、アキラの武器は、アリアに渡しておいたから多分自室のどこかにあると思うわ。

それと、食べた後、食器はちゃんと洗いなさいよ。

後は…」

「ああ、もう分った分った。ほら、早く行け」

「ん…また、どこかで会いましょう。じゃあね」

と言ったアヤカの瞳から大粒の涙が零れ落ちていたのが見えた。

あいつも涙もろいよな。

かく言う俺も気のせいか視界がぼやけている気がする。

俺もアヤカもゲームの中に閉じ込められ、お互い心の拠り所にして
いたのかも知れないな。

•

・ ・ ・ ・ ・
アヤカが旅立って3日が過ぎようとしていた。
いつも横にいたアヤカが居なくなり、今頃になって心にぽっかりと
穴が空いたような気がする。

さて、湿っぽいのはここまでだ。

俺も当初の計画通りノースブレイ王国から発つ事にしよう。

その為に、この3日準備をしていたしな。

すでに、装備は長旅用に変更しているし、傭兵ギルドに登録移転届
けを出しているので後は出発するだけ。

今回はレベル上げや戦争の為の旅ではない…。

この閉鎖されたE／Oの世界を元に戻す為の旅になる…と思う。

アヤカもそうだし、高レベル帯の傭兵の多くも世界を元に戻す為に
旅をしているという話だ。

騎士はよく分らないが、俺達傭兵と情報屋そしてOS社の協力が世
界を元に戻すのに必要なのは確かなのだ。

俺は、当分この家には戻らないだろう。

玄関から外に出て振り返り自宅を見渡し、一切の名残を絶つ。

「行って来ます」

俺は一路ハイランド王国を目指し出発した。

第29話【旅立】（後書き）

どうだったでしょうか。

次回のエピソードで序章が終了します。

第30話【エピローグ】（前書き）

誤字脱字・表現の誤りにはご容赦願います。

第30話【エピローグ】

「いよゝ！久しぶりだな。ア・キ・ラ・ちゃん」

「…シムス…」

ノースブレイ王国要塞都市オルドランとハイランド王国国境都市ロ
ーロスの間を流れる運河に掛かる巨大運河橋オルトロスを半ば過ぎ
た頃、俺の前にあのジョーイⅡシムスが現れた。

「やっと来たかよ。待ちくたびれたじゃねえか」

シムスの周りを見回すと傭兵の死体が数人分無造作に倒れていた。
俺が来るまでの間、ずっとここに居座っていたのかもしれないな。
そして、通り過ぎる傭兵を狩っていたというところだろうか…。
って、あれ？アヤカもここを通っている筈だよな？

「ここを通る傭兵全てを狩っていた訳でもないのか？」

「え、ああ、ま、まあな。俺様は慈悲深いからな。
偶には見逃す事もある」

うわぁ…絶対、アヤカに脅されたか何かされたな…。
目は明後日の方向を見ているし顔に大粒の冷や汗がダラダラと流れ
てるし不審極まりない。

一種のトラウマにさえなってる気がする。

大方、有無も言わず光の矢をぶっ放して「通ってもいいかしら？」
みたいな事を言ったのではなからうか。

「ふ、ふん。俺様の事はどうでもいい。アキラちゃんは少しぐらい強くなったかよ？」

つまんねえ戦い方をしてみろ。死なないようにジワジワと嬲って嬲りまくって犯し続けてやるからよ」

「…どうだろうね」

「ま、戦ってみれば分るか…。んじゃ、始めようぜ」

シムスは右手で武器を構え左手を前に出しクイクイっと手招きをしている。

「その前に、人が来ないようにしないとね。

我は望む。我が親愛なる…闇の精霊ベルセウス。我の呼びかけに応えよ。我の名はアキラ。ローグライト。汝の名はアーリア」

俺の影から漆黒の影が現れ、何を思ったか俺の背後に回り影が纏わりついてきた。

そして、その影はアーリアの形に変わっていく。

「…アーリア、その手はなに？」

案の定、アーリアの手は俺の胸を揉んでいた…というか、影のままでも自由に動けるのね…。

「この前、報酬貰い忘れたからのう。今徴収しても構うまい」

「時と場所というのがあるだろ…。

それに…慰めてやるとは言ったが揉んで良いとは一言も言っていなかった筈だけど？」

「そうであつたかのう。忘れたわい」

「まあ、良い。森の広場に掛けていた魔法で良いので周辺に掛けてくれないか？」

「何じゃそれだけで良いのか？」

オブハイド。ほれ、終わりじゃ」

アーリアが片手を上げ、オブハイドという魔術を発動した瞬間、周辺の空気が変わったような気がした。

いや、変わったな。よく目を凝らすと微妙に周りの風景が歪んでいる。

捕捉だが、風景が歪んでいるからといって決して空間が歪んでいる訳ではない。

厚みがどれ程かは分らないが不可視に近い魔力の層が壁となり外界からの進入を阻んでいるだけである。

大体、直径50mぐらいのドーム型に層が張り巡らされており、橋の幅の4分の1を占拠している感じだな。

精霊は、魔法を発動させるのに詠唱が必要ない。

どんな高位の魔法であろうと全てワンスペル発動だ。

というか、詠唱が必要なら人間と変わらないので属性が限定される精霊だと存在意義がなくなってしまうな。

ん？シムスと目があつたような…。

いや、よく見るとアーリアの動きに合わせて視線が動いている気がする。

「おおおお、プルンプルンって、うひょお堪らねえ」

シムスは独り言のつもりだろうが、普通に丸聞こえた。
「というか、そういうキャラだったか…？」

いや、男なら普通の反応かもしれない。さすがに声を出しては言わないが…。

身体が女性になったせいで、その辺の感覚が狂ってる可能性がないとも言えないな。

「ククク、御主、妾のここがそんなに気になるのかえ？」

アーリアは豊満な胸を両腕で挟み強調させる。

何とも羨ましいオp…事もないからな。ああ、決してだ。

「おおおおお」

シムスは股間を押さえ身悶える。

「はあゝ。これじゃ始まらないな。」

アーリア、召喚した直後みたいに影のようになれないのか？」

「ふむ、可能じゃ」

アーリアがそう言った直後に妖艶な肉体は漆黒の煙の様になり、俺の影に吸い込まれていく。

「ああゝ」

なんで名残惜しそうな声と顔をしているんだ…。

「シムス…。アーリアを見るのが目的だったのか？」

「ん？…あ、いや…：…そ、そんな事あるか！

何なら今すぐに始めても良いぜ」

「ああ、発つ鳥後を濁さずってね。ここで終わらせてもらう」

俺は、フランヴェルジュを腰から抜き、前に突き出す。

少し気がかりな事があったので今回は居合はしばらく使わない。

まあ、いずれ居合を使う機会があるだろう。

ちなみに、戦う舞台となる巨大橋オルトロスは、読んで字の如くかなり大きな跳開橋式の運河橋だ。

橋その物もオルトロスという名称も改変前から存在している。

オルトロスの全長は10kmで横幅200mほどある。計10箇所500m毎に跳ね上がる仕組みだ。

オルトロスを管理しているのはノースブレイでもハイランドでもない。

修繕箇所や改修工事などは全て設計から建設までを行ったモルディオ自治領区の機工技師達が行っている。

捕捉だが、改変後に機工技師のロールがプレイヤーに解放されたが、改変前からNPCのロールとしては存在していた。

ノースブレイとハイランドの間に争いが絶えない事からオルドラン・ローロスに技師が常駐しているらしい。

運営の方は、自動で行われており、河底には船舶に感応する魔法装置が10km隙間なく設置され、船舶が通り過ぎるとその前方にある橋の一部分が跳ね上がる仕組みだ。

ノースブレイ王国とハイランド王国の戦争は、この橋上と海上の2

箇所で戦う。

本来は戦争をする為の橋ではないが、強力な魔法や砲弾などで大爆発が起ころうが絶対落ちる事はない。

多少、地面が抉れるぐらいで、橋自体にダメージはほとんどない。という事で、高位魔術を連発しても壊れないだろう：多分。

で、気がかりっていうか気になったのだが、シムスは脳筋キャラではなからうか。

もし、ヴォルトと同じような育て方なら対魔法に対して非常に弱い筈だ。

ヴォルトの場合は、唯一級やプレイヤー生産品の中でも最高級の防具を装備していた事もあり、ある程度は耐性があつた。

しかし、シムスの場合は見るからにそういった装備をしていないのだ。

攻撃が当たらない事を前提にするのは間違いではないが、魔法耐性を怠っているのは間違いだ。

それに自分でいうのもアレだがプレイヤースキルも俺と比べてシムスはまだ未熟と言える。

俺とシムスのレベル差は未だに2倍以上あるが、全く耐性のない魔法なら利くかもしれない。

試す価値はある筈だ。

「あ？なんだ：。魔法如きで俺をやれると思っているのか？」

「まあね。魔法に弱いだろう？」

「どうだろうな。ま、どっちみち詠唱なんてさせねえけど：なっ！」

シムスは地面を這うように駆け出した。
縮地ほどではないが、かなり速く俺との距離を一瞬で詰める。
魔法を詠唱する暇を与えてもらえそうにないな。

しかし、俺はこのフランヴェルジュがある限り火属性魔術はワンス
ペルで発動させる事が出来る。

「ファイアウォール！」

シムスの前を一瞬で炎の壁が遮る。

「のわあっ!？」

シムスは驚き急制動した後、額を手で拭いながら「あつぶねえ」と
ボソリ呟いたように聞こえた。

「ちい、いつの間に詠唱したんだ…」

炎の壁を避けるなり飛び越えるなりしてくると思ったが何もして来
ないな…。

まさか、炎が治まるのを待っているのか？

と思った矢先、シムスは壁を飛び越え俺の頭上へ袈裟斬りを仕掛け
てきた。

「はははあー!!! 油断したなあ!!! 今度こそ詠唱なんてさせねええ
え!!!」

ああ、なるほど。壁の向こう側で俺が詠唱しているか確かめていた
んだな。

だけど…すまん。ご期待に添えなくて…。

「ファイアプリズン！」

今度は、シムスを炎の壁が囲む。

いわば炎の牢獄で360度ファイアウォールで囲み焼き殺す上位魔術だ。

ファイアウィールは攻撃と言うより寧ろ防御の魔術だが、ファイアプリズンは攻撃魔術なのだ。

シムスは、空中で炎の牢獄に前を遮られた為、炎に突っ込む形になる。

「うわああちちち…あちいいいい!!」

残念ながら、炎の勢いに飲まれ壁を突っ切る事が出来ず、炎に焼かれながら壁の内側に弾かれたようだ。

「はあはあはあ…おい、お前、さっきから詠唱してないよなあ!?! チートか? いや、間違いねえ、チートだろ!」

余程効いたのだろう。大分、イラついている感じだな。

「リアルから隔離された今の状態で、どうやってチートツールを使うんだ?」

それに、俺はチートなんて大嫌いだ。見た事も触れた事もない。ほんと、失礼な奴だ。

「……………それもそうだな」

シムスがボソリと何かを呟いたようだが、俺には聞き取りにくかった。

「…シムス…流石に魔法の知識なさ過ぎるだろう…」

魔術師と対峙した時、詠唱させなければ勝てるなんて、まさかとは思うけど思っていないよね。

いくら脳筋キャラとはいえ、魔法の知識なしで魔術師と殺り合おうなんて無謀だよ？」

「な、なにい!？」

「少なくとも前回のようによくがレベル1桁じゃないんだからさあ…」

「な、何が言いたい…!」

このうろたえ様、まさか凶星か!？」

「うん、良い事を教えてあげるよ。まあ、今日の戦いには役に立たない知識だけどね。」

魔法耐性はスキルや魔法で補う事も出来るけど、シムスみたいに脳筋テンプレキャラはその辺のスキル取らないよね。

だから、対魔法の付いた素材や特殊能力の付いた防具を着るのが基本なんだよ。

公式にも載ってる情報なんだけど…その辺、シムスは怠ってるよね」

「うっ…」

「それにね…シムスは知らないだろうけど、魔術師の杖ってのは、単純に魔力を強化するロッド以外にも

強力な魔法が封じ込めていたり特定の属性魔法をワンスペル発動できるワンドっていうのがあるんだよ。

シムスがさっき言ったチートってのは間違い、ボクは炎属性の魔法をワンスペル発動出来るワンドを使っている。

それに魔法使いのスキルには、高速詠唱や短縮詠唱っていうのがある。

まあ、ボクはまだ習得していないけどね。

あ、そうそう、その魔術終了間際になったら範囲を狭めるから気を付けた方がよいよ」

「へっ、何だって！？え、ちょっと待て…何か狭まってるんですけどお！？」

そんな事を叫んでいる間にも炎の壁はじよじよに範囲を狭めていき、とうとうシムス1人分の隙間しかなかった。

「ちょ待っ、ちょ待っ…あ、あ、あ、あがああああぐがあああつあああ！」

5枚の炎の壁が合わさった事でゴオオオオオと激しい音をたてながら、

高さ20m近くに燃え上がった炎の柱がシムスの身体を業火で焼いていく。

油田の炎みたいなのを想像したら良いと思う。

「ああああああああああああがあああああ！」

シムスは悲鳴にもならないような声が周辺に木霊した。

1分近く燃え続けた炎は要約治まっていき、丸焦げになったシムスの身体が横たわっていた。

さすが、上位魔術…魔法耐性のない人には強烈過ぎたか…。

「あぐ、あ…あ……」

身体が僅かに動いたが、ほぼ虫の息状態だ。

「あぐっ…お、俺は…これぐ、らいじゃ、負けね、え……」

シムスは、腰のベルトから吊られている皮袋からHP回復ポーション(大)を2本取り出し飲み干した。

さっきまで虫の息だった筈のシムスは大きく跳びはねて起きた。

「っ…さすがに火傷は治らないか…。

ま、良い事を聞かせて貰ったしな、次からは当たらねえぜ。

何処かの赤い人が言ってたよな…当たらなければどうって事はないってな。

いくら、無詠唱だろうが強力だろうが、動きまくって捕らえ辛くすれば良いだけじゃねえか」

シムスは、俺の周囲を縦横無尽に走り回る。

確かにこれでは狙いを定められないな…。

だが、シムスは重大な事をすっかり忘れているようだ。

そう、俺は剣士でもあるって事だ。

「ほら、どうした。当ててみろよ！

当てれねえだろ。けど、こっちからは攻撃で…ぎペッ!？」

俺が攻撃出来ないと思い込んでいたシムスの懐が、お留守になっていたので脇腹付近に居合で一閃してみた。

魔法しか使わないと踏んで余裕ぶった結果というやつだ。

対魔法がカスの防具だったようで、さっきの炎で焼け落ち防具としての機能を果たしていなかったのか、

俺の一閃は見事に脇腹を切り裂き大量の血が撒き散らされる。

本来なら2倍以上のレベル差でダメージ半減ぐらいはするだろうと思ったが、

油断から生じたクリティカルでダメージが通ったようだ。

さらに、刀身から発生した熱波が火傷から治りきっていない肌をもう一度焼き重ねた。

「へ?…え?…あれ?」

シムスは何が起こったのか理解出来ていなかったようだ。

「油断しすぎ。ボクが魔法しか使わないと思ったのか?

確かに今日は魔法しか使ってなかったけど、前はイスカ刀で攻撃していただろ」

何か、拍子抜けだな。

ここまで魔法に弱いなんて思っていなかった。

今まで魔術師や法術師と戦わなかったのか?

そうだとしたら、余程運が良いんだな。

まあ、それ以上にこいつはバカだな。

せめて、E/Oのシステムぐらい理解しておけと言いたい。

ゲームを買っても説明書を読まないタイプだな。

いや、こいつの場合はチュートリアルも飛ばすタイプに違いない。

「どうする?…まだやる?」

「チクシヨウ…チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ、

今まで一方的に自分がやられるって事はなかったのだろう。
シムスは、地面を殴りつけ俺に対してなのか自分自身に対してなのか分からないが半狂乱で叫びまくる。

シムスは、HP回復ポジションの入っていた皮袋から1本のどす黒いポジションを取り出す。

初めて見る色のポーシヨんだ。恐らくプレイヤー生産品だな。効果によって色が異なるらしく、生産できるポーシヨンも多岐に渡る。

さらに偶然の産物的なポジションも存在するらしいので、ぶつちやけ見た感じではどういう効果なのかさっぱり分らない。

俺は、少し遠いが分析したら何か分るかなと思ひ分析スキルを使用してみた。

[illegible]

生産者.. アクトII アラマキ

備考…潜在能力を解放する代りに自我を無くす。

效果時間20秒。時間經過後、瀕死狀態。

生産者コメント..使わない方が良いと思いますよ。

[illegible]

えーと、簡単に言えば、性質の悪いバーサクポジションってところだな。

バーサクポジションは、確かに一時的に能力を強化する代りに自我を無くすだった筈だ。

対して、これは一時的に能力を極限まで強化する代りに自我を無くし瀕死になるという事だよな。

ちなみに、名称は生産者が付けたと思う。流石に世界観に合わなさすぎな名称だしな。

そして、名称の横には（小）と書かれている。やはり、（大）とかになると効果時間が延びるのかな。

それにしても、シムスはどうやって手に入れたのだろうか、気になるが今は放っておこう。

俺だったら躊躇する色と效能のポーションをシムスは躊躇する事なく一気に飲み干す。

飲み干してからしばらくすると、シムスの様子が段々と変わってきた。

変化として顕著に現れたのが皮膚だろう…。細胞の活性化の影響なのか赤く染まっていく。

そして、血管がはち切れんばかりに太く隆起し、そして異常な速度で脈動している。

目は血走り口や鼻からは血を吐き出している。
細胞や血管が急激な変化付いていけないのだろう。

身体も二周りほど大きくなっているような気がする。

A H A ! ! ! !
「へ、へ、へ、へ、へ、へ、H E H E H E H E Y A H Y A H A Y
」

そして……シムスは自我を無くし……というか狂ったという言葉が似合

いそうな状態になった。

「HYAHYAHYAHYA……オンナダ……オンナ……オンナオンナオンナ、女アアアアア！」

シムスは、手を地面に付き四つ這いになり、今までを凌駕するスピードで突っ込んできた。

縮地とは違う純粋なスピードで怒り心頭状態のイノシシのようだ。

俺は冷静さのない単なる突進など簡単に避けれると思ひ込み、軽く身体を捻って避けたのが間違いだった。

野生の感と言うのだろうか……避ける動きに合わせて軌道修正してきたのだ。

これには驚いた……というか、俺の読みが甘かった……。

身体能力だけでなく五感も強化……もしかしたら第六感^{スキル}を一時的に習得したのかも知れない。

シムスの獣のような巨腕から繰り出された攻撃が俺の身体を掠ったのだ。

しかも、ただ掠ったのではなく、シムスの爪は俺の龍革製防具を斬り裂き、肌をも深く斬り裂いた。

あまりにも一瞬だったので痛みが襲ってくるまで攻撃が掠ったのが分らなかった。

「ぐっ!？」

「キケケケケ……オンナ……ハダカ、カカカカ……オンナオンナ……ハダカカカ」

「へ?……裸?……うわっ!？」

俺は頭を下に向けると見事に防具が形を成していなく、首下から下半身まで斬り裂かれ素肌が丸見えになっていた。

そして、俺は気付く…シムスの下半身が奇妙なぐらい大きく盛り上がっているのを…。

今のシムスの状態を見ると、恐らく性欲という繁殖に近い衝動なんだろうけど、

ここで犯られる訳にはいかない。

俺は縮地を使って境界ギリギリまで大きく後退し、3分の2ほどMPが残っているのを確認する。

上位魔術を2・3発連発しても大丈夫だろう…。

HPの方は残り半分ほどだが、治癒法術を詠唱している暇はない。

シムスは先ほどまでと同じように四つ這いになり突進してきた。

「ファイアウォール×2!!」

シムスの進行先に2枚の炎の壁を出現させる。

しかし、シムスは何もなかったかのようにいとも簡単に突破してく。

「なっ!? ……ファイアボール!!」

シムスの目の前に落とすように炎の弾を撃ち込み、大爆発が起きる。直径10mのドーム状の爆発で普通なら避けられない範囲だ。

「これでどうだ!! ……!?!」

シムスは、爆発を利用したのか大きく跳躍し炎を纏いながら俺に襲い掛かってくる。

「ちい!?!?…イリユージョンアロー×2」

これでシムスを止められなかったら、俺の貞操もとい命はないだろう…。

俺の頭上で2回連続して大きな爆発が起き、その爆炎と爆風は封鎖したドーム全体に広がり

俺自身も巻き込まれる感じになった。

だが、自身を巻き込まないとシムスから防ぐ魔術が存在しないのだから仕方ないのだ。

俺の身体は、爆炎と爆風のダメージでHPが削られていき最終的には赤く点滅するまでになった。

これで、シムスを止められていなかったら終わりだな。

そして、収まり掛けた時、黒い何かが俺に襲い掛かるように上から降ってきてドンッと大きな衝撃で俺は地面に倒れる。

「痛っ!?!?」

衝撃で咄嗟に目を瞑っていたのを開けるとシムスが覆いかぶさるように俺の身体を押さえつけていた。

犯られると俺は思いまた目を瞑ったが、何もされず数秒が経ち再び目を開ける。

そこには、変貌した姿ではなくいつも通り?のシムスがいた。

身体は、赤黒く焼け焦げ血肉が焼けているような臭いと煙が漂っていた。

そして、シムスは意識がないようで、俺が身体を傾けると簡単にシムスの身体が横に倒れる。

「はぁはぁはぁ、死んでるのか…?」

俺はフランヴェルジュの先端でシムスを突いてみる。
人間の身体とは思えない程、焼け焦げ所々硬く炭化していた。
さすがにやり過ぎたのかな？

「…ヒュッ…ゲホゲホ…カハッ…！」

生きていた…辛うじて…だけど。

シムスが空気を吸い込む為に大きく口を開けると喉奥から白い煙が出てきた。

恐らく、爆炎を吸い込んで内臓が焼けたのだろう。

程なくして、シムスはよろめきながら立ち上がりフラフラと歩き橋の柵に寄りかかる。

身体の支えがないと立ち上がれない程の状態のようだ。

「……………負け…た…の……………か……………」

しばらく、シムスは呆けていたが今の自分の現状を把握するかのように身体の至る所を確認する。

ポーシヨンの効果が切れて妙に冷静な状態になっているようだった。

「…そうだね」

正直、俺も瀕死なので、早く治癒をしたい。

俺はフランヴェルジュを構え直し、シムスに近寄る。

「……………ふんっ、抵抗、なんて…しねえよ…。」

ま、そんな…気力が、全くねえんだけど……………、大人、しく捕まる…
気もしねえ…！」

シムスは、何を思ったのか柵の上に立ち上がる。
フラフラしていて今にも落ちそうな状態だ。

「な、何を…」

「へへ…言ったら。捕ま、る気はねえ…ってな」

「今の状態で落ちれば確実に死ぬぞ。
リアルでも死ぬかも知れない…止める！」

「へ、…それがどう…した。

ここには…少し未練がない、訳じゃ…ねえが、リ、アルに未…練
は…ねえよ。

ん…じゃあ…な、あばよ」

シムスは、こちらに向き直り今まで見た事のないような穏やかな表情で背中から海面へ落ちていった。

海面まで凡そ60mほど、ここから瀕死の状態で落ちては流石のシムスと言えど助からないであろう。

ましてや、ここは運河と海の境界線で、両方の海洋Mobが生息しておりアクティブMobも当然いる。

数分ほどシムスが落ちた海面を見ていたが浮き上がる気配も血が広がる事もなかった。

シムスの生死は不明だが、やっとシムスとの因縁を断ち切れた…。

アーリアに魔法を解いて貰おうと思ったが、その前にシムスの遺品？を探す事にする。

何故なら、シムスを倒しても証拠になる筈のシムス自身がいないので、本人確認出来そうなものが必要なのだ。

探し回っていると5mほど先に何か光る物を見つけた。

これは：シムスの：ヴェノムヴァイパーという武器だった筈だ。

確か、結構長い時間使っていた筈だし証拠になるかもしれないな。

よし、証拠の品はこれで十分だろう。

魔法を解いても不自然ではないように端へ移動する。

解いていきなり道の真ん中に人が立っていたら、周囲が驚くだろうしな。

「アーリア、魔法解いて良いよ。

それと、解いたら還って貰えるかな？」

「まあ、よからう。報酬は、後日貰うとしようかの」

俺にはアーリアの姿を確認する事は出来なかったが、周囲にあった空間歪みはなくなり

一気に人の気配と話し声が俺の耳に届いた。

そして、ほぼ同時にアーリアの気配がなくなり俺の意識下に戻る。

ああ、ちなみにシムスとの戦闘が終了した時点で、斬り裂かれた俺の防具は元の状態に戻っている。

俺は痴女じゃないし、人様に裸を見せるなんて事は決してしないからな。

さて、このシムスの武器をどこに提出するかだな…。

ハイランド王国の傭兵ギルド所在都市には寄る予定はないので困ったな。

ああ、ちなみに当面の目的地はラキノイア王国だ。

そこに向かう理由は、シャーネⅡレギアスという人物に会う為だ。忘れているかもしれないが、蛇腹使いのアレクが尋ねろと書き残した人物で蛇腹剣をマスターする為に会おうと思う。

で、ラキノイア王国を向かう為には、ハイランド王国と華朝連邦を通過しなくてはならないのだが、

両国共にギルド所在都市を通らないルートなのだ。

ま、出張所に提出だけして次ギルド支部へ寄った時に賞金を貰えば良いか…。

まずは、この橋を渡りきってハイランド王国国境都市ローロスに入ろう。

ラキノイアまでかなり遠い…今日はローロスに泊まって、次は――

第30話【エピローグ】（後書き）

どうだったでしょうか。

この投稿で序章の終了です。

しばらく、次章の投稿は休ませて頂き、今まで投稿した文章の大幅な改稿と用語集・人物紹介・閑話の追加など書いていくつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3197x/>

『E／O』イオ

2012年1月13日17時11分発行